

2026

令和8年

沖ノ島研究

OKINOSHIMA RESEARCH MONOGRAPH

No. 12

沖ノ島研究

第 12 号

令和 8 年

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

沖ノ島研究

第12号

目次

2026年7月

特集 沖ノ島祭祀を奉獻品から考える2

I 「伝沖ノ島出土返納品」調査の概要	岡寺 未幾	1
II 伝沖ノ島出土とされる返納品について	福島真貴子	3
III 沖ノ島18号遺跡出土八鳳鏡(変形夔鳳鏡)と関連資料の検討	辻田淳一郎	5
IV 沖ノ島遺跡の金銅装甲冑 —伝沖ノ島出土返納品と21号遺跡出土品—	橋本 達也	15
V 伝沖ノ島出土返納品の金属製品の検討	水野 敏典	33
VI 伝沖ノ島出土返納品 石製模造品の検討	河野 一隆	45
VII 総括 伝沖ノ島出土返納品の評価について	水野 敏典	57
沖ノ島8号遺跡出土金銅製矛鞘の系譜	齊藤 大輔	59
沖ノ島祭祀遺跡学術調査聞取報告	岡寺 未幾	83
宗像市内における須恵器脚付短頸壺の新出資料	太田 智	101
筑前国の灯籠堂と急用丸格納庫	佐藤 正彦	111
《調査研究報告》		
2025年度「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群調査研究事業概要		121

特集 沖ノ島祭祀を奉獻品から考える2

I 「伝沖ノ島出土返納品」調査の概要

岡寺 未幾 福岡県九博・世界遺産・文化施設課

1. 調査の経緯

古代、沖ノ島の祭祀で捧げられた奉獻品は「東アジアの古代国家間の交流を物語る物証」として世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群（以下、「本遺産群」という）の価値の中核をなす。このことから、本遺産群の保存管理・公開活用を担う「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会（福岡県、宗像市、福津市及び宗像大社、以下「協議会」という）では、奉獻品の調査研究を推進する立場にある。

令和4・5（2022・2023）年に『国宝福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品 伝福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品 保存活用計画』（宗像大社2024）が、福岡県及び宗像市の協力の下、宗像大社が主体となってまとめられた。この計画で奉獻品の課題が明らかになり、再整理の必要性が高まったものの、8万点という質・量ともに膨大な資料群である。再整理の前の段階として、奉獻品の全体像の把握が喫緊の課題である。

なお、本協議会が、別途取り組んできた特別研究事業でも、沖ノ島祭祀のより解像度の高い祭祀の解明が課題となっており、この文脈からも奉獻品の調査研究にもとづく古代祭祀の復元というアプローチは長らく待望されてきた。

これらの状況を踏まえ、令和6（2024）年度から第2期特別研究事業⁽¹⁾の中で、4名の古墳時代の専門家とともに国宝部会を立ち上げ、調査研究を実施している⁽²⁾。

初年度である令和6年度は国宝「福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品（以下、「国宝 沖ノ島出土品」という）」の全体像の把握を試み、鏡・金属製品（7・8号遺跡）・石製品・滑石製品の調査を行い、その成果は『沖ノ島研究』第11号「特集 沖ノ島祭祀を奉獻品から考える」において報告した通りである。

2カ年目になる令和7（2025）年度は「伝沖ノ島出土返納品」の調査を行った。返納品の詳細は次章に譲るが、明治以降、沖ノ島に軍事施設や港湾施設が建設された際、島外へ持ち出され、その後、宗像大社へと一括で返納された資料である。ただし、その質と内容から沖ノ島から出土したことが確実とされるものである。なおこれまで学術的な評価がされておらず、文化財指定は受けていない。返納品は、鏡、甲冑片を含む金属製品、貝製品、石製品・石製模造品、であり、宗像大社神宝館での調査を行った。甲冑については、金銅装甲冑片が確認されたことから、関連する21号遺跡出土国宝の調査を追加で行っている。本号では、この調査成果報告を収録するものである。ただし、収録するレポートは、昨年同様、非常に短期間で行った調査成果の概要であり、本来的な調査成果については、今後に譲りたい。

2. 国宝部会の活動

国宝部会のメンバー及び令和7年度の活動は以下の通りである。

（1）国宝部会メンバー：

河野 一隆（東京国立博物館学芸研究部長）
辻田淳一郎（九州大学教授）
橋本 達也（鹿児島大学総合研究博物館教授）
水野 敏典（奈良県立橿原考古学研究所企画学芸部資料課長（兼）保存科学センター長）
岡寺 未幾（福岡県人づくり・県民生活部文化振興課九博・世界遺産室）
太田 智（宗像市世界遺産課）
福嶋真貴子（宗像大社文化局）

（2）国宝部会の実施

第一回（オンライン）

日 時：令和7年9月18日（木）

議 題：今年度事業について

第二回（オンライン）

日 時：令和7年12月8日（月）

議 題：調査状況・報告書執筆

第三回

日 時：令和8（2026）年3月9日（月）

場 所：宗像大社神宝館

議 題：調査成果の報告と検討

（3）資料調査

ア．神宝館における調査

・鏡

調査者：辻田 淳一郎

日 時：令和7年10月10日（金）

・金属製品・貝製品

調査者：橋本 達也、水野 敏典

日 時：

令和7年8月5～8日（火～金）※橋本氏のみ

令和7年9月24・25日（水・木）

令和7年10月27・28日（月・火）

・石製品・滑石製品

調査者：河野 一隆

日 時：令和7年11月13～15日（木～土）

イ．関連資料の調査

・元興寺文化財研究所

調査者：橋本 達也

日 時：令和7年8月20日（水）

・福津市カメラiasステージ歴史資料館

調査者：橋本 達也

日 時：令和7年12月1日（月）

3. 調査成果と今後の課題

国宝部会の今後の活動としては、令和8年度に第3回国際検討会での調査報告、令和9（2027）年度に報告書の執筆、令和10（2028）年度に英文報告書の執筆が予定されている。つまり、国宝部会による奉獻品を対象とした調査は昨年度で一旦終了する。

国宝部会での奉獻品の調査はわずか二年の短期間であったが、金銅製矛鞘内部に象嵌が残る鉄鉾が発

見されたのに続き、令和7年度は金銅装甲冑が発見されたことをはじめ、大きな成果を上げたといえる。

今回の調査は、あくまで沖ノ島の奉獻品を今後どう再整理していくか考える検討材料を集める為の、大枠を把握する概要調査にすぎない。にもかかわらず、二年連続でここまで目立った成果が出るのは、いかに国宝沖ノ島出土品が、歴史的に重要な価値を帯びているのかを雄弁に物語っていると考ええる。

古墳時代は文字記録のない時代だが、沖ノ島に捧げられた奉獻品は、古代の王権が東アジアの国々との交流の中で、持てるあらゆる知識と、技術と、財力を尽くして祈り、どうにかこの難しい事態を乗り越えようと「カミ」に祈りを捧げたことを伝える。国際情勢がめまぐるしく変わる現代の私達と同じように、わたしたちの祖先が、いかに切実に、航海の安全や対外交流の成就など、様々な困難を乗り越えようとしたのかを今に伝える貴重な資料である。

さまざまな課題はあるが、本協議会としては今後も奉獻品にかかる調査を継続し、少しずつでも、前進させ、世界遺産の価値をより明らかにしていくことが出来れば、と考える。

註

（1）特別研究事業について

特別研究事業は、世界遺産委員会から受けた勧告にもとづき、平成30（2018）年より実施。詳細は下記報告書を参照。

第1期 特別研究事業（平成30から令和4年）

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 保存活用協議会 2023『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 特別研究事業成果報告書』

第2期 特別研究事業（令和6年から10年）

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 保存活用協議会 2025『海域のネットワーク交流と祭祀・信仰の変化―報告書』

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 保存活用協議会 2026『宗像における祭祀・信仰の歴史的変遷の世界的意義』

（2）国宝部会の詳細は以下を参照。

岡寺未幾「1. 経緯」『沖ノ島研究』第11号 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 保存活用協議会

Ⅱ 伝沖ノ島出土とされる返納品について

福岡 真貴子 宗像大社文化局

宗像大社が所蔵する国宝沖ノ島祭祀遺跡出土品（正式指定名称「国宝 福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品 伝福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品」）は、宗像大社の神体島沖ノ島（福岡県宗像市）で4世紀後半から9世紀にかけて行われた国家的祭祀の奉獻品とされる約8万点の品々である。

本国宝は、宗像大社復興期成会が復興事業の一環で昭和29（1954）～46（1971）年に実施した3次の学術調査時の出土品と、学術調査時以外に島内で不時発見され島で保管されたのち諸事情で宗像大社^{つづ}津宮（福岡県宗像市田島）へ移され保管してきた伝世品からなり、宗像三女神信仰や三女神を奉斎した古代豪族宗像氏の歩みを解き明かすものとして、また、わが国固有の信仰はもちろん古代の国づくりや対外交流において歴史的・美術的価値をもつものとして、学術的に高く評価されている。

一方で、本国宝のほかにも、沖ノ島祭祀遺跡出土品と伝えられる資料が存在する。それらは、神体島の禁忌を無視した沖ノ島からの持ち出し行為により、島外へ流出した遺物である。

古来神の島への深い信仰から手つかずのまま永く神聖性が保たれてきた沖ノ島だったが、日露戦争開戦後もない明治37（1904）年4月、沖ノ島一ノ岳山頂に望楼（物見やぐら）および灯竿（灯台）が建設されて以降、時勢の推移にともない、島内に軍事や漁業にかかわる施設が加わった⁽¹⁾。尊く冒しがたい神聖な島に他者が立ち入り土地を開発することは信仰の尊厳を損なうことにつながるかもしれない。宗像大社は施設設置の度に、海水での禊をはじめ不浄汚物（唾、大小便など）の島内放棄や草木土石の持ち帰りの禁止など、信仰の保全を訴える条件を関係部局に提示し、時には抵抗しつつ⁽²⁾、国防のため、漁業者の安全・休息確保のために建設を許可した。やむを得ないこととして容認したのである。そのような状況の中、陸海軍部隊が島に駐屯した昭和10年代や、昭和26（1951）年から約20年行われた港湾工

事など、神職以外の者の往来が激しくなった時期に、島外への遺物流出があったとみられる⁽³⁾。

遺物流出の詳細は不明だが、のちに、個人蔵あるいは博物館所蔵の情報を得て、宗像大社が所在を確認した事例⁽⁴⁾もある。宗像大社はそれらを「流出品」として位置づけ、情報の収集や学術的な分析・検討を行っている。他方で、宗像大社には、沖ノ島から持ち出されたのち同社へ返納された資料もあり「返納品」と設定し所蔵している。返納品は、国宝沖ノ島祭祀遺跡出土品の関連品という位置づけで、本国宝と区別し管理している⁽⁵⁾。

令和6（2024）年3月に宗像大社が刊行、同年10月に文化庁が認定した、国宝考古部門初となる保存活用計画書『国宝 福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品 伝福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品 保存活用計画』では、本国宝に関連する流出品と返納品の取り扱いを具体的に定めている。本国宝の「保存・管理」や「調査研究」を述べた箇所では、流出品と返納品は台帳化されるべきもの、整理・調査研究の対象とすべきものとして取り上げられている。また、本国宝の「調査研究」の方法の箇所では、流出品・返納品ともに、出土（採集）状況の記録類が残されておらず、沖ノ島出土と判断できる直接的根拠を欠いているため、資料の現状を維持しつつ、個々の資料の評価、本国宝との比較等を経て沖ノ島祭祀遺跡との関係を検討するといった慎重な対応を含む学術的な裏付けのための調査研究を行うこととしている。

さて、令和7年度に国宝部会が調査し、本稿で報告する返納品は、前述の港湾工事の際に、工事に携わった作業員が島内で拾い持ち帰ったとされ、平成22（2010）年に宗像大社へ返納された資料である。これらは、昭和35（1960）年頃より以前に島外へ持ち出されたとされる。鏡、甲冑をはじめとする金属製品、滑石製品、貝製品等からなり、大変重要かつ貴重な製品、沖ノ島祭祀遺跡出土品特有の製品を含

むことから、宗像大社は、これらを沖ノ島祭祀の重要性を改めて示す新たな資料として捉え、関係部局で共有し、有意義な形で整理、調査する機会を模索してきた。本稿では、国宝部会の4名の研究者により、図面など返納品の基礎データならびに所見をまとめていただいた。

註

- (1) 灯台、砲台や漁港等の諸施設の仔細は次に詳しい（宗像神社復興期成会編 1961『宗像神社史』上巻 宗像神社復興期成会174～183頁、宗像大社復興期成会編 1976『宗像大社昭和造営誌』宗像大社復興期成会149～154頁）。
- (2) 昭和12（1937）年沖ノ島砲台設置の際、宗像神社（現宗像大社）と氏子らが灯台着工の直前まで抵抗活動を行っている（新修宗像市史編集委員会編 2022『新修宗像市史 いくさと人びと』635～639頁 宗像市）。
- (3) 沖ノ島学術調査開始の目的・理由は、由緒解明を目指す神社史編纂による動きと、沖ノ島港湾工事関係者による祭祀遺跡の散乱・遺物盗難からの保護であったことが知られている。第一次学術調査報告書『沖ノ島』の序文の記述などから、宗像大社および同社関係者が、港湾工事関係者による島外への遺物持ち出しをかなり案じていた様子がうかがえる（宗像神社復興期成会編 1958『沖ノ島』宗像神社復興期成会 1頁、宗像神社復興期成会編 1961『宗像神社史』上巻 宗像神社復興期成会 74頁、小田富士雄 1988「一 祭祀遺跡沖ノ島の歴史的位置」『古代を考える 沖ノ島と古代祭祀』吉川弘文館 11頁）。
- (4) 個人蔵の馬具・装飾大刀・金銅製鈴、山形県致道博物館寄託の銅矛、大英博物館蔵の画文帯同向式神獸鏡・変形獣帯画像鏡がある（重住真貴子 2005「上原孝夫氏所蔵沖ノ島出土品について」『宗像大社神宝館報』2 宗像大社神宝館、宗像大社復興期成会編 1979『宗像沖ノ島』、重住真貴子・水野敏典・森下章司 2010「沖ノ島出土鏡の再検討」『考古学資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』奈良県立橿原考古学研究所）。
- (5) 「流出品」のうち、第3次沖ノ島学術調査時に所在を確認し、同調査報告書で新出資料として公表した個

人蔵品は、一部を除き、報告書刊行後、宗像大社へ返納され、沖ノ島出土と判断できる学術的裏付けがあったことから、学術調査出土品とともに国宝に指定されている。当該資料の詳細は宗像大社復興期成会編 1979『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会 515～524頁参照。



写真1 調査風景（河野氏）



写真2 調査風景（辻田氏）



写真3 調査風景（橋本氏・水野氏）

Ⅲ 沖ノ島 18 号遺跡出土八鳳鏡（変形夔鳳鏡）と関連資料の検討

辻田 淳一郎 九州大学

要旨：本稿では、「伝沖ノ島出土返納品」のうち鏡片 1 点について、従来知られている関連資料との関係やその意義について検討を行った。この結果、返納鏡片・18号遺跡出土鏡片・伝宮地嶽付近出土鏡片（鈴木基親氏旧蔵）は、いずれも18号遺跡出土の同一個体で本来一面分の可能性が高いこと、当該復元鏡は、広島県尾ノ上古墳出土鏡の同型技法による同一文様鏡と想定されること、またこの復元鏡は、17号遺跡出土八鳳鏡（変形夔鳳鏡）とは、ほぼ同大・同一型式ではあるものの、同範・同型関係にはないこと、復元鏡が尾ノ上古墳出土鏡と同一文様鏡であることから、17号遺跡および18号遺跡から出土した八鳳鏡は、古墳時代前期に列島に流入したものであり、近畿中枢と西晋王朝との交渉の結果もたらされた鏡である可能性が高いことなどを明らかにした。

キーワード：沖ノ島返納品、沖ノ島18号遺跡、八鳳鏡（変形夔鳳鏡）、広島県尾ノ上古墳、三国～西晋代

1. はじめに

本稿の課題は、返納品のうち鏡関連資料について報告し、従来知られている資料との関係やその意義について検討することである。具体的に該当するのは、鏡片 1 点である（図 1 下）。本資料は、沖ノ島 17号遺跡から出土している八鳳鏡（変形夔鳳鏡：図 2）と文様が共通した資料であり、従来から知られている「伝宮地嶽付近出土」とされる鈴木基親氏旧蔵の鏡片 3 点（図 1 左上）と、18号遺跡出土鏡片 5 点（図 1 右上）の関連資料であるとみられることから、破片相互の関係や17号遺跡出土鏡との同範・同型関係の有無の解明などが課題として挙げられる。あわせて、類例として存在する広島県尾ノ上古墳出土鏡がこれらの破片資料の位置づけを考えるうえで重要な資料であることを確認したことから、この点をふまえて返納品の位置づけについて検討を行う。

2. 関連資料をめぐる先行研究と問題の所在

（1）1970 年代以前の研究動向

返納品を含めた破片資料そのものの検討を行う前に、沖ノ島17号遺跡出土八鳳鏡と関連資料に関する先行研究について整理しておきたい。

17号遺跡出土八鳳鏡は、21面出土した17号遺跡出

土鏡群の中では、三角縁神獸鏡以外ではもう 1 面の魏晋鏡（変形素文方格鏡：17-20）とともに、数少ない中国鏡と考えられている資料である（図 2）。ただし本鏡は、17号遺跡の報告時点では「変形夔鳳鏡」と呼称され、文様の「平面磨り出し」を行っていないこと、縁が三角縁であること、鋸歯文が外区に存在することの 3 点から「仿製鏡」として位置づけられている（原田1961）。またこの資料に関連して、鈴木基親氏が所蔵していた「福岡県の宮地嶽の近在から見出された」とされる鈴木基親氏所蔵の八鳳鏡片 3 点について梅原末治氏が報告を行っており、この中で梅原氏は六朝代の舶載品の可能性を指摘している（梅原1966）。その後、沖ノ島の第 3 次調査に伴い新たに18号遺跡から出土した破片が上記 17号遺跡出土鏡と類似することから、岡崎敬氏はこれらの破片が17号遺跡出土鏡と「同範関係」にある可能性を想定した。あわせて、上記の伝宮地嶽付近出土鏡片についても、「所伝のように宮地嶽近在のものとするか、あるいは沖ノ島18号遺跡の夔鳳文鏡のかたわれとするか決定することはできないが、後者の場合の可能性もつよくのこされている」と指摘している。また氏は中国の西晋墓出土鏡に類例を見出しつつ、17・18号遺跡出土の当該八鳳鏡も西晋代の作と内区に踏返してつくった仿製鏡と考えることができる」とした（岡崎1979：pp.307-308）。樋口

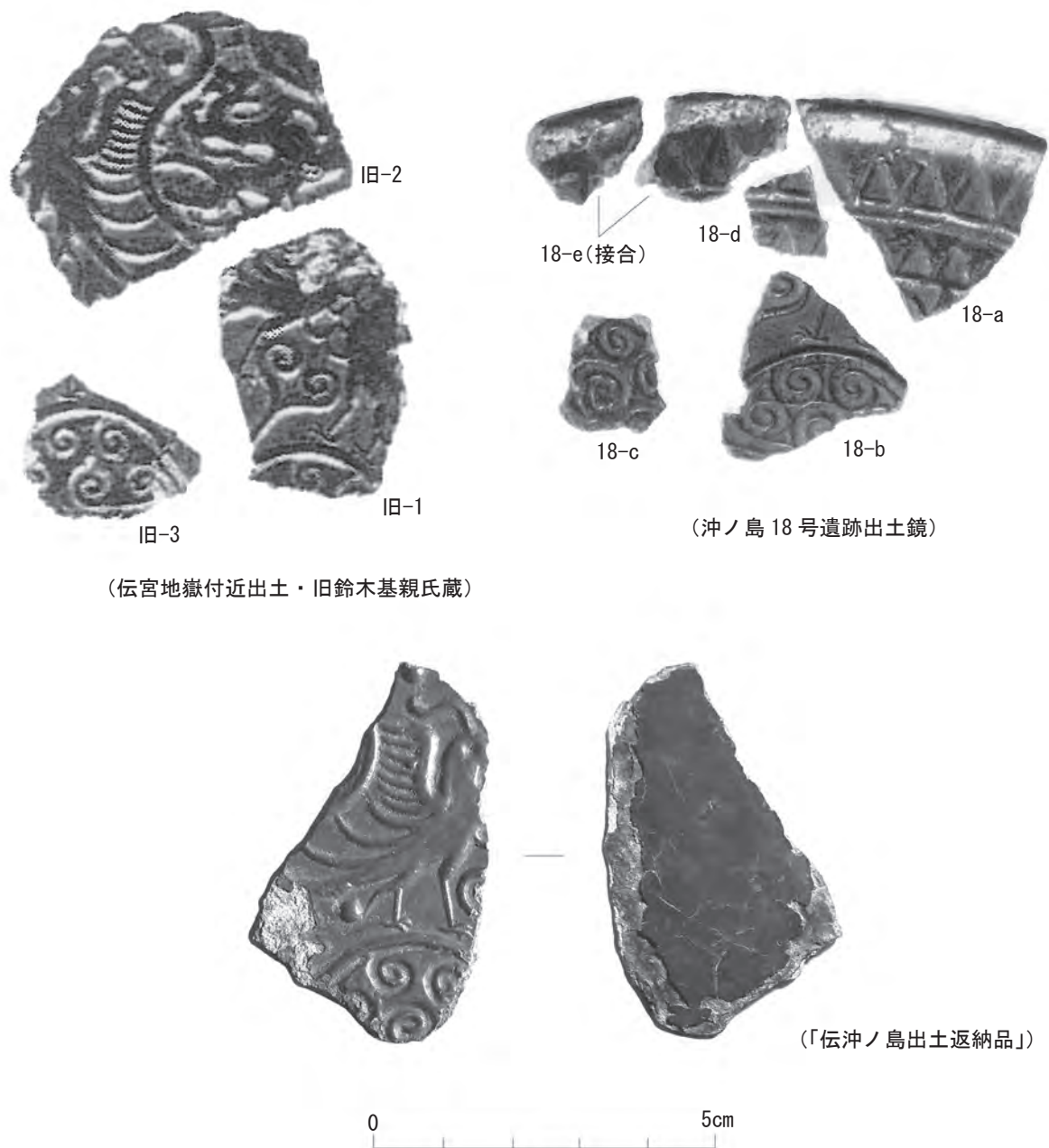


図1 返納鏡片と関連資料（ほぼ実大）

隆康氏も『古鏡』において、「沖ノ島鏡は、縁に二重の鋸歯文帯をつけ、便化が著しい。鏡体や銅質からみて、仿製鏡であろう」と想定している（樋口1979）。このように、第3次調査報告書刊行前後の時点では、これらの資料が同範関係などの近しい関係にあることが想定されていたこと、「仿製鏡」と「六朝代の舶載品」の双方の可能性が指摘されつつ、「仿製鏡」とする理解が有力視されていたことがわかる。

（2）1990年代以降の研究動向と課題

その後、当該八鳳鏡については、後述するように岡内三眞氏（1996）や岡村秀典氏（1996）が中国の出土資料を元に呉から西晋代の中国鏡と位置づけ、また秋山進午氏（1998）が沖ノ島出土鏡・伝宮地嶽付近出土鏡片の両者を西晋代よりも時期が下る東晋代の資料と位置つけたことなどを通じて、現在は中国鏡としての位置づけがほぼ定着している（例：車崎編2002；重住他2010）。製作年代については三国代・

西晋代・東晋代のいずれの時期とみるかで意見が分かれており、これについては後ほどあらためて検討したい。

前述の17号遺跡出土鏡・18号遺跡出土鏡片・伝宮地嶽付近出土鏡片の相互の関係について、その背景まで含めてまとめた形で検討したのが花田勝広氏の論考（1999）である。花田氏は、18号遺跡出土鏡片5点と伝宮地嶽付近出土鏡片3点について、復元案を提示しつつ本来同一個体であった可能性を指摘する（後述するように、氏の復元案では18号遺跡出土鏡片と伝宮地嶽付近出土鏡片の一部が接合することが示されている）。かつ、前述の岡崎氏の指摘を受けて、これらの同一個体と認定した鏡片が17号遺跡出土八鳳鏡と同範関係にあるものと推定する。また伝宮地嶽付近とされる所伝をもとに宗像地域の古墳築造動向を検討した結果、これらが出土したと想定可能な古墳が見いだせないことから、これらの破片はすべて沖ノ島から出土したものであるものと推測している（花田1999）。後述するように、花田氏の復元案にはいくつか修正すべき点が含まれているが、これらの鏡片が同一個体であり、かつすべて沖ノ島から出土した可能性を明確に指摘した点で重要である。

その後、重住真貴子・水野敏典・森下章司氏らにより沖ノ島遺跡出土鏡全資料の三次元計測とその報告が行われている（重住他2010）。この中で上記の八鳳鏡と関連資料についても検討が行われ、その結果として、上述の岡崎氏・花田氏が想定したような、17号遺跡出土鏡と18号遺跡出土鏡片との間での同範・同型関係については、その根拠が確認できなかったことが示されている。この結果、両者について同範・同型関係を前提とすることなく、相互の関係を検証することが必要となっている。

以上の先行研究をふまえた課題としては、大きく以下の4点が挙げられる：①17号遺跡出土鏡と18号遺跡出土鏡片は同範・同型か、②18号遺跡出土鏡片と伝宮地嶽出土鏡片は同一個体か、③返納品の鏡片はどのように位置づけられるか、④その上で、これらの資料は沖ノ島出土鏡群全体の中でどのように位置づけられるか。本稿で対象とする返納品の鏡片

は、上記の先行研究で扱われた鏡群の関連資料とみられることから、その相互の関係を明らかにすることが必要である。

他方で、18号遺跡出土鏡片や伝宮地嶽付近出土鏡片は破片資料であるため、本来同一個体であるかどうか、また欠損部を含めて考えたときに、17号遺跡出土八鳳鏡と同範・同型関係にあるかの検証については資料的な限界があった。この点について、類例として知られる広島県福山市尾ノ上古墳出土鏡の観察を行った結果、尾ノ上古墳出土鏡を介することにより、上記の問題の解決を図ることが可能であることが判明した。以下、この点について具体的に検討したい。なお本稿では、沖ノ島出土鏡の番号について、宗像大社の整理番号（重住他2010）にもとづいて記述する。

3. 返納鏡片・関連資料による八鳳鏡の復元

（1）沖ノ島17号遺跡出土鏡と尾ノ上古墳出土鏡の文様構成

ここでまず、沖ノ島17号遺跡出土鏡（以下「17-1鏡」）の文様構成について、前述の重住氏らの報告を引用する：「17-1 変形夔鳳鏡 22.1cm 785g 外区は縁が小さな斜縁状で、二帯の内向鋸歯文。続けて雲文と鳥文を2体ずつ交互に配した連弧文がめぐる。内区は宝珠形の四葉によって4つに区画され、四葉の中に横向きと振り返りの龍を置き、四葉の間には相向う夔鳳を置く。それぞれの夔鳳の頭上には「富」「冝」「子」「孫」の吉祥銘を入れる。鈕は円形鈕孔で平たい。鏡背面は全体的に模糊としていて、内区の一部はうまく文様表出されず「孫」の字が消えている。縁の2箇所が凹み、縁から鈕への長い亀裂がある。なお、18号遺跡に文様や特徴が酷似する鏡片5点がある」（重住他2010：p.22）。

あわせて、18号遺跡出土鏡片5点の記述も同様に引用する：「18-5-3 変形夔鳳鏡片 5点 22cm（推定復元径）17号遺跡の変形夔鳳鏡（17-1）と酷似する夔鳳鏡の破片。同範・同型の根拠は得られず。半円文の表出が2片間で異なる。伝宮地嶽付近の古墳出土の破片（鈴木基親氏旧蔵、鈴木氏売却にて現在

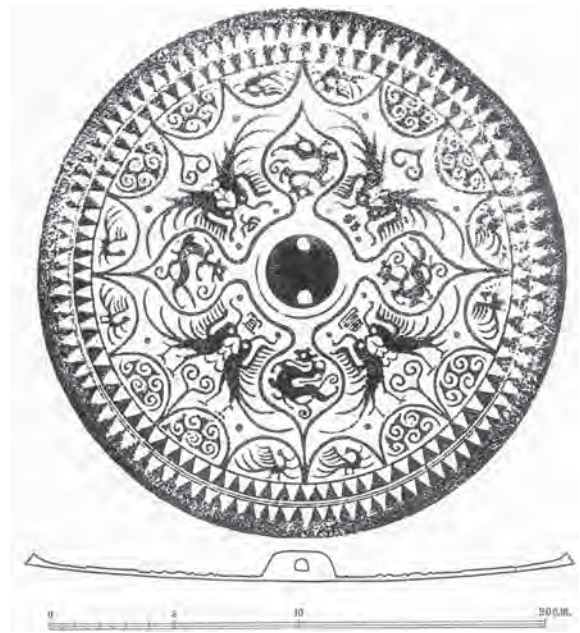


図2 沖ノ島17号遺跡出土八鳳鏡（17-1鏡：面径22.1cm，縮尺任意）



図3 広島県尾ノ上古墳出土鏡（面径22.0cm，縮尺任意）

所在不明 梅原1966)と同一個体とみる考えもある」(重住他2010 : p.26)。最後の部分では、前掲の岡崎敬氏(1979)および花田勝広氏(1999)らの論考の該当箇所が参照されている。

最初に問題となるのは、上記の重住氏らも取り上げているように、17-1鏡と18号遺跡出土鏡片5点および伝宮地嶽付近出土鏡片3点が同範・同型技法などによる同一文様鏡と認定できるかどうかである。本稿では、図1に示すように、18号遺跡出土鏡片5点は、「18-a」～「18-e」、伝宮地嶽付近出土鏡片3点(鈴木基親氏旧蔵鏡)は、「旧-1」～「旧-3」と呼称する。以下では、冒頭に掲げた返納品の鏡片1点(以下、「返納鏡片」と呼称)も含めた、計9点の破片の相互の関係について検討したい。

返納鏡片は、残存長約5cm×最大幅約4.3cmの内区片である。向かい合う鳳文のうちの左側の破片であることがわかる(図1下)。

花田氏(1999)の復元案では、1979年の報告書の復元をふまえつつ、①個人蔵の鈕、②鈴木氏旧蔵品、③沖ノ島3次調査(18号遺跡出土鏡)をあわせて検討が行われている。その結果、いくつかの破片が接合する可能性が示されており、後述するように、このうち旧-2と18-bの接合箇所については、筆者もその可能性が高いものと追認している。それ以外については、例えば氏が図示する旧-1は、写真と左右逆の形で復元・配置されているなど、いくつか修正を要する点がある。また上記①の個人蔵の鈕は、後に神宝館に寄贈された「伝7-2」に該当するが、これについては「仿製盤龍鏡」の可能性などが想定されており(重住他2010)、鈕の周囲の突線などがみられず鈕の形態自体も17-1鏡と異なることから、ここでも当該の八鳳鏡とは別個体として扱っておきたい。

返納鏡片は、これらのいずれとも接合する関係にはないことから、鏡片のみからではこれ以上の検討は難しい。そこで重要となるのが、今回検討する広島県福山市尾ノ上古墳出土鏡である(図3、以下「尾ノ上鏡」)。本鏡は、1999年に真砂土の採取に伴い緊急調査された全長約60mの前方後円墳から出土した鏡で、すでに盗掘を受けていたこともあり、一部欠

損しているが、面径22.0cmで17-1鏡とほぼ同じ大きさである(福山市教育委員会・福山市埋蔵文化財発掘調査団2000)。本鏡は、車崎正彦氏が『考古資料大観』において17-1鏡の関連資料として例示している(車崎編2002 : 102-1)。

文様構成について観察すると、17-1鏡と尾ノ上鏡は、共通性が高い一方で、異なる点がいくつか見受けられる。具体的には、①宝珠形の四葉座の中の龍像の向き、②鳳文の間の銘／文様の両者である。①については、17-1鏡では胴体がいずれも「左向き」で、左向き頭部の龍像と、右に振り返って口から渦文を出す龍像が交互に配されている。逆に尾ノ上鏡では、胴体がいずれも「右向き」で、胴体と同じ向きの頭部と振り返る頭部(＋渦文)の龍像の配置が交互である点は共通する。②の鳳文の間の銘／文様については、前述のように17-1鏡では一対の鳳文の頭上に「富」「亘」「子」「孫」の吉祥銘が配されるのに対し、尾ノ上鏡では逆三角形文とその下端から下方に延びた線が向き合った鳳文の頭部の間に続く形で描かれている。逆にそれ以外の特徴については細部に至るまで共通性が高い点が注目される。以上の①②の特徴から、17-1鏡と尾ノ上鏡は、ほぼ同大・同一型式でありながら、同範・同型技法などによる同一文様鏡ではなく、「別の文様の鏡」であるということがわかる。あわせてこの両者は、同一工房なり極めて近い関係の中で製作された連作鏡群などの可能性も想定される資料と考えることができる。

その上で問題となるのは、今回対象としている返納鏡片や18号遺跡出土鏡片5点・伝宮地嶽付近出土鏡片3点などが、17-1鏡と尾ノ上鏡のどちらとより関連がつよいかという点である。結論からいえば、これらの鏡片はいずれも尾ノ上鏡との共通性が高く、かつ同型技法による同一文様鏡の可能性が高いと考えられる。次項にてその論拠を述べる。

(2) 破片資料の復元と関連資料相互の関係

返納鏡片・18号遺跡出土鏡片・伝宮地嶽付近出土鏡片3点について、文様の細部を尾ノ上鏡と比較したところ、一部の破片を除くと、大半の破片が尾ノ上鏡の特定位置と微細な特徴まで含めて共通する

ことが判明した。各破片の想定位置を尾ノ上鏡の拓本上に配置したものが図5である。

文様の位置については、17-1鏡の文様構成（図2）をもとに、宝珠形の四葉座を基準として、上から時計回りに宝珠形1～4とする。内区の周囲に配された16個の連弧文（半円形）についても、上から時計回りに1～16とする。向き合う一対の鳳文については、右上・右下・左下・左上の区画ごとに、それぞれの左右の鳳文について検討した。

このうち、まず返納鏡片について観察すると、一対の鳳文の左側であることがわかるが、この背中に伸びた羽の中に、文様とは無関係な「点」が観察できる（図4左）。尾ノ上鏡を観察すると、左上区画の一対の鳳文のうち、左側の鳳文の同じ位置に「点」が確認できる（図4右）。この「点」は、古墳時代中・後期の同型鏡群などで広く観察される、いわゆる「共有傷」とみられ、両者が同型技法による同一文様鏡である可能性を示唆するものである。あわせて、尾ノ上鏡では、鳳文の左側の足付近から後方に伸びる尾の付近に珠文があり、その左側から半円形にかけての部分が崩れているが、返納鏡片にも同様の傷が認められる。また鳳文の下に位置する半円形内の渦文の細部も、尾ノ上鏡の半円形15と一致する。以上から、返納鏡片と尾ノ上鏡の両者は、同型技法による同一文様鏡である可能性が高いことが判明した。この認識を定点として、他の破片についても検討したところ、以下の観察結果が得られた。

・「左上」区画と宝珠形4：〔返納鏡片・18-b・旧-2〕。18-bは、半円形内の渦文が突線状に表現されている点の特徴である。この破片は、重住氏らの報告の中で、「半円文の表出が2片間で異なる」と注目された資料であるが（重住他2010：p.26）、尾ノ上鏡を観察すると、16ある半円形の中で、半円形14のみ渦文が突線状に表現されており、18-bと細部まで一致する。また旧-2は、右側の鳳文と宝珠形が描かれており、鳳文の頭部上に逆三角形文の左上角の一部が僅かに残存している（写真による復元ではやや小さくなっており、拓本とは若干ずれている）。また宝珠形内の龍像の胴体が右向きで、頭部も振り返らない右向きで表現されており、かつ鳳文

の両足が18-bの半円形上にある足先表現と接合する位置で確認できる。以上から、返納品・18-b・旧-2の3点は、尾ノ上鏡でいえば左上の鳳文から宝珠形4にかけての位置にあたる、尾ノ上鏡と同一文様鏡の一部と考えることができる。このうち、18-bと旧-2の接合関係については花田氏が先の復元案で示しており、本稿では尾ノ上鏡をもとにその点を追認したものといえる。

・「左下」区画：旧-1・旧-3の2点が該当する。花田氏による図上の復元では、前述のように旧-1を図示する際に左右が逆転しているが、写真をもとに検討したところ、旧-1と旧-3はほぼ接合する位置関係にあり、かつ半円形内の渦文や向かい合う鳳文の足先などの細部の特徴が一致したことから、尾ノ上鏡の同一文様鏡の左下の区画・半円形11に相当する位置の破片である可能性が高い。

・「右下」区画・半円形6付近：厳密には位置を確定できないが、18-aと18-cの2点が該当するものと推定した。18-aは外区の二条の内向鋸歯文と隣り合う連弧文（半円形）が接続する下端の部分が残存している。二条の内向鋸歯文のそれぞれの位置関係について、尾ノ上鏡の残存箇所すべてを確認したところ、鋸歯文の大きさおよび内側と外側の鋸歯文が相互に対応する位置関係にあることなどから、現在残存している範囲の中では、半円形6の外側の位置の可能性が高いと判断される。18-cについては、半円形内の渦文の位置・向き・大きさなどの細部で、現在尾ノ上鏡で残存している半円形で一致する箇所が見出されず、かつ文様構成からは18-aに隣接する位置に復元できることから、尾ノ上鏡では欠損している半円形6の一部であるものと想定した。なお今回の報告に際し、18-aと18-cの両者が接合するかどうかの検証を試みたが、18-cの破断面が欠けていることから直接の接合関係は確認できなかった。このため、18-cについては厳密には位置を特定できず、半円形6以外の欠損箇所に該当する可能性も想定しておく必要がある。

この他、18号遺跡出土鏡片5点のうち、18-d・eについては鋸歯文の特徴のみでは位置を限定できなかったため、ここでの図示は割愛したが、銅質・鋳

上がり・鋸歯文の大きさなどからみて、上記の鏡と同一個体である可能性が高い。

以上の検討により、18号遺跡出土鏡片3点と鈴木基親氏旧蔵鏡片3点は尾ノ上古墳出土鏡の同一文様鏡の同一個体の一部で、〔旧-2・18-b〕・〔旧-1・旧-2〕で接合関係が確認できた（18-a・18-cについては未確定）。また返納鏡片についても、尾ノ上鏡との共有傷の存在から、上記の同一文様鏡の一部であることが判明した。この結果、これらの破片はすべて同一個体で、かつ本来は18号遺跡から出土したものであることが確定でき、かつ本鏡は17-1鏡とは同範・同型の関係にはない（文様が異なる別個体）ことが明らかとなった。18号遺跡出土鏡片と伝宮地嶽付近出土鏡片の間での接合関係（旧-2・18-b）はすでに花田氏によって指摘されていたものであり、この点で両者がすべて18号遺跡から出土した可能性が高いとする花田氏の理解を追認した。その上で、花田氏の復元案を一部修正しつつ、本鏡が17-1鏡と同範・同型の鏡ではなく、別に尾ノ上鏡の同一文様鏡が存在しており、返納鏡片も含めてその一部であることを新たな復元案とともに示した、というのが上記の観察の成果である。

一点付言するならば、この復元は、これら9(7)点の破片が同一個体である可能性と、尾ノ上鏡の同型技法による同一文様鏡が現状で「1面」と想定した場合のものである。同一文様鏡が本来複数面存在した場合はこのかぎりではないが、銅質や鋳上がりなどでみるかぎり、これらの破片は同一個体の可能性が高いと判断されることから、1面分の同一文様鏡として復元した。現状で破片の推定位置が重複していないことも消極的ながら判断材料となろう。

4. 18号遺跡出土八鳳鏡（変形夔鳳鏡）の年代的位置づけ

最後に、上記の復元案をもとに、尾ノ上鏡の同一文様鏡1面が沖ノ島18号遺跡から出土した、と考えた場合の、本鏡の沖ノ島遺跡出土鏡群全体における位置づけについて検討しておきたい。以下では、上記の破片資料を18号遺跡出土八鳳鏡〔18-5-3鏡〕と

して記述する。

上述のように、17-1鏡と18-5-3鏡については、現在は三国代以降の中国鏡とする見解が有力である。1990年代以降の主な見解として、以下のような諸研究が挙げられる。岡内三眞氏は、鈕座と文様の組み合わせにもとづき、宝珠形の鈕座をもつものをⅣ式と分類する。Ⅳ式鏡は「三国時代初めに生産が始まり、西晋の半ば・4世紀を待たずに生産が衰えてしまい、およそ60-70年の生産期間であったと想定される」とした上で、沖ノ島鏡を含む「Ⅳ B2b ロ式」鏡は西晋代の作と位置づけている（岡内1996：p. 307）。岡村秀典氏は、後述する関連資料の西晋墓出土事例から、いずれも西晋代の作と想定している（岡村1996）。他方、秋山進午氏は、後漢代以降の八鳳鏡を検討する中で、宝珠形の鈕座を持つ一群を岡内氏と同様に4式とし、外区平素縁のものを4A式、外区有文縁のものを4B式、全体的に線・立体表現図形の文様のものを4C式と分類する。沖ノ島の資料は氏の4C式に該当する。氏は、4A式を呉中期から西晋にかけて、4B式を呉代後半から西晋およびそれ以降、4C式は「線表現の表出や内行花文が規格をはずれ、周縁に鋸歯文帯が入るなど、夔鳳鏡の範疇からかなり外れる。その年代は南朝にまで引き下げる必要がある」とした（秋山1998：p. 14）。

それ以降では、車崎正彦氏が呉以降の「三国鏡」として17-1鏡・尾ノ上鏡や仏像夔鳳鏡の事例を挙げている（車崎編2002）。車崎氏は、三国時代の呉鏡・魏鏡・西晋鏡をまとめて「三国鏡」と総称している。これらの宝珠形の四葉座を持つ一群は、仏像夔鳳鏡も含めて呉の鏡と捉えられている（王1998）。また17-1鏡や18-5-3鏡について、重住真貴子氏・水野敏典氏・森下章司氏らは「三国鏡」と位置づける（重住他2010）。下垣仁志氏は「三国〜」（三国代以降）、岩本崇氏は「西晋鏡（280〜300年ごろ）」として位置づけている（下垣2018；岩本2023）。筆者も上記の先行研究などをもとに、呉系の三国代以降の鏡として位置づけている（辻田2007・2025）。

17-1鏡や18-5-3鏡は、中国に直接の類例がないため、実年代についても上記のように意見が分かれて



図4 返納鏡片と尾ノ上鏡の「左上」区画付近（縮尺任意）

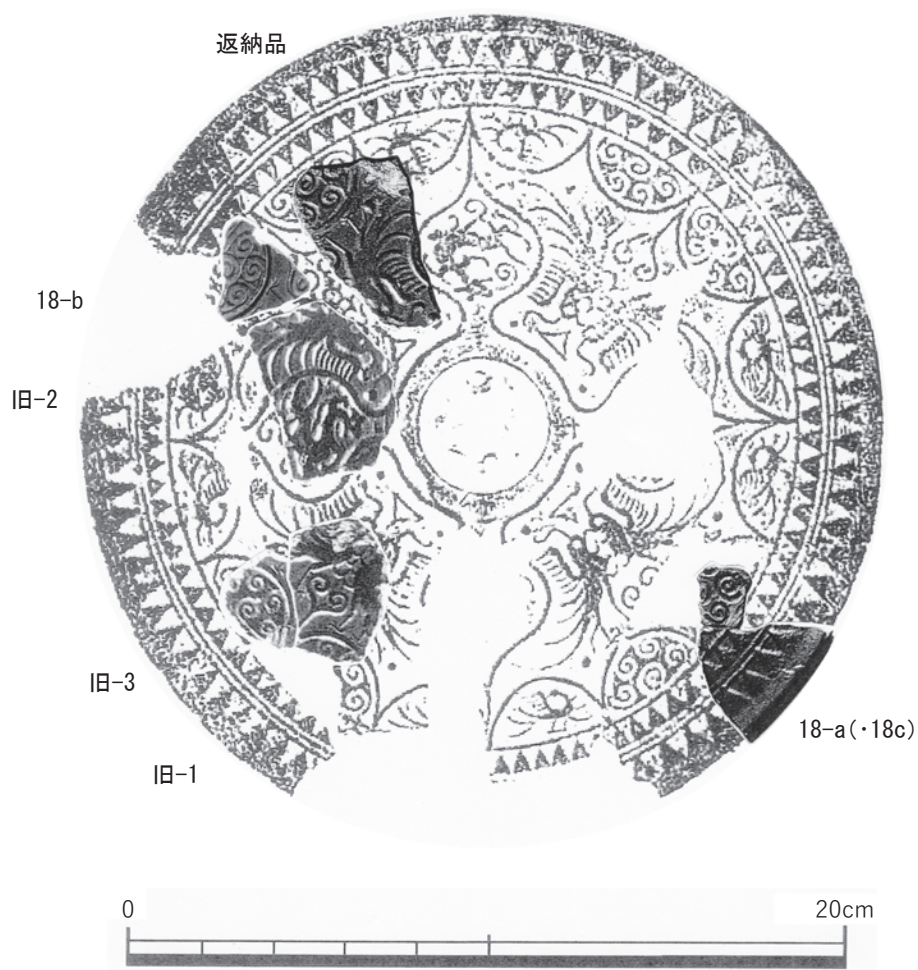


図5 関連資料の復元案（縮尺任意）
背景は尾ノ上古墳出土鏡



図6 中国出土の関連資料（縮尺任意）
 1：浙江省金華古方25号墓出土鏡（復元径15.2cm）
 2：江西省東湖区永外正街1号墓出土鏡（面径12.0cm）

いるが、多くの先行研究の中で類似した資料として挙げられている2面についてあらためて確認しておきたい。浙江省・金華古方25号墓出土鏡は、秋山氏分類の4C式に該当し、復元径15.2cmで外区に鋸歯文を有する（図6-1:金華地区文管会1984）。江西省・東湖区永外正街1号墓出土鏡は復元径12cmで（図6-2:江西省博物館1974）、秋山氏は単鳳鏡として分類するが、宝珠系の中に龍文などを描く点などが沖ノ島鏡群と共通する。これらはいずれも西晋墓から出土したものとされることから、17-1鏡・18-5-3鏡や尾ノ上鏡についても、上述の岡内氏や岡村氏が指摘するように、三国代以降の西晋代に定点を置くことができるものとする。

その上で、今回尾ノ上鏡と沖ノ島18-5-3鏡が同型技法による同一文様鏡と想定されたことの意義について考えておきたい。尾ノ上古墳は、円筒・壺形・朝顔形埴輪を伴っており、後世の攪乱により堅穴式石槨が大きく破壊されていたが、鏡以外に石製・ガラス製の玉類が出土している。玉類の組成からは前期後半の可能性が指摘されている（谷澤2020）。上記のような三国鏡においては、同型技法による同一文様鏡の存在は一般的であるが、今回18-5-3鏡と尾ノ上鏡が同一文様鏡であることが判明したことにより、これらの鏡が古墳時代前期に列島に流入したも

のであること、17-1鏡もその一部である可能性が高いことが確認された。18-5-3鏡と尾ノ上鏡は、同一文様鏡ではあるものの、古墳時代中・後期の同型鏡群の一部などではなく、西晋鏡として4世紀代以前に列島に流入したものであることが確定した点は大きい。古墳時代前期に近畿地域に流入した少なくとも3面の八鳳鏡のうち、2面は沖ノ島に、1面は尾ノ上古墳を築造した地域集団のもとにもたらされたと考えることができる。

また本鏡群（17-1鏡・18-5-3鏡・尾ノ上鏡）が江南地域に類例がみられる西晋鏡であると考えた場合、これらは3世紀後葉～末前後において行われた、近畿中枢による西晋王朝への遣使の結果として列島にもたらされた鏡であると理解することができる。列島の古墳時代遺跡出土鏡の中に、三国西晋鏡の存在はこれまでも多く知られているが（車崎編2002）、本鏡群は、三角縁神獣鏡とは別の形で3世紀後半代における西晋王朝とのつながりを想定することが可能な資料としても重要である。他の列島出土西晋鏡についても、同様の観点での検討が必要であろう。

5. 結語

以上、返納品の鏡と関連資料について検討を行った。結果は以下のようにまとめることができる。

- ・返納鏡片・18号遺跡出土鏡片・伝宮地嶽付近出土鏡片（鈴木基親氏旧蔵）は、いずれも18号遺跡出土の同一個体で本来一面分の可能性が高い
- ・上記復元鏡は、広島県尾ノ上古墳出土鏡の同型技法による同一文様鏡と想定される
- ・上記復元鏡は、沖ノ島17号遺跡出土八鳳鏡（変形雙鳳鏡）とは、ほぼ同大・同一型式ではあるものの、同範・同型関係にはない
- ・上記復元鏡が尾ノ上古墳出土鏡と同一文様鏡であることから、沖ノ島17号遺跡および18号遺跡から出土した八鳳鏡は、古墳時代前期に列島に流入したものである可能性が高い

尾ノ上古墳出土鏡の調査および写真の掲載に際しては、福山市文化観光振興部文化振興課の関係各位に大変お世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 秋山進午 1998 「雙鳳鏡について」『考古学雑誌』84-1
- 岩本崇 2023 「鏡からみた沖ノ島祭祀の展開」『沖ノ島研究』9
- 梅原末治 1966 「福岡県下出土の雙鳳鏡片」『九州考古学』28
- 王仲殊（西嶋定生監修・尾形勇・杉本憲司編訳）1998 『三角縁神獣鏡』学生社
- 岡内三眞 1996 「双鳳八爵文鏡」『東北アジアの考古学第二 [権域]』キブンセム
- 岡崎敬 1979 「鏡」宗像大社復興期成会『宗像沖ノ島』
- 岡村秀典 1996 「中国鏡からみた弥生・古墳時代の年代」『考古学と実年代』第1分冊、埋蔵文化財研究会
- 金華地区文管会 1984 「浙江金華古方六朝墓」『考古』1984-9
- 車崎正彦編 2002 『考古資料大観 5 弥生・古墳時代 鏡』小学館
- 江西省博物館 1974 「江西南昌晋墓」『考古』1974-6

- 重住真貴子・水野敏典・森下章司 2010 「沖ノ島出土鏡の再検討」水野敏典編『考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』奈良県立橿原考古学研究所
- 下垣仁志 2018 「沖ノ島の鏡」『季刊考古学別冊27 世界のなかの沖ノ島』雄山閣
- 谷澤亜里 2020 『玉からみた古墳時代の開始と社会変革』同成社
- 辻田淳一郎 2007 『鏡と初期ヤマト政権』すいれん舎
- 辻田淳一郎 2025 「九州の古墳時代遺跡出土鏡をめぐる諸問題」『九州島の古墳時代における銅鏡の様相』九州前方後円墳研究会
- 花田勝広 1999 「沖ノ島祭祀と在地首長の動向」『古代学研究』148
- 原田大六 1961 「17号遺跡の遺物」宗像大社復興期成会『続沖ノ島』
- 樋口隆康 1979 『古鏡』新潮社
- 福山市教育委員会・福山市埋蔵文化財発掘調査団 2000 『尾ノ上古墳』福山市埋蔵文化財発掘調査団調査報告書第13集
- 宗像大社復興期成会 1979 『宗像沖ノ島』

挿図出典

図1：梅原（1966）・宗像大社復興期成会（1979）の写真を改変、返納鏡片は筆者撮影。図2：写真は筆者撮影、拓本・実測図は原田（1961）を改変。図3：写真は筆者撮影、拓本・実測図は福山市教育委員会・福山市埋蔵文化財発掘調査団（2000）を改変。図4：筆者撮影。図5：福山市教育委員会・福山市埋蔵文化財発掘調査団（2000）の拓本と図1の写真をもとに筆者作成。図6-1：金華地区文管会（1984）、図6-2：江西省博物館（1974）を改変。

Ⅳ 沖ノ島遺跡の金銅装甲冑—伝沖ノ島出土返納品と 21 号遺跡出土品—

橋本 達也 鹿児島大学総合研究博物館

要旨：伝沖ノ島出土返納品という一群の資料の中には金銅装甲冑の破片が含まれている。また沖ノ島ではかつて21号遺跡で金銅装衝角付冑が報告されている。今回、この返納品と21号遺跡出土の甲冑片の検討を行った。その結果、甲冑には、鉄地金銅製の鉾留板甲と鉾留衝角付冑、鉄製の頸甲が確認でき、鉄製肩甲も想定できる4点セットの存在することを指摘した。これらは、古墳時代中期中葉のものであり、当時のヤマト政権中枢、倭の五王の最上位層の祭祀にかかわるものであると推定できる。沖ノ島での祭祀が、古市・百舌鳥古墳群の造営者たちが中心となったヤマト政権の中枢と古墳時代中期にも深く関わっていたことを表すものといえよう。

キーワード：金銅装甲冑、鉄地金銅製、沖ノ島21号遺跡、古墳時代中期、倭の五王

1. はじめに—資料の概要と今回の調査—

返納品の甲冑資料について 沖ノ島遺跡での発掘調査による出土品とは別に、「伝沖ノ島出土返納品（以下、「返納品」とする）」という一群の資料が宗像大社神宝館に所蔵されている。

このなかには金銅装の帯金式甲冑の破片を含んでおり、沖ノ島遺跡の歴史的評価においてもきわめて重要な資料群であることは一目瞭然である。本稿は、この返納品の甲冑片の資料検討に端を発し、とくに古墳時代中期の沖ノ島遺跡の重要性をあらためて評価しようとするものである。

21号遺跡出土品について 沖ノ島では岩上祭祀の21号遺跡で金銅製品の「衝角付冑」が図・写真とともに報告されており（松本1979）、また文中で「頸甲」の存在も記載されている。

筆者はかつて『古墳時代甲冑集成』を作成した際（橋本・鈴木2014）、この掲載情報をもとに検討したところ鉾留のある金銅装の帯状金具は甲冑ではなく胡籐金具などが候補になるものと推定し、鉄地金銅製の衝角付冑の存在には確証がないと判断して集成に加えなかったということがある⁽¹⁾。同様の検討は齊藤大輔も行っており、『沖ノ島研究』第10号で帯金は胡籐金具である可能性に言及している（齊藤2024, p. 11）。

今回、あらためて返納品の調査の機会が得られた

ことにより、この21号遺跡の資料とあわせて比較する必要が生じた。そこで21号遺跡出土「衝角付冑」と報告された資料についてもあわせて検討した結果を報告する。

資料の現況と今回の調査方法 返納品は現在未指定であるので保存処理は行われていない。一方、21号遺跡出土品は国宝に指定されており、保存処理済みである。そのため返納品は表裏の観察が行えたが、21号遺跡出土品は基本的に保存台に固定されて管理されているので片面しか観察できていない。また、保存台に固定されたものの多くは外面を上面にして固定されているが、なかには内面を上面にして固定しているものもある。

このような状況のもと、本稿で使用する図は、返納品については通常の実測手法に拠ったものであるが（図2・3）、一方の、21号遺跡出土品は通常の実測が行えないため、保存台ごと三次元計測を行い、個別資料のデータを切り出して、オルソ画像と断面図を作成し、それに描き込む形で作図を行ったものである（図4・5）。そのため21号遺跡出土品は現状の設置状況の投影図となっており、甲冑本来の正位置の形状を投影したものとなっていないものを含むことは断っておく。なお、返納品および21号遺跡出土品はX線画像が取得されており、表面観察にあわせて、その情報を踏まえて図化をしている。

三次元計測は SfM/MVS 法による。データの作

成には Agisoft 社 Metashape を使用した。三次元データは解析ソフト CloudCompare で加工し、オルソ画像と断面図を作成している。

なお、21号遺跡出土品のうち、5点は保存台から外されているため通常の実測を行っている（表1・図4・図5-23・24・30・52・62）。

2. 返納品と21号遺跡出土甲冑の同一性の認定

返納品が沖ノ島由来のものであれば、そこに含まれている金銅装甲冑は21号遺跡の「鉄地金銅張」の「衝角付冑」として報告されたものとの関係を検討しなければならない。

そこで今回の検討について結論から述べると、両者間に接合するものまでは確認できなかったが、両者は同一の甲冑の一部であると考えるのが妥当である。すなわち、返納品の甲冑は21号遺跡出土甲冑と同じ甲冑の一部であると考えられる。以下に、その根拠を示しておきたい。

鉄地金銅製板甲 まず金銅装甲冑とは、金銅板で飾り、金色に輝くことを特徴とする甲冑であるが、それには甲冑本体を金銅板のみでつくった金銅製甲冑と鉄板に金銅板を被せて装飾した鉄地金銅製甲冑の2種の存在がこれまで知られている（橋本2013, pp. 59-60）。

返納品・21号遺跡で確認できる金銅装の帯金は、

鉄地金銅製の帯金式甲冑の帯金で、地板を鋲留しており、まずは有機質を本体とする胡籐金具などではないことが確認できる。

帯金幅、鋲径、金銅技法などの共通性は高く、保存処理の前後での違いはみられるが、サビ等の遺存状態は似ており同一個体とみることに問題はない。

また、返納品のなかには帯金以外に押付板・裾板などがあるので、なかには板甲⁽²⁾の破片を含むことが確認できる。これまでに鉄製板甲は約540例以上の存在が知られるなかで、鉄地金銅製の板甲は2例のみしか知られていないきわめて稀少なものであるため、沖ノ島遺跡内で2点以上の複数例の存在する可能性は限りなく低い。

特徴的な波状列点文 返納品と21号遺跡出土甲冑で共通するもっとも重要な属性として、帯金に施された波状列点文がある。通常、古墳時代中期に一般的波状列点文は図1-4のように、楔形の連続切削による蹴り彫りで施文する。一方、ここでみられる波状文は、連続する細かな二本の平行線からなっている。また、波状文の両外側の区画線が蹴り彫り線ではなく、浅い点打ちによる列点文とすることもきわめて特徴的である（図1-1・2・3）。この返納品と21号遺跡甲冑にみられる波状列点文は他に類例のない特徴的な技法によって施文されており、両者を別個体の製品とみるのは困難である。両者は同一個体の製品とみなして問題ない。

すなわち、沖ノ島では21号遺跡において衝角付冑

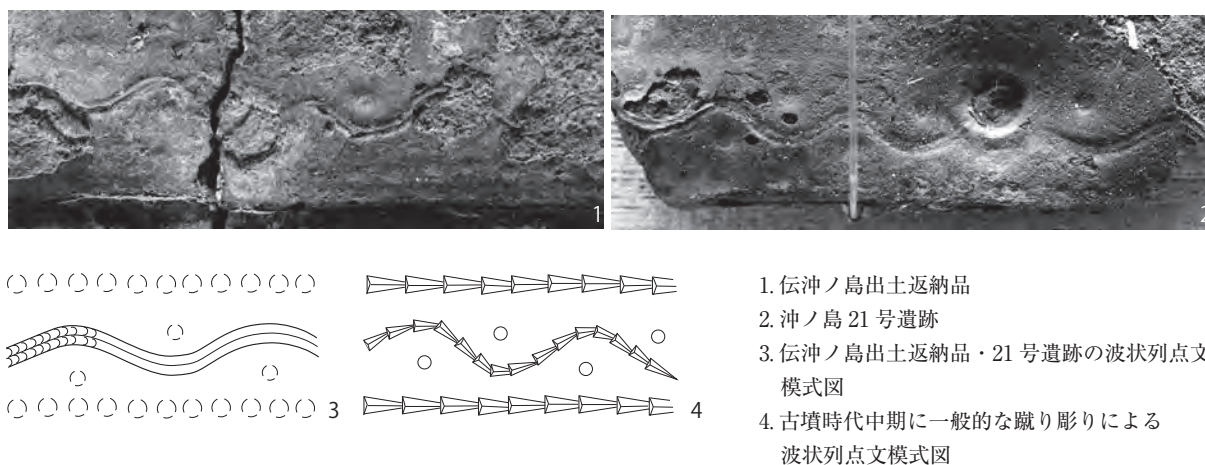


図1 伝沖ノ島出土返納品・21号遺跡の甲冑にみられる波状列点文

表 1 伝沖ノ島出土返納品・21 号遺跡甲冑一覧

来歴遺跡 返納品	図番号	資料番号	甲冑形式	部位	金銅板	文様	鋳頭径	板幅	備考
	1	-	板甲	押付板	○		7.0		
	2	-		押付板・堅上板か	○		5.6		内外面全体有機質付着
	3	-		押付板・堅上板か	○				
	4	-		蝶番金具	○				裏面に有機質
	5	-		帯金・地板	○	○	7.0	2.9	
	6	-		帯金	○	○	4.9	2.9	有機質付着
	7	-		帯金	○	○			
	8	-		帯金	○		5.1,5.7	2.7	有機質付着
	9	-		帯金	○	○		2.9	幅 2.85cm
	10	-		帯金	○				
	11	-		帯金	○	○	4.8		
	12	-		帯金	○			3.0	覆輪なし
	13	-		裾板	○		5.6		覆輪なし
	14	-		裾板			7.3- 7.7		外面、土・サビ・有機質に覆われる。内面有機質付着。
	15	-		裾板(左脇)か	○	○	5.2		外反
	16	-	頸甲						襟高 0.8cm、低く緩い。肩幅3.8cm
	17	-	不明(冑か)		○		5.0		
	18	-	冑	鋳	○	○		3.2	下端外反
	19	-		鋳	○			3.1	内面全体有機質付着
	20	-		鋳か	○				前端斜め、折返
	21	-	不明鉄板						
21号遺跡	22	21-11	板甲	蝶番金具			6.3,5.7	1.5	
	23	21-10-26		帯金	○	○	4.5	2.9	
	24	21-10-22		帯金	○	○	4.8- 5.2	3.4	
	25	21-10-20		帯金	○	○		3.2	
	26	21-10-25		帯金	○	○		3.4	
	27	21-10-9		帯金	○	○			
	28	21-10-10		帯金	○	○			
	29	21-10-6		帯金か	○				孔は鋳抜けか
	30	21-10-5		裾板か	○	○	5.8- 6.2		上下やや外反
	31	21-10-14		裾板か			6.2		上下ソリ少ないので裾板か。表面サビ、金銅板あるか不明瞭。
	32	21-10-13		裾板上部か	○				上下外反
	33	21-9-2		裾板					上下外反
	34	21-9-5		帯金・地板			5.6- 6.3		
	35	21-9-7		帯金か					鋳かサビに覆われる。
	36	21-10-15		帯金	○				金銅板上繊維塊
	37	21-10-19	甲か	部位不明					
	38	21-10-12		部位不明					
	39	21-10-3		部位不明					
	40	21-10-4		部位不明					
	41	21-10-8		部位不明					
	42	21-10-11		部位不明					
	43	21-10-17		部位不明					
	44	21-10-44		部位不明					サビ大きい
	45	21-9-11	頸甲	襟部					
	46	21-10-1		襟部					
	47	21-26-20		襟部					襟高 1.0cm
	48	21-9-6		襟部					襟緩い
	49	21-26-22		後本体・蝶番金具			6.4,5.9	1.2	長さ1.95cm、本体板上下内湾
	50	21-9-12		本体板部か					
	51	21-9-3	衝角付冑	伏板・地板	(○)	(○)	7.0		伏板金銅板不明瞭ながらありか。上段地板金銅板ありとみられる。
	52	21-10-18		伏板か	○	○	5.7- 5.9		内湾、押付板・堅上板の可能性もあり。
	53	21-9-8		伏板か					

	54	21-9-9		伏板か					
	55	21-9-4		伏板か					
	56	21-9-13		衝角部					外接式か
	57	21-9-1	冑か	部位不明			5.2-5.6		横方向内湾
	58	21-10-16	鋳か	先端部	○	○		2.6	文様は下側のみ
	59	21-10-2		先端部	○			2.5	
	60	21-10-7		最下端					下端折返。金銅板か不明瞭
	61	21-10-23	袖鋳		○	○		3.2	覆輪孔か
	62	21-10-24	鋳か		○	○		3.5	下辺に威孔、上辺にも孔列あり
	63	21-9-10	不明小片	部位不明					

資料番号は宗像大社の整理番号を指す。

帯金には押付板・堅上板・裾板の小片を含む。板甲帯金には衝角付冑帯金を含む可能性もあり。

鋳径の単位は mm、板幅単位は cm。

と頸甲は報告されていたが、さらにそれに板甲を含むもので、また頸甲には肩甲も伴うであろうから、4 点の帯金式冑のセットが存在していたとみなされる。

3. 資料各説

資料を確認しよう。表 1 と図 2～5 の図番号は対応しているので、以下、資料の説明にはこの番号を用いる。

(1) 板甲

押付板 確実な押付板は 1 のみであるが、2 もその可能性が高い。鉄地金銅製であるが、表面の遺存状態は不良なので文様は不明である。

3 は角部に向かって幅を狭める最小幅 3.0 cm のもので、カーブはなく平坦である。覆輪がなく平坦であるなど、やや決め手を欠くが堅上板右脇ないし押付板左脇部が候補となろうか。覆輪がないことは後述の裾板の項で触れる。

蝶番金具 4・22 は折損しているが長方形 2 鋳式の鉄地金銅製蝶番金具である。少なくとも右脇は開閉したことを示している。

帯金 鉄地金銅製で波状列点文の施文が明瞭なもっとも特徴的な部位である。幅 2.7～3.0 cm (5・6・8・9・12・23)、3.2～3.4 cm (24・25・26) の、大きく分けて 2 種が存在する。

5 は帯金近くの地板に穿孔があるので、板甲後胴上段地板の懸緒孔の可能性が考えられ、後胴上段帯

金は幅 2.9 cm の帯金とみられる。9 は帯金に合わせ目があるので、板甲脇部下段帯金であり、下段帯金もまた幅 2.9 cm の帯金と考えられる。幅 2.7 cm の 8 は同じく下段地板の引合板と接する前端部と考えられる。

そうなると 3.2～3.4 cm の帯金は消去法的に前胴上段帯金と推定し得る。あるいは後述する衝角付冑の帯金は特定できていないので、この帯金は衝角付冑の胴巻板の可能性も考慮が必要となるが、23 の角が直角であることからすれば、衝角付冑の胴巻板の前端にはならない。やはり板甲前胴上段帯金とするのが妥当であろう。

地板 帯金に鋳留されて一部が残るもののみである。そのため地板型式も厳密には確定できないが 5・13・30 でみると、三角板であることを積極的に認める残存部位はないので、横刎板を想定しておきたい。

いずれもサビによって表面状態が不良であるが、地板に金銅板を認めることができない。帯金では外面から折り返した金銅板の端部を内面で確認できるものが多いが、現状において地板でそのような金銅板の折り返しは認められないので、地板は鉄製であったと想定する。ただし、将来的には保存台に留められた資料の裏面観察、材質分析やクリーニングを行えば、認識を変更する必要性が生じる可能性は否定しない。

裾板 15 は小片であるが、上下方向に外反しており、裾板の左脇上端部と考えられる。この部位に波状列点文が認められることから、裾板上辺に沿って波状列点文が施文されていたと認められる。ほかの

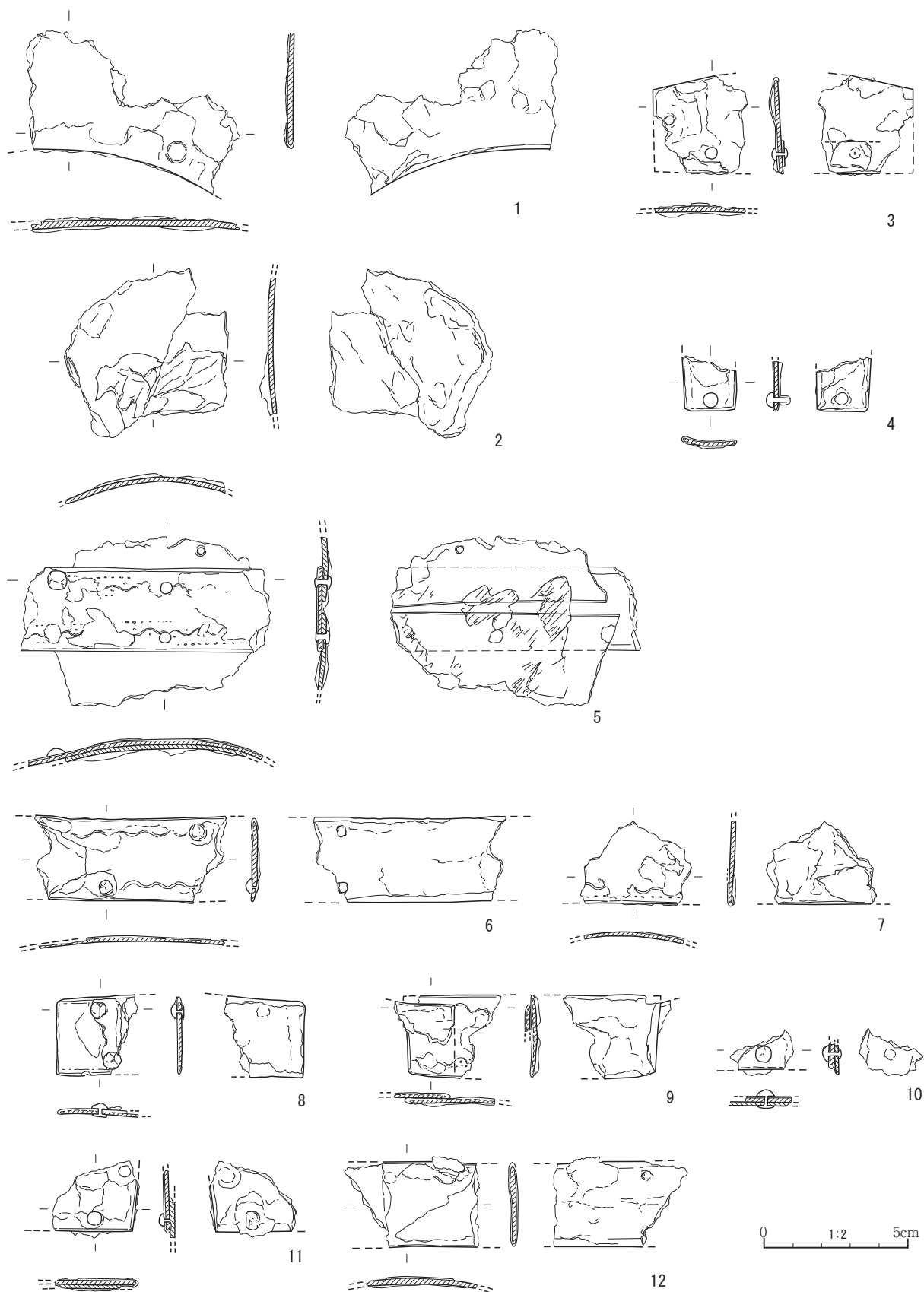


図2 伝沖ノ島出土返納品 甲冑 (1)

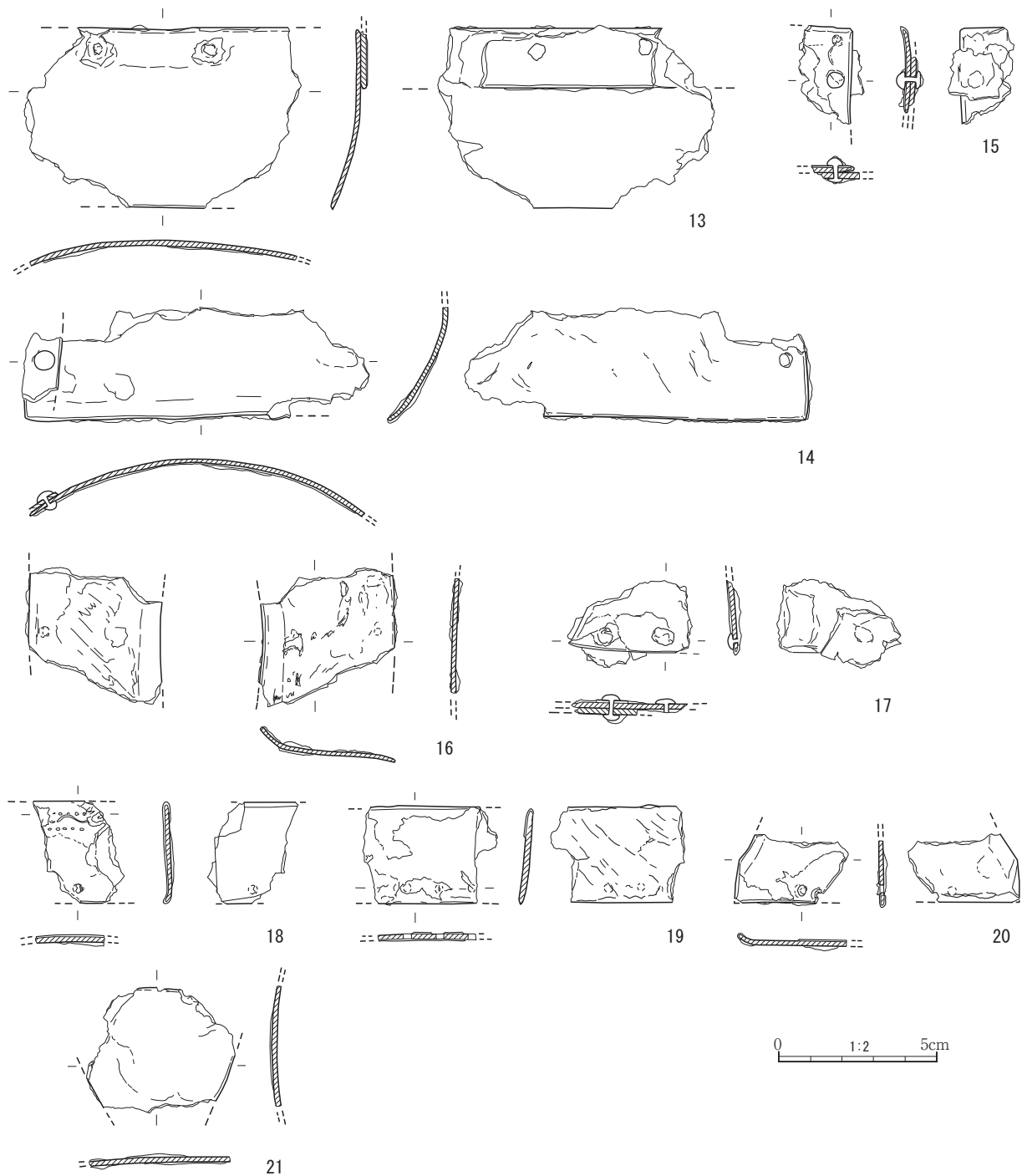


図3 伝沖ノ島出土返納品 甲冑 (2)

資料は表面の遺存状態が良好でないため文様などは確認できない。14は鉾留で板を結合しており、左前胴前端引合板との結合部、左脇部結合部後胴側、右脇部蝶番板との結合部が候補となる。

13・14ともに覆輪がみられない。鉄包覆輪が脱落した可能性も考慮は必要であるが、類例となる大仙陵古墳の金銅製横矧板鉾留板甲も覆輪がなかったと

みられるので、同じ金銅装板甲として覆輪がなかった可能性は考えられる。そうすると上記の3が豎上板・押付板の一部とみることも可能であろう。

金銅装 押付板・帯金・裾板が鉄地金銅製であることは確実であるが、地板に関しては確定ではないものの現状の観察によれば鉄製とみておくのが妥当であろう。

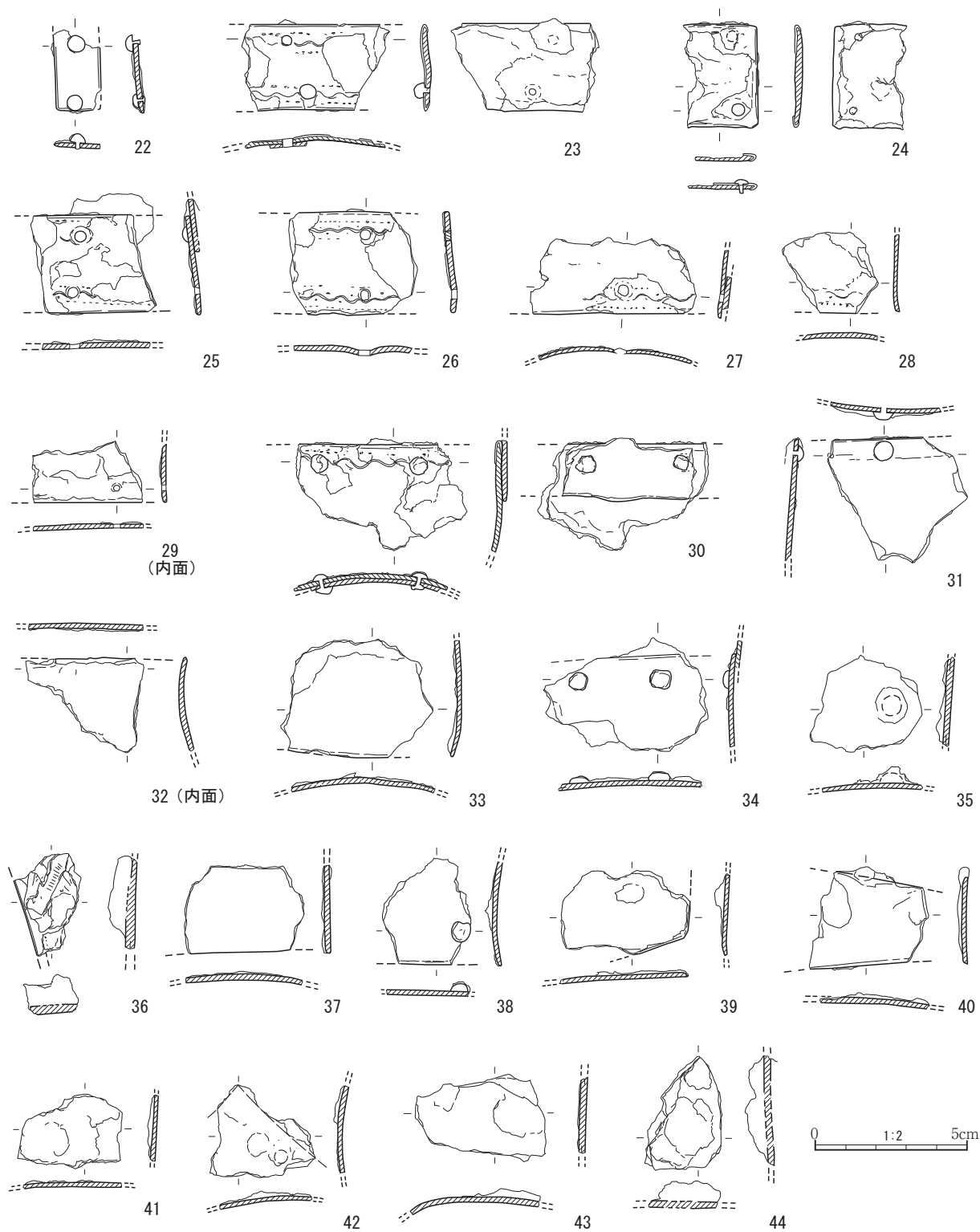


図4 沖ノ島21号遺跡 甲冑 (1)

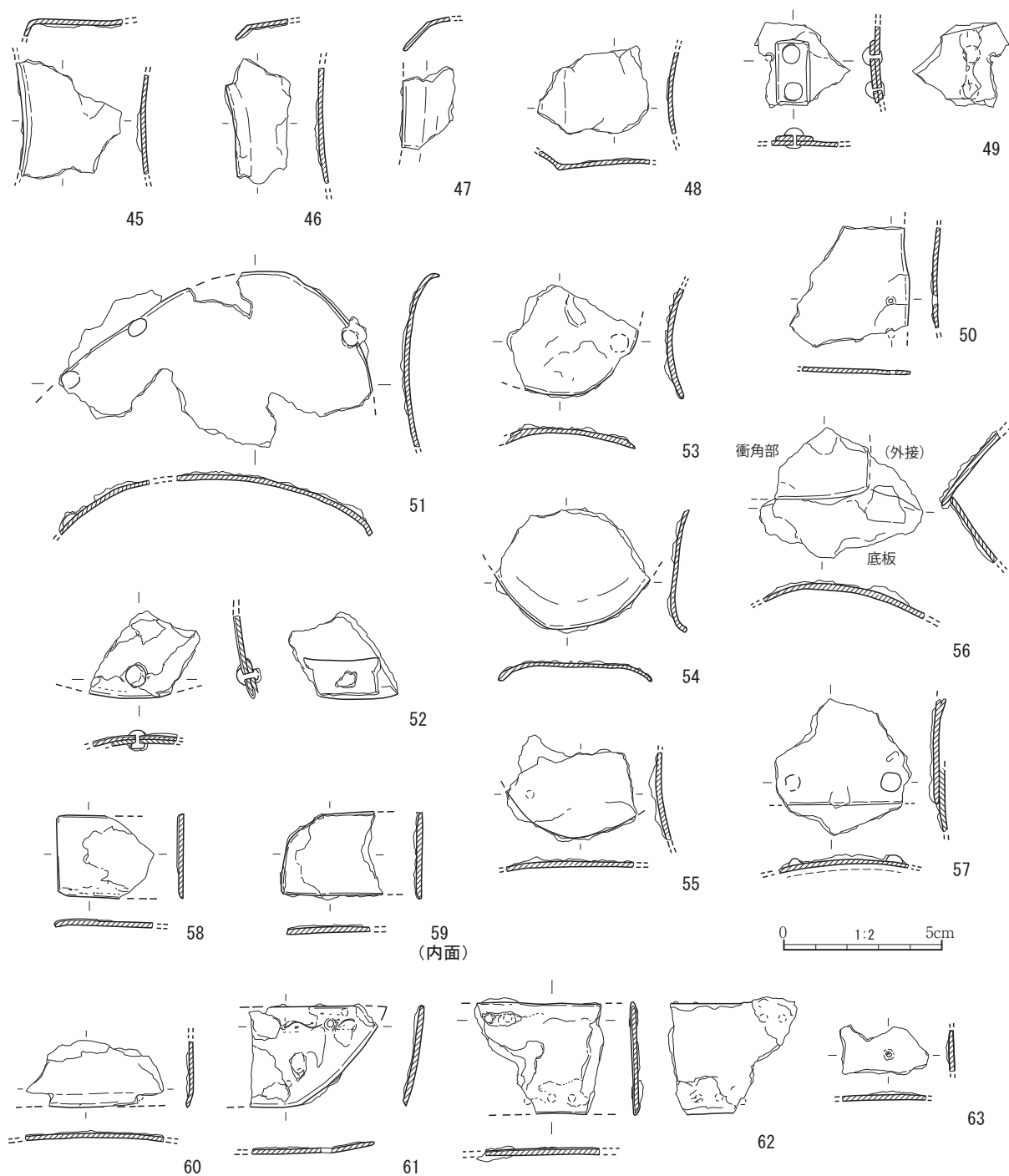


図5 沖ノ島21号遺跡 甲冑(2)

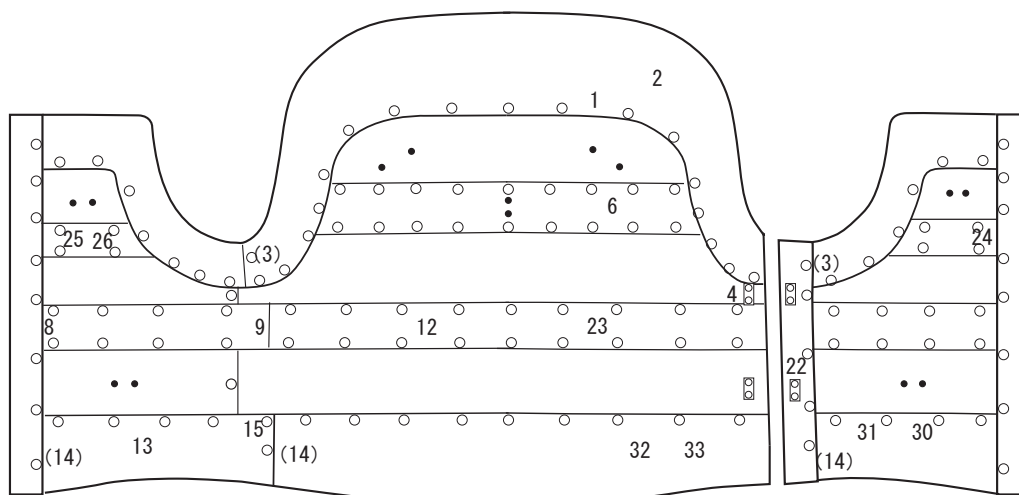
資料がいずれも小片であるため確定的な復元は難しいが、以上の観察に基づき、可能性のある推定位置を示したものが図6である。

(2) 衝角付冑

概要 返納品で衝角付冑の本体と考えられるのは

17のみで、それも確定的とはいえない。17を冑片と考えるのは板甲とみるには鉾間隔が狭いことによる。一方で、21号遺跡には当初から衝角付冑と報告されたように伏板といった特徴的な部位がある。

伏板 51は伏板で良いであろう。52～55は板端部が弧を描いており、伏板の可能性を考える。51・53～



可能性のある部位に図番号を付したもので、正確な位置関係は不明。

図6 伝沖ノ島出土返納品・21号遺跡板甲展開模式図

55は表面状態が不良で金銅装は不明確であるが、52は内湾しており、金銅板に波状列点文が明瞭に確認できる伏板とみる。伏板が文様をもつ鉄地金銅製であったとすることの根拠になるが、ただし、52は小片のため押付板・豎上板の脇部付近などになる可能性を完全には否定できない。

衝角部 56はサビのため状態は不良であるが鉄板をL字形に組み合わせており、衝角部と衝角底板の結合部で、外接式の衝角部の可能性が考えられる。

鋳 18～19・58～62は鋳で、そのなかでも61は袖鋳と考えられる。58・59に角があり前端部と考えられる。20は上部を斜めにカットして端部を外側に折り曲げており、左側前端部の鋳の可能性を考えるが確定はできない。

58・59は幅2.5～2.6、18・19は幅3.1～3.2、62は幅3.5cmで、少なくとも3段以上からなる多段鋳と考えられる。

61は後端部とみられ、連続的でないものの覆輪孔とみられる孔がある。革包覆輪であろうか。62は上下辺に連続する威孔と同様の孔があり、あるいは一般的な帯板ではない可能性も考えられる。60は端部を緩く折り返した鋳最下端と考えられるが、袖鋳に明瞭な折返はみられないので、後頭部側鋳下端の破片であろうか。

金銅装 伏板、衝角部片といった資料からでは胄

本体が確実に金銅装であるといえない状態であるが、鋳には波状列点文をもつ鉄地金銅製のものがある。類例となる金銅装眉底付胄では、鋳を金銅装とする場合、胄本体も装飾性の高い金銅装であるので、本胄は金銅装衝角付胄とみるのが妥当であろう。

(3) 頸甲

16・45・46・47・48は襟部である。50は本体板と考えて良いであろう。16は肩部であるが、ほかは小片のため位置を確認できない。襟部は45を除きいずれも折曲げの角度が鈍角で緩い。襟高は16が0.8cm、47が1.0cmと低い。

49は長さ2cmに満たない板甲の蝶番金具よりも小さいもので、また上下方向に内湾することから、頸甲本体板後面に取り付けられた蝶番金具と考えられる。

いずれも金銅板は確認できず、頸甲は鉄製と考えられる。肩甲とできる甲胄片は確認できていないが、頸甲本体が鉄製であることからすれば、肩甲も鉄製が想定できる。なお、頸甲に蝶番金具をもつということは引合板を鋳留にしたものであり、鋳留頸甲と位置付けられる。

(4) その他

21号遺跡の37～44は衝角付胄として保存台に取り

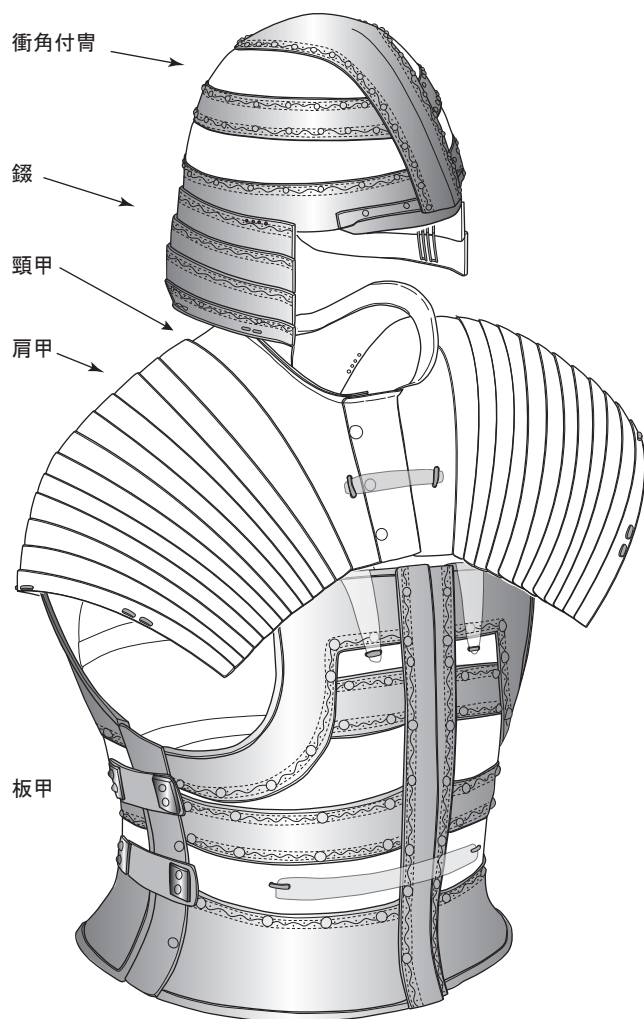


図7 伝沖ノ島出土返納品・21号遺跡甲冑復元イメージ図

付けられて一括で管理されてきたものである。表面がサビに覆われていて鉄板状製品としかみえず、鉾なども不明確なため、部位の特定は困難であるが、板甲・衝角付冑の地板が候補になるであろう。

また、保存台に取り付けられていない破片資料の中に小片ながらかなりの量の甲冑片が含まれている(資料番号: 21-11、21-19～21-26)。今回図化した22・47・49はその中からピックアップしたものである。

これらを組み合わせて想定復元できる甲冑のイメージを図7に示す。

4. 沖ノ島遺跡出土金銅装甲冑の復元と評価

(1) 板甲

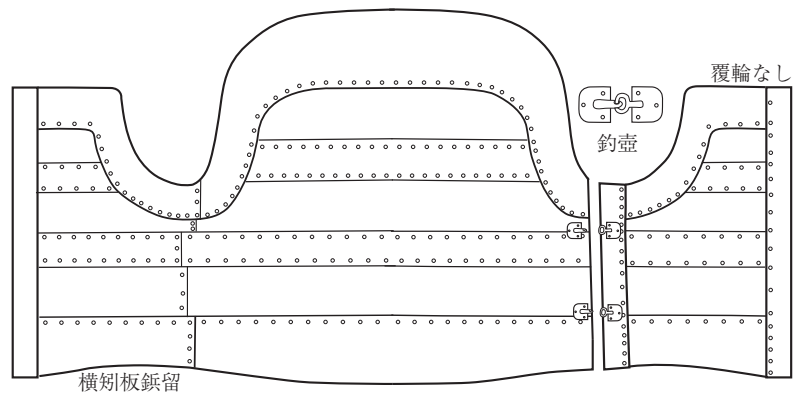
これまで金銅装甲には板甲3例と札甲1例が知られている。沖ノ島遺跡例との比較ではとくに板甲に注目する必要がある。板甲の類例には、すべての部材を金銅製とする大阪府大仙陵古墳前方部石室出土例(図8-1)と鉄地金銅製の徳島県子安観音塚古墳出土例(図8-2)、大阪府城ノ山古墳出土例がある。本体は鉄製とすることが基本である板甲のなかでは装飾性を重視した特別な甲といってよい。

大仙陵古墳例は明治5年(1872)に描かれた絵図によって情報が得られる(橋本2025)。子安観音塚古墳例も長く嘉永7年(1854)に描かれた絵図で知られてきたものであるが、一部の破片は現存が確認されている(橋本2015)。城ノ山古墳例は非常に細片化しており型式学的検討に関わる情報は少ない⁽³⁾(鈴木・小森2010)。

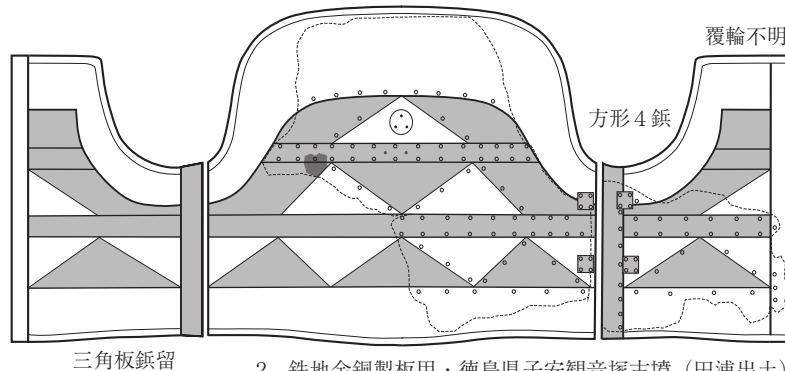
大仙陵古墳例は横矧板鉾留式、子安観音塚古墳例は三角板鉾留式、城ノ山古墳例は不明である。大仙陵古墳は右前胴開閉式で、子安観音塚古墳も右前胴開閉式の可能性が高いが、両胴開閉式であることは否定できない。大仙陵古墳例は釣壺式蝶番金具、子安観音塚古墳例は方形4鉾式蝶番金具を付す。両者ともに小型鉾を多量に用いて留めたタイプの板甲と考えられる。

沖ノ島遺跡例は小片であるが残存部位からみると横矧板の可能性が考えられる。また、長方形2鉾の蝶番金具があり、少なくとも右前胴が開閉する型式であったとみなされる。鉾頭径は帯金で5～6mm程度、押付板・裾板では7mm程度のものがみられ、小型鉾を数多く使用する板甲よりは、やや鉾頭も大きく、間隔もあけて使用鉾数も減少させているものとみられる。これらの情報を比較すると大仙陵古墳、子安観音塚古墳の甲冑よりは新相の製品にみえる。城ノ山古墳板甲は鉾頭径6～7mm程のものを使用しており、沖ノ島遺跡例に近い。

以上、金銅装板甲は絵図のみの情報で実物がな

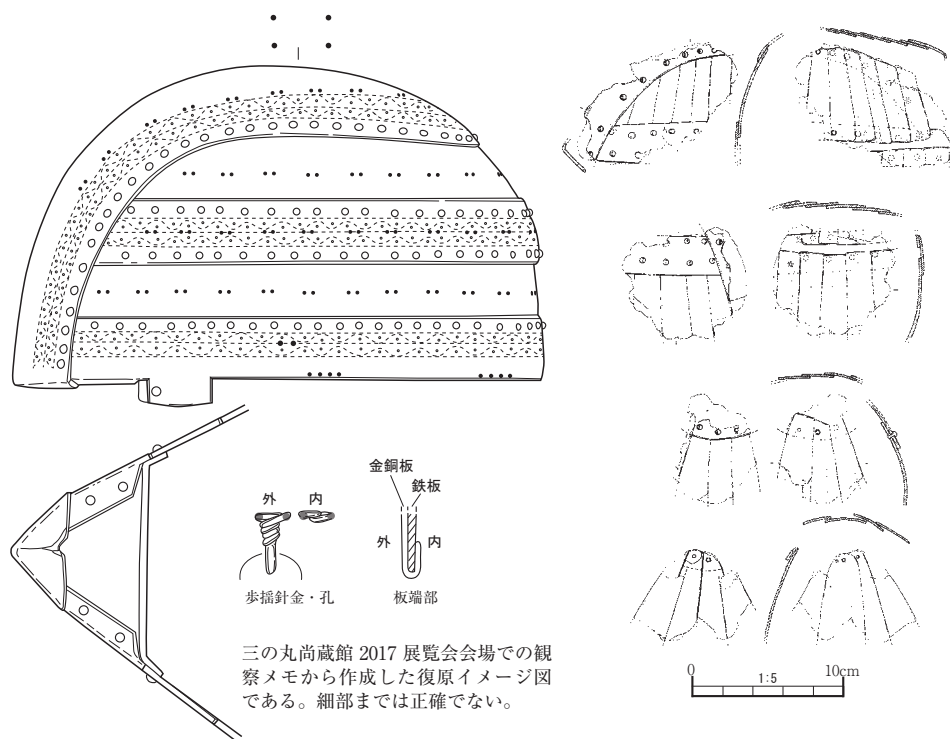


1. 金銅製板甲（総金銅装）・大阪府大仙陵古墳



2. 鉄地金銅製板甲・徳島県子安観音塚古墳（田浦出土）
アミ掛け部が鉄地金銅製・濃いアミ部が残存部位

図8 金銅装板甲展開模式図



1. 鉄地金銅製横矧板鉾留衝角付胄三の丸尚蔵館所蔵品（推定：和歌山県陵山古墳）
2. 鉄地金銅製小札鉾留衝角付胄（四方白）千葉県姉崎二子塚古墳

図9 金銅装衝角付胄

かったり、小片だけであったりして、きわめて情報が乏しい状況であるが、確認できるかぎりではいずれの属性にも共通性が少なく個性的であることを特徴としている。

（２）衝角付冑

金銅装の冑はほとんどが眉庇付冑であり、衝角付冑で本体を金銅装とするものは三の丸尚蔵館所蔵品（図 9-1）、千葉県姉崎二子塚古墳出土例（図 9-2）の 2 点のみである。いずれも鉄地金銅製である。その他、三尾鉄のみを鉄地金銅製品とする大阪府野中古墳の革製衝角付冑 3 点がある。なお、三の丸尚蔵館所蔵品について筆者は和歌山県陵山古墳の出土品である可能性を考えている（橋本2021）。

三の丸尚蔵館例は横矧板鉾留で総金銅装、姉崎二子塚古墳例は小札鉾留で地板を四方白とする。三の丸尚蔵館例の衝角部と底板の結合は上下接式、姉崎二子塚古墳例は不明である。

沖ノ島遺跡例の地板は明確ではないが、伏板の鉾間隔からすれば、堅矧板や小札ではなく横矧板とみなされる。また衝角部は小片のため確定的ではないが外接式の可能性がある。そうであれば沖ノ島遺跡例は金銅装衝角付冑の中ではより新相に位置付けられる。

また、三の丸尚蔵館例の鍔は陵山古墳から出土した金銅装鍔が対応すると想定され、姉崎二子塚古墳例の鍔は不明である。金銅装の眉庇付冑の場合、金銅装鍔は筆者が総金銅装ないしは部分金銅装 A と呼んでいる（橋本2013・2021）、より装飾性の高いものに採用されており、冑本体の装飾性の高さに関連する。このことからすれば、沖ノ島遺跡例の衝角付冑本体も本来は金銅装部分が多くを占める、より装飾性の高いものであったことが考えられる。

（３）頸甲

小片ばかりで評価は難しいものの、本体板後面に取り付けたとみられる蝶番金具の類例は大阪府黒姫山古墳 A2号頸甲にある。蝶番金具をもつ頸甲は宇治二子山南墳などに限られ、鉾留甲冑の中では新相段階のものである。

一方で、沖ノ島遺跡の頸甲の場合、襟部高が 1 cm 程度と黒姫山古墳や宇治二子山南墳のものより低く、これら資料よりは古相に位置付けられるものである。

（４）甲冑セットと編年的位置

ここまでみてきたように、あらためて沖ノ島遺跡の甲冑には、金銅装鉾留板甲、金銅装鉾留衝角付冑、鉾留頸甲が確認でき、それに肩甲が伴っていたものと考えられる。

冑と甲をともに金銅装とする甲冑セットの事例には、大仙陵古墳の板甲・眉庇付冑セット、祇園大塚山古墳の札甲・眉庇付冑セットがある⁽⁴⁾。

沖ノ島遺跡、大仙陵古墳、祇園大塚山古墳、それぞれのセットの組合せには共通性がないことを特徴としている。セットを構成するそれぞれの甲冑自体が個性的であり、かつそのきらびやかな装飾性の高さをあわせて考えると、他からの差別化を図るようにより用意された 1 点限定の特注品であったと考えられるだろう。その所有者に史上最大の方後円墳、大仙陵古墳に葬られるような人物を含むことからすれば、古市・百舌鳥古墳群を中心とする古墳時代中期の近畿中央政権において最上位層の甲冑としてその地位を表示したものとみなされる。

沖ノ島遺跡の甲・冑はいずれも帯金式甲冑の鉾留技法出現期、TK73型式段階ものではない。一方で、その最新相、古墳時代中期後葉の TK23～47型式段階にも位置付けられない。また TK216型式段階に位置づけられる大仙陵古墳の甲冑（橋本2025）よりは新相に位置付けられるものであろうことから、おおむね古墳時代中期中葉、TK208型式段階を中心とする時期とみるのが妥当であろう。

5. 結語—倭の五王時代の沖ノ島祭祀—

古墳時代中期の甲冑は、古市・百舌鳥古墳群とその周辺に大量に集積されて古墳に副葬・埋納されていること、高度な技術を駆使した共通性の高い形態をもつ製品が鹿児島から福島までの広範な地域で出土することを特徴とする。これらの特徴は近畿中央

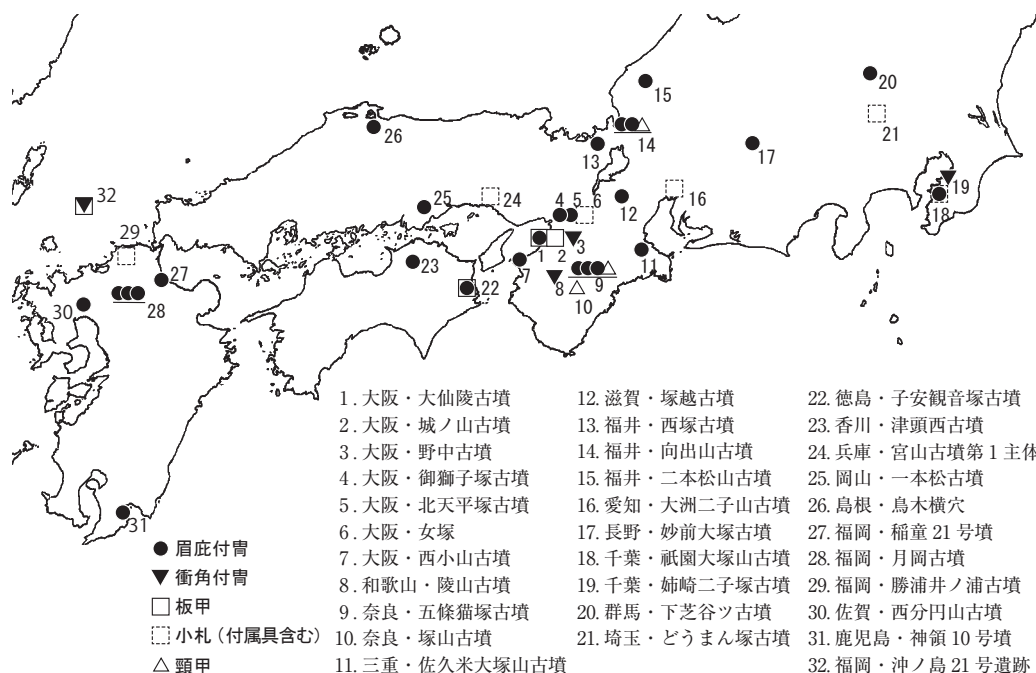


図10 金銅装甲冑分布図

部の政権中枢で生産されたものが、首長間の政治的結びつきを表すものとして配付された、この時代を象徴する器物であることを示している。なかでも、金銅装甲冑は5世紀前葉から中葉を中心に、中央政権と関係性の強い広域ネットワークの中で活躍する上位層の首長に配付されたものとみなされる(図10)。

沖ノ島21号遺跡出土品および返納品として今に伝わる金銅装甲冑は、古市・百舌鳥古墳群被葬者たちを中心とする近畿中央の政権中枢のもとで当時の政権の最上位層の使用するものとして製作されたと考えられる。

その年代は5世紀中葉、筆者は450～460年代を想定する。この時期は文献史料上の倭の五王の時期に相当し、なかでも倭国王・興・武の活動期にかかる時期となるだろう。沖ノ島祭祀における金銅装甲冑の奉献には東アジア社会の中で広く活動した倭人を代表する地位の倭国王とその政権との関わりが想定されるものである。

この金銅装甲冑は、あらためて沖ノ島祭祀がヤマト政権中枢との直接的で強固な結びつきを有していたことを表すものである。これまで沖ノ島の祭祀遺物では、古墳時代前期の様相をもつ鏡や後期の馬具などに比して、古墳時代中期についてはさほど注目

されてこなかったように思われる。古墳時代中期の中央政権の政治性を代表する器物である帯金式甲冑の存在は、沖ノ島祭祀がその開始以降、継続的に中央政権と対外交流とのほざまで大きな役割を果たしていたことを明らかにするものである。

最後に、金銅装甲冑のセットの個性について付け加えておきたい。眉庇付冑と札甲を組み合わせる祇園大塚山古墳例は先進の外来文化を象徴するスタイルである。眉庇付冑と板甲を組み合わせる大仙陵古墳例は対外意識を表示する眉庇付冑と伝統的かつ同型の共有による政治的紐帯を象徴する板甲によって先進性・伝統性・共通性を象徴するスタイルである。そして、沖ノ島遺跡例は、伝統性と政治的紐帯を象徴する中期ヤマト政権の正当性をもっとも象徴するスタイルである。このようにみると、最上位層の金銅装甲冑がそれぞれ個性的であるのも、使用場面にあわせて用意がなされた可能性を想定できるだろう。沖ノ島に奉献されたのは、伝統にもとづく正当性、倭人のアイデンティティを示しつつ、最上級の技法で加飾した特別仕様の甲冑であったといえよう。無論、このような甲冑は実際の戦闘に使用するものではなく、近畿中央政権あるいは倭国王にかかわる祭祀において王の権力を象徴する役割を果たし

たものであろう。

今回、返納品の調査からはじまり、現状の制約はありながらも沖ノ島21号遺跡出土品との比較によって金銅装甲冑に可能なかぎりの検討を行った。現存する甲冑資料は小片ではあるが、それらが沖ノ島祭祀と倭の五王の関係性を物語るきわめて大きな歴史的意義を有するものであることをここでは確認しておきたい。

謝辞

図のトレースには星野三香氏のご協力を得た。記して謝意を表します。

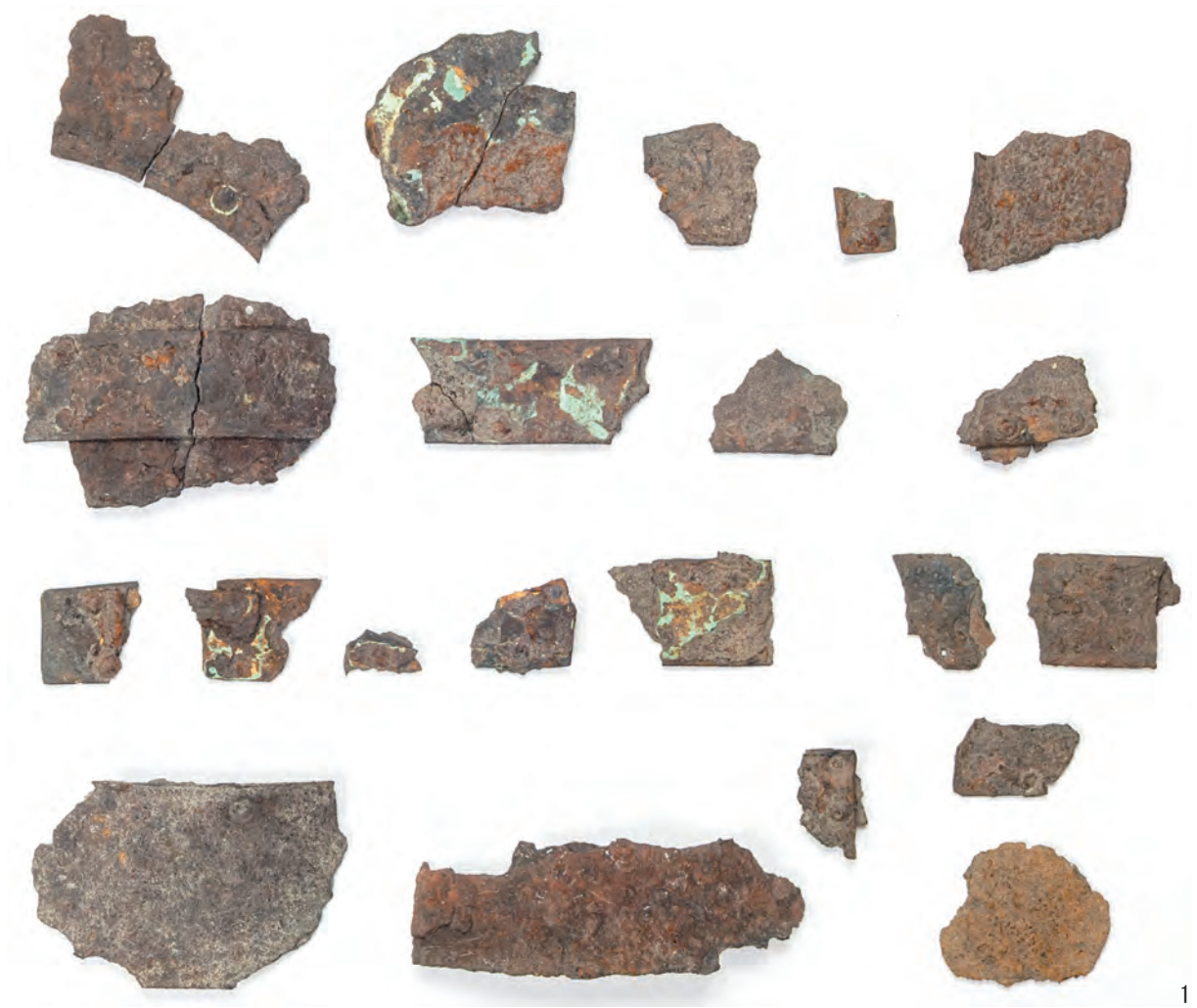
註

- (1) 松本1979では、本文で「裾巻鉄板」が「鉄地金銅張」であることを記述し、挿図では「金銅製品実測図一衝角付冑」のキャプションを付すが、写真図版では「衝角付冑」として提示されたものが挿図で提示された金銅製品とは異なっており、金銅製品には「鉄地金銅張小札」のキャプションが付されている。腰巻板を「裾巻鉄板」と呼称していることや本文と写真図版キャプションにおける形式認識の齟齬など、甲冑に関する情報が不正確であるため報告書記述を採用しなかった。
- (2) 筆者は、これまで使用されてきた「短甲」・「挂甲」は古墳時代甲冑の形式名称として、適切でないと考えており、「板甲」・「札甲」の名称を使用している。詳細は橋本2022に拠る。
- (3) 城ノ山古墳の資料報告（鈴木・小森2010）では、裾板のみが板甲片として報告されている。その他に「鉄地金銅張製品」として器種の同定されていない破片資料があるが、その大部分は板甲片とみられる。また、「頸甲」として報告されている資料も板甲である可能性がある。
- (4) 城ノ山古墳についてはセット関係が確定していないのでここでは言及していない。なお、この古墳では同志社大学所蔵資料と堺市博物館所蔵資料をあわせて、板甲・札甲・衝角付冑・眉庇付冑の甲・冑2セットの存在が復元できる。また、上記(2)のように「頸甲」は板甲の可能性があり、明らかな頸甲は確認できない。また鉄地金銅製の肩甲が報告されている肩甲に金

銅装の類例はなく、小片のため確定できないものの鍔とした方が良いように思われる。ただし、先端部の形状から鍔より肩甲とみることに一理はある。これが鍔の場合、眉庇付冑の冑本体は装飾性の高い金銅装眉庇付冑が想定され、報告にある鉄製鍔は衝角付冑のものとなるだろう。ほか、堺市博物館には鉄地金銅製の襟甲があり、札甲に伴うものであろう。同志社大学所蔵城ノ山古墳の資料観察には、同志社大学歴史資料館・若林邦彦氏のご協力を得た。

引用文献

- 齊藤大輔 2024「沖ノ島祭祀遺跡の武器と武装」『沖ノ島研究』第10号「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 pp. 1-20
- 鈴木康高・小森牧人 2010「同志社大学所蔵堺市城ノ山古墳出土資料調査報告(2)」『同志社大学歴史資料館館報第13号』同志社大学歴史資料館 pp. 1-17
- 橋本達也 2013「祇園大塚山古墳の金銅装眉庇付冑と古墳時代中期の社会」『祇園大塚山古墳と5世紀という時代』六一書房 pp. 57-83
- 橋本達也 2015「小松島市田浦出土甲冑の再発見と子安観音古墳」『新居見遺跡・田浦遺跡発掘調査報告書』小松島市教育委員会 pp. 137-142
- 橋本達也 2021「三の丸尚蔵館所蔵金銅装衝角付冑とそれに関わる推論—水野忠央と橋本市陵山古墳をめぐる—」『技と慧眼—塚本敏夫さん還暦記念論集—』塚本敏夫さん還暦記念論集事務局 pp. 125-136
- 橋本達也 2022「古墳時代の甲冑・軍事組織・戦争」『古代武器研究』Vol. 17 古代武器研究会 pp. 79-95
- 橋本達也 2025「大仙陵古墳の甲冑とその年代」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室 pp. 357-366
- 橋本達也・鈴木一有 2014『古墳時代甲冑集成』大阪大学大学院文学研究科
- 松本 肇 1979「21号遺跡」『宗像沖ノ島』第三次沖ノ島学術調査隊編 吉川弘文館 pp. 222-235



1. 返納品一括外面 2. 資料2 付着有機質痕 3. 資料5 細部 4. 資料6 細部 5. 資料17拡大写真1 伝沖ノ島出土返納品・外面



1



2



3



4

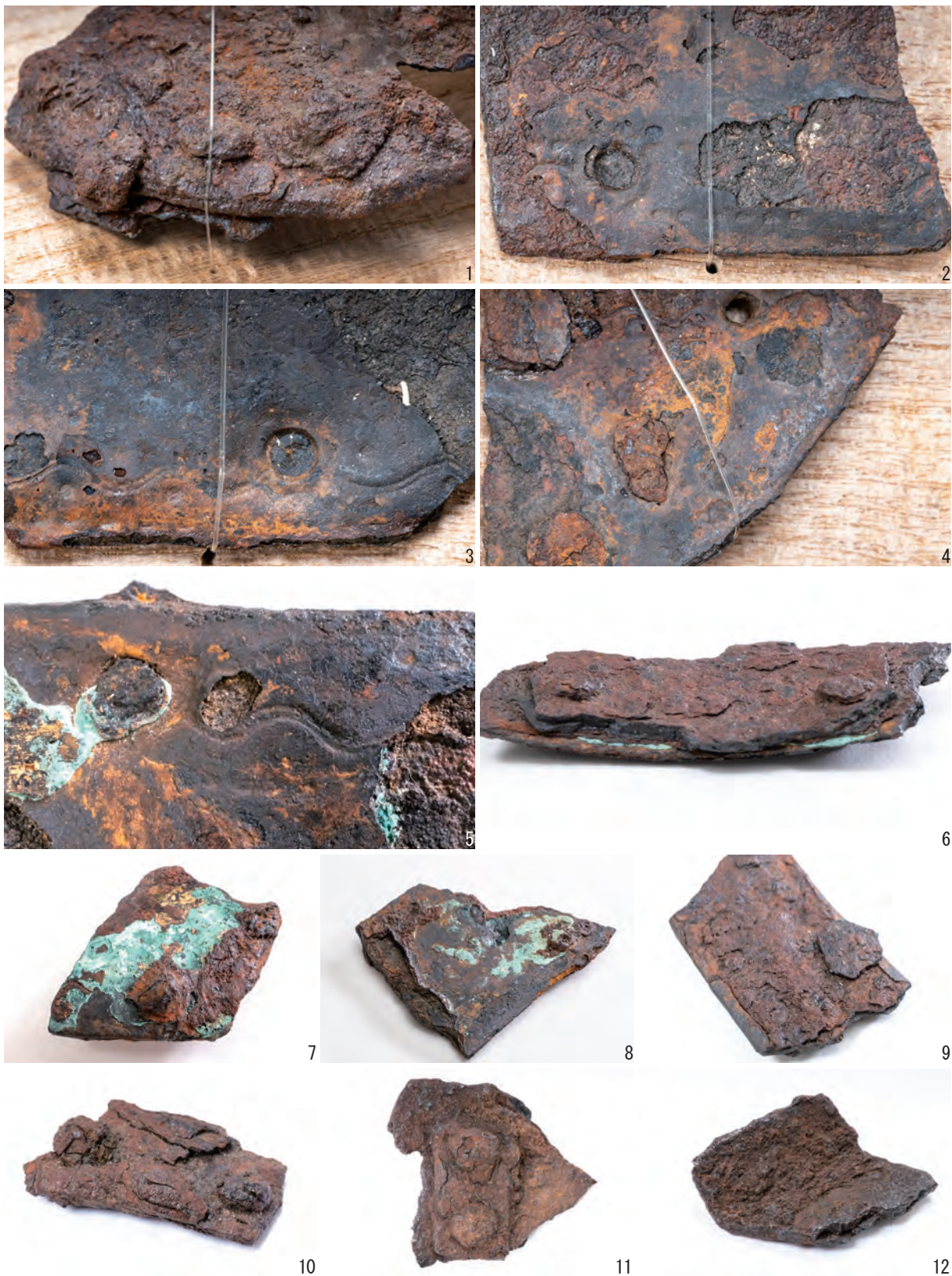


5

1. 返納品一括内面 2. 資料1 端部 3. 資料13端部 4. 資料9 5. 資料20
写真1 伝沖ノ島出土返納品・内面



写真3 沖ノ島21号遺跡出土金銅装甲胄



1. 資料51 2. 資料25 3. 資料26 4. 資料61 5. 資料23 6. 資料30 7. 資料52 8. 資料62 9. 資料23内面
10. 資料22 11. 資料49 12. 資料47

写真 4 沖ノ島21号遺跡・細部

V 伝沖ノ島出土返納品の金属製品の検討

水野 敏典 奈良県立橿原考古学研究所

要旨：伝沖ノ島出土返納品のうち、銅鏡、石製品、甲冑類を除いた金属製品および貝製品の調査を行い、既報告資料との対照をすすめた。沖ノ島祭祀に特徴的な「雛形鉄刀」や「金銅製瓔珞」と報告された短冊状銅板のほか、金銅製責金具、小型の「鐸」など多様なものを確認する機会を得た。7号遺跡出土品と同型式の子持剣菱形杏葉片を複数確認するとともに、倭装大刀の装具片とみられる金銅板を確認したことで、沖ノ島祭祀における倭装大刀の奉納量が報告記載よりも多い可能性を指摘でき、同時に鉄製武器類が倭製に偏るという従来の見解を補強した（水野2025）。その一方で「花文」と蓮の「花卉状」の打ち出しをもつ銅板片や細長く加工された貝製玉を確認したが、報告書内に直接の類例を確認できなかった。貝製品や銅板片については今後も調査を必要とするが、返納品中の沖ノ島祭祀独特の奉納品や、同型品が多数認められることから、沖ノ島祭祀奉納品としての一括性を認めて良いと考える。

キーワード：雛形鉄刀、短冊状銅板、鐸、倭装大刀、貝製玉類

はじめに

「伝沖ノ島出土返納品（以下、「返納品」とする）」のうち、銅鏡、石製品、甲冑類を除いた金属製品、貝製品等を担当した。対象資料は、非常に多様で、多くは破片である。そのため器物の性格が明確にならないものも多かったが、まずは、個々の遺物の報告を行い、既報告の祭祀遺跡出土品との対照から出土遺跡の候補を示しつつ、個々の遺物の検討を行った。

第1章 鉄製品（図1、図版1）

両端が欠損した細長い板状の「雛形鉄刀」片および「鉄製円盤」、棒状の工具片、金銅板を被せた馬具片、「鐸」が確認できた。

雛形鉄刀

1 残存長9.2cm、右端で最大幅1.4cm、残存重量9.7gとなる。図示した上方がやや厚く0.2cmで背となるとみられる。片面が平滑なのに対してもう一面はやや膨らみを持つ。刃部側は全く研磨されておらず、端部は0.15cmと薄くなるものの刃部を持たない。木質等の付着物は確認できない。

2 残存長5.1cm、最大幅1.6cm、最大厚0.3cm、重量7.3gである。背をもち、刃部側は薄くなるものの、研磨による刃部は確認できない。片面が平滑であるのに対して、もう一面はごく薄くカマボコ状に膨らみを持つ。付着物は確認できない。

3 残存長4.8cm、最大幅1.3cm、最大厚0.35cm、重量5.0gである。背をもち、刃部側はやや薄くなるものの、厚さ0.15cmと刃部を持たない。切っ先状に幅を狭めている。片面が平滑である。付着物は確認できない。

4 現状で2片が接合し、残存長4.7cm、最大厚0.2cm、重量3.4gと、背を表現する意図は窺えるものの、刃部側は厚さ1.2cmと刃部を持たない。全体に板状である。

5 残存長4.2cm、最大幅1.5cm、最大厚0.3cm、重量4.0gである。刃部側は厚さ0.1cmと刃部を持たず、板状である。

6 残存長2.3cm、幅1.4cm、最大厚0.25cm、重量2.0gである。刃部側がわずかに薄くなるが明確ではなく、板状である。

7 残存長6.3cm、幅2.1cm、最大厚0.4cm、重量16.3gである。片面が扁平であるのに対して反対側はややカマボコ状に膨らみ、背が最大厚とならない。付着物は確認できない。

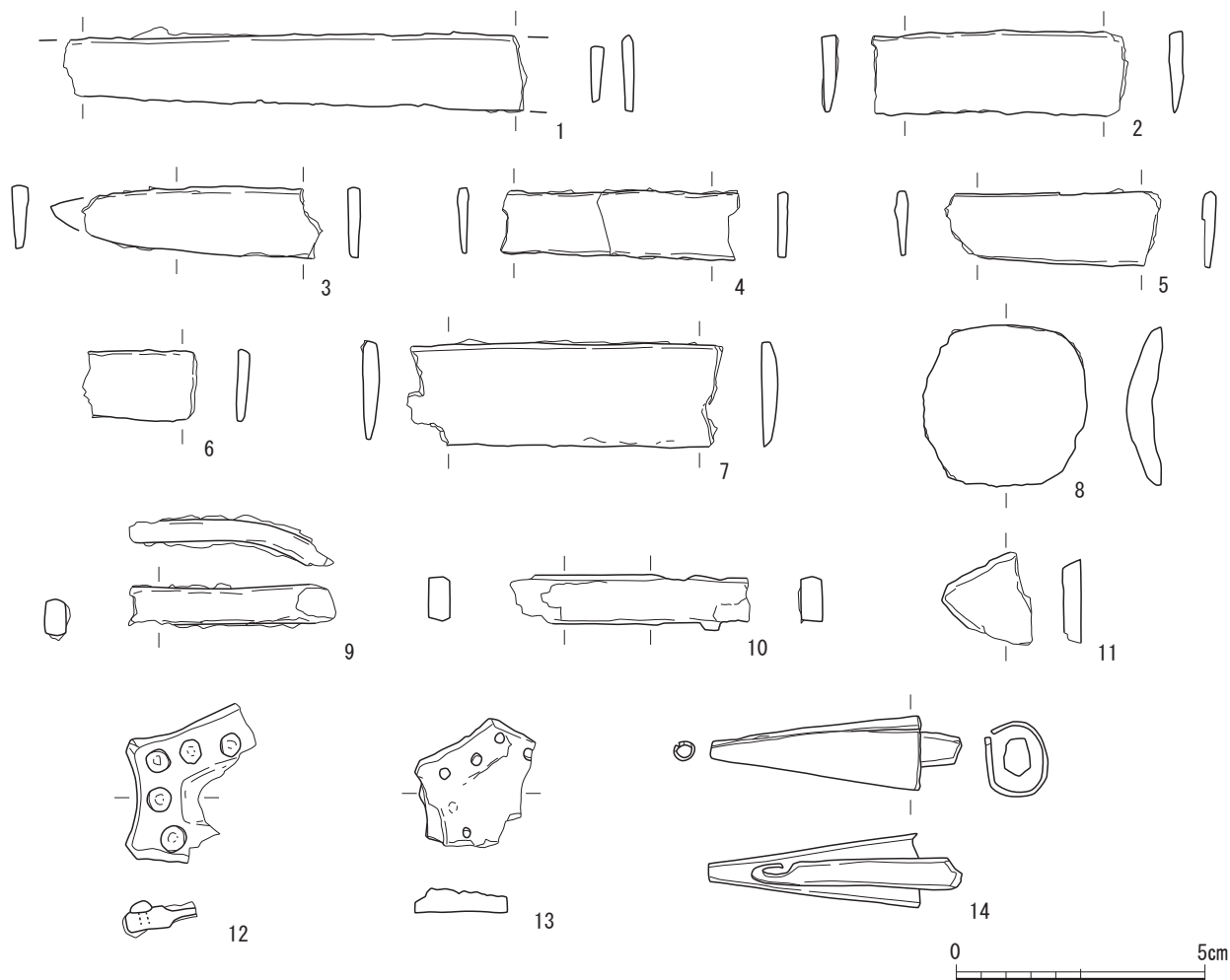


図1 鉄器・その他金属器

1～7は、両端が欠損した細長い板状鉄片である。長側の一端がやや厚く、既報告での「雛形鉄刀」とみられるが、刃部関や茎部は確認できない。いずれも片面が扁平となる傾向が強く、刃部側をやや薄くする簡易な加工は行うものの、明確な刃部をもたない。鞘や柄装具となる木質等の付着物も確認できなかった。

「雛形鉄刀」は、刃部幅は2 cm以下と小型で、刃部が明確でなく直刀の雛形品とみられる。1号、4号、5～9号、21～23号に類例が確認できるが、木製装具痕跡の有無など、様相は異なる。沖ノ島祭祀に特徴的な鉄器といえる。

鉄製円盤

8 縦3.2cm、幅3.2cm、厚さ0.6cm、重量11.6gの扁平な円板状の鉄器である。正確には丸みをもった六角形の平面形である。表側は中央にやや膨らみを持つものに対して、裏面は周囲に平滑な面をもちつつ、中央付近にやや窪みをもつ。刃部や装飾は確認できない。裏面に織物状の繊維痕跡が付着するが、固定のための小孔などは確認できない。

同様の「鉄製円盤」の類例は、1号遺跡にある。直径3.6cm前後と6.4cm前後の大小があり、そのうちの小型品と同型式である。いずれも固定や吊り下げのための円孔などの造作がないのが特徴である。今

回、やや窪みを持つ裏面に織物痕が確認できたことから、織物の上に糸や紐を掛けわたして固定した装飾品の可能性をもつ。

棒状鉄器片

9 両端の欠損したやや彎曲した棒状で、残存長4.2cm、幅0.65cm、厚さ0.4cm、重量4.3gである。工具など柄片とみられ、断面は扁平な矩形である。

10 両端が欠損した棒状の鉄器である。残存長4.8cm、幅1.0cm、厚さ0.4cm、重量5.1gの棒状で、扁平な矩形の断面をもち、鉄地は金銅板とみられる金属に覆われている。X線画像でも鉋孔等は確認できない。

9は、鉋などの工具片であれば、6号、21号遺跡と関わる可能性を持ち、10は馬具片の可能性を持つが部位は特定できない。馬具であれば4号、6～9号遺跡が採取地点の候補に挙がる。

その他

11 残存長1.7cm、最大幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量1.6gである。残存する三角形で板状の鉄地で金銅板とみられる金属に覆われる。X線画像の観察でも鉋孔などは確認できないが馬具の辻金具などの可能性がある。馬具であれば4号、6～9号遺跡が採取地点の候補に挙がる。

子持剣菱形杏葉片

12 残存長3.2cm、最大幅2.8cm、厚さ0.5cmの板状で、重量5.7gである。子持剣菱形杏葉（報告名称：剣形附飾扁円剣尾形杏葉）の子持部の破片である。直径0.3cmの鉋孔5ヶ所を確認でき、鉋頭は円形で径0.5cm高さ0.2cmであり、ベースとなる地板に対して幅0.8cmの鉄製フレームを重ね、その上から金銅板を被せている。鉋頭は黒色化しており、銀板を被せている可能性が高い。

13 残存長2.8cm、最大幅2.3cm、厚さ0.45cmの板状で、重量5.7gである。目視では鉋孔を確認できないが、X線画像では縁に沿って6ヶ所の鉋孔を確認でき、地板とフレームを確認した。鉋頭は残っていない。12と同様の子持剣菱形杏葉の破片とみられる。

7号遺跡に子持剣菱形杏葉片が出土しており、そ

の子持部分と法量も近く、それと同一個体、もしくは同型式の杏葉片とみられる。同型式自体の出土が珍しく、福岡県王塚古墳や奈良県条池北古墳など、類例は限られている。

鐸

14 円錐形の銅板と鉄棒を組み合わせた全長6.0cmの「鐸」である。厚さ0.1cmの銅板を全長4.2cm、最大径1.5cmの円錐形に丸め、その中に全長4.8cm、幅0.4～0.6cm、厚さ0.5cmの断面方形の鉄棒を入れて、舌としている。錆びて固着しているが、X線画像により円錐端側の鉄製舌は、細く鍵手状に曲げられており、これに紐を掛けて円錐状銅板の先端の隙間から通すことで鐸としたとみられる。

既報告では「銅鐸」あるいは「鐸」と呼称されている。銅板の筒形品は1号、4号遺跡にもあるが舌の報告がない。本品に形態と法量の酷似したものが5号、6号に確認できる。

第2章 金銅板片・金銅製品（図2、図版2～4）

多数の金銅板片および銅椀片などを確認したが、大半は細片であり、器物の性格は明らかにし難いものが多い。特徴のある主要なものを報告する。また、図番号と写真図版の番号にズレがある場合には、写真図版番号には括弧を付けて表記する。

刀装具

1 残存幅3.0×2.9cm、厚さ0.5mm、重量1.9gの金銅板片である。2列の円文がならぶ。円文は径1.0mm前後、高さ0.2mm程度の突起をもち、その周囲とそこから延びる線は連続する径1.0mm前後の点状の打ち込みで構成されている。錆に薄く覆われるが金鍍金が現状でも確認でき、いわゆる倭装大刀の鞘金具とみられる。倭装大刀は、振り環頭大刀が出土した7号遺跡や頭椎大刀の装具片が確認できる8号遺跡に類例はあるが、同型式の鞘金具は確認できていない。

2 幅2.3cmの帯状の銅板で、両端が欠損する。現状で長さ4.2cm、厚さ0.5mm、重量2.1gの銅板で、卵

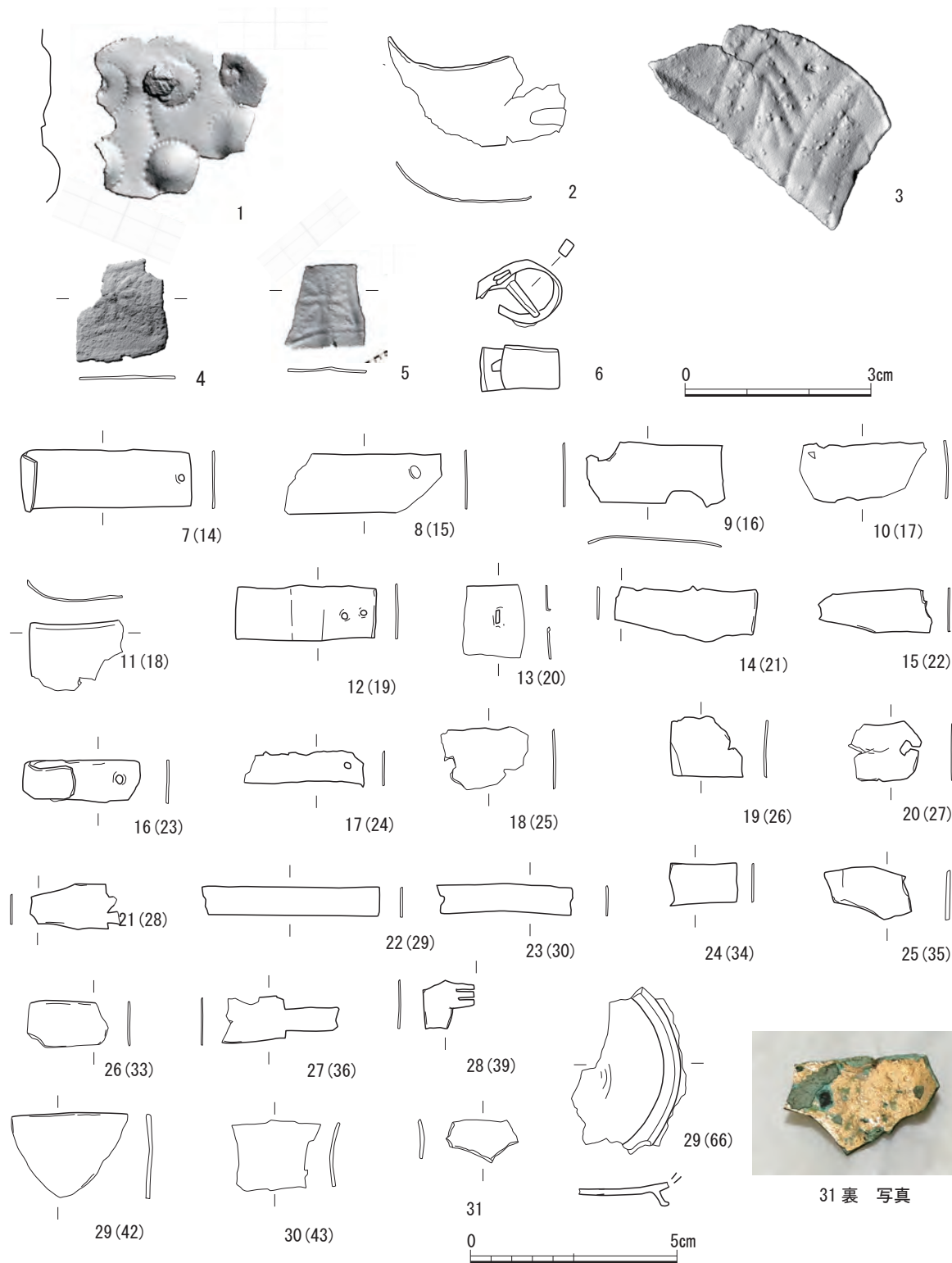


图2 銅製品等 実測図

形に彎曲する。大刀の装具の可能性をもつ。文様はなく、付着物も確認できない。他に刀装具になる可能性を持つものに18（25）がある。銅板の幅は1.5cmで、やや彎曲が強く、厚さ0.4mm、重量0.4gである。

その他にも、11（18）など、幅が1.4cmを超えるもので、彎曲があるものは短冊状銅板ではなく、刀装具となる可能性がある。

打ち出しをもつ銅板片

3 残存幅4.0×2.2cm、厚さ0.4mm、0.9gの銅片である。蓮の花弁状の鋸歯文が3つ重なる銅板片である。銅板は扁平で、明確な彎曲は確認できない。文様は、表側からは木型などに押し付けての打ち出しにも見えたが、裏面を観察すると径1mm弱の列点により文様を打ち出している。錆びて不明瞭であるが、長さ約3mm、幅1mmほどの長方形の孔がある。蓮の花弁状に重なる文様は、全体に弧を描いており、半円もしくは円形に配置されたものとみられる。付着物は確認できない。

4 残存幅1.4×1.4cm、厚さ0.4mm、0.2gの銅片である。押し出しにより全長約0.9cmの8本の丸みをもった放射状の線による花文とそれを囲う弧線が確認できる。1や3と異なり、文様は点の連続による打ち込みによるかは明確でなく、木彫などに銅板を押し付けての打ち出しの可能性を持つ。

5 残存幅1.6×1.4cm、厚さ0.4mm、0.2gの銅片で、4の文様と酷似する。花文の周りに圈線状の囲みがあり、その外側にも並行する線が確認できる。銅板の厚み等は銅片1とも似るが、錆の付着で詳細を観察し難い状況である。付着物や明確な列点による打ち出しは確認できなかった。

4と5は、文様の法量がほぼ一致することから同一器物片、あるいは同種の破片とみられる。弧線を持つことから3と同様に半円もしくは円形に配置されたものとみられる。3～5は、これまでの出土品中に類品が明確でない。打ち出しを持つ銅板片の報告は沖津宮付近の5号遺跡にみられるが、列点状の打ち込みは確認できず、様相はやや異なるようである。垂木状の木製品の端部や瓔珞などの一部となる可能性もあり、未報告の銅板の細片がないか、確認

する必要がある。蓮の花弁状のモチーフは仏教的な要素を想起させるが、これまで沖ノ島祭祀では存在が明確ではない。時期は不明である。

金銅製責金具

6 直径1.8cm前後の径を持つ幅0.7cm、厚さ0.5mmの銅板であり、責金具とみられる。留め具として一方から長さ1.5cm、断面方形の銅釘が刺さる。明確な釘頭を持たない。穿孔後に銅板に釘を打ち込んだのではなく、柔らかい対象を銅板で包んだ状態で釘を打ち込んでおり、釘孔周辺が大きく窪んでいる。この環状の彎曲と釘穿孔の撓みを根拠に集めたものが、（7～13）である。銅板の幅は0.3～0.7cmである。

（13）は、鍵手状に銅板をつなぎ合わせている。いずれも銅板は0.5～0.7mmと薄い。

带状の金銅板を環状にして、銅釘1本で重なった板を貫き、束に綴じたものごと固定する責金具である。大きな力で固定できるような責金具ではなく、带状の銅板が釘で大きく撓むことから、綴じる対象は木材などの硬いものではないとわかる。

1号遺跡からは径の大きく同構造をもつ「金銅製麻笥環状品」があるが、5号、6号、22号遺跡からは法量の近い同型品が出土しており、金銅製の責金具も沖ノ島祭祀に特徴的な器物と言える。

短冊状銅板（瓔珞）、雛形紡織具、その他

他に金銅板・銅板片は図版3、4の（14～65）までを確認した。多くは破片であるが、短冊状の銅板が大勢を占めており、その典型が、（14～27）である。図版3の（14、15）が奉納時の姿に近いとみられ、銅板の長さは4cm前後であり（14、15、16、17、19、26）の幅1.4cm前後にまとまりをもつ。類品の（20）は幅1.7cmと幅広で短辺が緩く弧線を描き、孔も2.5×1.0mmの長方形である。孔付近に黒色の带状の付着物が確認でき、有機質のヒモとみられる。短辺の一端に1、2個の孔があり、吊るす器物とみられる。（19）は二つの孔をもつ。これ以外に幅が9mm前後で平らな銅板として（24、29、30）があり、（24、30）には円孔が確認できる。

短冊状銅板は、5号、22号遺跡に、幅の狭い銅板

は6号遺跡に類例がある。短辺の一端に一つないし二つの円孔を持つ。「瓔珞」もしくは短冊状銅板の名称で報告されている。瓔珞はインド発祥の貴人が用いる垂加する装飾品であるが、仏教との関りの強い用語で、菩薩の装身具や天蓋から下がる金銅製装飾品を指すことが多い。ただし、沖ノ島祭祀遺跡の類例も含めて短冊状銅板の両端に円孔を持つものが見当たらないことから、銅板は一枚ずつ吊り下げられており、複数が縦に接続して垂加するものではない。ここでは祭祀の場の荘厳具として理解したい。

単純な短冊形だけでなく、複雑な切込みや造作を持つものがあり、これらは雛形紡織機具と報告されたものの一部とみられる。(37)は方形孔に別の銅板を差し込んで銅板同士と繋いでいた。全体像は不明であるが類似した造作は1号遺跡の雛形紡織機台座などに確認できる。(36)は銅板に直角の切込みを持ち、紡織具のカセイと報告された1号遺跡の類例に近い。(39)は端が三本に切れ込みが入っており、同じく紡織具のタタリと報告された1号遺跡に類例がある。これらの銅板もしくは金銅板の厚さも0.5、0.7、0.9mmなどがあり、複数のセットが混在するとみられる。

複雑な切込みを持つ金銅製の雛形紡織具は、1号、5号、6号、22号遺跡に確認できる。いずれも沖ノ島祭祀に特有の奉納品といえる。

銅椀片

29(66)は、残存幅3.8×2.5cm、底付近で厚さ2.0mm、重量は6.1gで、高台から椀底にかけての破片である。底面には同心円上の研磨痕を確認できる。高台は径約5cm、高さ約4mm、厚さ1.5mmで緩く外反し、端部は丸みを持ち外側に突出する。ほかに銅椀底の形状や厚さと錆び方が類似した破片3点確認できた。他にも小片であるが近似した厚さの銅細片が多数あり、同様に銅椀片となる可能性がある。

本銅椀は、1号遺跡から多数出土する「雛形銅椀」と報告される銅板を加工した薄手のものと異なり、肉厚な点は4号遺跡出土の銅盤に似るが、より深い銅椀であり、6号遺跡出土の銅椀に様相に近い。

歩揺片

図2-31、残存長1.6×1.4cm、厚さ0.8mmの緩く彎曲する金銅片である。表裏とも鍍金されており、現在も輝きを残す。縁が欠けて全体形状は不明であるが、表裏のみえる器物として歩揺の可能性が高い。歩揺付雲珠などに付属する歩揺片とみられる。

第3章 貝製品 (図版5、表1)

返納品中の貝片は18点で、そのうち図版5-1～7は返納時にタコ糸で括られて保管されていた。人為的な穿孔が確認できるのは1～8の8点で、確認できる穿孔は各一ヶ所ずつである。8は円孔の一部が欠損していた。残る10点に円孔は確認できず、小片も合わせて全部で18点である。そのうちの15は加工痕跡の確認できないサザエの蓋であり、貝製品と断定できない。15を除く全ての貝片は貝殻の縁を打ち欠いている。貝製品としての縁部の研磨は明確でなく、奉納時の姿をどの程度残すかの判断が難しいが、円孔が確認できる1～8の全長は2.7～7.4cmで、最大幅は1.6～5.7cmと細長く加工される傾向を持つ。穿孔のない8～18も同様である。円孔は基本的に片側穿孔で、孔の径は2.1～4.4mmで、貝の厚さ2～4mmほどである。貝はかなり硬く、石製玉類と同様に加工には手間をかけている。細長い形状と穿孔から貝製玉類とみられ、貝以外の円孔をもつ出土品と同様に、垂加しての奉納が想定される。なお、厳密な貝の種類同定はできておらず、今後の課題として残るが、内面に光沢をもつアワビなどの一枚貝が主とみられる。

貝製品は、イモガイを使用した雲珠以外には、1号、6～9号、22、23号遺跡で出土している。6号、8号遺跡からは、石製品の有孔円盤に似た形状の「有孔貝製品」が、5号、22号遺跡にも複数の円孔をもつ貝製品があるが、これらと返納品の貝製品とはやや様相が異なる。他にも報告書に図示されていない貝製品があるとみられ、貝製品の全体像については、別に検討する余地がある。

表 1 貝製品

番号	内容	残存長cm	残存幅cm	穿孔	穿孔径(最大)	穿孔径(最小)	重さ(g)	備考
1	貝製品	7.4	1.7	有	0.3	0.2	3.5	
2	貝製品	3.7	3.2	有	0.3	0.2	10.8	
3	貝製品	7.1	2.8	有	0.31	0.12	9.4	
4	貝製品	5	4.4	有	0.48	0.4	10.4	
5	貝製品	7.9	5.7	有	0.32	0.29	29.1	
6	貝製品	6.2	3.5	有	0.42	0.4	18.4	
7	貝製品	2.7	1.6	有	0.21	0.18	1.1	
8	貝製品	4.1	3.7	有	0.4	0.4	4.5	
9	貝製品	4.7	1.2	無	—	—	2.5	
10	貝製品	3.8	1.8	無	—	—	1.6	
11	貝製品	3.7	2.1	無	—	—	1.6	
12	貝製品	3.2	1.8	無	—	—	0.8	
13	貝製品	3.5	3.5	無	—	—	1.9	
14	貝製品	2.1	1.2	無	—	—	1.5	
15	貝	3.4	3.3	無	—	—	12.6	サザエ
16	貝製品	1.4	0.7	有	—	—	0.5	窪みあり
17	貝製品	1.8	0.8	無	—	—	0.5	
18	貝製品	1.1	0.5	無	—	—	0.2	

まとめ

担当した金属製品だけでも種類は多様で、既報告の出土品との対照からみて、沖ノ島内の多数の祭祀遺跡を横断する形で採取されていることが判明した。「雛形鉄刀」や金銅製の「責金具」や「瓔珞」と報告される短冊状銅板など沖ノ島祭祀特有の器物を数多く含んでいた。また、倭製の金銅装大刀の装具片とみられるものが複数確認できた。沖ノ島祭祀自体は国際色豊かな奉納品を持つが、確認できる武器類は倭系に偏る傾向があり（水野2025）、これを再確認させる資料である。同時に、報告書記載を上回る数量の大刀の奉納を窺わせるものである。その他に、文様を打ち出した銅板片や穿孔された貝製品（玉類）が確認できた。前者は、打ち出しを持つ銅板という点で、5号遺跡出土品に類品があるものの、これまで明確に認識できていなかった資料である。後者の貝製品は報告書での記載が少なく、沖ノ島祭祀における貝製品の全体像はやや不明な点があり、貝製雲珠を除けば、多くが穿孔された貝製品である。返納品では確認できる円孔が1つであることから、22号遺跡などの楕円形で複数の円孔を持つ貝製品とは様相が異なる。細長く加工された勾玉などを指向した貝製玉類の可能性を持つ。

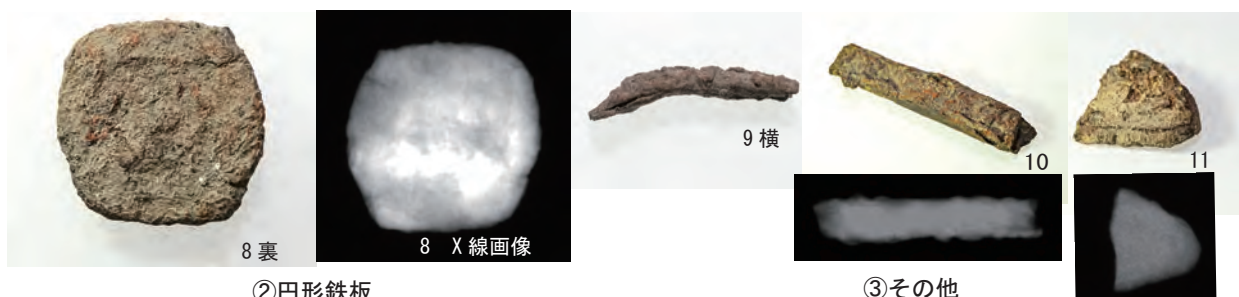
検討した返納品は、沖ノ島祭祀に特徴的な奉納品を含み、資料として一括性は高く、いずれも沖ノ島祭祀奉納品とみて良いと考える。

参考文献

- 宗像神社復興期成会1958『沖ノ島』吉川弘文館
 宗像神社復興期成会1961『続沖ノ島』吉川弘文館
 宗像大社復興期成会（第三次沖ノ島学術調査隊）1979『宗像 沖ノ島』精興社
 水野敏典2025「7・8号遺跡出土の鉄製武器と金属製品の再検討に向けて」『沖ノ島研究』第11号

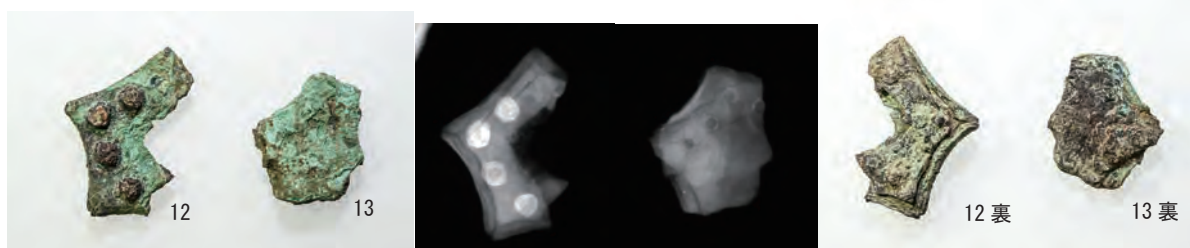


① 雛形鉄刀・鉄製品ほか



② 円形鉄板

③ その他

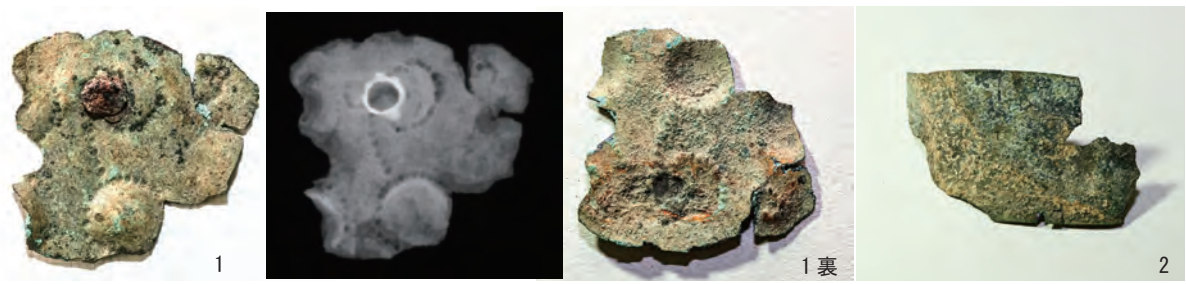


④ 子持剣菱形杏葉片

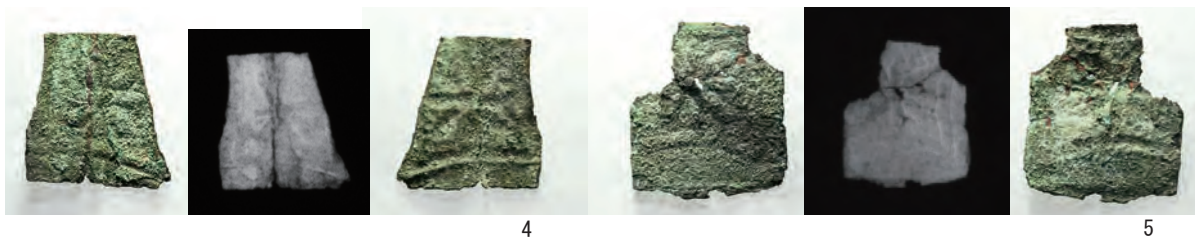
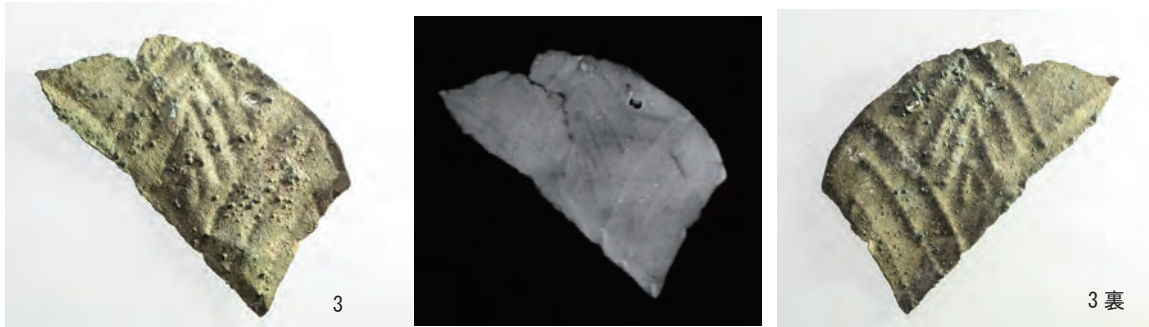


⑤ 鐸

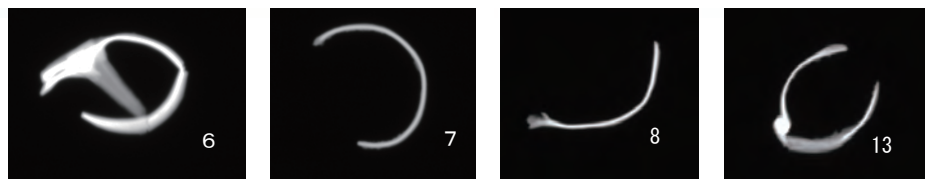
図版1 鉄器類・その他



①刀装具



②打ち出しをもつ銅板片



③金銅製責金具

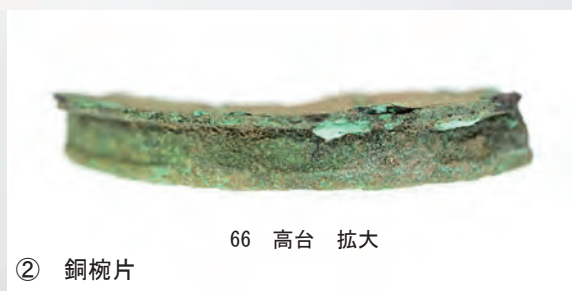
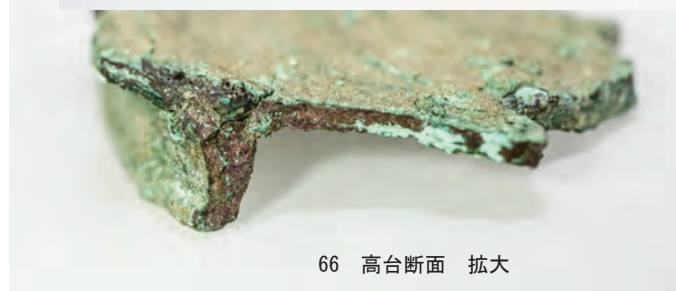
図版 2 金銅製品 1



図版 3 金銅・銅板片

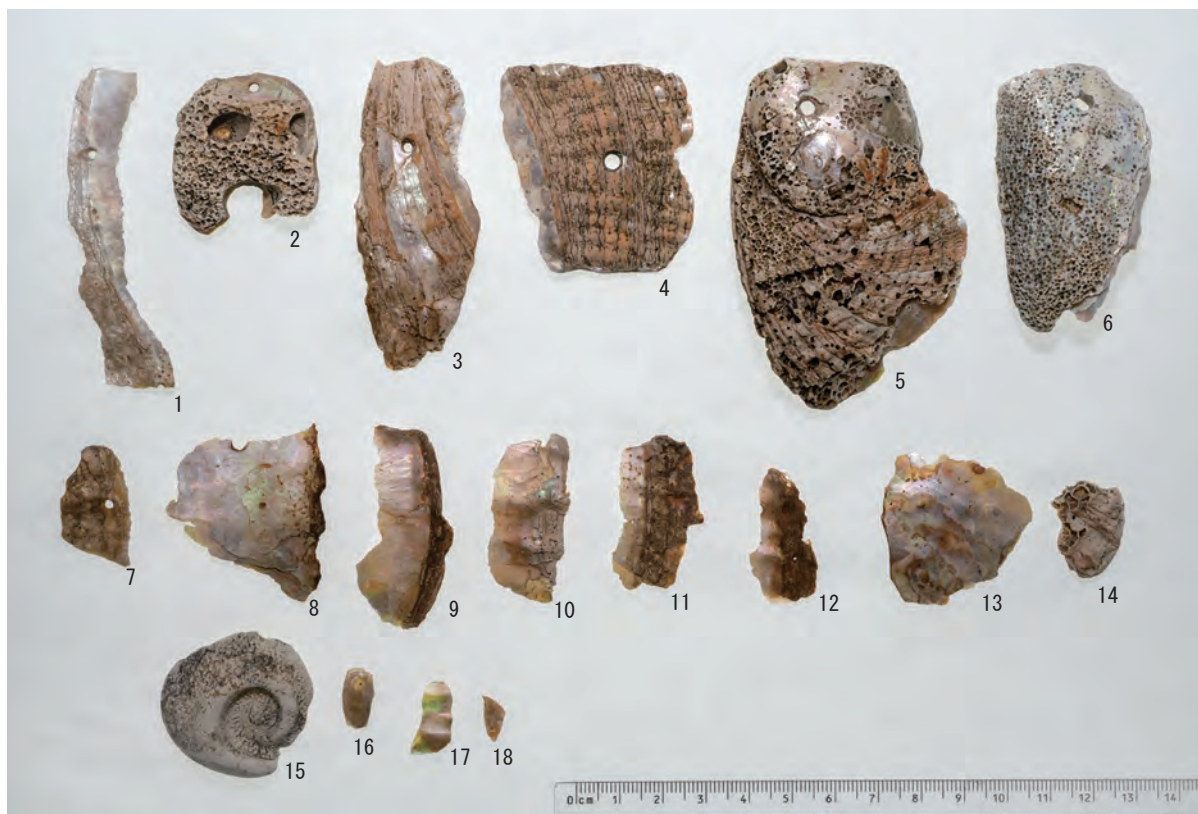


① 銅片



② 銅椀片

図版 4 銅製品 他



①貝製品ほか 表



②貝製品ほか 裏

図版 5 貝製品と貝

VI 伝沖ノ島出土返納品 石製模造品の検討

河野 一隆 東京国立博物館

要旨：本稿は、伝沖ノ島出土返納品（石製模造品・玉類等）を対象に、2024年度調査で整理した石製品群の三段階（岩上・岩陰・露天）変遷の枠組みを踏まえ、2025年11月に宗像大社神宝館で実測・法量・重量計測を行い、製作・調達・選別の実態を検討した成果報告である。出土状況が不明な返納品についても、可能な限り観察、実測調査、法量計測を行い、組成、素材、製作痕の分析から段階差に対応した技術的特徴を整理した。とくに滑石製白玉389点を対象に径や厚さの多変量解析によって三つの寸法規格群を抽出し、計画的調達と品質選別の可能性を示した。また、穿孔を中断した個体や研磨後に施溝された個体の存在から工程の柔軟な組替えを確認することができ、「沖ノ島技法」を分割時の打点形成を制御するための準備工程として再定義した。さらに、剣形を扶安竹幕洞遺跡出土資料と比較することによって、沖ノ島に特徴的な扁平菱形剣形の独自性と広域的な関連性を位置づけ、沖ノ島祭祀における独自の祭具の関連性を明らかにした。

キーワード：剣形、平玉、白玉、沖ノ島技法、多変量解析、竹幕洞祭祀遺跡

1. 2024年度の調査成果の総括

2024年度に実施した国宝「宗像・沖ノ島祭祀遺跡出土品」に関する石製品・石製模造品の特別調査では、各祭祀遺跡に供献された石製祭具群を悉皆的に実見・整理し、その体系的把握を目的として実施した⁽¹⁾。この調査では、玉類（勾玉・管玉・棗玉・白玉・平玉・算盤玉）、腕輪形石製品（鋏形石・車輪石・石釧）、石製模造品（器物形・玉類）、さらに人形・馬形・舟形といった石製形代を含む広汎な石製遺物を対象とし、品目構成、素材選択、製作技法、型式変遷を総合的に俯瞰することを目的とした。

これまで沖ノ島出土の石製祭具は、玉類、腕輪形石製品、形代といった品目ごとに個別研究が蓄積されている。しかし、祭祀全体の時間的展開の中で石製品群を総体として捉え直す試みは必ずしも十分ではなかった。そこで、昨年度の調査では研究史の整理を踏まえつつ、沖ノ島祭祀の諸段階に即して石製品・石製模造品の変遷を追跡することによって、祭祀内容の変化と石製祭具の関係性を明確化することを試みた。

その結果、沖ノ島祭祀における石製品・石製模造品の製作技法や組成の変遷過程は、①岩上祭祀段

階、②岩陰祭祀段階、③露天祭祀段階の三段階に大別できることが明確となった。岩上祭祀段階では、三角縁神獣鏡や鉄製武器と共伴する玉類や腕輪形石製品が中心であり、古墳副葬品と共通する性格を有したものと判断され搬入品の比重が高い。とくに、石製模造品では、白玉が灰白色・灰褐色の石材を使用し、個別成形のものと管玉を輪切りにした小型品が多く、算盤玉は個別成形で白色滑石が使用される特徴がある。方格に擦切施溝した平玉も見られるが岩陰祭祀段階以降と比べると少ない。

続く岩陰祭祀段階に入ると、腕輪形石製品は姿を消し、白玉・平玉・円板類を中心とする滑石製玉類が顕著となっている。この段階では、素材が黄褐色～明褐色の滑石へと収斂し、擦切施溝と打割を組み合わせた規格的な製作技法が広く採用されるようになる。石製祭具の製作には、岩上祭祀段階までの搬入品中心のあり方から、九州北部の在地的な素材調達・現地加工を基盤とした体制へと大きく転換したと推定できる。

さらに8世紀の露天祭祀段階になると、人形・馬形・舟形などの石製形代が大量に供献され、律令祭祀の枠組みの中に沖ノ島祭祀が明確に位置づけられたと考えられる。この段階では、円板や白玉・平玉

といった従来から継続する玉類と、形代として新たに登場する石製品とが併存し、前代とは使用石材や製作技法にも明瞭な差異が認められる。石製形代の製作には、硬質で粘度の高い石材を用い、刀子による切削加工を多用する点でそれ以前の滑石製玉類とは異なる技術系譜に属することが明らかになった。

なお、2024年度の調査における重要な成果の一つとして、従来「沖ノ島技法」と呼ばれてきた擦切施溝を伴う臼玉・平玉製作技法を再検討したことが挙げられる。実見資料の詳細な観察によって、擦切施溝は素材を手で割り取るための工程ではなく、分割時の打点形成を制御するための準備作業であることが明確となった。施溝の本数と平玉の辺数の関係を検討した結果、板状石核はひとかかえ程の比較的小規模な転石から、規格的な分割が行われていた可能性が高いことが示唆される。この知見は、沖ノ島祭祀における石製玉類生産が、専門工人のみに特化したものではなく、在地的な製作体制のもとで成立していた可能性を示すものであった。

また、露天祭祀段階における石製形代については、精巧な祖型と、それを簡略化した大量の粗製品との明確な関係が確認された。人形・馬形・舟形はいずれも無秩序に模造されたものではなく、共通する造形原理と製作技術の系譜に基づいて生産されている。これは、奈良県飛鳥池遺跡でみられたような「様」^{ためし}を用いた律令的生産管理と共通した性格を有しており、沖ノ島における石製形代の大量供献が国家的な生産・管理体制の下で行われた可能性を強く示唆している。

以上の成果から、沖ノ島祭祀における石製品・石製模造品は、単なる供献品ではなく、祭祀の性格、社会的背景、生産体制の変化を鋭敏に反映する指標であることが明らかとなった。

この一方で、昨年度の調査は全体像の体系的把握を優先したため、詳細な法量分析が実施できなかった。また、調査対象となる指定品のほとんどが板付きで保存されていたため、個別品の実測調査については将来の課題として残された。

そこで、2025年度の「伝沖ノ島出土返納品（以下、「返納品」とする）」調査では実測調査と法量分析を目的として、2025年11月13～15日にかけて宗像大社神宝館で行った。その内容は、資料群全体の観察、板付きでない石製模造品の法量（径・厚さ・重量）⁽²⁾の計測を主たる作業とした。

2. 返納品の概要

今回の調査対象品目には臼玉が最も多く、剣形、円板、擦切施溝分割（いわゆる沖ノ島技法）による平玉などバリエーション豊かな内容を含む。今回、実測調査と法量計測の対象とした返納品（図1）の、個別の特徴については第3～6節に詳述した。

このほか、図化に至らなかったものが若干ある。

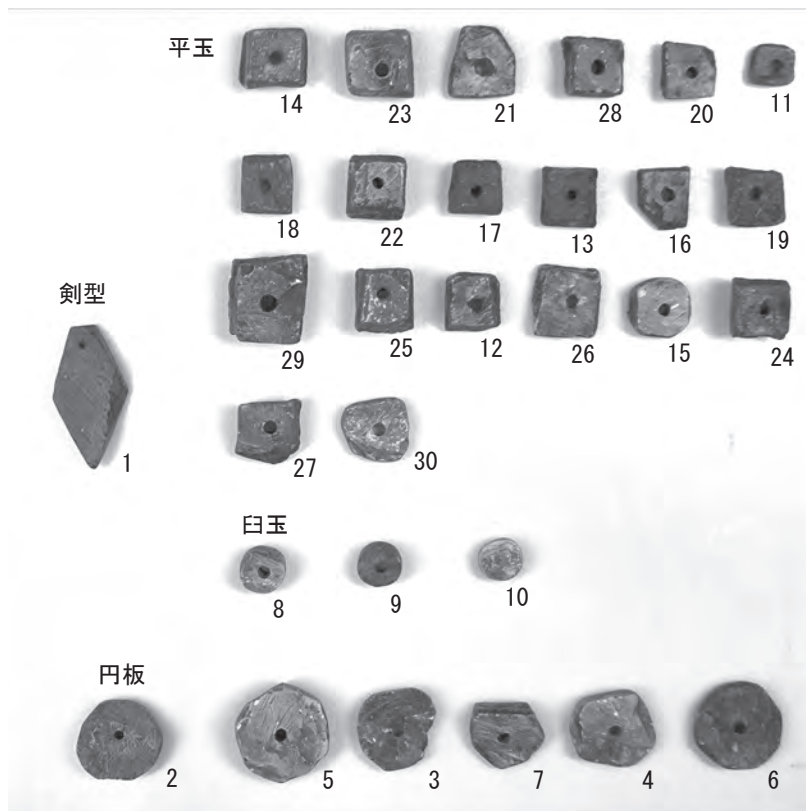


図1 今回調査対象とした伝沖ノ島出土返納品写真（一連の臼玉を除く）

このうち玉1点は平玉残片で穿孔開始側の断面がロート状になった薄いものである。また、極小の玉片と有機質のコハクか?と見られる施溝痕をとどめる残片もある。

以下は、個別資料について実測図および計測データ、観察所見を提示する。

3. 剣形 (図2)

剣形は鎬の表現が無い扁平な作りであるが、全体の形状は整っている。表裏面は穿孔を上置いて右下がりの密度の高い研磨痕が認められる。側面も古い割れや石のくぼみのために研磨が及んでいない部分を除き、おおむね仕上げはていねいである。暗灰褐色の粘板岩と見られ、重量は3.92gである。

沖ノ島祭祀では、おおむね器物を模倣した石製模造品は少ない。石製鏡がていねいに仕上げられている以外は⁽³⁾、剣形および工具形は扁平に便化した粗製品であり原型が不明なものも少なくない。剣形が確認されているのは、21号遺跡と6号遺跡で2024年度に実見調査を実施した。特に後者の剣形は基部と切先が明瞭ではなく、菱形を呈し本品と共通した特徴を持つものであり、第7節(2)で詳述する。

4. 円板・臼玉

円板(図3)は白・黄灰褐色～暗灰褐色の粘板岩で薄く扁平な作りのものが多い。いずれも表裏面に

密度の高い研磨痕を止めるものが多い。2は、穿孔が明確に円の中心から上に偏る。この特徴は露天祭祀段階の円板類の特徴と共通する。しかし、1号遺跡のこの種の円板は暗灰色で光沢を持つ石材を刀子で切削して成形するのに対し、本品は暗黄褐色で多孔質の粘板岩であり砥石研磨で整形するという製作技法に大きな隔たりがある。このため本例を露天祭祀段階にまで下げることはできず、しいて言うなら過渡的な型式と位置付けられるかもしれない。3は円板で一側縁がわずかに挟られている。形態的には粗製の勾玉と見られなくもないが、穿孔が中心にあることから、ここでは円板に分類した。4も一辺が大きく挟れた不整形の円板であるが、側面はていねいに研磨されている。5は両端が尖る円板で成形や研磨が十分に及んでいないと見られる。表裏面で白灰褐～暗灰褐色と色調に大きな差が認められる粘板

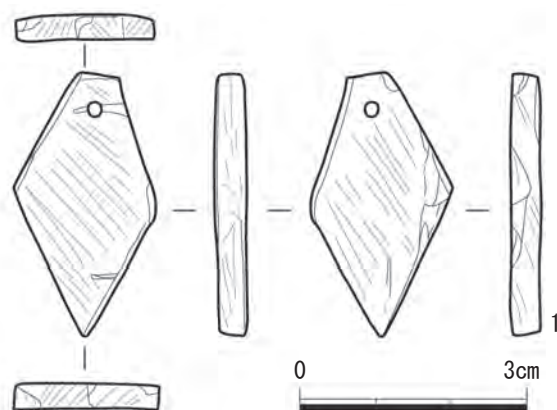


図2 剣形の平面・側面図

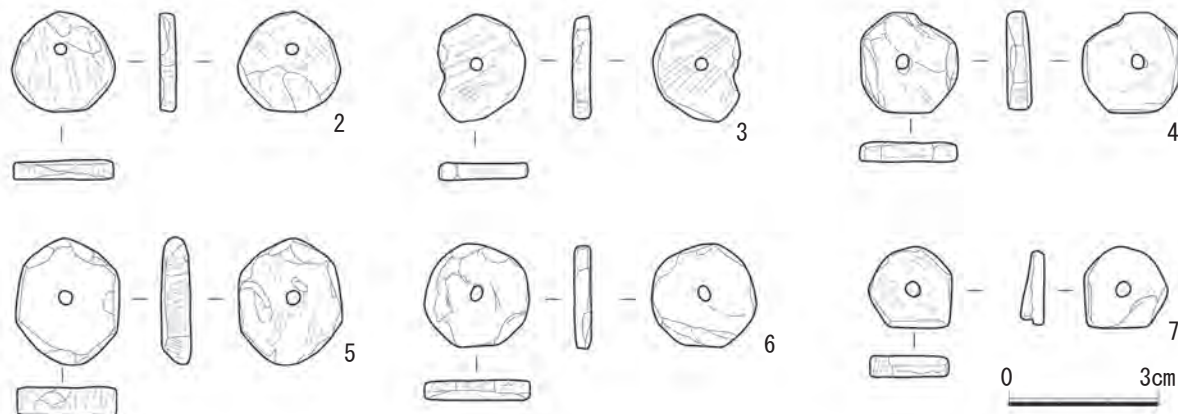


図3 円板の平面・側面図

岩を使用している。6は作りの整った円板で表裏面がていねいに研磨されている。7は黄灰褐色の粘板岩で一边には擦切施溝痕が認められ、側面から見ると段状に加工されている。擦切施溝分割の必要が無い部分で、続いて行われるべき打点も観察できないことから製作技法上の必要性から擦切施溝を行ったものではなく、当初は沖ノ島技法で平玉を作出するための素材石核を擦切施溝の一边を利用して円板に再加工したものと推定される。

白玉(図5)は3点確認できる。8は上辺に擦切施溝(図4)と打点を確認することができる。端面は高密度で研磨されたていねいな作りである。9は、擦切施溝は認められないが、側面を見ると打割時に力が抜けて破断した(割れ円錐)痕跡がうかがえ、端面の研磨はなされていない。10は、両端面がていねいに研磨されているが穿孔部は貫通していない。孔内には泥とは少し異なった石材と同質の充填物が詰まっており、一端に錐の先端のような小さな窪みも確認できる。もし、これが穿孔途中のものだとすれば、本例から白玉の穿孔には両面穿孔するものがあつたと推定することが出来るかもしれない。

前稿で確認した沖ノ島祭祀における円板と白玉の変遷過程は以下のとおりである。円板には双孔と単孔の2種類があり、単孔の出現時期は後出する。沖ノ島祭祀遺跡で有孔(単孔)円板が出現するのは21号遺跡で、単孔円板には円形・方形に成形し側縁を研磨で整えたものと、1点のみだが白玉と共通した擦切技法で整形したものがある。返納品の場合、前者は2～6、後者は7が該当する。8号遺跡でもこの傾向は共通する一方で、双孔円板が激減し、単孔円板は6cm程度に大型化したものが圧倒するようになる。露天祭祀では、円板類が10cm程度に巨大化して厚みを増し、孔も中心から上部へと移動する。製作技法も、板状石核から打割するものに代わって、角柱体から連続的に打割した後、主剥離面を上にして

して刀子で切削することで円板に成形するという製作技法の変遷を経過する。

一方、白玉については岩上祭祀段階から登場し、灰白色～灰褐色で径の小さなものが多い。それらは和歌山または兵庫県北部産か?と見られるが文化財科学的な調査は行っていない。個別成形と管玉に擦切を入れて両極打法で打割したものがあり、素材は前者が搬入の可能性のある白色、後者は灰白色または灰褐色の滑石で砥石整形時の研磨筋が明褐色となる特徴で九州北部(篠栗周辺か?)産の可能性も指摘できる。

岩陰遺跡段階の7号遺跡では、九州北部産の滑石を素材とし、分割後に切断面両側を研磨して仕上げるものが多い。小型品と擦切施溝で分割した大型品が共存し、21号から8号への過渡的様相を示す。擦切施溝は大量の白玉・平玉を生産するために規格的に打割できる技法として、岩陰祭祀段階から大々的に採用されている。これは、祭具の現地調達のために、九州北部で古墳時代から行われていた白玉製作技法から発展したと推定される。8号遺跡では白玉製作の定型化段階と位置付けられ、研磨によって円柱体を作り出し、擦切施溝によって打点を作り出し打割するものが大半である。両極打法で端面を研磨したものと打割したままのものが岩陰祭祀段階を通じて認められる。露天祭祀段階でも、灰白色または灰褐色の多孔質の滑石が使用されており砥石研磨を多用して製作される。石製形代では異系統の製作技法が導入されているのに対し、白玉は岩陰祭祀段階のものが踏襲される。



図4 施溝分
割痕(8)

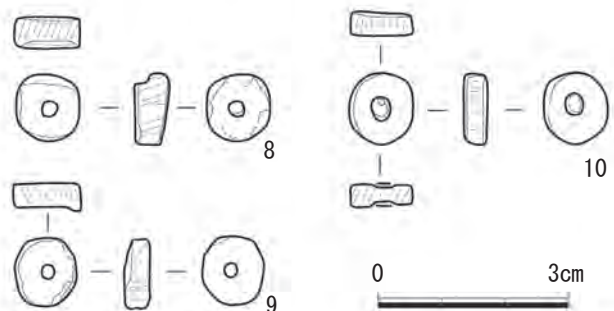


図5 白玉の平面・側面図

5. 平玉 (図 6)

いわゆる沖ノ島技法で作出された方形の玉を平玉と呼ぶ⁽⁴⁾。平滑に研磨加工した板状石核に方格状に施溝分割を加え、そこを打点として打割したもの

で、破断面を研磨で仕上げるものとそうでないものがある。この資料群は、全面(4方向)に施溝するものが主体であり、方形に整ったものを選別して採取した可能性がある。白灰色～暗灰褐色の多様な色調の滑石が用いられる。11は、最も小型の玉で2方

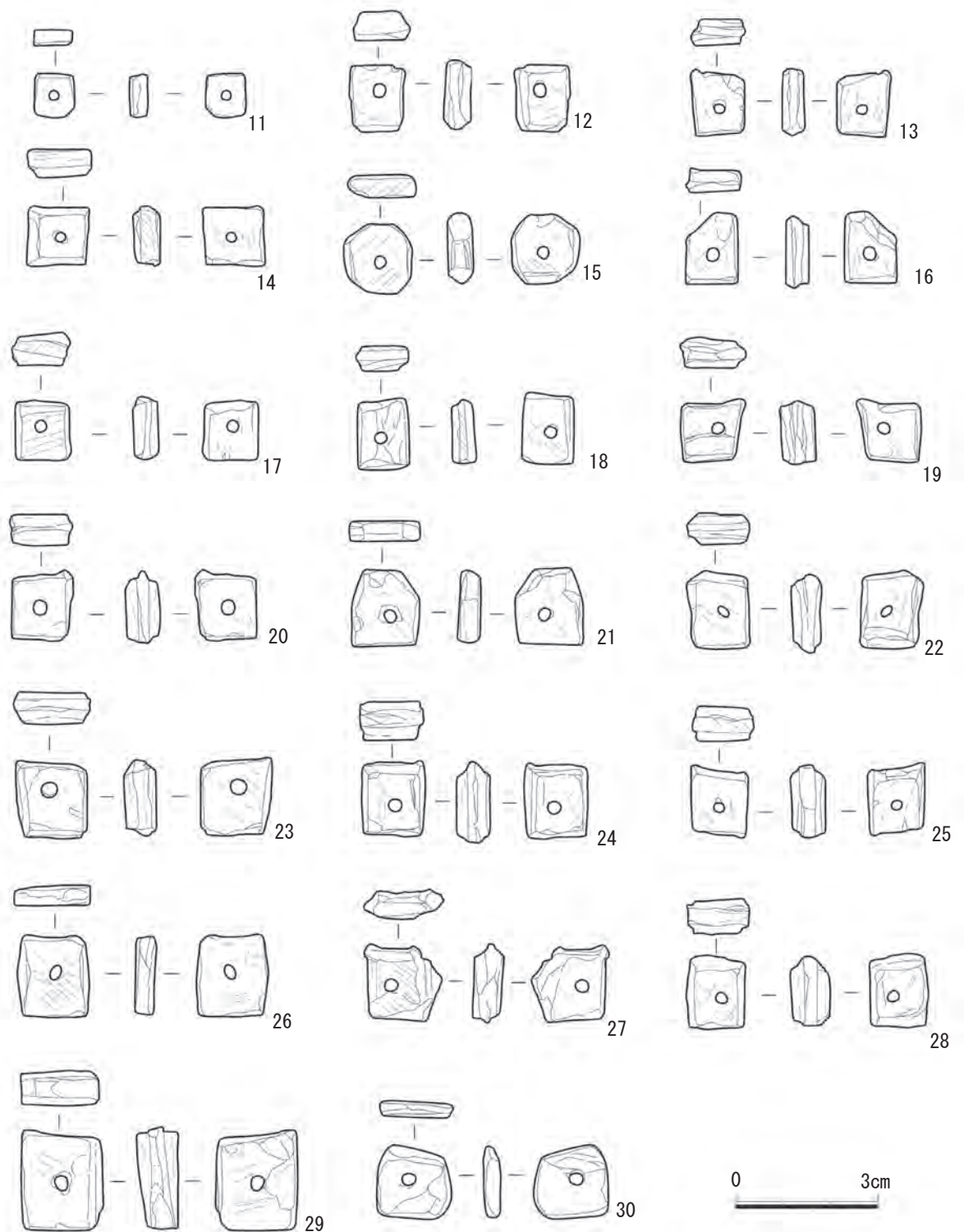


図 6 平玉の平面・側面図

向が擦切、2方向を研磨で仕上げる。12は穿孔が上部に偏り、全面擦切後に2方向だけに研磨を施す。13は全面擦切だが1隅が棘状になる。暗褐色の滑石製。14は比較的整った平玉だが、19、20、23、25、28などと同様、全面擦切で平面形に比較して分厚い印象を与える。15は全面擦切のため平玉に分類されるが、隅角が研磨で落とされ円板のような形になっている。16は角の一つが欠失し打割時の力の制御に失敗したものか。17は方形に整った玉で軽い。18は3方向を擦切し、うち2方向を研磨する。1方の長辺は打割されたままである。19も13同様に1隅が棘状になり穿孔が片寄った位置にある。20は灰褐色で全面擦切。21は全面研磨により2つの隅角が落とされている。22は全面擦切で1辺が大きく乱れている。23は穿孔が片寄り1つの角が尖っている。24は全面擦切で分厚い印象を与える。25は全面擦切後に1方を研磨で打割時の力の抜け具合で平行四変形になっている。26は比較的大きな玉だが薄い。3方を擦切し、1方だけに研磨を施す。27は本資料群中、最も形が崩れている。3方に擦切が残っていて、1方に剥離面が残っている。28は整った方形で穿孔が片寄る。大きさに比べて非常に分厚く、3.58gと重い。29は本資料群中最大の玉で5.9gに達する。1方を研磨している。30は非常に薄い玉で、1方に石核を成形した時の割れを残している。

ここで、もう一度、昨年度考察した沖ノ島技法について振り返っておこう。沖ノ島技法は岩上祭祀段階の16号遺跡で登場し、21号遺跡で定着する。これは、若杉山の滑石産地に近い粕屋町古大間池遺跡や宗像市藤原神屋崎遺跡、福岡市三苦遺跡群で知られ、小郡市西島遺跡でも報告されているように、九州北部で確認できる方格擦切施溝して分割成形する、古墳時代の臼玉製作技法に技術系譜が求められる。岩陰祭祀段階の8号遺跡では平玉製作技法として盛行し、露天祭祀段階にも踏襲される。一方で擦切施溝がなされる時点は、砥石による研磨で板状石核として仕上げられた後で打割される前である。擦切施溝は、臼玉製作時に円柱体から規格的に打割する場合にも採用されている。つまり、擦切施溝とは、かつて推定されたように手で割り取るためではな

く、分割に際して打点を作成するための準備作業の一環と推定される。しかし、本資料群の1つの角が棘状になる個体や隅角が研磨で落とされた個体の存在から、沖ノ島技法の打割についての傾向が見えてくる。方格に施溝して分割する場合、力の抜け方のコントロールが最も難しいのは最初に打割する時である。打割が進めば進むほど打撃時のベクトルが施溝に沿うようになるため、整形は容易になる。このため、棘状になった1つの角の両側の辺が最初に加撃した部分と推定される。また、孔の位置が片寄ったものが見られる点から方形に打割されるより前に、穿孔が施されたと推定できる。なお、本資料群に見られるような不整形の玉や、後述するような平玉を作成するための素材石核を設計変更して臼玉に転用した事例も見られることから、熟練した工人が計画的に玉生産に従事していたわけではなく、臨時に動員された工人も臼玉や平玉の調達に際して動員されたのではなかろうか。この体制が岩陰祭祀段階に確立されていたからこそ、露天祭祀段階に石製形代生産に異系統の石材加工技術が導入されても玉生産は同じ系統の技術が継承されたと推定できる。これは、膨大な量の石製形代を生産し続けた沖ノ島祭祀の基盤を形成したと評価することができよう。

以上、返納品に含まれる石製模造品のうち、図2・3・5・6に該当するものの法量を計測し、観察表にまとめたものが表1である。

6. 臼玉（図7、表2）

図化・計測した個別の返納品以外には、紐で綴じられた臼玉がある。本品は、滑石製玉類389点が一連となったもので、擦切施溝痕をとどめるものよりていねいに研磨されたものの方が多い傾向がある。これは、金属製品などと共通する傾向で採集時に玉を選別した可能性が考えられる。これらの玉類には3種類に大別される。第1はあらかじめ製作した管玉に施溝分割し臼玉を作成している。上下に施溝するものと上だけのものがあり、端面も打割後に未調整ものと研磨するものがある。第2は、いわゆる算盤玉だが1点しかない。第3は最も多数を占める

表1 今年度調査対象とした伝沖ノ島出土返納品の観察表

番号	名称	長さ (長径)	幅 (短径)	重さ	色調	施溝数
1	剣形	2.4	0.4	3.92	暗灰褐色粘板岩	－
2	円板	2	2	3.22	暗黄褐色粘板岩	－
3	円板	2.1	1.8	2.5	暗灰褐色粘板岩	－
4	円板	2	2	3.04	暗黄灰色粘板岩	－
5	円板	2.5	2.1	6.45	白－暗灰褐色粘板岩	－
6	円板	2.1	2.1	3.21	暗黄褐色粘板岩	－
7	円板	1.7	1.6	2.61	黄灰色粘板岩	－
8	白玉	1	1.1	1.21	灰褐色粘板岩	－
9	白玉	1	1	1	灰褐色粘板岩	－
10	白玉	1.1	1	0.76	灰褐色粘板岩？	－
11	平玉	0.9	0.9	2.05	白灰色滑石	2
12	平玉	1.4	1.1	2.11	灰褐色滑石	2
13	平玉	1.5	1.1	1.78	灰褐色滑石	4
14	平玉	1.4	1.2	2.18	灰褐色滑石	4
15	平玉	1.5	1.4	1.95	灰褐色滑石	4
16	平玉	1.5	1.1	1.67	白褐色－暗褐色滑石	3
17	平玉	1.3	1.1	1.71	暗灰褐色滑石	3
18	平玉	1.4	1.1	1.64	暗灰褐色滑石	3
19	平玉	1.5	1.3	2.2	暗褐色滑石	4
20	平玉	1.45	1.4	2.89	灰褐色滑石	4
21	平玉	1.6	1.4	2.03	白灰－暗灰褐色滑石	4
22	平玉	1.6	1.2	2.85	灰褐色滑石	4
23	平玉	1.65	1.5	3.96	暗灰褐色滑石	4
24	平玉	1.8	1.55	3.68	灰褐色滑石	4
25	平玉	1.5	1.2	2.26	灰褐色滑石	4
26	平玉	1.7	1.6	2.36	灰褐色滑石	3
27	平玉	1.6	1.6	2.72	暗灰褐色滑石	3
28	平玉	1.55	1.2	3.58	白灰褐色滑石	4
29	平玉	2.2	2.1	5.9	暗灰褐色滑石	2
30	平玉	1.5	1.5	1.49	白灰色滑石	2

もので、擦切施溝痕を認めないほどいいに仕上げられたもので、当初から無かったのか研磨によって不明確となったのかは定かではない。

2024年度の調査で見出された石製品・石製模造品

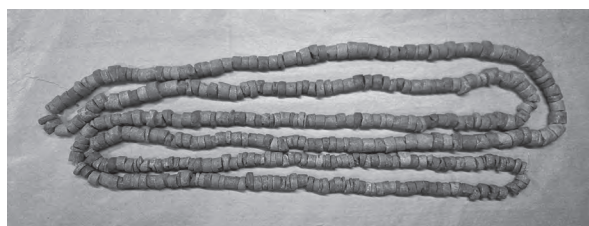


図7 紐で綴じられ一連となった白玉

の3段階のうち、岩上祭祀段階に見られた、白色－灰褐色の高密度の石材で、単体で仕上げられたものではなく、おそらく九州島内の産地から採取された光沢が少ない淡黄褐色で多孔質の滑石を母岩とし、タバコ状の円柱素材石核から規格的に打ち割って穿孔・ていねいに研磨したものが大半である。このうち、2つの注目すべき特徴が指摘できる。第1は、錐ブレを止めるため穿孔を始めた所で中断した個体が複数個あることである（図8左）。このことから、施溝分割後に端面を研磨して平滑にし、補助穿孔を開始しそのまま完孔することもあるが、石質の具合で完孔できない場合は別に設定することが分かった。これは、昨年度の調査中から想定できてはいたものの、今年度の調査で確認できた成果は大きい。第2は、研磨後の端面に施溝した個体がある点（図8右）である。白玉製作工程における端面研磨は、穿孔直前の最終段階でその後に分割のために施溝することはあり得ない。この一方で、沖ノ島技法による平玉作出工程では平滑に整形した素材石核から打割するため、本来は平玉を作出する過程の途中で設計変更

したと考える以外にない。これは、①白玉と平玉とでは製作技法が截然と分かれていること、②製作者は自在に製作技法を組み合わせ玉を調達したこ

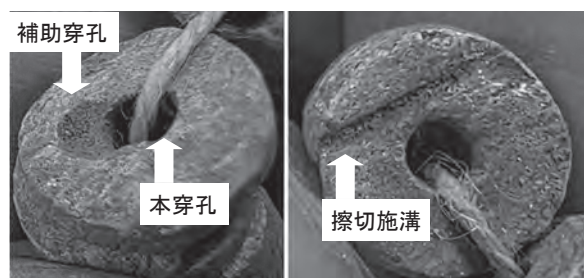


図8 白玉に見られる補助穿孔(左)と端面の擦切施溝(右)

表 2 臼玉の観察表

番号	最大径	最大厚	番号	最大径	最大厚	番号	最大径	最大厚	番号	最大径	最大厚	番号	最大径	最大厚
1	11	7	79	11	6	157	8	6	235	12	6	313	10	7
2	12	6	80	13	7	158	11	7	236	11	8	314	11	6
3	11	6	81	11	7	159	11	5	237	11	8	315	11	7
4	9	8	82	11	6	160	10	4	238	12	9	316	13	4
5	12	6	83	7	7	161	11	8	239	11	5	317	9	5
6	11	5	84	13	4	162	12	8	240	10	8	318	12	7
7	10	5	85	11	8	163	13	9	241	11	5	319	11	3
8	11	4	86	11	7	164	11	8	242	9	6	320	10	6
9	12	5	87	11	5	165	11	7	243	10	5	321	10	7
10	10	7	88	10	3	166	12	7	244	10	6	322	12	3
11	12	5	89	12	5	167	14	6	245	11	8	323	9	9
12	11	5	90	11	7	168	13	8	246	11	7	324	9	2
13	12	6	91	10	7	169	9	3	247	8	3	325	11	8
14	10	4	92	10	5	170	11	11	248	9	6	326	11	6
15	11	5	93	11	5	171	12	4	249	11	7	327	11	5
16	11	8	94	9	4	172	11	7	250	10	5	328	10	2
17	11	8	95	10	4	173	11	9	251	11	6	329	11	8
18	10	5	96	10	5	174	11	7	252	11	6	330	13	4
19	11	5	97	11	4	175	10	6	253	9	5	331	10	6
20	10	5	98	11	8	176	9	7	254	9	5	332	11	9
21	9	6	99	11	5	177	9	9	255	13	5	333	10	7
22	12	5	100	9	7	178	11	9	256	11	6	334	11	7
23	11	7	101	10	6	179	11	6	257	11	6	335	9	5
24	10	8	102	12	7	180	11	4	258	9	5	336	10	7
25	8	1	103	12	7	181	11	7	259	14	10	337	11	3
26	10	7	104	13	8	182	11	6	260	11	6	338	12	5
27	11	5	105	10	6	183	11	6	261	12	7	339	10	6
28	12	7	106	11	5	184	10	5	262	11	6	340	11	6
29	9	6	107	11	5	185	11	7	263	9	3	341	9	4
30	11	6	108	11	4	186	9	6	264	10	3	342	9	6
31	10	5	109	11	6	187	9	5	265	9	6	343	11	7
32	10	5	110	11	6	188	10	5	266	9	7	344	11	6
33	10	4	111	11	3	189	11	5	267	12	7	345	10	4
34	10	6	112	11	6	190	11	6	268	12	8	346	11	2
35	8	4	113	10	7	191	14	8	269	11	6	347	9	5
36	10	6	114	11	3	192	11	7	270	11	6	348	11	6
37	12	4	115	13	12	193	11	5	271	12	5	349	11	5
38	11	2	116	11	9	194	11	6	272	9	7	350	11	3
39	7	7	117	12	8	195	11	6	273	11	6	351	9	7
40	10	6	118	12	9	196	12	5	274	11	7	352	9	4
41	11	7	119	11	8	197	11	7	275	10	7	353	11	6
42	10	5	120	13	9	198	12	7	276	11	7	354	11	6
43	10	6	121	13	13	199	11	7	277	10	7	355	11	6
44	9	5	122	14	8	200	11	6	278	12	2	356	11	4
45	10	4	123	13	8	201	12	5	279	11	5	357	12	4
46	11	6	124	14	8	202	13	7	280	13	5	358	11	6
47	12	5	125	12	11	203	11	10	281	11	6	359	11	5
48	10	3	126	13	10	204	11	5	282	11	4	360	11	5
49	11	6	127	12	9	205	11	7	283	11	7	361	13	6
50	11	6	128	12	11	206	11	12	284	11	4	362	10	8
51	12	4	129	14	11	207	11	6	285	11	6	363	11	5
52	11	4	130	14	8	208	11	8	286	13	9	364	9	5
53	10	7	131	13	10	209	11	12	287	12	5	365	11	3
54	13	7	132	12	12	210	11	9	288	9	6	366	12	5
55	11	8	133	12	11	211	12	7	289	11	8	367	9	5
56	11	8	134	12	10	212	11	6	290	11	9	368	11	6
57	12	6	135	9	9	213	14	9	291	11	6	369	11	3
58	10	5	136	12	9	214	9	5	292	9	4	370	11	3
59	9	4	137	11	8	215	11	10	293	9	3	371	11	2
60	9	6	138	12	3	216	11	6	294	9	1	372	11	5
61	10	4	139	11	6	217	11	4	295	11	4	373	10	5
62	10	4	140	11	8	218	11	7	296	11	3	374	9	4
63	10	6	141	14	6	219	11	8	297	11	3	375	8	5
64	11	5	142	11	4	220	13	8	298	11	7	376	9	3
65	11	5	143	11	10	221	12	9	299	10	4	377	11	5
66	12	5	144	12	4	222	11	4	300	11	3	378	9	5
67	11	3	145	11	6	223	11	4	301	11	6	379	11	2
68	11	3	146	12	9	224	11	4	302	10	5	380	10	6
69	10	7	147	13	6	225	13	7	303	10	7	381	11	7
70	11	6	148	11	8	226	9	6	304	11	5	382	11	6
71	12	7	149	11	6	227	11	7	305	9	3	383	10	6
72	11	4	150	10	6	228	9	4	306	11	3	384	9	5
73	11	3	151	13	7	229	12	6	307	9	5	385	11	4
74	11	6	152	11	8	230	11	8	308	11	6	386	11	7
75	11	7	153	12	7	231	12	4	309	12	3	387	11	6
76	10	4	154	10	9	232	11	7	310	11	8	388	10	4
77	11	7	155	11	3	233	9	7	311	11	7	389	9	8
78	12	7	156	11	7	234	14	6	312	11	7			

と、③玉の調達数があらかじめ決められており、このため仕上げの丁寧さは問われなかった可能性の3点が推測される。

以上、389点の白玉の径と厚さの計測結果を表2に観察表として提示した。

7. 返納品の定量的評価と定性的評価

次に、出土地点や帰属時期もバラバラな返納品の資料群としての定量的・定性的な評価を試みた。

(1) 玉類の多変量解析

まず、一連となった白玉に対して数量的・統計的手法を用いた多変量解析を試み、形態的規格性および製作工程との対応関係について検討を行った⁽⁵⁾。分析に用いた変数は、各白玉について計測した最大径および最大厚の2項目である(表2)。この資料群はすべて滑石製で材質差による影響が小さいため、寸法比に着目することで製作意図や規格の有無を見出すことを目的とした。

k-means 法によるクラスタリング 次に、同じ2変数を用いてk-means法によるクラスタリングを行った。クラスタ数は試行的検討の結果、3群とした。その結果、白玉は以下の3類型に明瞭に分かれることが確認された。k-meansによる分析結果を図9上である。

第1群(グループ3)は、径が比較的小さく、厚さも薄い群である。これらは擦切施溝痕を残すものや、端面未調整の個体を多く含む傾向があり、分割後の簡易仕上げ、あるいは量的確保を優先した製作段階に対応する可能性がある。第2群(グループ2)は、中程度の径と厚さを持つ群で、全体として最も安定した寸法分布を示す。本資料群の中核をなす規格的な白玉群と位置づけられ、穿孔・端面研磨ともに一定水準で施された個体が多い。第3群(グループ1)は、径が大きく、かつ厚手の個体からなる群である。これらは研磨が極めて丁寧で、擦切施溝痕が不明瞭なものが多く、完成度の高い製品群とみなすことができる。

主成分分析(PCA) 最大径および最大厚を標準化した上で主成分分析を行った結果、第1主成分が

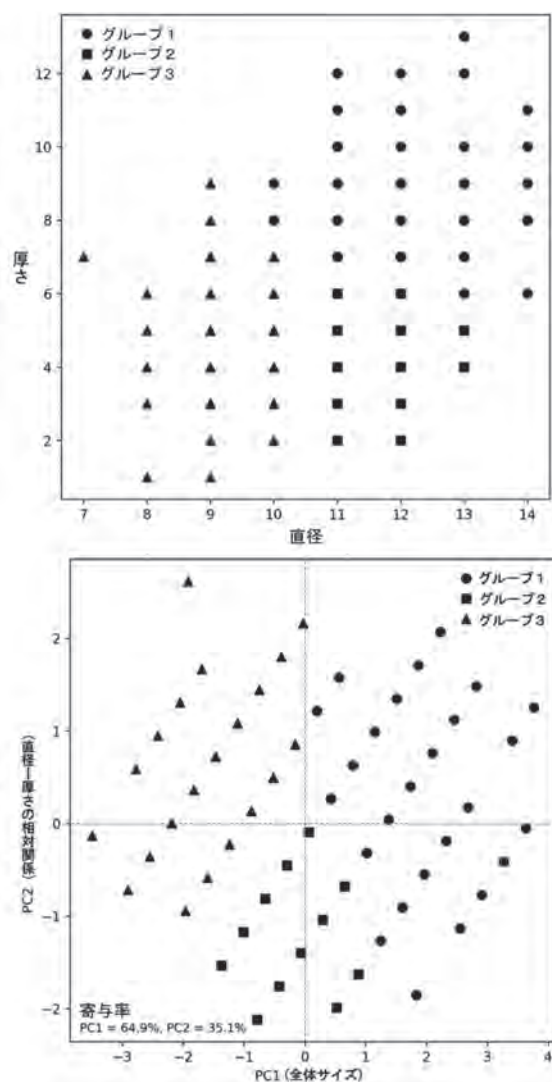


図9 k-means 法によるクラスタリング(上)と主成分分析との統合結果(下)

全分散の約65%を、第2主成分が約35%となった。第1主成分は径・厚ともに正の寄与を示し、白玉全体の「サイズ」を表す軸と解釈できる。一方、第2主成分は径と厚のバランス、すなわち扁平性あるいは厚手性の差異を反映する軸である。そこで、k-means法のグルーピングと主成分分析の結果を統合したものが図9下である。

この結果から、白玉の形態変異は単なる連続的なサイズ差ではなく、「全体規模」と「厚さのまとまり」という二つの要因によって規定されていることが明らかとなった。特に、同程度の径を持つ個体群の中で厚さに明確なばらつきが認められる点は、厚さが偶然的に決定されたのではなく、製作過程における

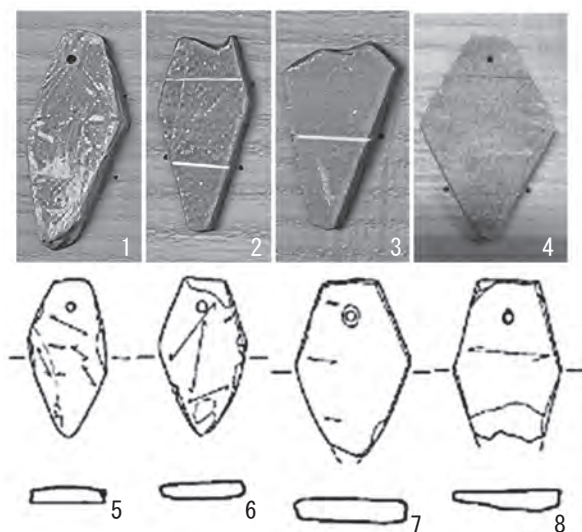


図10 沖ノ島出土の剣形（21号（1～3）、6号（4））と竹幕洞出土の剣形（5～8）

意図的な制御対象であった可能性を示唆している。

製作工程と選別の可能性 以上の解析結果から、389点の白玉は無作為に製作・集積されたものではなく、少なくとも三つの寸法規格群を前提として調達・選別された可能性が高いことが明らかとなった。特に、研磨の丁寧な個体が数量的に優勢（グループ1）である点は、先述したように採集時点に選別が行われた可能性を示唆する。

また、穿孔途中で中断された個体や、研磨後に施溝が施された個体が存在することは、白玉製作が単線的な工程ではなく、石質や必要数量に応じて工程を柔軟に組み替える実践的な製作体系であったことを裏付ける。数量解析によって示された規格群は、こうした工程選択の結果を反映するものと考えられる。

以上より、本資料群の白玉からは、一定数を確保することを前提に、製作技法・仕上げの精粗を問わず柔軟に調達されており、採集時に選別された可能性はあるものの白玉生産が規格的な体制下で行われた可能性がうかがえる。

（2）宗像・沖ノ島と竹幕洞の剣形の比較

この資料群で特筆されるものが剣形である。剣形とは抜身の鉄剣を祖型とする石製模造品で有孔円板と共に祭祀遺跡で主として使用されることの多い祭

具である。したがって、剣の基部と刃部とが明確で鎬のあるものが古く、鎬が消滅した扁平な作りのものが新しいとされている。宗像・沖ノ島遺跡で使用される剣形は、菱形～長菱形の輪郭で穿孔された側の頂部を落としたものが21号、6号遺跡から出土している（図10-1～4）。21号遺跡出土品は3点あり、うち2点は穿孔されたか否かは不明である。また、6号遺跡出土品や返納品の例は左右対称形でいいに研磨されたものであり、おおむね21号遺跡出土品よりも形が整っている。これらは厚みが均質で表面に砥石による高密度の研磨根をとどめていることから、平滑な板状石核から成形したものと推定される。したがって、粗製品の退化型式と見なすべきではなく、石製祭具として定型化した型式であろう。

このような菱形基調の扁平な剣形は鎬が立体的な剣形から便化した粗製品は知られているが、定型化したこの型式の剣形は沖ノ島祭祀との深い関連性を指摘しても良いだろう。

ところで、この視点に立つと注目されるのが、韓国で沖ノ島祭祀と比肩される祭祀遺跡として古くから注目されている忠清北道・扶安竹幕洞祭祀遺跡である。ここでは、日本列島の古墳文化との関連性を示すものが少なくないが、石製模造品の剣形もその一つである。竹幕洞遺跡の石製模造品には、短甲や刀子・曲刃鎌など器財、農工具形の模造品が含まれ、有孔円板では双孔円板が主体を占めるなど、石製模造品を使った祭祀が始まるのは沖ノ島に先行する様相がうかがえる。剣形にも鎬表現のあるものが一定量占める点もこの想定を示唆する。この一方で、沖ノ島の剣形と共通した扁平菱形の剣形（図10-5～8）が検出されている。この一方で、沖ノ島祭祀を特徴づける擦切施溝分割を多用した製作技法による白玉や平玉はあまり出土していない。したがって、日本列島の古墳文化と共通する石製模造品の祭祀を採用する点で、沖ノ島と竹幕洞遺跡との関連性は否定できないけれども、石製模造品の組成を見れば、むしろ長野県神坂峠遺跡や福島県建鉾山遺跡のような器物形模造品を伴う祭祀遺跡との関連性も強いと想定される。ただし、そのような中で扁平菱形の剣形の存在は、石製短甲と並んで沖ノ島祭祀との関連性が

明確に指摘できる資料と位置付けることが出来るだろう。

8. 今年度調査の総括

最後に、今年度の返納品調査の成果を列記すると、次のとおりである。

まず、2024年度の課題であった石製模造品の法量分析および実測を実施し得た点は、特筆すべき成果である。昨年度の国宝部会調査の際には、大部分の石製品・石製模造品が板にテグス留めされた状態にあり、十分な計測・図化が困難であった。これに対し、今回の調査では、剣形、円板、臼玉、平玉等について、詳細な観察所見を伴う法量データを新たに取得することができた。これにより、形態差や規格性を具体的に検討する基盤が整い、今後の研究に資する重要な基礎データが蓄積されたと評価できる。

第2に返納された一連の臼玉389点について、径と厚さの二変数を用いた定量分析（k-means 法および主成分分析）を行い、少なくとも三つの寸法規格群が存在することを示した点である。この結果から、臼玉の製作・調達は無作為なものではなく、数量確保と完成度の異なる複数の規格群を前提とし計画的に調達された可能性を指摘することができた。

第3に、臼玉および平玉の製作工程において、設計変更や工程の組み替えが実際に行われていたことを、研磨後の施溝個体や穿孔中断個体の存在から具体的に確認した点である。

これは、石製祭具生産が、専門的・固定的な工房制ではなく、在地的かつ柔軟な製作体制のもとで運用されていたことを示唆する。

第4に、返納品に含まれる剣形の石製模造品を、韓国・扶安竹幕洞祭祀遺跡の剣形と比較検討し、沖ノ島祭祀に特徴的な扁平菱形剣形が、広域的な石製模造品祭祀の中でも一定の独自性を有する型式であることを指摘した。これにより、沖ノ島祭祀が東アジア的な祭祀文化の影響を受けつつも、独自の祭具体系を形成していた可能性を、具体的資料に基づいて位置付けた。

以上の成果は、宗像・沖ノ島祭祀遺跡における石

製品研究を、従来の個別器種ごとの検討段階から、生産・調達・選別を含む祭祀システム全体の理解へと展開させるための重要な基盤を提供する。また、本稿で用いた定量的分析手法は、宗像・沖ノ島祭祀遺跡にとどまらず、膨大な出土量を有する石製形代の分析にも広く応用し得る汎用性を有している。

石製模造品は、古墳時代に登場して以来、しばしば「粗製」で「同種多量」といった評価のもとに捉えられてきたが、そのため従来の型式学的研究のみでは把握しきれない面が少なくなかった。これに対し、今回試みた多変量解析は、そうした従来の分析枠組みを補完・拡張し、石製模造品の構成や規格性、さらには祭祀における運用実態に迫るための有効な方法論となる可能性を示したといえる。

その意味において、本報告の検討は、宗像・沖ノ島祭祀遺跡における石製品研究の深化に資するのみならず、古墳時代から律令祭祀へと連なる石製祭具生産の基盤の構造を考える上でも、新たな視座を提示するものとして位置づけることができよう。

註

- (1) 河野一隆「国宝特別調査 石製品・石製模造品編」『沖ノ島研究』11、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会調査報告書、2025年
- (2) 重量計測には、Conkoo社製のHacari-01 Q 0.01g-500gを使用した。薬包紙で汚染を防止しつつ小数点以下1桁の有効数字で計測した。
- (3) 高宮出土の石製短甲も写実的な器財形模造品だが出土状況の詳細が明らかでない。沖ノ島祭祀における農具形模造品の少なさは、後述の竹幕洞祭祀遺跡と比較すると対照的である。
- (4) 本稿の「平玉」とは、前稿と同じく、方格に擦切施溝して分割・穿孔されたいわゆる「沖ノ島技法」によって製作された玉類を指す。この型式の玉は、報告書作成当初、「平玉」と呼ばれてはいたものの、近年では臼玉を量産するために採用された未成品と考えられる傾向にある。

ところが、沖ノ島から出土する資料群には、穿孔された個体が多く未穿孔のものは少ない。一般的に玉作で最も困難な工程は穿孔である。もし、これを未成品

と捉えるならば、わざわざ貫孔が成功した個体にあえて玉が破砕するリスクを伴う打割成形を行う理由が説明できない。また、本稿で分析したように臼玉の調達には整った形よりも数を揃えることが優先されていたから、大量生産のためにはタバコ形の円柱体を製作して打割する方が合理的であり、わざわざ板状石核にして1点ずつ個別に成形するのは理にかなっていない。したがって、本稿では「沖ノ島技法」に則って製作された玉類は臼玉の未成品ではなく、個体として完成した形とみる方が妥当と考えられ、かつてのように「平玉」という名称を採用したい。

- (5) 多変量解析には、ChatGPT による図化を行った。

VII 総括 伝沖ノ島出土返納品の評価について

水野 敏典 奈良県立橿原考古学研究所

「伝沖ノ島出土返納品（以下、「返納品」とする）」は、『沖ノ島』、『続沖ノ島』、『宗像沖ノ島』に報告されている沖ノ島祭祀特有の器物を含み（復興期成会1958、復興期成会1961、復興期成会1979）、出土品と同一個体、あるいは類品を多数確認できた点で、沖ノ島祭祀奉納品として高い一括性をもつ資料と評価できる。

調査により、沖ノ島祭祀の評価につながる成果があったので、まとめておきたい。

一つは、返納品中の八鳳鏡（変形夔鳳鏡片）である。夔鳳鏡は下垣仁志による日本列島内出土の銅鏡集成によると6千数百面中で大小加えても約30面と希少な鏡種である（下垣2016）。にもかかわらず17号と18号遺跡に、直径約22.1cmの大型品が出土していた。夔鳳鏡は数が少ないためか、注目される機会が少なかったが、今回、返納品中の鏡片と18号遺跡出土鏡片、さらに伝宮地嶽付近出土鏡片が同一個体と判明し、広島県尾ノ上古墳出土鏡と同型技法による同一文様鏡と判明した。加えて18号遺跡と17号遺跡の八鳳鏡（変形夔鳳鏡）は、同型式であるが、同範・同型関係にはないことも確認できるなど、多くが明らかとなった。

二つ目は、滑石製玉類である。調査を通し、滑石製白玉を統計的手法と詳細観察により量産技法である「沖ノ島技法」の再定義を行うとともに、沖ノ島祭祀に特徴的な扁平菱形剣形と、韓国竹幕洞遺跡出土品との関連も明らかとなった。

三つ目は、金銅装甲冑のセットとしての確認である。返納品中に金銅装甲冑片を確認し、それを足掛かりに21号遺跡に同一個体とみられる金銅装甲冑片を確認した。古墳時代中期の金銅装甲冑の出土は非常に希少であり、代表的な類例が日本最大の前方後円墳である大阪府大仙古墳（伝仁徳天皇陵古墳）出土品であることから、古墳時代中期の大和王権がいかに沖ノ島祭祀を重要視したかが判明した。

最後に、沖ノ島祭祀における金銅装甲冑奉納の意

義について再確認しておきたい。金銅装甲冑のセットは、古墳時代中期の沖ノ島祭祀を代表する奉納品となる。

古墳時代前期後半からの三角縁神獣鏡に代表される銅鏡群は、九州全体を見渡しても突出した出土量をもつ。そして古墳時代後期には、一昨年度のX線CT調査で確認された銚全体に象嵌をもつ三角穂式鉄銚がある（検討会2025）。三角穂式鉄矛は倭製武器とみられるが、古墳副葬品に類例を確認できない突出した優品であった。

今回の発見は、古墳時代前期と後期に挟まれた古墳時代中期の沖ノ島祭祀の再評価を迫るものである。これまでに古墳時代中期の奉納品として、銅鏡、鉄製甲冑、蔵手刀子や鉄鎌が知られていたが、畿内の有力古墳の副葬品に準じるものに留まっていた。古墳時代中期の倭製の金銅装甲冑のセットは、大王陵級の古墳に副葬される極めて限定的で最上級の副葬品とみられる。これの沖ノ島祭祀への奉納を確認できたことで、大和王権における沖ノ島祭祀の重要性が、古墳時代前期や後期と比べて衰えることなく継続していたことが明らかとなった。

古墳時代の約300年あまりの大和王権を取り巻く変化を考えると、沖ノ島祭祀が一貫して特別な地位を保持したことに驚かされる。その変化とは、第1に、中国王朝や半島各国との外交姿勢や交易を含めた政治的、経済的な変化である。古墳時代前期古墳の中国鏡や素環頭大刀にみる中国(魏晉)との交渉、古墳時代中期の「倭の五王」に代表される対外交渉と後期における中国王朝との交渉途絶がある。並行して鉄や銅などの社会を支える物資の供給先も国産化へと変化する。第2に、大和王権を支えた有力氏族の交代である。葛城氏、和爾氏、物部氏、蘇我氏などの交代が文献からうかがわれるが、個々の氏族的な特性は影響しない。第3に、儀礼や葬送観の変化である。古墳副葬品と沖ノ島祭祀の奉納品には重複する部分があり、その中核となる品は銅鏡から甲

冑へ、さらに金銅装大刀や馬具という変化をみせる。単に奉納品の変化ではなく、古墳埋葬施設が竪穴式石室から横穴式石室への変化が示すように葬送観念の変化もうかがわれる。第4に、古墳時代後期には仏教伝来があり、宗教的、思想的影響を受ける。これらの政治的、経済的、宗教的な変化にもかかわらず、大和王権での沖ノ島祭祀の重要性が一貫して揺るがない点、しかも、類似した国家規模の祭祀が他に確認できず、文字通りの唯一無二の存在という特殊性を再確認した。

今後、この点も沖ノ島祭祀を考える上で解明すべき大きな課題と言える。

参考文献

- 国宝金銅製矛鞘検討会2025「沖ノ島8号遺跡出土金銅製矛鞘の新知見」『沖ノ島研究』第11号
- 宗像神社復興期成会1958『沖ノ島』吉川弘文館
- 宗像神社復興期成会1961『続沖ノ島』吉川弘文館
- 宗像大社復興期成会（第三次沖ノ島学術調査隊）1979『宗像 沖ノ島』精興社
- 下垣仁志2016『日本列島出土鏡集成』学生社

沖ノ島8号遺跡出土金銅製矛鞘の系譜

齊藤 大輔 島根県立八雲立つ風土記の丘

要旨：沖ノ島8号遺跡から出土した金銅装の鞘には、鳳凰文と唐草文を象嵌した三角穂式鉄銚が収められていることがわかった〔国宝金銅製矛鞘検討会 2025〕。金銅装の銚鞘、鳳凰文・唐草文を象嵌した鉄銚ともに類例は知られておらず、各部位の剛性が弱いこととあわせ、東アジア交流の境界祭祀を特徴づける儀仗とみなされる。

小稿では、本資料について鉄銚本体の型式学的検討を軸とし、付随する要素ごとに類例を示しながら複合体としての位置づけを考えた。そして、鳳凰文および儀仗に関わる研究にも目配りしながら、古代東アジアにおける鉄銚の最高峰であると評価した。

キーワード：沖ノ島、金銅製矛鞘、三角穂式鉄銚、鳳凰文、儀仗

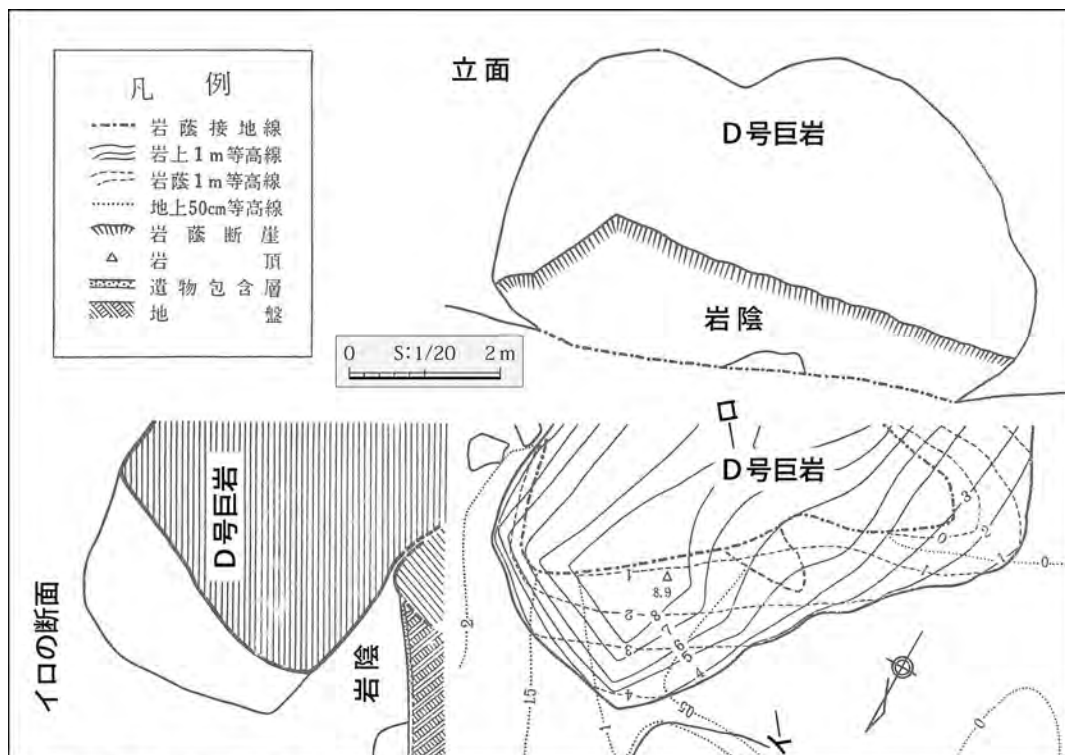
1. はじめに

福岡県宗像市沖ノ島祭祀遺跡D号巨岩の岩陰で営まれた8号遺跡では、多様な奉獻品とともに金銅装の鞘に収められた鉄銚が出土した（第1次調査：1954年、図1～3）。本資料は報告書刊行当時より衆目を集めながらも〔宗像神社復興期成会 1958〕、鞘の内部が錆ついて引き抜けず、また1962年6月に第1・2次調査出土品が国宝に指定されたこともあり、ながらく型式学的検討がなされずにいた。

そうしたなか、令和6（2024）年度文化庁 Innovate MUSEUM 事業「世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群における出土品金属製品のデジタル台帳および検索・閲覧システムの構築による博物館DXの推進」（採択団体：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会）の一環として実施されたX線調査、および追加でおこなったX線CT調査を通じて、鞘の内部構造が明らかとなった（図4）。その概要は共同の検討会名義で報告したが〔国宝金銅製矛鞘検討会 2025、以下「2025 報告」と記す〕⁽¹⁾、この成果は、いち早く基礎的なデータを公開することに重点が置かれており、資料の踏み込んだ考察は今後の課題とされた。小稿では、古墳時代武器研究の立場から本資料の考察を深めたい。

なお、2025 報告で示された主な論点はつぎの通りであり、それぞれのオーサiershipは註(2)～(9)にまとめる。

- ① 鉄銚本体と鞘それぞれの袋部の開口部に銀板、鞘の開口部付近には銀製の小環をつける。銚本体の袋部と銀板を貫いて、直方体の頭をもつ金銅製の鞘留が2本刺さっている。ただし、鞘留の脚は柄まではおよんでいない⁽²⁾。
- ② 鉄銚本体は身部断面が三角形の「三角穂式」、袋部の断面は九角形で、袋部の合せ目や端部の挟りは認められない。全長は286mm以上⁽³⁾。
- ③ 鞘内の鋒受け具の配置と象嵌文様から、三角穂式鉄銚の背の位置が推察された⁽⁴⁾。
- ④ 図4に示すように、鞘留は鉄銚の背に対して左右対称の位置には取り付けられていない。一方で、鞘は二つの鞘留の中央に小環が位置するように装着されており、結果として、小環と背は正対していない⁽⁵⁾。
- ⑤ 鉄銚の各面には鋒付近から袋部の端付近まで象嵌（材質は金とみられる）を施す⁽⁶⁾。
- ⑥ 身部の象嵌は唐草文、袋部の象嵌は変化した亀甲繫鳳凰文とみられ、文様および象嵌技術の特徴から6世紀後半に位置づけられる⁽⁷⁾。
- ⑦ 銚や鞘は古墳時代後期後半・末に位置づけるが、複合体としての類例はない⁽⁸⁾。
- ⑧ 本資料は、1958年の報告では「銀装金銅矛鞘」ないし「金銅銀装矛鞘」、宗像大社神宝館の展示説明などでは「金銅製矛鞘」と表記されてきたが、資料の実態を適切に表す名称として「金銅装鞘入象嵌装鉄銚」を提唱する⁽⁹⁾。

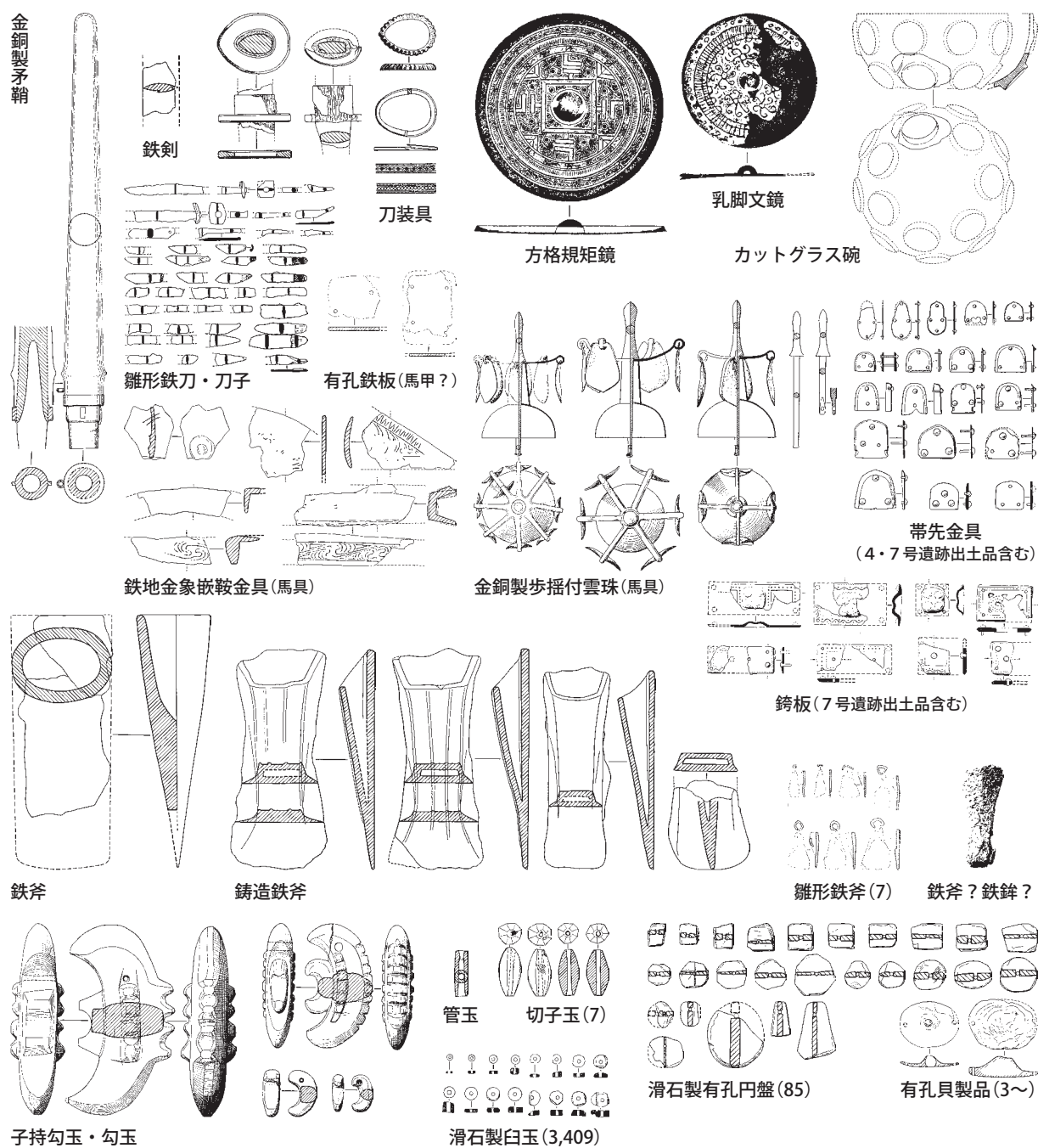


1. 沖ノ島8号遺跡の立・平面図



2. D号巨岩の調査風景

図1 D号巨岩と岩陰遺跡



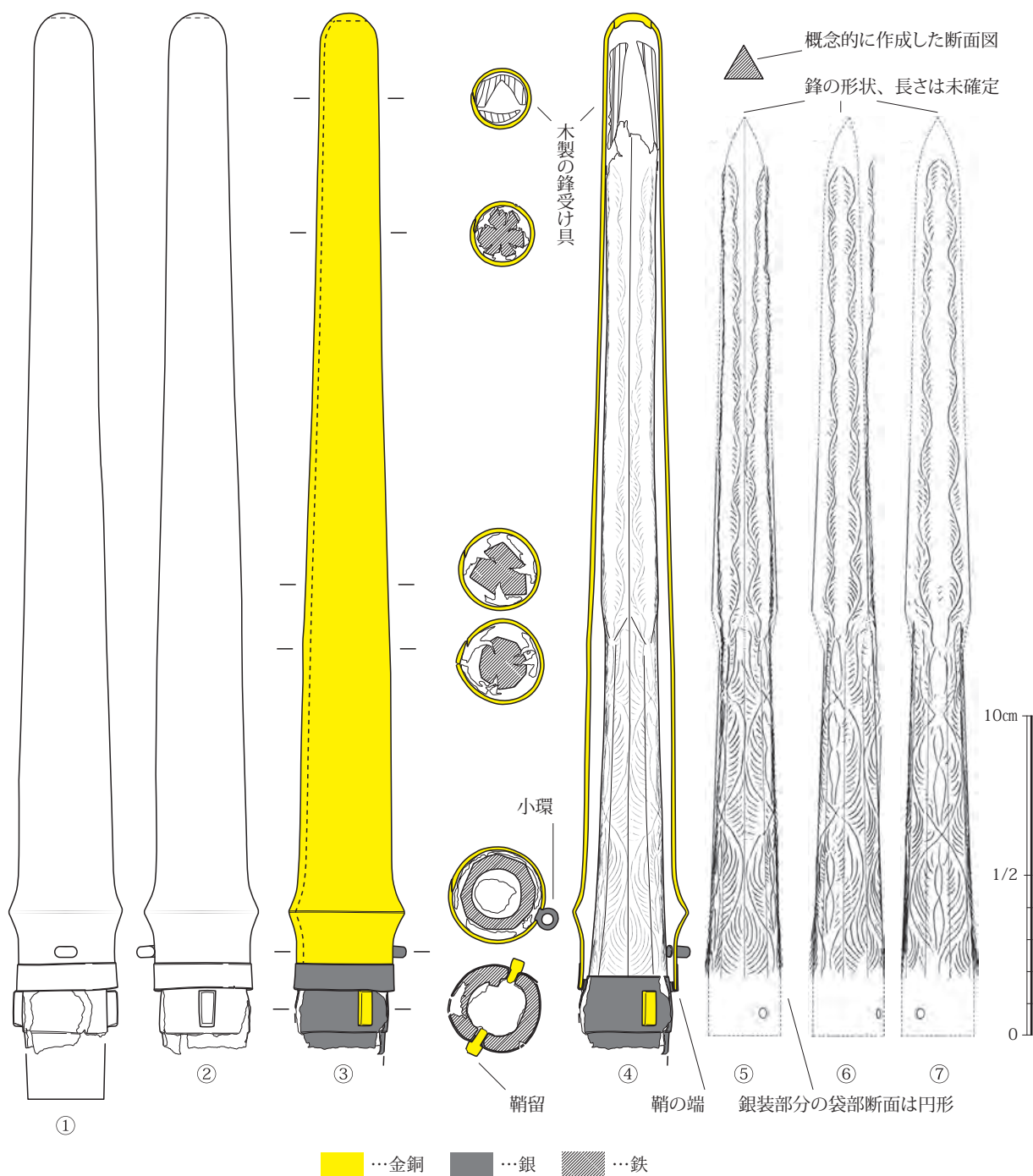
※() 内の数字は報告書本文に記された個体数

0 S:1/5 20cm

【沖ノ島8号遺跡の奉献品概略】8号遺跡では、朝鮮半島系の影響を受けた金属製刀装具やササン朝ペルシア（イラン）製のカットグラス碗が出土したことから、アジア広域の交流網に組み込まれた奉斎者像が導かれる。7号遺跡と比べて人馬に着装する武装具・馬装具のセット数が少ないこと、7号遺跡出土武器の多くは古墳副葬品と同質の真正品であるのに対して、8号遺跡では雛形鉄刀・刀子や鉄斧、玉類が目立つこととあわせ、同じD号巨岩の岩陰祭祀であっても異なる性質をもっていたと考えられる。

また、方格規矩鏡や鑄造鉄斧など、古墳時代前期以前にさかのぼりうる器物が目立つことから、8号遺跡の形成・盛行年代については各時期の奉献品を精査したうえで再検討する必要がある。

図3 沖ノ島8号遺跡の主要な奉献品



【本図観察上の注意点】 ①②は、鞘の小環を手前に向けた面を①として、②は①を通有の実測図の通り90° 展開された図である。一方、③は②から約150° 展開し、内部の鉄銚本体の背に対して正対する位置で据えられた図である [国宝金銅製矛鞘検討会 2025]。④⑤は③と同じ角度で、④は鞘を半裁した図、⑤は鞘を取り払った図である。また、⑥は⑤に対して90°、⑦は⑤に対して180° 展開した図である。

なお、現状では1958年の報告時(図3左上)と比べ袋端部の銀板先端が欠損しており、全長が短くなっている。①下部の線は当時の写真をもとに筆者が発掘時の全長を示したものである。

図4 沖ノ島8号遺跡出土の金銅製矛鞘推定模式図(国宝金銅製矛鞘検討会2025の53頁図1、68頁図25、76頁図39より引用改変)

2. 三角穗式鉄鉾の発展的整理

金銅製矛鞘の属性は多いが、その本質は鞘に収められた「三角穗式鉄鉾」にある。以下、本形式の鉾へ対する現状での認識をまとめる。

(1) 研究の推移

身部断面が三角形の鉄鉾へ対する注目は武器研究の黎明期にすでにみられ〔末永 1941、高橋 1912〕、後藤守一が鉄鉾を身の形状にもとづいて分類するなかで「三角穗形」と呼んだ〔後藤 1928〕。

1980年代に、三角穗式は6世紀前半に出現することが指摘された〔茂木 1980、臼杵 1985〕。その後は、三角穗式鉄鉾の系譜や編年をまとめるなかで、朝鮮半島との錯綜した地域間交流が生みだした倭製品であるという見解が強調されてきた〔齊藤 2015・2020、高田 1998・2001・2002〕。また、後期古墳の副葬品様式を抽出するなかで、身部断面が菱形の鎬式鉄鉾が出土する墳墓と比べて墓域の規模や共伴品の組成が相対的に優れた三角穗式鉄鉾がとりあげられるようになり〔鈴木 2018、橋本_達 2010、早野 2023〕、時期区分論や古墳時代後期における広域首長間交流を読み解くうえで一定程度の有効性をもつことも確かめられている〔齊藤 2023〕。

(2) 三角穗式鉄鉾の特徴

三角穗式鉄鉾の形態的特徴として、①身部の断面が三角形をなすこと、②関が浅く、鋒から袋端部にかけて比較的直線的な輪郭を呈すること、③袋部の合せ目や目釘孔が視認しにくいこと、④袋端部に山形抉りを施す事例が知られていないこと、⑤全長に一定の規格を見出しうる一群があることなどが挙げられる。また、全長 20 cm に満たない個体が知られる一方で、中期古墳出土鉄鉾にみられるような全長 40 cm を超える大型品は含まないことも、特徴の一つとして捉えうる。まったくの同形品を示すことは難しいが、中期以前の鉄鉾と比べて斉一的で瀟洒な印象を与える形式といえる。袋部の断面が多角形をなす事例のほか、袋端部に銀板や鐔をともなう装飾性ゆたかな事例が知られることとあわせ、三角穗式鉄鉾

が儀器性を高めた武器であることをうかがわせる。これに対して、三角穗式鉄鉾の先鋒化を刺突機能の強化や特化とみる意見もあるが〔寺前 2021〕、両意見は必ずしも互いに無効化するものではない。

また、拠点的な遺跡においては2本以上の多量副葬・奉獻がしばしばみられるのに対して、小規模な古墳では単数副葬を志向することも、三角穗式鉄鉾の性格を示すありかたとして留意される。

(3) 三角穗式鉄鉾の分布

三角穗式鉄鉾は日韓で 130 本ちかい事例があるが(表 1)、朝鮮半島の事例は3遺跡から1本ずつ出土しているに過ぎないため、大多数が日本列島製とみてよい。ただし、朝鮮半島出土品のうち2例(ソウル風納土城ナ地区1号住居、羅州伏岩里丁村古墳1号石室)が日本列島出土品の大半よりも古い5世紀にさかのぼる点が、その起源論を複雑にする。

朝鮮半島の事例のうち残る1例は、栄山江流域の前方後円墳である咸平礼德里新徳1号墳(6世紀前半)から出土している。その被葬者の性格についてはさまざまな解釈があるが〔禹 2022、高田 2012、朴 2007〕、九州系の横穴式石室を主体部にもち、振り環頭大刀や広帯二山式冠など倭とのつながりを示す器物が出土したことから、その勢力基盤は倭との交流なしに成り立つものではないことはたしかである。

日本列島では、東北から九州南部までの主要な後期前方後円墳の築造地域と重なるように分布する(図 5)。水系や港湾に臨む立地の遺跡からの出土事例が多く、福岡県沖ノ島、長崎県壱岐(双六古墳)、および島根県隠岐(立石古墳)という、日本列島と朝鮮半島の境界領域を結ぶ離島で出土していることも注目される。沖ノ島や壱岐のみならず、隠岐でも5～7世紀の対外交流を示す資料がみられることとあわせ〔角田 2017〕(図 6)、三角穗式鉄鉾の保有者は水運に一定の利権をもっていたと考えられる。

水系や山系によって囲まれた特定の地域における分布密度は奈良盆地が最も高い(図 7)。このうち全長 60m の前方後円墳である奈良県烏土塚古墳では3本出土しており、近畿最多の出土数、かつ多量

表 1 三角穗式鉄鉾出土遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	遺跡概要	時期	本数	金銀装	鐳	三角穂編年
1	甲塚古墳	福島県福島市	—	6c 末～7c 初	1			第3b段階
2	中田裝飾横穴	福島県いわき市	裝飾横穴	TK209	2	銀	○	第3b段階
3	赤羽B-1号横穴	茨城県ひたちなか市	横穴墓	TK43-TK209	2			—
4	風返稲荷山古墳	茨城県かすみがうら市	前方後円墳・78m	TK209-TK217	1	銀		第3b段階
5	寺山Ⅰ号墳	茨城県筑西市	円墳・40m	TK43-TK209	2			第3a段階
6	竹下浅間山古墳	栃木県宇都宮市	前方後円墳・52.5m	TK209	1			第3b段階
7	明神山10号墳	栃木県足利市	円墳・8m	TK43-TK209	2			第3段階
8	若田大塚古墳	群馬県高崎市	円墳・29.5m	6c 前	1	金		第1段階
9	綿貫観音山古墳	群馬県高崎市	前方後円墳・97m	TK43	9			第3a段階
10	八幡観音塚古墳	群馬県高崎市	前方後円墳・105m	TK209	2			第3b段階
11	鈴塚古墳	群馬県高崎市	円墳・20m	6c 後	1			第3b段階
12	壇塚古墳	群馬県前橋市	円墳・25m	6c 中	1			—
13	弦巻塚古墳	群馬県前橋市	前方後円墳・86m	5c 後～6c 前	1			第1段階?
14	不二山古墳	群馬県前橋市	前方後円墳・54.5m	6c 後	2			第3a段階
15	赤堀4号墳	群馬県伊勢崎市	円墳・22.5m	6c 末～7c 初	1			第3b段階
16	美九里中学校	群馬県藤岡市	不時発見	6c 末～7c 初	1			第3b段階
17	房子塚古墳	群馬県玉村町	前方後円墳・45m	6c 末	1			第3a段階
18	小泉大塚越3号墳	群馬県玉村町	前方後円墳・46m	6c 後	2			第3段階
19	ニツ山1号墳	群馬県太田市	前方後円墳・74m	6c 後	1			第3a段階
20	北大竹遺跡(第1号遺物集中)	埼玉県行田市	祭祀遺構	6c 後～7c	1			—
21	金鈴塚古墳	千葉県木更津市	前方後円墳・91m	TK209	2	銀		第3a段階
22	天王船塚4号墳	千葉県成田市	周溝円墳・50m～	7c 前	1			—
23	塚田2号墳	神奈川県南足柄市	—	TK43-TK209	3		○	第3段階
24	三ノ宮3号墳	神奈川県伊勢原町	—	7c 前	1			第3段階
25	伝・福井県若狭町西塚出土	—	—	—	1			—
26	稲荷塚1号墳	岐阜県可児市	円墳・21m	TK43-TK209	1		○	第3b段階
27	飯塚古墳	静岡県磐田市	円墳・26m	MT15	1			—
28	上神増E16号古墳	静岡県磐田市	周溝円墳・11m	TK43	1			—
29	梶ヶ谷横穴墓群	静岡県御前崎市	横穴墓	TK209	1			第3b段階
30	瀬戸1号墳	静岡県藤枝市	円墳・12m	TK209-TK217	2			第3段階
31	賤機山古墳	静岡県静岡市	円墳・32m	TK43-TK209	3			第3段階
32	いわき塚古墳	愛知県大口町	円墳・19m	TK43	1			第3a段階
33	根川1号墳	愛知県豊田市	円墳・17m	MT85-TK43	1			—
34	寺西1号墳	愛知県豊橋市	円墳・25m	TK43-TK209	3			第3a段階
35	馬越長火塚古墳	愛知県豊橋市	前方後円墳・70m	TK209	1			—
36	入田古墳	三重県津市	円墳・18m	6c 後	1			第3段階
37	井田川茶臼山古墳	三重県亀山市	—	TK10	1			第2段階?
38	甲山古墳	滋賀県野洲市	円墳・8m	TK10	1	銀?		第2段階
39	畑の前7号墳	京都府精華町	周溝円墳・18.6m	7c 前	1			—
40	小屋ヶ谷古墳	京都府福知山市	円墳・13m	TK43	1			第3a段階
41	堀切1号墳	京都府京田辺市	円墳・22m	TK209	1			第3b段階
42	河内愛宕塚古墳	大阪府八尾市	円墳・22.5m	MT85-TK209	1			—
43	山畑48号墳	大阪府東大阪市	—	TK209	1			第3b段階
44	奥山1号墳	大阪府寝屋川市	円墳・25m	TK43-TK209	1			第3a段階
45	年の神2号墳	兵庫県三木市	円墳・14.7m	TK46	1			第3b段階
46	西山6号墳(第6主体)	兵庫県三田市	前方後円墳・35m	TK10	1			第2段階
47	見手山1号墳	兵庫県豊岡市	前方後円墳・35m	TK43	1			—
48	東山1号墳	兵庫県多可町	円墳・30m	TK209	1		○	第3b段階
49	帯解狐塚古墳	奈良県奈良市	—	TK43	1			—
50	馬塚古墳	奈良県桜井市	—	6c 後				第3段階
51	竜谷8号墳	奈良県桜井市	円墳・18.5m	6c 後	1			第3a段階
52	鍋割古墳	奈良県天理市	—	TK10	1			—
53	鳥土塚古墳	奈良県平群町	前方後円墳・60m	TK43	3			第3a段階
54	牧野古墳	奈良県広陵町	円墳・50m	TK209	1			第3b段階
55	平林古墳	奈良県葛城市	前方後円墳・55m	TK43	1			—
56	伊瀬敏郎コレクション	(推定)奈良県葛城市	—	—	1			第3a段階
57	箕島1号墳(一本松)	和歌山県有田市	円墳・12m	6c 中	1		○	—
58	上塩冶薬山古墳	鳥根県出雲市	周溝円墳・77m	TK43-TK209	9			第3段階
59	立石古墳	鳥根県西ノ島町	—	6c 末～7c 前	1			—
60	定東塚古墳	岡山県真庭市	方墳・17m	TK217	4	銀	○	第3b段階
61	王墓山古墳	岡山県倉敷市	円墳・25m～	TK43-TK209	4		○	第3段階
62	赤井西4号墳	岡山県倉敷市	—	TK209	1			—
63	赤井南3号墳	岡山県倉敷市	円墳・17m	TK209	1			—
64	二子塚古墳	広島県福山市	前方後円墳・68m	TK43-TK209	4			第3段階
65	田戸古墳	広島県三次市	円墳・13m	TK209	1			第3b段階
66	長砂古4号墳	香川県観音寺市	円墳・13m	TK43	1			第3段階
67	経ヶ岡古墳	愛媛県四国中央市	前方後円墳・30m	TK10	1			第3a段階
68	箕田丸山古墳	福岡県みやこ町	前方後円墳・37m	TK10	1			第2段階
69	袈水1号墳	福岡県行橋市	—	TK209	1			第3b段階
70	伊田孤塚D4号横穴	福岡県田川市	横穴墓	TK209	1			第3b段階
71	沖ノ島7号遺跡	福岡県宗像市	祭祀遺跡	6c 後	2～			第3b段階
72	沖ノ島8号遺跡	福岡県宗像市	祭祀遺跡	6c 後～7c 初	1	金銀		第3b段階
73	勝浦水押SO-01	福岡県福津市	円墳・14m	TK209	1			第3b段階
74	原口1号墳	福岡県古賀市	円墳・23m	MT85-TK43	1			第3a段階
75	宇美観音浦KS3号墳	福岡県宇美町	円墳・14m	TK209-TK217	1			第3b段階
76	片縄山丸ノ口IV-2号墳	福岡県那珂川市	円墳・12.5m	TK209	1			第3b段階
77	元岡G-6号墳	福岡県福岡市西区	多角形墳?	6c 後～7c 前	2			第3a段階
78	双六古墳	長崎県壱岐市	前方後円墳・91m	MT85-TK209	1			—
79	赤坂古墳	熊本県多良木町	円墳	TK209	1			—
80	丁村古墳(1号石室)	韓国全羅南道羅州市	円墳	5c 後	1			第1段階
81	新徳1号墳	韓国全羅南道咸平郡	前方後円墳・51m	6c 中	1	銀		第2段階
82	風納土城ナ地区1号住居	韓国ソウル	住居跡	5c 後	1			第1段階

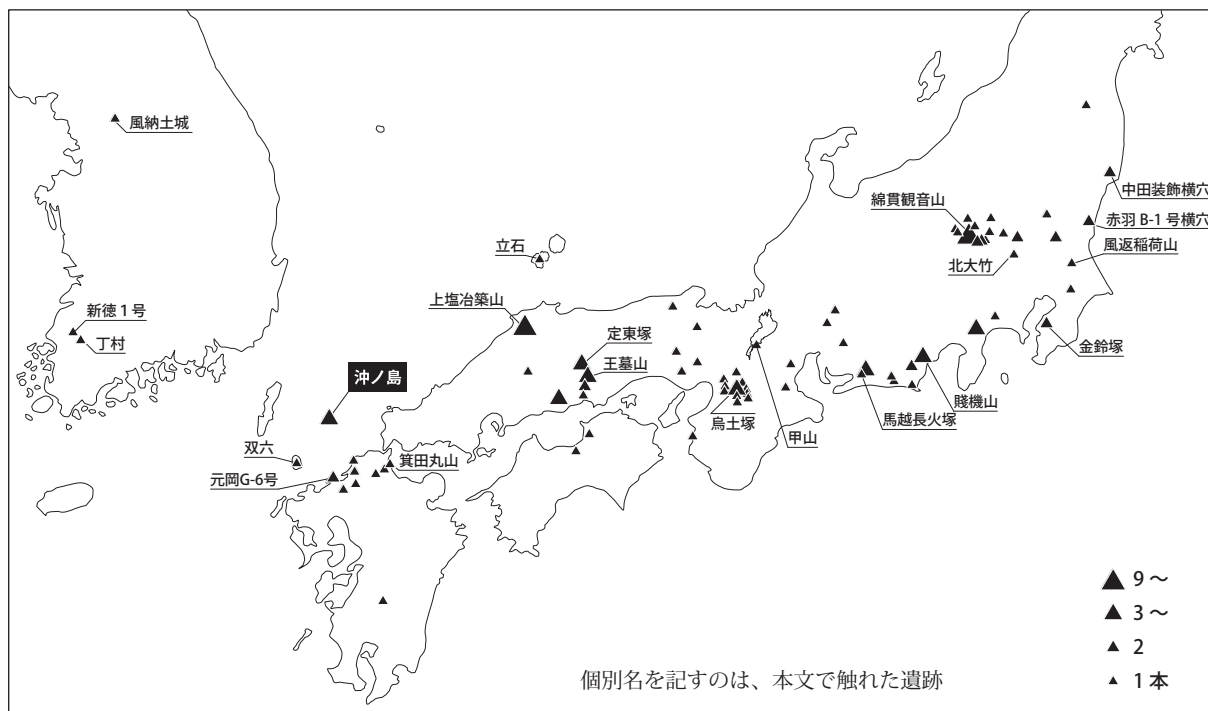


図5 三角穂式鉄鉾出土遺跡の分布

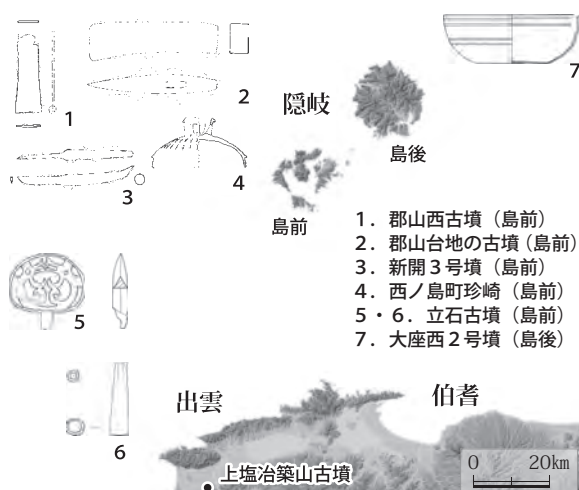


図6 隠岐における対外交流を示唆する資料

副葬の初期の事例とみられる。後期の前方後円墳が多く築かれた関東の利根川流域や九州北部（図8）も三角穂式鉄鉾の分布の核をなすほか、島根県上塩冶築山古墳と群馬県綿貫観音山古墳の9本を筆頭として、各地域の主要遺跡で多量出土が目立つ。

こうした分布相をふまえると、三角穂式鉄鉾に関わる情報は奈良盆地を有力な発信源の一つとして、各地の首長間交流網を介して地方へおよんでいったと考えることができる〔齊藤2020b〕。

（4）鉄鉾研究の量質転化

筆者は、ここまで示した条件の推移に注目して、三角穂式鉄鉾の展開を第1段階（成立期）、第2段階（拡散期）、第3a段階（規格生産期①）、第3b段階（規格生産期②）に区分した〔齊藤2023〕。

しかし鉄鉾は属性が少なく、装飾大刀や馬具でいえば奈良県藤ノ木古墳出土品に相当するような別格の資料、あるいは編年の定点となる資料も欠く。そのため、これまでの鉄鉾に関する考察の多くは定量的根拠に拠るものであり、もちろんそこから一定の成果があがったとはいえ、出土個体数や本体の長さにもとづく論理展開は「外れ値」を許容しない点に余蘆が燻っていたのが実情である。

こうした課題も含みつつ、筆者が後期古墳編年における鉄鉾の資料特性をまとめるとともに、これまでの考察を裏づける資料を希求した矢先の〔齊藤2024ab〕、「金銅製矛鞘の再発見」であった。

刀装具や象嵌といった古墳時代の既存技術を集約しながらも複合体としての例をみない本資料は、三角穂式鉄鉾を古墳時代器物の複合編年に組み込めるとともに、従来の定量分析を定性分析へ転化することが期待される。

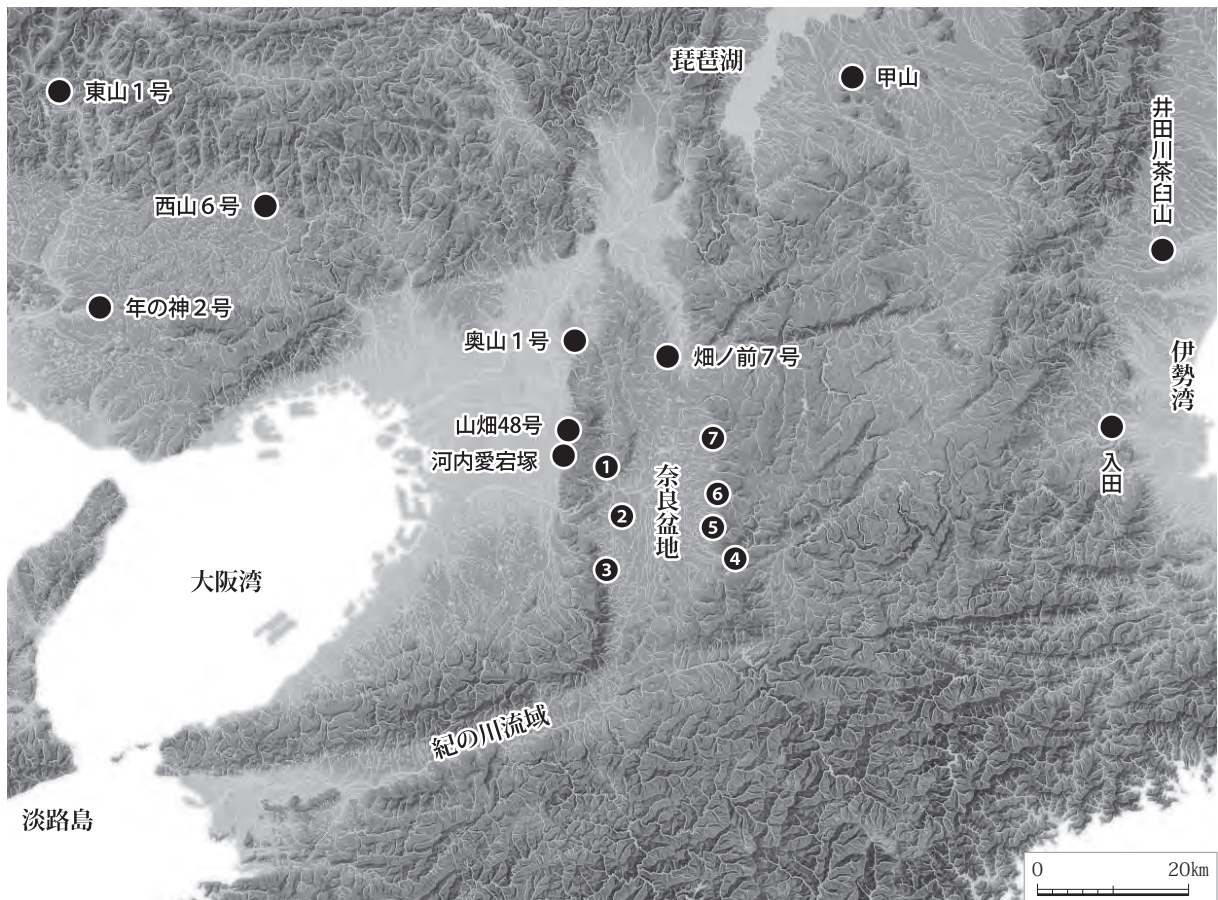
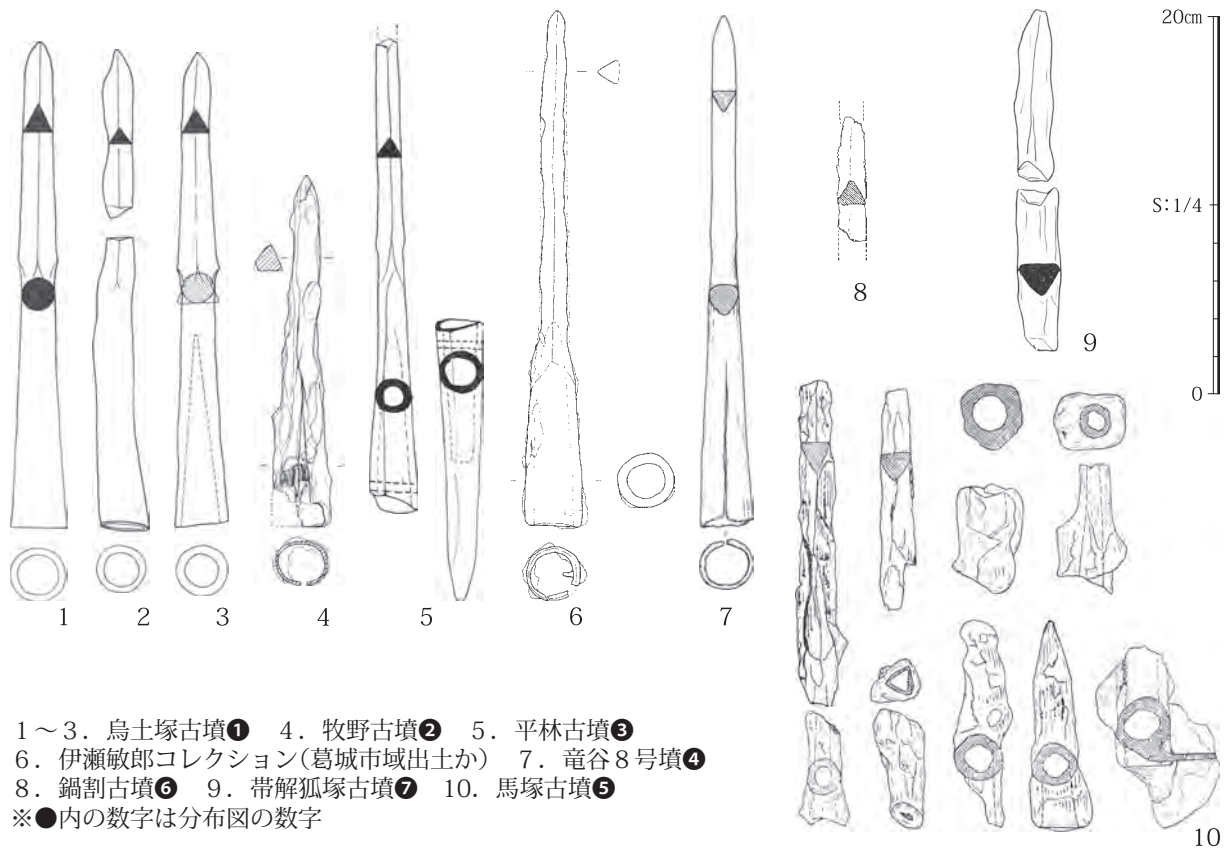


図7 奈良県域の三角穂式鉄鉞と近畿周辺の分布

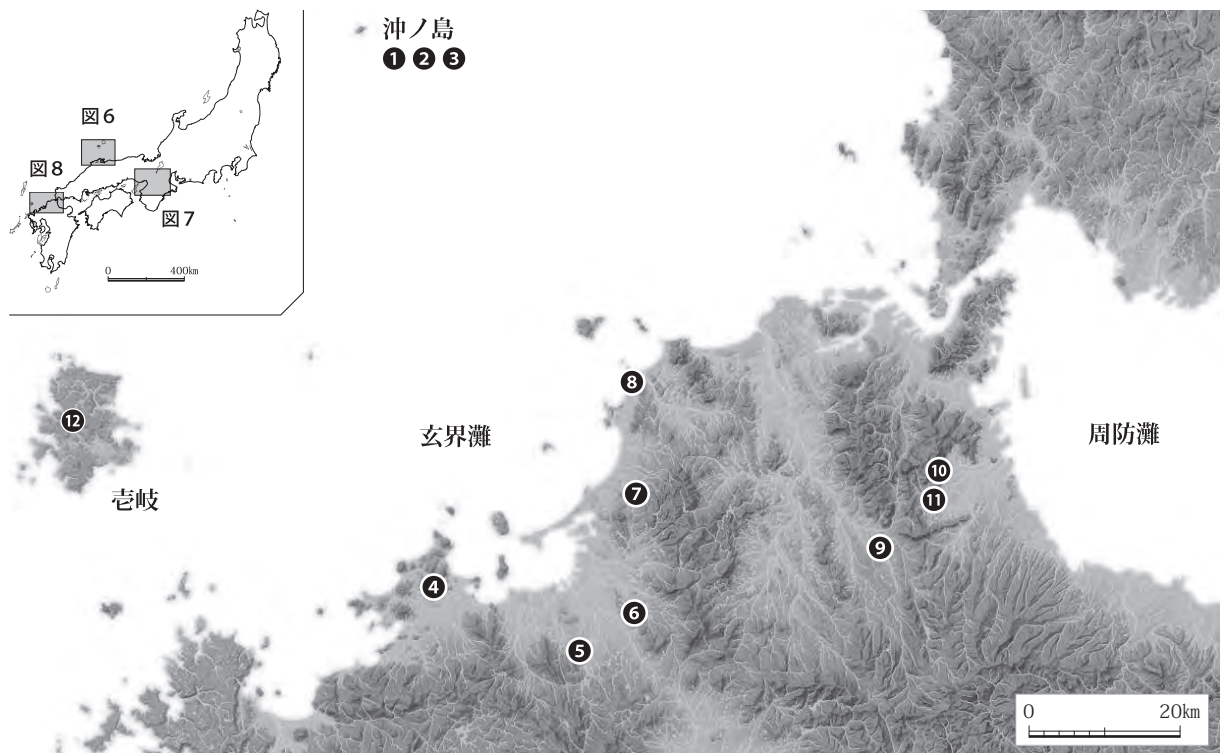
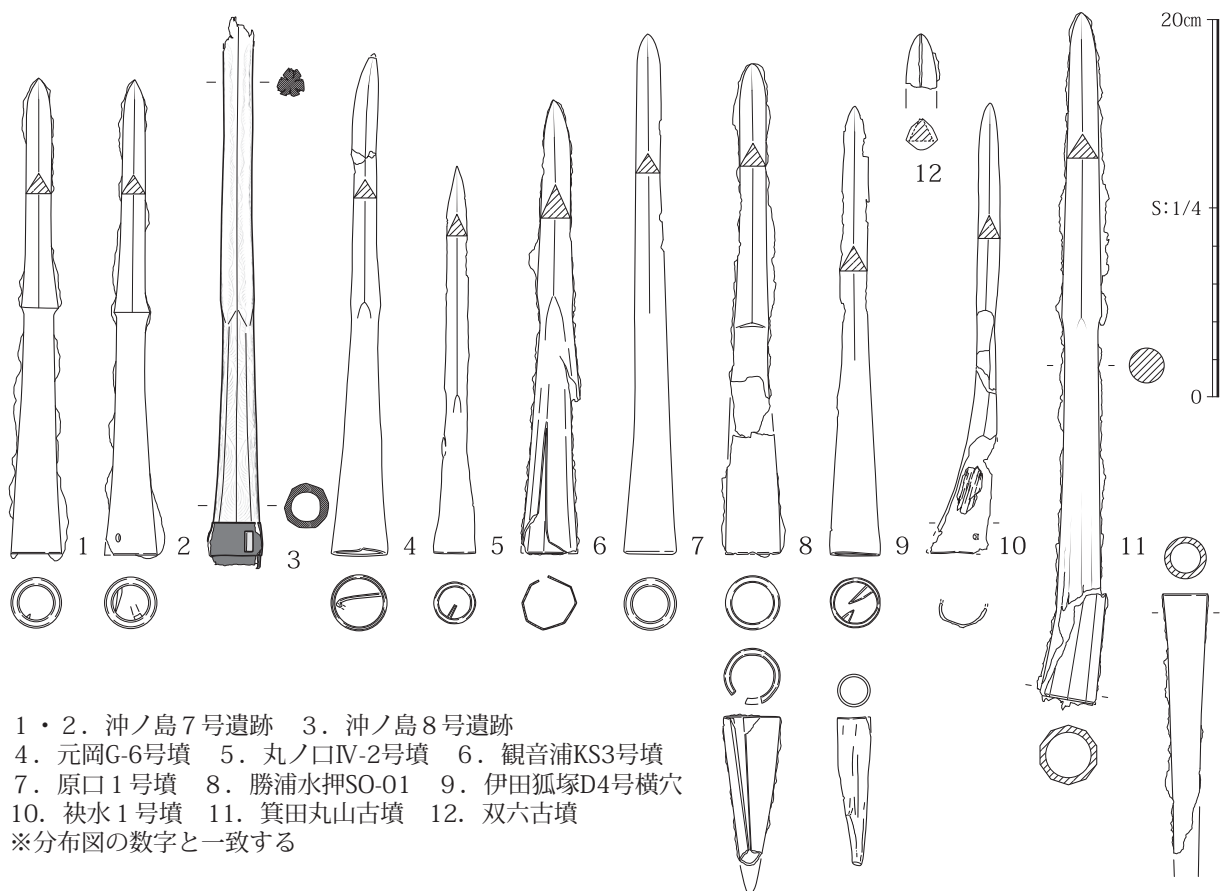


図8 九州北部の三角穂式鉄鏃と分布

3. 金銅製矛鞘の構造的特徴と階層性

(1) 鞘・銀板(図9)

金銅装の鞘をともなう鉄鉾は例をみないが、福島県中田装飾横穴の三角穂式鉄鉾は袋端部から鋒付近にいたるまでの大部分に鞘木が付着しており、銀装の環状責金具でこれを束ねる。茨城県風返稻荷山古墳や千葉県金鈴塚古墳の三角穂式鉄鉾の表面にも主軸方向に沿った木質ないしは有機質が認められ、正円形の環状金具が出土している。一部の三角穂式鉄鉾の携行・保管・副葬(奉献)にあたっては、鞘に収めるという丁寧な所作があったとみられる。

上に示した3点および金銅製矛鞘は、いずれも袋端部に銀板をともなうことでも共通する。銀装の鉾は、朝鮮半島の王陵を含む上位階層墓で出土することが多い[朴1999]。大加耶では高霊池山洞44号墳、百済では公州武寧王陵(王:523年没)、新羅では慶州飾履塚などが代表である。日本列島では5世紀初頭の鳥取県紙子谷1号墳出土品を最古の事例として、和歌山県大谷古墳、群馬県金井東裏遺跡、千葉

県禅昌寺山古墳、京都府物集女車塚古墳、滋賀県甲山古墳、大阪府海北塚古墳、埼玉県將軍山古墳、奈良県星塚古墳、千葉県金鈴塚古墳、福島県中田装飾横穴、岡山県定東塚古墳など、6世紀を中心とする有力な墳墓で出土している。

朝鮮半島の新羅・百済・加耶それぞれに銀装鉄鉾が存在する背景として高田貫太は、地域間交渉を通じて各地在来鉄鉾に「銀装」という共通した付加価値を与え、その政治的な象徴性を高めるうごきが生じたと考える[高田2002]。

日本列島でも、中田装飾横穴、風返稻荷山古墳、金鈴塚古墳、そして沖ノ島8号遺跡が、それぞれ太平洋沿岸、霞ヶ浦沿岸、東京湾沿岸、玄界灘の水運を制した最有力の首長墓ないし祭祀遺跡であることを鑑みれば、銀装品は数ある三角穂式鉄鉾のなかでも広域交流権を表象する一際格式の高い一群であったといえる[稲田2014、齊藤2020a]。金銅装の鞘をともなう鉄鉾は、これらのなかでもさらに高位に位置づけてよいであろう。



図9 鞘と銀板をともなう三角穂式鉄鉾

(2) 袋部の象嵌 (図 10)

金銅製矛鞘に収められた鉄鉾本体の袋部には、大小ふたつの杏形が縦に連なり、両側に密集する弧線、それらをまとめて囲む大きな杏形が象嵌される。2025 報告で西山要一は、栃木県足利公園古墳群の鉄装銀象嵌鞍（≒ TK209 型式期、cf. 宮代 1996）の文様を参照しつつ、膨らみのある胴と小さな頭、そしてその両側に上向きの弧線で翼をあらわす「亀甲繫鳳凰文」とみた。そして、大刀にみられる亀甲繫鳳凰文の変化をまとめ、鳳凰文は体全体を描くものが古相を示すとし、本資料を 6 世紀後半に位置づけた。また、技術面からも象嵌線の幅は広いものから狭いものへ、鑿一打（ピッチ）の長さは長いものから短いものへ変化するとし、6 世紀後半から飛鳥時代への過渡期に位置づけられるとした（表 2）。

このほかにも象嵌を施す古墳出土鉄鉾として大阪府百舌鳥大塚山古墳（5 世紀）と愛媛県東宮山古墳（6 世紀）の例があるが、この 2 例は幾何学的な小円文を局所的に施すものであり、金銅製矛鞘との水準の隔たりが大きい。本資料の系譜を追ううえでは、

鳳凰文の故地である中国大陆の図像資料と対比する必要があるだろう。

古墳・三国時代の金工品にみられる鳳凰文の多くは横を向くのに対して、本資料の鳳凰文は正面を向く。鳳凰は朱雀とも表現され、正面を向いた朱雀文を東潮は「静止形象朱雀」〔東 2000〕、両脚を揃えて伸ばす表現を網干善教は「静止」と呼ぶ〔網干 2002〕。静止形象朱雀は、中国東魏・北斉の茹茹公主墓（550 年）や北斉の堯峻墓（571 年）に代表される墓壁画を初現とし、盛唐（712-765 年）にかけて継承されるなかで装飾化や唐草文化が進んだ。

西山の報告を受けるかたちで、本資料の製作の上限年代を検討する。鳳凰文は北斉の初期資料より唐草文化が進んでおり、縦長杏形の体躯は盛唐の図案にちかい。足利公園古墳群の鞍の文様より便化しているとみれば TK209 型式期（6 世紀末～7 世紀初頭）を上限とする。象嵌線の幅・鑿一打の長さも、570 年製作の福岡県元岡 G-6 号墳出土庚寅銘大刀、608 年製作の兵庫県箕谷 2 号墳出土戊辰年銘大刀より新相を示す。これは鳳凰文の変化傾向とも矛盾しない。

表 2 象嵌線の幅・鑿一打の長さ（2025 報告の西山報文に、〔尾崎 2018〕〔西山ほか 1996〕の記述を追加して作成）

資料	遺跡	年代	象嵌線の幅	鑿一打の長さ	材質	典拠
漢中平紀年大刀	奈良・東大寺山古墳	後漢製(184~189年)	0.5~0.8mm	1.0~1.2mm	金	2025 報告
七支刀		百濟製(369年)	0.4~0.5mm	1.0~1.2mm	金	2025 報告
辛亥年銘鉄剣	埼玉・稻荷山古墳	倭製(471年)	0.8~1.0mm	1.0~1.2mm	金	2025 報告
額田部臣銘大刀	島根・岡田山 1 号墳	倭製(6 世紀後半)	0.7~1.2mm	1.0mm	銀	2025 報告
庚寅銘大刀	福岡・元岡 G-6 号墳	百濟製か(570年)	0.3~0.5mm	—	金	尾崎2018
戊辰年銘大刀	兵庫・箕谷 2 号墳	倭製(608年)	0.3~0.5mm	1.0~1.1mm	銅	西山ほか1996
金銅製矛鞘	福岡・沖ノ島 8 号遺跡	倭製	0.28mm	平均 0.87mm	金?	2025 報告
三寅劔		飛鳥~奈良(7~8 世紀)	0.25mm	0.4~0.5mm	金・銀	2025 報告
禰祭劔(ばさいのつるぎ)		鎌倉~室町(14~16 世紀)	0.5mm以下	0.4~0.5mm	金・銀	2025 報告



1. 慶州・飾履塚(飾履) 2. 栃木・足利公園古墳群(鞍) 3. 福岡・沖ノ島 8 号遺跡(鉾) 4. 陝西・韋氏墓(壁画)

図 10 金銅製矛鞘の亀甲繫鳳凰文と関連資料

(3) 身部の象嵌 (図 11)

金銅製矛鞘に収められた鉄鉾の身部3面には、左右対称を意識した一対の波状線、およびその谷部を充填する短い弧文（おおむね4～7本で一単位）が象嵌される。その祖型についてはなお議論する余地が残るが、ここでは2025報告で示された「唐草文」とみる西山要一の意見を前提として私見を述べる。

結論をいえば、筆者は、鞘をとまなう長柄武器の先端に植物文をあしらう発想として、古墳時代中期以前にさかのぼる「儀仗」あるいは「石見型立物」と呼ばれる木製品・埴輪の形象を読みとる。

これらの用語や性格については決着をみないが、筆者をこのような着想に導いたのは、藤田和尊らが検討した奈良県御所市鴨都波1号墳の「ヤリの鞘」である。鴨都波1号墳では粘土槨の棺外から鉄ヤリ2本が出土し、それぞれの先端には鞘装具の漆膜が良好な状態を保っていた。とくに「鍵1」の鞘装具は、逆台形の台部にY字状に開く角状突起がついており石見型製品と共通する〔藤田・木許2011〕。このことをもって、用途が不明な「石見型」とされる資料を一律ヤリ装具とみる藤田・木許の見解に対しては樋上昇による的確な批判があり〔樋上2024〕、たしかに藤田・木許による想定 of 普遍性については慎重を期すべきである。しかし、それ以上に筆者は、たとえ少数ではあれ石見型のヤリ鞘が存在する事実、そして三重県松坂市宝塚1号墳の船形埴輪や奈良県桜井市小立古墳の木製品にみるように、石見型が倭装大刀という最高位の武器と一式で運用される事例が存在する点に注目する。

穂積裕昌も長柄武器の儀仗化プロセスを考えるうえで鴨都波1号墳のヤリ鞘に注目するほか〔穂積2018〕、寺前直人も、土製品や木製品にみる武器のデフォルメ志向を検証し、石見型木製品はヤリを表象したものとみる〔寺前2025〕(図11)。ただし、穂積と寺前の見解は、藤田・木許説を無批判に首肯するものでもなければ、樋上による藤田・木許説批判を無効化するものでもないことに注意を要する。

坂墳は、奈良県大和郡山市水晶塚古墳(6世

紀前半)における鳥形立物と石見型立物を用いる情景を復元し、古墳とその外部をつなぐ結界の標識として樹立したと考えた〔坂2008〕(図12)。鳥形と石見型の組みあわせに、筆者は金銅製矛鞘に収められた鉄鉾の象嵌文様を重ねる。奈良県御所市極楽寺ヒビキ遺跡(5世紀前半)で検出された「祭政空間に面して立つ3本の大柱遺構」の情景を復元した辰巳和弘も、鴨都波1号墳のヤリ鞘に配慮しつつ、貴人の祭政空間を象徴する聖標として杖や鉾に見立てた大柱が建てられたと想定し、大柱の「かたち」の候補に石見型立物を挙げている〔辰巳2010〕。

なお、境界祭祀における杖の表象については、大正・昭和期に日欧の神話研究を集大成した松村武雄の研究に詳しく〔松村1930〕、考古学からは岩松保が松村の研究を引きつつ遺構・遺物に境界儀礼の痕跡を積極的に読み取ろうとする〔岩松2016〕。

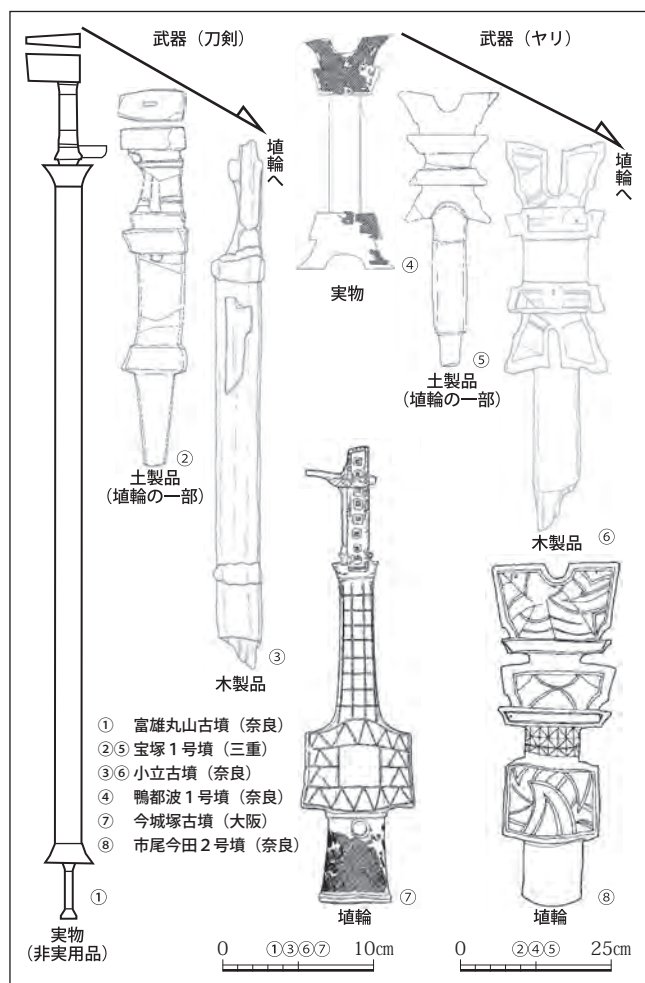


図 11 武器の実用的大型化と木製品・土製品による模倣

さらに、樋上〔2006〕が石見型の儀仗の祖型とみた朝鮮半島東南部の鉄製品（有刺利器）の発想については、かつて金元龍が、新羅王陵から出土する「出」字形冠について樹木を図案化したものと捉え、ユーラシアの金工芸術にみられる「樹木崇拜思想」にもとづくものと考えたことにヒントがあるかもしれない〔金元1972、144頁〕。

ここまで挙げて、強力な個性をもつ資料群の起源を一点に絞り込むことは容易でなく、堂々巡りに陥る恐れもある。ただ、福岡県福岡市博多区三築遺跡の河川跡より出土した木製鉾は（図13）、柄部分

は欠損したのか、そもそもなかったのか詳らかでないが、60 cm以上の大型品で先端が尖り、左右両側に4か所の突起をもつ。中心軸には鑄があり、断面は菱形をなす。細かい時期は不明だが、古墳時代の層位に属するという。両側面の突起、およびその間のくびれは、象嵌装鉄鉾の身部の文様と通ずるものがある。本節で触れたような視点をもって見直すべき資料であろう。金銅製矛鞘についても鉄鉾の型式組列だけでなく、儀仗や境界碑という大きな観念のなかで理解すれば、歴史的に孤立した存在とは言えなくなるのではなかろうか。

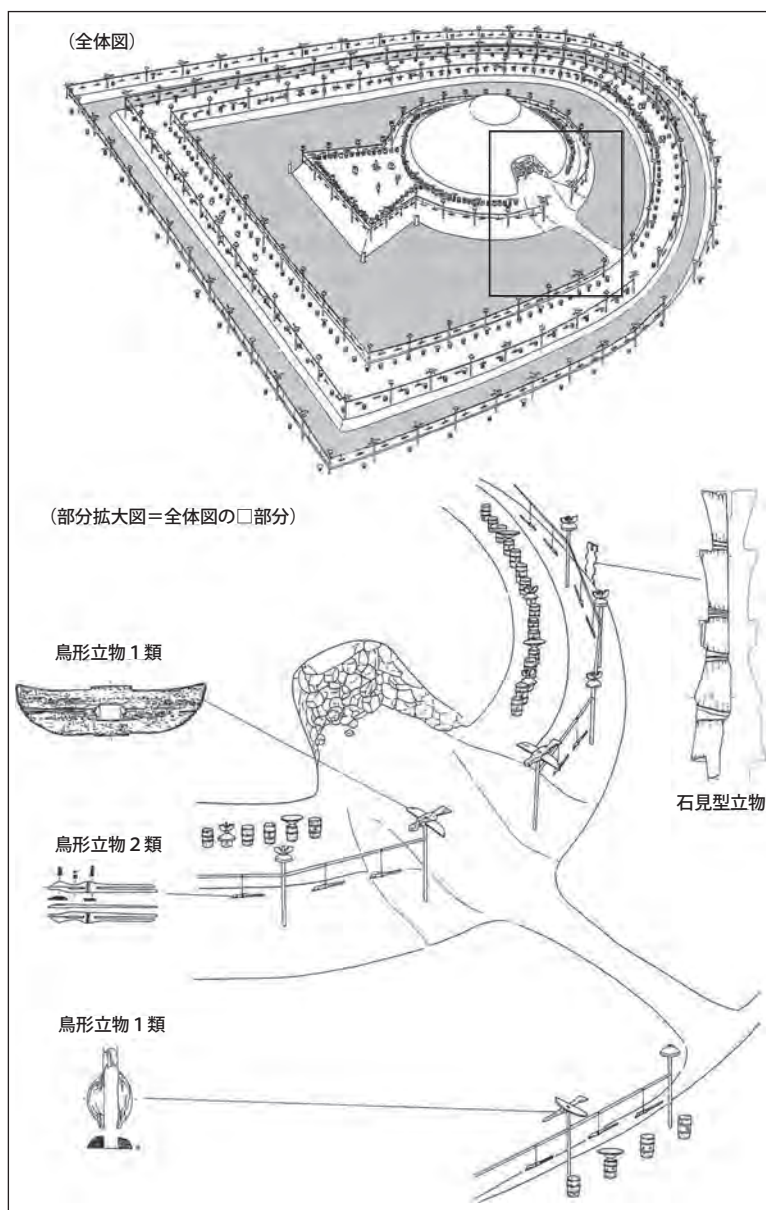


図12 埴輪・木製立物樹立状況の復原（モデル：水晶塚古墳）

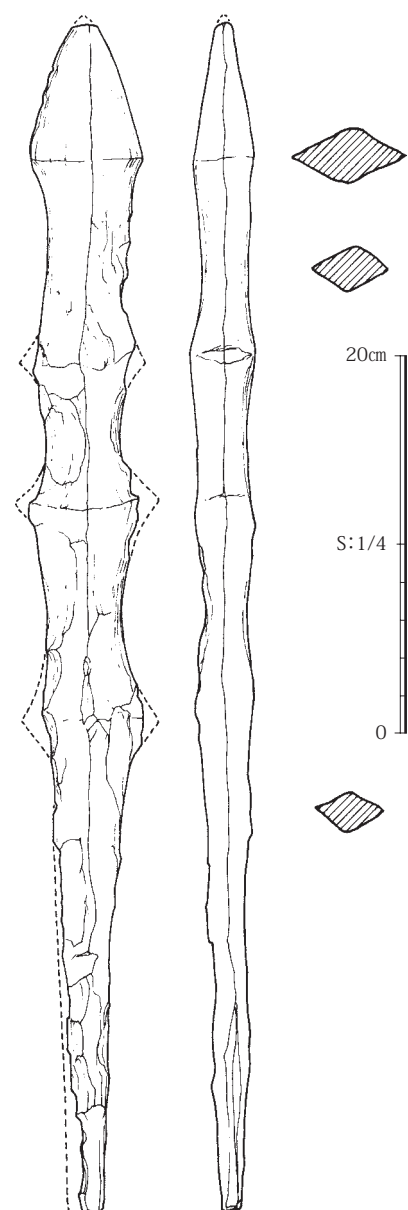


図13 三築遺跡出土の木製鉾

(4) 小環の用途

鞘口ちかくの小環は大刀吊金具の環と似るが、どのような用途を考えるのであろうか。

高句麗の武装発展期〔金^性2013〕にあたる薬水里古墳壁画（4世紀末～5世紀初頭）の出行図は牛車に乗る王と、その衛兵の装いを描く（図14）。このうち王からみて右側にならぶ軽騎兵の鉞には旗がたなびくのに対して、後列に密集する重装騎兵がもつ鉞には旗はともなわない。旗のついた鉞は儀仗的な意味合いが色濃いのであろう。

高句麗の軍事制度では軍団のことを「幢^{とう}」と呼んだが、そもそも幢とは軍団の先頭に掲げる「旗」、いわば軍事徽章を指す〔田中2001〕。高句麗の諸制度を模倣した新羅でも、軍団長の職名に「軍師幢主」「歩騎幢主」「大匠尺幢主」などがみえ、最大の王陵である皇南大塚南墳出土品においても長柄武器が武

装の主力を占めていた〔齊藤2013〕。

また、平安時代以来、伊勢神宝として命脈を保ってきた鉞^{ひれ}には、柄につけられた環に「比礼」と呼ぶ旗を結び垂れる（図15）。時期や地域、あるいは王権によって鉞の運用形態に違いがあったとみるべきながら、金銅製矛鞘の小環にも装飾性ゆたかな旗ないしは垂飾を結ぶことにより、倭や沖ノ島祭祀の徽章としていた可能性を示しておきたい。

なお、金銅製矛鞘の用途については沖ノ島5号遺跡から出土した東魏（534-550）様式の金銅製龍頭にともなう「石突」とみなし、両者が一体の旗竿を構成したとみる考察もあったが〔弓場1985〕（図16）、このたびの研究をもってその想定は成立し得なくなった。ただし、両者の開口部の径はおおむね3cmとちかしいことから、各々類似する柄を挿入していたことに違いはなさそうである。薬水里古墳壁

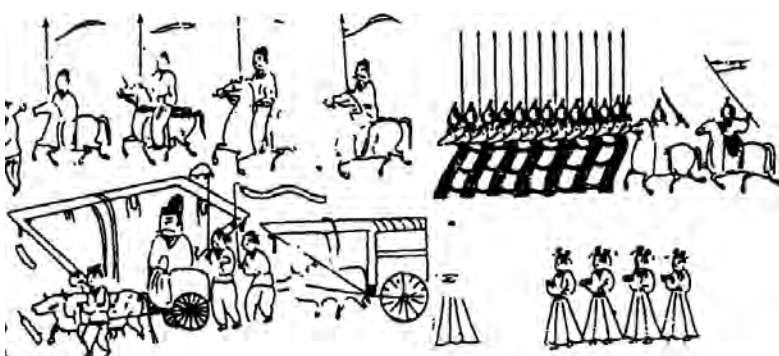


図14 薬水里古墳壁画の出行図（一部）

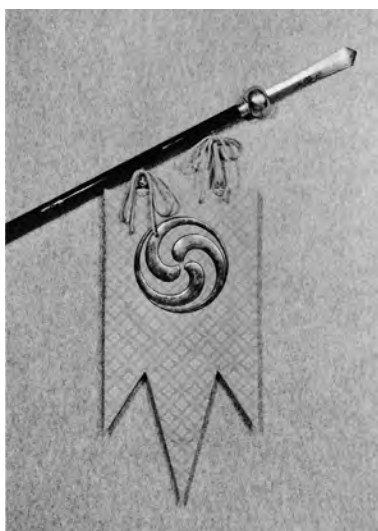


図15 伊勢神宝の鉞

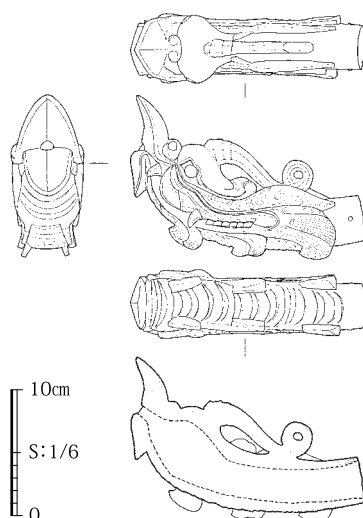


図16 沖ノ島5号遺跡出土金銅製龍頭（左）と
敦煌莫高窟159窟東壁南側の維摩变相図の一部（右）



画の王の背後には、龍頭らしき表現のある竿を掲げた人物と、騎兵よりも長い旗をたなびかせる人物がならび、王の威容を際立たせる。5号遺跡と8号遺跡の年代差は詳らかでないが、旗をつけた鉾と龍頭をつけた竿が同一の祭祀空間に存在した可能性には留意すべきであろう [cf. 岡崎 1979]。

(5) 日韓の三角穂式鉄鉾の比較 (図 17)

日韓の代表的な三角穂式鉄鉾である沖ノ島8号遺跡例と新徳1号墳例には、いくつかの共通点がある。

まず、全長は両者とも 30 cm 内外と、三角穂式鉄鉾のなかでは大型の部類である。沖ノ島8号例は身部の三面に象嵌、新徳1号例は樋をとまなう。袋部の断面は、前者は九角形、後者は八角形である。断面が奇数角形の袋部は、偶数角形のものよりも製作が難しいと思われるが、いずれも袋端部に銀板を被せるほか、直方体の頭をもつ金具2点をともなう。

断面が多角形の袋部や、銀板をとまなう鉄鉾は有力な墳墓出土品にみられるが、身部の三面に象嵌や

樋を施す事例は現状では類例がなく、それぞれの個性を高めている。袋端部ちかくに差し込まれた直方体の頭をとまなう金具にも注目すれば、この2例はちかしい製作規範をもっていたと考えられる。なお、韓国慶州飾履塚でも銀板と留金具をとまなう鎬式鉄鉾が出土している。銀板の大きさは3例とも似ることから、やはり一定の規格があった可能性がある。

(6) 鉾の階層性

本章までに示してきた、同一形式の鉾へ対するつくりこみ度合いの高低は、出土遺跡の規模や共伴品が示す被葬者の性格の違いともおおむね親和的である。図 18 に示すように、さまざまな既存技術・意匠を兼ね揃えた金銅製矛鞘がそうした序列を規定する。主としてⅠは国家祭祀、Ⅱ・Ⅲは外交に長けた広域首長権、Ⅳは群集墳を含めた地方首長権の担い手による保有類型であろう。

ただし、そもそも形式や型式を問わず鉾の保有そのものがすでに大多数の非保有層へ対する優位性をもち、Ⅱ・Ⅲ類型においても屯倉管掌者や国造級の首長墓を含みうることに留意されたい。

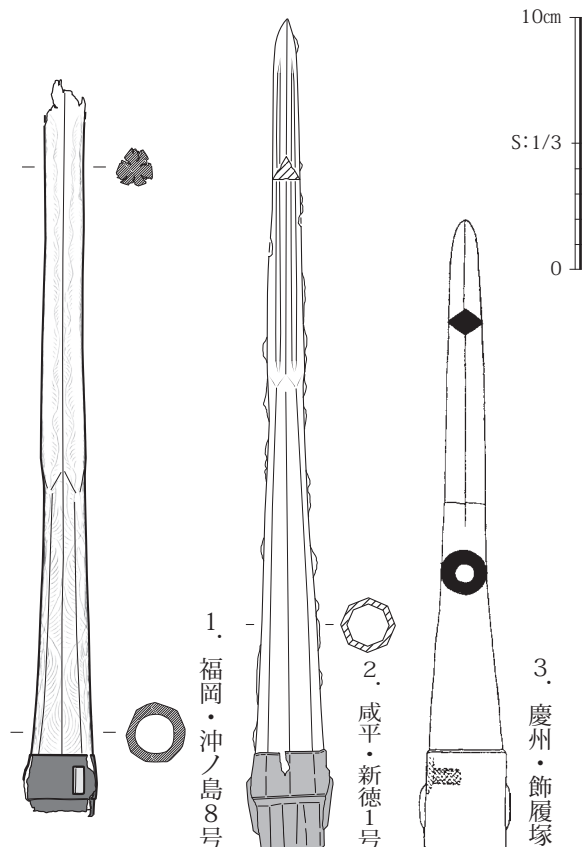
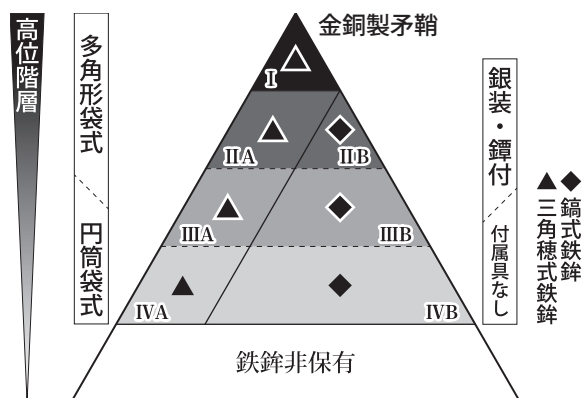


図 17 日韓の銀装鉄鉾



【各類型の代表的遺跡】

- Ⅰ 沖ノ島8号 (袋部断面九角形・銀装・象嵌・金銅鞘)
- Ⅱ A 新徳1号 (袋部断面八角形・銀装・樋)
金鈴塚 (袋部断面九角形・銀装・鹿角)
- Ⅲ A 箕田丸山 (袋部断面十角形)
綿貫観音山、上塩冶築山 (袋部断面八角形)
塚田2号、王墓山 (袋部断面円形・鐔)
定東塚 (袋部断面円形・銀装鐔) など

図 18 古墳時代後期における鉄鉾の階層性

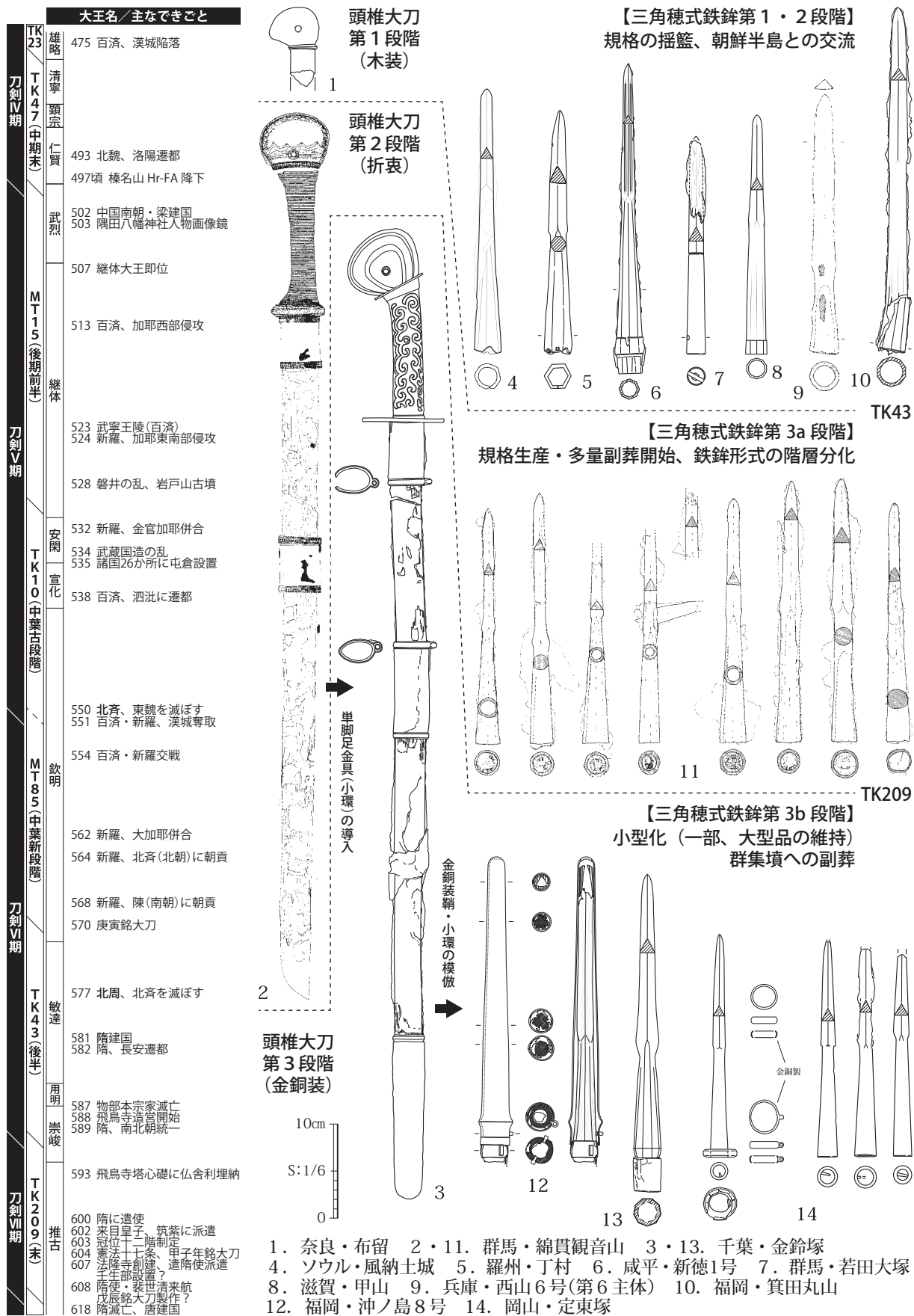


図20 装飾大刀と三角穂式鉄鉾の並行関係

（２）空間的位置づけ

微視的視点 鉄鉾が出土した祭祀遺跡として、福島県建鉾山遺跡や静岡県天白磐座遺跡、埼玉県北大竹遺跡が知られる。建鉾山遺跡高木地区では、2,000点ちかい滑石製品、銅鏡1面、わずかな鉄製刀剣片とともに鉄鉾が1本出土した。天白磐座遺跡「岩A」のⅠ区では200点ちかい手づくね土器、Ⅱ区では鉄鉾1本が出土した（図21）。沖ノ島以外における祭祀遺跡からの三角穂式鉄鉾出土事例は、北大竹遺跡第18次B区第1号遺物集中が現状で唯一とみられ、12点の滑石製子持勾玉や海獣葡萄鏡などとともに身部片が出土している。いずれも祭祀用の石製品や手づくね土器の量に圧倒されるが、稀少な金属製品に占める鉾の割合は、古墳副葬金属製品に占める鉾の少なさに比すと低くはない。とくに金銅製矛鞘の場合、境界碑としての聖樹や「神の依り代としての鳥装」[鈴木1999、491頁]にその本質を求めうならば、祭祀空間へ対する鉾の奉獻は、墳墓の築造や軍事とは異なる論理にもとづいた倭王権の領域展開を反映するとみられる。

巨視的視点 九州北部では、玄界灘や周防灘に沿うように三角穂式鉄鉾出土古墳が点在し、この形式の鉾が水運の場で重視されたことを示唆する。古墳時代後期後半以降の玄界灘沿岸では、前方後円墳の築造が続く地域（宗像など）と続かない地域（福岡平野、糟屋郡南部など）があるが[齊藤2024c]、三角穂式鉄鉾は両地域を横断して配付された。内地の諸集団が墳丘形態の差異にはあらわれない論理にもとづいて沖ノ島祭祀に携わったようにみえる。周防灘を望む箕田丸山古墳では、現状で最大長（36cm）の三角穂式鉄鉾、および大阪府古市・峯ヶ塚古墳に準ずる馬具や倭装大刀複数振が出土しており、瀬戸内航路を介した近畿中央との通信拠点を思わせる。

三角穂式鉄鉾の分布中枢である奈良盆地に目を移すと、多量副葬の初期事例とみられる烏土塚古墳は「平群谷最大の古墳」としても知られる。平群地方は、磐余や飛鳥といった当時の政権中枢と国際港である難波を結ぶ軍事・外交の要衝であった。加藤謙吉は、6世紀後半から7世紀にかけて生じた東アジアの変動のなかで、外交・内政の両面で板挟みにあった倭

王権が水陸交通の要である平群地方を軍事的・外交的に重んじた結果、平群氏や額田部氏、膳氏、紀氏のほか、東漢氏を中心とする渡来系氏族が現地に移住したことにより、当該地の軍事的・外交的機能が高まったと述べる[加藤1989]。

ここで、遣隋使・小野妹子とともに難波津を経由して来日した隋使・裴世清らを、海石榴市（現在の奈良県桜井市三輪・金屋周辺）において額田部連比羅夫と「飾騎七十五疋」が迎賓したという『日本書紀』推古16年（608）の記事を想起す。このような情景は『隋書』『倭国伝』にも記されており、田島公はこれを「中国的な外交儀礼」の枠組みで理解する[田島1986]。

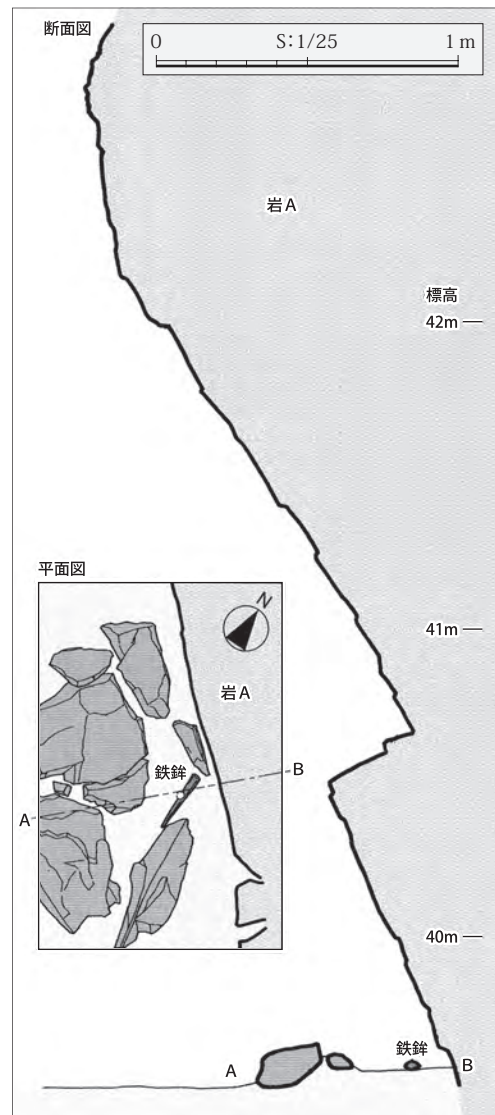


図21 天白磐座遺跡「岩A」Ⅱ区の鉄鉾検出状況

馬具型式学の立場から「飾騎七十五疋」の実態に迫る桃崎祐輔は、棘葉形杏葉・鏡板の性格を論じるなかで「対外的に倭政権の権威を誇示する際は、多数の飾り騎が規格化された馬装をなす方が、統一政権の意義を示す上で有効と思われる」「この時期には透彫金銅板にパルメット・鳳凰文をあしらう心葉形鏡板・杏葉の出土例が比較的多く、工芸的に完成度が高い上斉一的な印象を与えるので、推古朝における飾り騎は、この種の馬具を装着した」「棘葉形杏葉には心葉形杏葉を伴う馬具と鏡板の類似や文様板意匠の共有が見られることから、両者を同時に運用する前提があった」と考察する[桃崎2001、33頁]。

心葉形十字文鏡板付轡や棘葉形杏葉が出土した遺跡のなかでも、とりわけ各地域を代表する規模をもつ茨城県赤羽B-1号横穴、風返稲荷山古墳、静岡県賤機山古墳、愛知県馬越長火塚古墳、島根県上塩冶築山古墳、そして沖ノ島で規格生産段階の三角穗式鉄鉾が出土していることを鑑みれば、「飾騎」には馬具を含めた武装全体の統一が志向された可能性すらある。その統一は不完全におわったとしても、玄界灘沿岸に点在する三角穗式鉄鉾出土古墳の被葬者に境界祭祀を含意した外交的機能を投影することは、荒唐無稽な想定ではなかろう。

（3）金銅製矛鞘の位相

沖ノ島7号遺跡では有力な後期古墳副葬品に比肩する質実で伝統的な武装具、8号遺跡では華美で先進的・国際的な武器、とくに金属装化初期の頭椎大刀2振分のほか、大加耶系装飾付環頭大刀の責金具が出土した。古墳時代中期以来の倭系武装の伝統を重んじた7号遺跡と、後期後半以降の革新を体現した8号遺跡の共存は、岩陰祭祀段階における沖ノ島の本質を示唆する[齊藤2024a]。金銀色の装具をとまなわない質実な鉄鉾を多量に奉獻した7号遺跡と、金銅製矛鞘という一点豪華主義的な個体を奉獻した8号遺跡の対比もこれに準ずるとみられるが、こうしたありかたは古墳時代後期後半・末における倭の武装体系の縮図をも示している。

古墳時代の武装具を大きく倭系と外来系に分け、前者を倭国内での身分表象、後者を対外的場面で

の身分表象[町田1988、内山2012]として理解するときこそ、金銅製矛鞘が列島と大陸・半島の境界祭祀空間に献じられたことの本質が問われてくる。すなわち、大加耶滅亡や中国隋の南北統一という変革する東アジア勢力地図のなかにあつて、外来系文物の内製化や独自の財体系・身分秩序を整えることは倭が国際社会に台頭するうえでの前提条件だったはずである。大加耶系金工品からの技術移転が倭の武装具の多様化と荘厳化を促したことは[諫早2012、内山2012、金_平2017]、受動的かつ一過的な流行などではなかった。

金銅製矛鞘およびそれに収められた象嵌装鉄鉾にみる既存技術・意匠の集約志向もこのような文脈で読み解けば、それは特定器物の変遷観を支持するのみならず、古代東アジアにおける沖ノ島祭祀そのものを相対化するうえでの突破口をひらくと考える。

5. 結 語

沖ノ島祭祀遺跡の出土品には多くの未報告資料があり、古墳時代研究の深化は既報告資料の再検討をも促している[橋本_達2025、福嶋2025、水野2025]。そうしたなかでの“金銅製矛鞘の再発見”は学史上の必然であり、沖ノ島研究の士気を一層高めた。集団徽章としての鉾や、境界碑という概念も小稿の着想につながっている。多岐にわたる属性を備えた本資料を理解するうえでは金工史・図像学・宗教史・民俗学・地政学的視点からの批判が不可欠であるし、律令期以降の神宝への連続など、論じきれなかった課題も多い。しかしそれらを差し引いてもなお、金銅製矛鞘が古代東アジアにおける鉄鉾の最高峰に位置づけられることは揺るがないだろう。

謝辞 金銅製矛鞘に関する新知見については共著による報告をなしましたが、考察編としての小稿の責任と批判は齊藤個人が負うことを明記します。

末尾となりましたが、小稿執筆の機会と多くのご教示をいただいた「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会の皆様に感謝申しあげます。

註

- (1) 国宝金銅製矛鞘検討会の参加者（*は報告執筆者）
太田 智（宗像市世界遺産課）
岡寺未幾*（福岡県九州国立博物館・世界遺産室）
加藤和歳（九州歴史資料館）
菊池宣行（宗像大社文化局）
齊藤大輔*（島根県立八雲立つ風土記の丘）
西山要一*（奈良大学名誉教授）
橋本達也*（鹿児島大学総合研究博物館）
初村武寛*（公益財団法人元興寺文化財研究所）
福岡真貴子*（宗像大社文化局）
水野敏典*（奈良県立橿原考古学研究所）
山口繁生*（公益財団法人元興寺文化財研究所）
横須賀倫達（文化庁）

- (2) 2025 報告；56-76 頁、山口繁生・初村武寛報文
(3) 2025 報告；56-76 頁、山口繁生・初村武寛報文
(4) 2025 報告；56-76 頁、山口繁生・初村武寛報文
(5) 2025 報告；56-76 頁、山口繁生・初村武寛報文
(6) 2025 報告；56-76 頁、山口繁生・初村武寛報文
(7) 2025 報告；77-85 頁、西山要一報文
(8) 2025 報告；86-89 頁、齊藤大輔報文
(9) 2025 報告；52-55 頁、福岡真貴子報文

小稿は 2025 報告の考察編という性格上、混乱を防ぐために引き続き「金銅製矛鞘」の名称を用いる。ただし一般には、弥生時代の銅ホコに「矛」、古墳時代の鉄ホコに「銚」を用いることが多い。そのため、ここでは「金銅製矛鞘」に限って「矛」を用いる。

参考文献

- 東 潮 2000「古代東アジアの鬼神と四神図像」『道教と東アジア文化』国際日本文化研究センター
網干義教 2002「古墳壁画・墓誌等にみえる朱雀・鳳凰の図像について」『関西大学博物館紀要』8 関西大学博物館
諫早直人 2012「九州出土の馬具と朝鮮半島」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』九州前方後円墳研

究会

- 稲田健一 2014「イワキとヒタチ」『海の古墳を考えるⅣ — 列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流 —』海の古墳を考える会
岩松 保 2016「境界を設定する儀礼 — 墓域の構造とその計画性から —」『京都府埋蔵文化財論集 7 — 創立 35 周年記念誌 —』京都府埋蔵文化財調査研究センター
臼杵 勲 1985「古墳出土銚の分類と編年」『日本古代文化研究』2 PHALANX — 古墳文化研究会 —
内山敏行 2012「装飾付武器・馬具の受容と展開」『馬越長火塚古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書 120
禹 炳喆 2022「3～6 世紀東アジア国家の武器体系から見た韓半島南部地域出土の倭系武器の認識」『韓日の武器・武具・馬具』九州考古学会・嶺南考古学会
岡崎 敬 1979「金銅製龍頭」『宗像 沖ノ島』宗像大社復興期成会
尾崎 誠 2018「「庚寅」銘大刀の象嵌に関する論考」『元岡・桑原遺跡群 30 — 元岡古墳群 G-6 号墳・庚寅銘大刀の考察 —』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1355
角田徳幸 2017「海士町郡山西古墳の鉄鋌」『島根考古学会誌』34 島根考古学会
加藤謙吉 1989「6 世紀後半の政治情勢と藤ノ木古墳 — 平群地方の地域的特性とその史的意義 —」『東アジアの古代文化』59 大和書房
金 宇大 2017『金工品から読む古代朝鮮と倭 — 新しい地域関係史へ —』プリミエ・コレクション 79 京都大学学術出版会
金 元龍（西谷 正訳）1972『韓国考古学概論』東出版
金 性泰 2013「高句麗の武器、武装、馬具」『高句麗の文化と思想』明石書店
国宝金銅製矛鞘検討会 2025「沖ノ島 8 号遺跡出土金銅製矛鞘の新知見」『沖ノ島研究』11 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

- 後藤守一 1928『原史時代の武器と武装』雄山閣
- 齊藤大輔 2013「皇南大塚南墳副槨出土鉄鉾の系譜」『福岡大学考古学論集2 ― 考古学研究室開設25周年記念 ―』福岡大学考古学研究室
- 齊藤大輔 2015「古代東アジアにおける特殊鉄鉾の系譜」『古代武器研究』11 古代武器研究会
- 齊藤大輔 2020a「金鈴塚古墳の武器と銀の武装」『金鈴塚古墳出土品再整理報告書』第2分冊 考察編 木更津市教育委員会
- 齊藤大輔 2020b「古墳時代後・終末期における武器具流通の実態 ― 三角穂式鉄鉾を事例として ―」『土曜考古』42 土曜考古学研究会
- 齊藤大輔 2022「古墳時代日本列島における東アジア刀剣文化の受容と内製の諸問題」『韓日の武器・武具・馬具』九州考古学会・嶺南考古学会
- 齊藤大輔 2023「古墳時代後期における鉄鉾の変遷」『後期古墳研究の現状と課題Ⅰ ― 交差編年の手がかり ―』中国四国前方後円墳研究会
- 齊藤大輔 2024a「沖ノ島祭祀遺跡の武器と武装」『沖ノ島研究』10 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
- 齊藤大輔 2024b「後期古墳編年における鉄鉾の資料特性」『中四研だより』53 中国四国前方後円墳研究会
- 齊藤大輔 2024c「古墳時代後期の武装と玄界灘沿岸の首長権構造」『地域と交流の考古学』日本考古学協会 2024年度島根大会実行委員会
- 清水みき 1983「湯舟坂2号墳出土環頭大刀の文献的考察」『湯舟坂2号墳』久美浜町文化財調査報告7 久美浜町教育委員会
- 末永雅雄 1941『日本上代の武器』弘文堂書房
- 鈴木一有 1999「鳥装の武人」『国家形成期の考古学 ― 大阪大学考古学研究室10周年記念論集 ―』大阪大学考古学研究室
- 鈴木一有 2018「副葬品組成からみた古墳時代中期から後期への変革」『待兼山考古学論集Ⅲ ― 大阪大学考古学研究室30周年記念論集 ―』大阪大学考古学
- 学友の会
- 高田貫太 1998「古墳副葬鉄鉾の性格」『考古学研究』45-1 考古学研究会
- 高田貫太 2001「三角穂式鉄鉾の基礎的整理」『定東塚・西塚古墳』岡山大学考古学研究室
- 高田貫太 2002「朝鮮半島南部地域の三国時代古墳副葬鉄鉾についての予察」『古代武器研究』3 古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室
- 高田貫太 2012「柴山江流域における前方後円墳築造の歴史的背景」『古墳時代の考古学』7（内外の交流と時代の潮流）同成社
- 高橋健自 1912「古代の槍」『考古学雑誌』3-3 考古学界
- 田島 公 1986「外交と儀礼」『日本の古代』7（まっつりごとの展開）中央公論社
- 辰巳和弘 2010「門に立つ杖」『日本基層文化論叢』雄山閣
- 田中俊明 2001「高句麗の軍制」『季刊考古学』76（古代の武器・武具・馬具）雄山閣
- 寺前直人 2021「弥生・古墳時代における長柄武器の変遷」『年報人類学研究』12 南山大学人類学研究
- 所
- 寺前直人 2025「古墳に並べられた長柄武器の表象 ― 石見型木製品・埴輪の祖型 ―」『駒澤考古』51 駒沢大学考古学研究室
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1985『伊勢神宝と考古学』
- 西山要一・山口誠治・李午熹 1996「日韓古代象嵌遺物の基礎的研究（1） ― 日韓文化交流の源点をさぐる」『青丘学術論集』9 韓国文化研究振興財団
- 朴 天秀 1999「装飾鉄鉾の性格とその地域性」『国家形成期の考古学 ― 大阪大学考古学研究室10周年記念論集 ―』大阪大学考古学研究室
- 朴 天秀 2007『加耶と倭 ― 韓半島と日本列島の考古学 ―』講談社選書メチエ 398 講談社
- 橋本達也 2010「古墳時代中期甲冑の終焉とその評価 ― 中期と後期を分かちもの ―」『待兼山考古学

論集Ⅱ — 大阪大学考古学研究室 20 周年記念論集
—』大阪大学考古学友の会

橋本達也 2025 「沖ノ島遺跡出土の金属製品の現状と
課題 — 甲冑・馬具を中心として —」『沖ノ島研究』
11 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用
協議会

橋本英将 2006 「「折衷系」装飾大刀考」『古代武器研
究』7 古代武器研究会

早野浩二 2023 「鉄鉾の評価」『豊橋市寺西 1 号墳の
研究 (2) 論考編』愛知大学総合郷土研究所

坂 靖 2008 「埴輪・木製立物と「王権」」『王権と
武器と信仰』同成社

樋上 昇 2006 「儀仗の系譜」『考古学研究』52-4
考古学研究会

樋上 昇 2024 「「儀仗の系譜」再論 — 御所市鴨都
波 1 号墳出土「鎧鎧装具」との関連性をめぐって —」
『考古学論叢Ⅳ』関西大学文学部考古学研究室

福嶋真貴子 2025 「国宝沖ノ島出土品の保存活用計画
について」『沖ノ島研究』第 11 号 「神宿る島」宗像・
沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

福永伸哉 2005 「いわゆる継体期における威信財変化
とその意義」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学
文学研究科考古学研究報告 3 大阪大学稲荷塚古墳
発掘調査団

藤井康隆 2025 「魏晋南北朝の刀剣」『古代武器研究』
20 古代武器研究会

藤田和尊・木許 守 2011 「鎧とその表象品」『勝部
明生先生喜寿記念論文集』勝部明生先生喜寿記念論
文集刊行会

穂積裕昌 2018 「儀仗鉾の系譜」『実証の考古学 松
藤和人先生退職記念論文集』同志社大学考古学シ
リーズ 12 同志社大学考古学シリーズ刊行会

町田 章 1976 「環刀の系譜」『研究論集Ⅲ』奈良国
立文化財研究所学報 28

町田 章 1988 「三重県井田川茶臼山古墳の鉄地銀
象嵌掘り環頭大刀について」『井田川茶臼山古墳』
三重県埋蔵文化財調査報告 26

松村武雄 1930 「生杖と占杖 — 一つの覚書 —」『民
俗學論考』大岡山書店

水野敏典 2025 「沖ノ島 7・8 号遺跡出土の鉄製武器
と金属製品の再検討に向けて」『沖ノ島研究』11 「神
宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
宗像神社復興期成会 1958 『沖ノ島 宗像神社沖
津宮祭祀遺跡』

宮代栄一 1996 「古墳時代の金属装鞍の研究 — 鉄地
金銅装鞍を中心に —」『日本考古学』3 日本考古
学協会

茂木雅博 1980 「古墳出土の鉄鉾について」『常陸観
音寺山古墳の研究』

桃崎祐輔 2001 「棘葉形杏葉・鏡板の変遷とその意義」
『筑波大学 先史学・考古学研究』12 筑波大学歴史・
人類学系

弓場紀知 1985 「沖ノ島出土舶載遺物の再検討 —
特に金銅製龍頭の流伝に関して —」『国立歴史
民俗博物館研究報告』7 国立歴史民俗博物館

図出典

図 1～3 宗像神社復興期成会 1958 (一部改変)

図 4 ①②：筆者作成、③～⑦：国宝金銅製矛鞘検討
会 2025 より転載し、各部名称を加筆した

図 5 筆者作成

図 6 1～4：角田 2017
5・6：隠岐島前教育委員会 1986 『黒木の遺跡』
7：隠岐の島町教育委員会 2006 『大座西遺跡
発掘調査報告書』

図 7 1～3：奈良県教育委員会 1972 『烏土塚古墳』
奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 27
4：広陵町教育委員会 1987 『牧野古墳』広陵
町文化財調査報告 1
5：奈良県教育委員会 1960 『奈良県文化財調
査報告 (埋蔵文化財編)』3
6：奈良文化高等学校 2013 『奈良文化高等学
校所蔵考古資料目録 — 伊瀬敏郎コレクション —』

- 7 : 奈良県立橿原考古学研究所 1978『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 34
- 8 : 天理市教育委員会 1988『天理市埋蔵文化財調査概報 昭和 61・62 年度』
- 9 : 奈良県教育委員会 1961『奈良県文化財調査報告 (埋蔵文化財編)』4
- 10 : 奈良県教育委員会 1956『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』8
- 図8 1・2 : 宗像神社復興期成会 1958 (再トレース)
3 : 国宝金銅製矛鞘検討会 2025 を改変
7 : 福岡県教育委員会 1974『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ (本文編)』(再トレース)
筆者作成 (4 : 福岡市埋蔵文化財センター、5 : 那珂川市教育委員会、6 : 宇美町立歴史民俗資料館、8 : 福津市教育委員会、9 : 田川市石炭・歴史博物館、10 : 行橋市歴史資料館、11 : 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室、12 : 壱岐市教育委員会)
- 図6～8の地図はweb サイト「川だけ地形地図」
- 図9 筆者作成 (1 : 木更津市郷土博物館金すず、2 : かすみがうら市歴史博物館、3 : いわき市考古資料館)
- 図10 1 : 鈴木勉 2025『藤ノ木古墳金銅製馬具のルーツを辿る』工芸文化研究所
2 : ColBase (https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-8201?locale=ja) をトリミング
3 : 公益財団法人元興寺文化財研究所提供
4 : 群馬県立博物館 1989『唐墓壁画集錦』
- 図11 寺前2025 (一部改変)
- 図12 坂2008 (一部改変)
- 図13 福岡市教育委員会 1981『三築遺跡・次郎丸高石遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 69
- 図14 朱栄憲 1963「薬水里壁画古墳発掘報告」『各地遺跡整理報告』科学出版社
- 図15 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1985
- 図16 宗像大社復興期成会 1979『宗像 沖ノ島』
- 図17 1 : 国宝金銅製矛鞘検討会 2025 を改変
2 : 国立光州博物館 全羅南道・咸平郡『咸平禮德里 新徳古墳』国立光州博物館学術叢書 70 (再トレース)
3 : 朝鮮総督府 1932『慶州金鈴塚飾履塚発掘調査報告』大正 13 年度古蹟調査報告 1
- 図18 筆者作成
- 図19 木更津市教育委員会 2020『金鈴塚古墳出土品再整理報告書』第 1 分冊 (本文編) (一部改変)
- 図20 2・11 : 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『綿貫観音山古墳Ⅱ』(石室・遺物編) 群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書 255
3 : 木更津市教育委員会 2020『金鈴塚古墳出土品再整理報告書』第 1 分冊 (本文編)
4 : 国立文化財研究所 2012『風納土城ⅩⅢ』風納洞 197 番地 (舊未来村) 発掘調査報告書 2 (再トレース)
5 : 国立羅州文化財研究所 2017『羅州伏岩里丁村古墳』(再トレース)
6 : 国立光州博物館 全羅南道・咸平郡『咸平禮德里 新徳古墳』国立光州博物館学術叢書 70 (再トレース)
9 : 三田市教育委員会 1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ』三田市文化財調査報告書 2
12 : 公益財団法人元興寺文化財研究所提供
筆者作成 (1 : 天理教埋蔵文化財調査団、7 : 高崎市観音塚考古資料館、8 : 野洲市銅鐸博物館、10 : 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室、13 : 木更津市郷土博物館金のすず、14 : 岡山大学考古学研究室)
- 図21 辰巳和弘 2006『聖なる水の祀りと古代王権 天白磐座遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」033 新泉社 (一部改変)

【調査報告】

沖ノ島祭祀遺跡学術調査聞取報告

岡寺 未幾 福岡県九州国立博物館・世界遺産室

要旨: 世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会では、令和元年度からデジタル・アーカイブ MUKAKATA ARCHIVES を構築し、本遺産群に関わる文化財や関連する資料のデジタル化を進めている。その一環として、沖ノ島祭祀遺跡の学術調査、特に第1・2次調査にかかる写真フィルムのデジタル化作業を行っている。令和2年度に、この写真データについて、沖ノ島の3次にわたる学術調査全てに参加した小田富士雄氏から聞き取り調査を行った。沖ノ島の発掘調査が行われた当時の島内の様子や、調査の状況を伝える貴重な証言と考え、ここで報告する。

キーワード: 沖ノ島、祭祀遺跡、自然崇拜、古墳群

1. 調査の概要

世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会では、令和元年度から本遺産群にかかるデジタル・アーカイブ MUKAKATA ARCHIVES を構築し、本遺産群に関わる文化財および関連資料のデジタル化を進めている。その一環として、令和元年度から5年度まで、昭和29（1954）年から昭和47（1972）年にかけて行われた沖ノ島祭祀遺跡学術調査にかかる写真のデジタル化を行った。本事業の成果については既に MUKAKATA ARCHIVES で公開されている⁽¹⁾。

第1・2次調査にかかる写真のデジタル化に着手した令和2（2020）年12月9日に、沖ノ島の三次の学術調査全てに参加した小田富士雄氏から聞き取り調査を行った。沖ノ島の発掘調査が行われた当時の島内の様子や、調査の状況を伝える貴重かつ重要な

証言であり、書き起こしの形で報告する。

小田富士雄先生 沖ノ島学術調査 聞取調査

日時：令和2年12月9日

会場：九州歴史資料館研修室

参加者：

福岡県世界遺産室 岡寺 未幾

九州歴史資料館 伊崎 俊秋

宗像市文化財課 原 俊一

宗像市世界遺産課 合島 賢二・岡 崇

宗像大社 福嶋 真貴子

株式会社とっぺん 田中 健一郎・宮田 慶彦

2 聞き取り調査の内容

（1）デジタル化の経緯

岡寺：本日は、令和元年度から進めている沖ノ島の調査にまつわる写真をデジタル化した資料を見てい



写真1 聞取調査の様子



写真2 小田富士雄先生

ただき、小田先生からコメントをいただこうと思います。

今回の経緯は、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群を世界遺産に登録推薦する時、第1次・2次調査に関する写真がなく困ったという話を小田先生にした際、片山写真館を訪ねてくださいとお話しいただきました。その片山写真館が平成31（2019）年3月に閉館することになりました。

片山撰三さんは、とくに肖像写真で著名な写真家ですが、仏教美術をはじめとして、芸術・文化財に造詣が深く、九州の文化財に関わる写真も多く撮影されています。沖ノ島では、第一次調査に参加し、発掘調査の報告書『沖ノ島』、『続 沖ノ島』、『宗像神社史』の写真図版を担当しています。

福岡県立美術館は平成29（2017）年に特別展「写真家 片山撰三 肖像写真の軌跡」を開催したことから、片山写真館と強いつながりを持たれており、写真館に残る片山撰三さんが撮影された写真の調査を福岡県で実施させていただくことになりました。調査に参加したのは福岡県立美術館魚里洋一副館長、岡部るい、九州歴史資料館松川博一、井形進、福岡県世界遺産室岡寺未幾、松本将一郎の5名です。この調査で、沖ノ島の第一次調査の写真や九州の文化財にかかる大変貴重な写真が残されていたことがわかりました。当初写真は全て東京のフィルムセンターに寄贈予定だったのですが、所有者の片山敬子さん、(株)片山写真館 代表取締役 飯田章人さんに御報告したところ、文化財にかかる写真については、福岡県へ寄贈いただけることになりました。これらの資料は現在、九州歴史資料館に所蔵されています。

ちょうど福岡県世界遺産室では令和元年度から文化庁の補助事業でデジタルアーカイブ事業を行っていたことから、片山写真館から寄贈いただいた宗像関係の資料のデジタル化を行うことになりました（岡寺2020）。

その成果を宗像大社へ報告したところ、宗像大社神宝館が保管する黒い箱からも、沖ノ島の発掘調査時のカラースライドが見つかりました。詳細を調べたところ、こちらも片山撰三写場が撮影した第1次調査のものである事がわかりました。

神宝館に残る沖ノ島の第3次調査の写真も宗像市文化財課の原俊一さんが整理を行われていたことから、1次のカラースライドと3次調査写真のデジタル化をあわせて行うことになりました。

令和2年現在、デジタル化した写真資料は3000点ほどです。宗像大社神宝館にある沖ノ島関係の写真は20000点を超えるので、まだごく一部ですが、沖ノ島に関わる非常に重要な資料だと思います。

今回の聞き取りでは第1次の第1回と第2回の写真を中心にみていただこうと思っています。なお、第3次調査の写真も時間が許せばコメントをいただくためにあわせて、ご用意しています。

（2）第1次調査の参加者

岡寺：これは昭和29年5月29日沖ノ島へ向かうという写真です。神風丸という県の巡視船と別の船と二手に分かれて沖ノ島へ行ったようです（写真3）。

小田：第1次調査の第1回目の調査は、考古班は1～2日遅れて出発したんですよ。その前に本隊の（出光）泰亮さんたちが来ていましてね。九州大学のほうで学会などがあって、鏡山先生と松岡君と私とが遅れて出発したんですよ。それで向こうについて5月の30日かな、5月の終わりに最初に渡った本隊の人たちが帰っていきますけどね。我々はそれからもうちょっと残って調査したわけですが、その時に台風が来て遅れて、帰ってきたのは6月の4日でしたか。その間に暇になりましたので本調査の予備でどういう状況か見てみよう。7号遺跡に向かって左、灯台に上る道が続いているところでトレンチを一箇所入れましたら、新羅の関係の馬具だとか金製の指輪を掘り当てた次第です。沖ノ島の調査は不思議にですね、金製品と何か縁がある。

これはですね、第1次第2回調査の時の写真ですね（写真4）。最前列右から2人目が斎藤忠さん、立っている麦藁帽の方の左は京都大学の水野清一さん、最前列左から4人目が鏡山猛先生、その右が熊本の坂本経堯先生です。第1次の2回目の調査は8月で、当時斎藤忠さんと東博の三木文雄さんが客員ということになっておったのですが、水野清一さんや森貞次郎さんなど、東亜考古学会で壱岐の調査をやった



写真3 船上から沖ノ島をみる (1954)

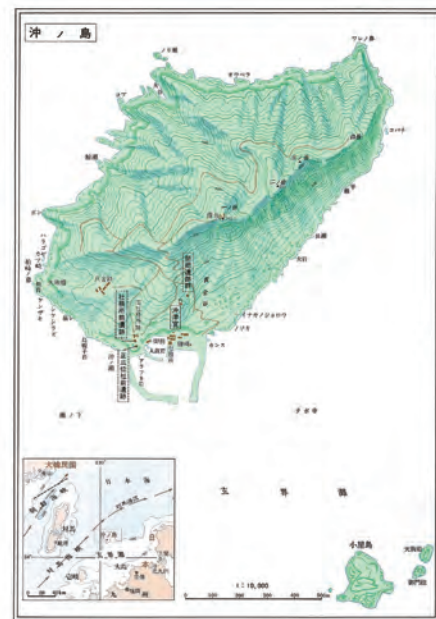


図1 第3次調査時の沖ノ島
(旧社務所が第1次調査時の社務所)

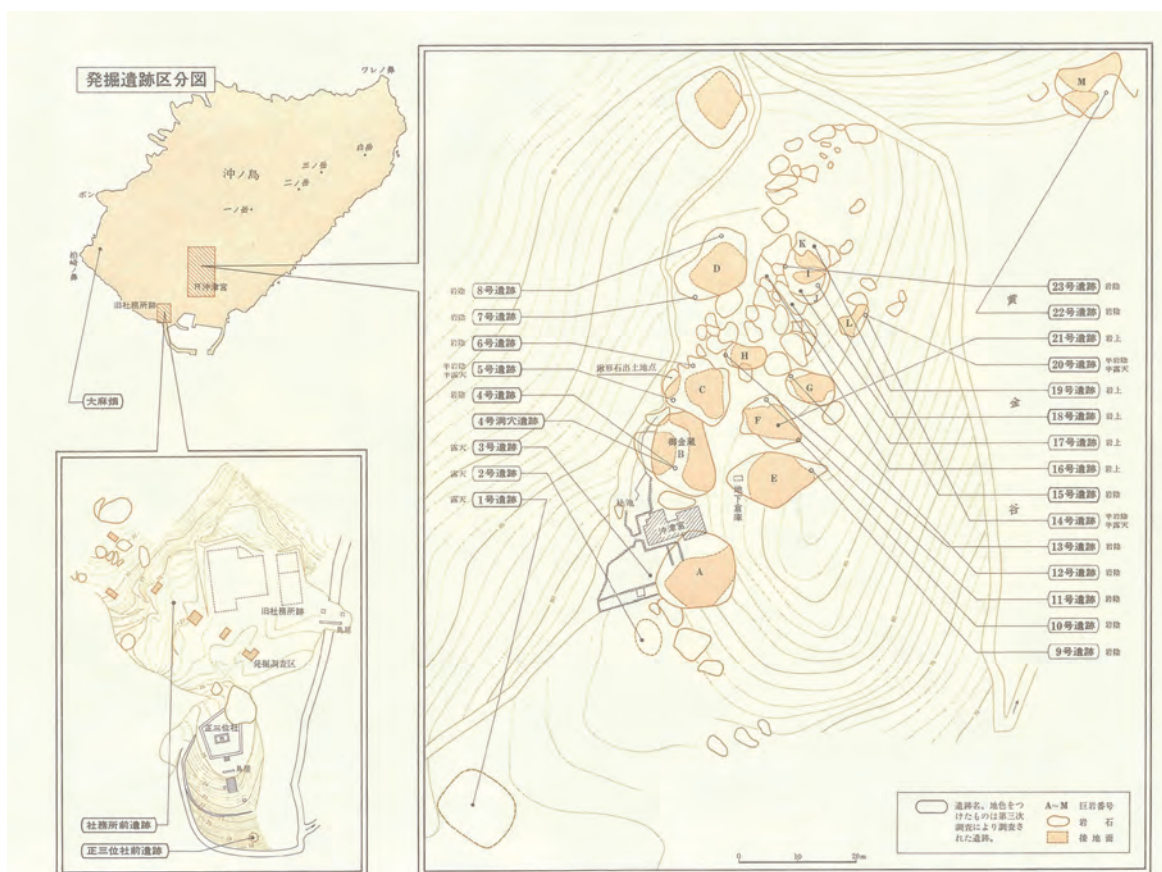


図2 発掘遺跡区分図 (第3次調査当時、※現在旧社務所・正三位社前遺跡は崩落により消失)



写真4 第1次調査第2回調査参加者① (1954.5)



写真5 第1次調査第2回調査参加者② (1954.5)



写真6 沖津宮社殿 (1954.5.30)



写真7 8号遺跡 (左)・7号遺跡 (右) (1954.5)

帰りにここに寄られたのです。この写真の前列の座っている左側から二人目が片山撰三さん、その左の野口さんは片山さんの助手です。左から三人目に座っている人が京都大学の高橋猪之介さんで京大の考古学関係の写真をほとんど一手に引き受けておられた方です、それからその右の座っている方が田中忠さん。松岡君の一年後輩で佐賀大の学生です。その右が鏡山先生、さらにその右が坂本先生、その右で椅子に座っているのが出光泰亮さん。その右側が斎藤忠さん。その右側の前列に座っているのが武藤正行さん、当時修猷館高校の先生をしておられて、沖ノ島の調査を持ってくるために、出光さんあたりとかなり折衝交渉をされて、調査の一番の原動力になった方で、のちに福岡県文化課へ入られた⁽²⁾。それから後列に立って一番左側におられるのが波多江一俊さん。筑紫豊さんが神道代表で、波多江さんが仏教代表ということで。その右側が吉田聖さん、毎日新聞社の記者の方で考古学関係の記事では九州ではなかなかの人です。その右の角帽かぶっている人は松岡史君。その右が水野清一さん。角帽かぶっているのが私、その右側に立っているのが東京国立博物館の三木文雄さん。その右側に角帽かぶっているのが宮崎大学の諏訪昭千代君ですね。のちに鹿児島県文化財の係長になって、もう亡くなられましたけれど。その右側の白い帽子をかぶっている人は森貞次郎さんです。それからその右側が渡辺正気さん。その右に一番上が神戸さんという宗像の神主さんでいろいろと我々の世話をしてくれた方です。その前に原田大六さん。一番前が武藤正行さんです、それから右端が佐藤市五郎さんの息子の千里さん。

社務所（図1に記載されている旧社務所のことを指す⁽³⁾）の前の断崖絶壁になるところにこういう岩場がありまして、みなさん朝晩よくここに出てきて景色を眺めていたところです。たしか鏡山さんがつけた名前が九州のあちこちが見えるので「望郷の岩」という名前をこの岩につけてましてですね。それで朝晩良く眺めておったのですが。

これは7号遺跡の前で撮った写真で第1次の第2回ですね（写真5）。手前に座っている方が左から佐藤千里さん、それから坂本先生、それから鏡山先

生、それからその右が武藤正行さん、それから渡辺正気さん、それから後ろに立っている方が一番左が宮崎大の諏訪昭千代さん、その右が私です。それからポール持って立っているのが原田大六さん、それから波多江一俊さん、角帽かぶっているのが松岡史君、それと田中忠さん。右端が三木文雄さん。というような顔ぶれです。

岡寺：調査は5月29日に船が出て沖ノ島に到着し、九州考古学会の考古班は後から合流するのですけれども、調査日誌では嵐で帰れなくなった話がありました。ヤマドリという海上保安庁の船が昼くらいに来るけど乗船できず船はそのまま引き返して、やむなく滞在したところ、社務所の西側に縄文・弥生の土器片が散在していることが分かって遺跡を見つけた、となっています。もともと、第1回調査は4号遺跡だけを目的としていたようですね。

（3）4号遺跡

小田：4号遺跡は（沖津宮）社殿（写真6）の向ってすぐ左側にある洞穴でしてね、御金蔵（おかなぐら）と言われていたところです。近世・近代までのいろんな奉納品があるとみんなこの御金蔵に持って行って入れておいたのですね。昔から「御金蔵」って名称だけが非常によく知られておったのです。3次調査の折に御金蔵の中を掘りましたら、その時に新羅系の馬具などが発見されて、4号遺跡という名前を付けました。遺跡自体が洞穴になっていますが、祭祀遺跡です。さらにその下の層に、縄文の層が出たのです。最初は縄文時代の生活の遺跡として、おそらく台風か何かで上陸して短期間だけ住んだ。この遺跡で縄文から弥生、古墳時代の土師器まで出ますけれども、つながらないんですよ。間が途切れておりますから、たぶん台風か何かに遭うと皆ここに逃げ込んで来たのですね。我々の調査中でもそうで、皆ここに避難してくるわけです。そういうようなことで、短期間だけ滞在した時期があった後、祭祀遺跡になって、さらに中世近世以降には御金蔵という形で、奉納品を納めるという利用の仕方をされておったのです。この御金蔵の後ろ側が、第5号遺跡になります。



写真8 7号遺跡 (1954.5)



写真9 5号遺跡 (1969)



写真10 20号遺跡 (1970.5)



写真11 正三位社 (1954.5)



写真12 休憩のひととき (1954.5)



写真13 三岩礁と船 (1954.5)



写真14 沖ノ島港湾 (1954.5)



写真15 沖ノ島港湾工事 (1954.5)

我々は先ほど言いましたように結局台風で帰れなくなりまして、当初は5月の終わるか6月の初めに帰る予定で、海上保安庁の船が（迎えに）来たんです。当時海上保安庁の船は戦時中の駆逐艦を改造した船になっておりまして、あれで帰ると2時間くらいで帰れるわけですよ。我々は漁船で往復しましたから、漁船で行くと片道が3時間半～4時間かかっていたんですよ。ある時期に我々も漁船に乗っていききました。台風前にはもう波が逆立ってますから、船が波の頭に乗ったときは沖ノ島の灯がちらっと見えるんですけども、その次には波の底へ船が引きずりこまれるような、どっちを向いても波の頭が見えてるような、そんな状態で、行ったこともありました。

我々が最初、帰れなくなった時も、簡単に帰れると思っていたんで、予備の食料の用意をしないで、当時、植物関係の先生がおりましたから、天然記念物になっているんで本当はいかんですけれども、食える草を探して来いというのでいろんな草を持って帰っては植物の先生に「食べられますか？食べられませんか？」というようなことも聞いたり。それから、夜になると、例のオガチが鳴くわけですよ。赤ん坊の泣くような声を出します。佐藤千里さんたちが、オガチ（オオミズナギドリ）を食うんだと言い出して、オガチを2～3羽捕まえてきて、食料にするんだということで。あれは本当は1週間くらい油抜きをせにゃいかんだそうですけどもね、獲って帰って翌日食わされたんですよ。前の晩にくくって庭に置いときますと、ぎゃーぎゃー鳴くんですよ。武藤さんなどが「明日のおかずが鳴いとる」とか言ったんですけどもね。そんなことがあって翌日のみそ汁の中に入れて食わされました。食べたもんじゃないですね、油がいっぱい浮いてですね。あれは本当は油抜きをせんといかんです。

（4）7号遺跡（写真7・8）

小田：そんなことがあって、じつとしくのもなんだから、次の本調査に備えて、探りを入れてみるかというので、7号遺跡の端っこの方にトレンチを入れましたら偶然、新羅系の馬具類のある所に当たり

まして。金製指輪も掘りましたね。

それで、社務所まで持って下りましたら、当時、前田さんという神職さんがおりましたが、「先生これは古いんですか？」と尋ねられたので、「古いものですよ。」と答えたら、実はあそこは横が登山道になっていて、灯台に登る道で、雨が降るたびに7号の端っこの方の土が流れるんです。それで新羅の馬具とかが出て、灯台に上る人を見つけ出して、神社にことずけていったらしいんですね。それでこれらはあの灯台に上る方々が採取して持って来たのですよって、前田さんがバケツに馬具を入れてガラガラいわせて持ってきたんです。だからあの7号の新羅系の馬具はほとんどそういう状況で採集されて、神社のほうで保管してあったんです。私どもはあつげにとられて、これはえらいことになったと。金製の指輪が出た、というので是非、発掘しなければいかんという流れになったんです。

（5）5号遺跡（第3次調査）（写真9）

小田：同じようなことで第3次のきっかけになったのは、金銅製の龍頭が発見されたことです。あれは第3次調査でどこをやるかという話が出た時に、たまたまあの当時地下探査機が出始めたころでしてね。出光さんの方が事前にあそこに来て、たまたま電探を使ったら、あの辺でビービー音がしたんで、掘り出して持って帰ったんです。金銅の龍頭が出たということでこれは何としても第3次であそこを掘らなきゃいかんということになりました。沖ノ島というのはどうも不思議と金製品に縁があるところですね。

（6）20号遺跡（第3次調査・写真10）

小田：第1次調査では3回調査をして、第3回は原田大六さんと波多江さんが行っています。その段階では確か16号遺跡くらいまでしか遺跡があることはわかってなかったと思います。その後に第2次の調査で周囲の探索をやって、19号遺跡まで発見されています。第3次調査では23号遺跡までですね。で、14号遺跡と20号遺跡は同じものですから、14号遺跡を最終的には欠番にしているんです。20号遺跡は巨

岩が座っているところから黄金谷のほうまでずっと斜面になっています。この左側が斜面になっていて、この斜面の、外側に須恵器類がだいぶ当時はあったんです。それが斜面の下のほうにずれ落ちて。ずれ落ちたものを最初に見つけたものだからそれを14号遺跡にしたわけです。その後20号の調査をやりましたらですね、この斜面の上からずっと滑り落ちているという状態がわかってきて、それで14号遺跡のほうを最終的には欠番にしているんです。

20号遺跡の発掘後の写真ですね（写真10）。右側のほうにずっと斜面が落ちていくところが黄金谷となっているんですね。最初に我々が調査に入ったころまでは、漁師の人たちの中で、「黄金谷には金のチャボがいる」という伝説がありましてね。これはおそらく新羅や加耶の遺物に元があります。我々はよく漁師の人たちから、チャボは見つかりましたかと質問があって、かなり信じられている伝承のようですね。それでこの黄金谷がこれだけ（傾斜が）ありますから、将来、黄金谷のほうに（遺跡が）ずれ落ちていく危険がある。この前、見学に行った時にそういう感じを受けました。

最初に出ていた、望郷の岩だと言っていた社務所前の巨岩（写真4・11）ですね、あの写真の左側は絶壁になっておって、絶壁の部分に確か鉄鉋が入っていた遺跡（正三位社前遺跡）がありましてね。この前私たちが行った時には、あの岸壁が崩れ落ちて、出た遺跡がみんな無くなっておりまして。だからあの黄金谷とか周囲の崖面なんかにある遺跡もいずれなくなっていくだろうと思います⁽⁴⁾。

（7）三岩礁（小屋島、御門柱、天狗岩）

これはいい写真ですね（写真12）。向こうに小屋島とか三つの島がありまして、最近の世界遺産の時の説明の中に、あれを鳥居に見立ててあの真ん中を通して入ってくるんだという説明がありましたが、あれは今回初めて聞いた話でありまして、我々の時はあの間を通していくようなことはなかったし、漁船でも話は聞かなかったのですよ。今もそうなんでしょうが？

岡寺：大島の方に聞き取りをした時、沖ノ島に行くときは必ず船でこの岩礁の間を通るという漁師の方がおりました。第3次調査の概報にも岩礁が沖ノ島の鳥居に見立てられているとの記述があります（宗像大社復興期成会1970）。この写真は昭和29年に撮影されたものですが、恐らくその慣習を意識して撮影されたのではないかと思います（写真13）。

（8）第1次調査の頃の沖ノ島

岡寺：片山写真館を引き継がれている飯田章人さんの話では、第一次調査が行われた昭和29年当時、カラーフィルムは大変高価で貴重なものだったそうですが、調査では多くの写真がカラーで撮られています。出光さんから島内の様子をできるだけ記録として残して欲しいと、お金に糸目をつけずに提供されたと、伺いました。

神宝館に残されていた400枚の写真はほとんどが第1次調査の5月29日、5月30日にかけての2日間のもので。当時、大島の漁師さん達はオリコミと言って毎年10月から4月ぐらいにかけてブリを獲りに沖ノ島を拠点にしていたそうです。

小田：昭和の30年代ぐらいまではまだ内側の小さい堤防しかなかったと思うんです（写真14）。小型の堤防しかなかった。そのあと外側に大型の堤防ができた。内側の堤防は我々が聞いた話では、宗像出身の人が、漁師の人たちが漁をやっている時に台風が来たときにここへ逃げ込むんだけど、それは大変だということでそのために個人で出資したんだという話を聞いていたんです。

テトラポッドを使ってる堤防の方が新しいですよ。手前のあの堤防は我々が調査に行った時には作っていたのだけれども、台風が来ると一晩で全部崩れるんですよ。それで何度も申請してお金をもらってやるもんだから、中央のほうでいくらお金をやっても出来上がらないから、どうもおかしい、現地で汚職しとるのではないかと話が出たという話を当時漁師から聞いていました。古いほうの堤防には、三菱の大きいいわゆるテトラポッドは使ってないですよ。あれを使いだしてから上手くできるようになったという話を聞きましたけどね。



写真16 社務所 (1954.5)



写真17 社務所での打合せ (1954.5)



写真18 沖ノ島の檳榔 (1954.5)



写真19 8号遺跡調査前風景 (1954.5)



写真20 8号遺跡遺物検出状況 (1954.5)



写真21 8号遺跡遺物検出状況 (1954.5)



写真22 8号遺跡調査風景 (1954.5)

最初我々が行った当時、内側の堤防しかなくて、まだおおらかな時代でしたからね、朝あそこの御神水のある所に歯磨きをしたりするのに下りてくるんですけども、あの海岸の水際のところにサザエが上がってきておったんですよ。それを下で七輪を3つ4つ据えといてですね、我々がサザエを捕まえて七輪の上に置いとくと歯磨きが終わったらつば焼きができるといいう、非常にいい時代で。今はそういうの無いでしょう。上がってきたりしませんよね。それで魚とるのもあそこにあるゴムのペラペラしたやつを魚の形に切ってですね、それをつけて釣ってくと捕まるんですよ。そこらへんにこういう魚の形したやつを捨ててありますよね。別にそんなに餌をつけるでもなくいいんだという話をしました。

それから第2次の調査の頃には、港のほうに小屋を作ってそこで寝泊まりして堤防工事をしましたね。6か月くらいで交代するらしいんですよ。ちょうど交代する時期に第2次の調査に行きましてね、工事の人たちと話をする機会もありました（写真15）。

岡寺：こちらは社務所です（写真16）。社務所の前の広場が縄文弥生の遺物の散布地で、現在は崩落により失われています。こちら（写真17）は社務所で打ち合わせされている風景かと思います。

小田：真ん中が出光泰亮さんですね。左側是水野清一さん。

岡寺：写真としては第1次第1回の調査の沖ノ島の島内の様子、沖津宮社殿や自然、特に岩や植物系の写真があります。虫の写真もありました。

小田：アブ。我々が発掘してるときでも昼間はアブにやられるんですよ。岩の根っこのほうまで入り込んでやっていますと、夏場ですと汗かくもんでアブがワーンと寄ってきますね。だから調査に入る前は我々は体にフマキラーを撒いていた。そして中にもぐって掘るんですけども、それでもアブが寄ってきますから。そうすると鏡山先生が後ろからハエたたきを持って回っているという、そういう調査の仕方でしたよ。夜になると今度は蚊が出るんですよ。交代期が朝の6時、7時台と、夕方の6時前後ですか、1時間くらいがアブと蚊の交代期で、何もいな

い時期がありまして。だから夜になると社務所で寝てますと天井にアブがずっとぶら下がっているんです。そして蚊が出てくるんです。今度は朝になるとアブと蚊が交代するんですよ。そういうのが毎日です。それで1週間ぐらい我々が行って叩いてますと、やっぱり減ってくるんですよ。そうすると1週間ぐらいで若いのが出てくるんです、ちっこいやつがですね。そうするとだいたいアブの世代交代が起こったなと。その小さいアブにね刺されるとこれがもう一番痛いんですよ。大きいやつより痛いんですね。今はないんですが、あの当時は下草が生えてましてね、社務所（旧社務所）からずっと上がって行って、（沖津宮）社殿のほうに上がっていくところが、ずうっと草が生い茂っているんですね。その中を上がっていくわけですが、当時我々が穿いているズボンには折り返しがありましてね、ズボンの折り返しの中にあれが、血を吸うやつが。

岡寺：ヒルですか？

小田：ヒルです。ヒルが入っているわけです。そいつが靴下の上から食いついてくるんです。取ると頭だけ残ってる。草の中を歩いてきてズボンを払うとヒルが落ちる。だからアブと蚊とヒルにやられる。僕らの時は沖ノ島の島内は昼でも薄暗い感じだったんですよ。今は（3次調査の時に）かなり周りを伐採してますから。草を刈っているから少ないんですが。今でもヒルは居るんですか？

岡：ヒルはいます。ただ小田先生行かれたところよりは多くないと思います。

小田：あの当時は一木一草も切ってはならんというそういう時期でしたから。で女人禁制ですから、天気予報のこともあって、ラジオでも女性アナウンサーの声が入ると切っていました。

大正か昭和の初めくらいに九州大学の農学部で沖ノ島の植物調査をしていまして、だから天然記念物の指定が早くからできた。檳榔（びんろう）の木が4本あって、それが減っていった私どもの調査の時には1本になっていた（写真18）。遺跡のほうから北側にずっと斜面が下がっていきますね、あの辺の中にあるんですよ。佐藤市五郎さんが、小田さん檳榔の木を見に行きましょうや、と連れて行っても

らったりして。ただ市五郎さんはさすがに10いくつから漁師で鍛えているもんだから、島のヤブの中を走るようにして行くんですね、ついていくのでも大変でした。そういうので檳榔の木を見に連れて行ってもらったのですが、まだ残っていますかね？。

岡：あります、あります。今3本、大きいのがあって、また2本、実生のが。

小田：それでね、大体あれぐらいで、木が大きくなりませんよね。やっぱり海風に当たるから、立ち枯れみたいな状態になっているので。最初の1回目2回目ぐらいの時にはあの中へ入って行って、手で触ると立ち枯れしてるやつがメリメリと倒れるというような状態だったんですけどね。今はこんな状態はあまり見られなくなったんじゃないですか？

岡：これは台風でやっぱり同じ状況になっているところですね。

小田：韓国でも花崗岩の松の木がいっぱい茂っているところでは、今この写真と同じくらいで、大きくならないんですよ。結局土がないんですねそんなに。沖ノ島でもあまり土がないというので有名で。なんかちょっと掘ったりして土が出ると、佐藤市五郎さんなんかは、「ああ日本の土が出た。」と喜んでましたけどね。

そしてオガチ、この鳥が夜になると帰ってくるんですね。あれは滑走路がないと飛べないそうですね。夕方になると帰ってくるんですよ。それが7号・8号遺跡あたりの遺跡の中にみんな入って寝るわけですよ、夜になるとあの中に入って人間の赤ん坊が泣くように鳴くわけです。我々が発掘した遺物を出土状態のままにしておいておくと、そこに入ってきてワーッと暴れるもんだから、遺物がみんな跳ね飛ばされて翌日大変だったんです。この辺の岩の根っこがオガチの宿になっているんですよ。だから重要なものはその日のうちに写真撮りまでやって持って帰るようにしないと、小さい遺物だったら翌日行ったら跳ね飛ばされているということになります。

(9) 8号遺跡 (写真19-22)

小田：こちらは8号遺跡ですね。

岡：8号遺跡から出土したカットグラス碗片が出土

した場所は分かりますか？

小田：あれはですね、我々も最初ここに入るときは、普通の遺跡と同じように堆積層があってその中に遺物が入っているものだと思っていたのです。ところが第1次第2回調査の時に行って、この遺跡の岩の上に長い間に落ち葉がいっぱいかぶっておりまして。落ち葉をかきのけたら遺物が出てくるという状態なんです。この遺跡は下の方で、オガチもかなり動いておりますから、たぶん遺物がかき回されて上に出てきたんじゃないかという風に観察したわけです。

調査時に台風で居残りになったときに、7号のところにトレンチを入れてみたんです。落ち葉をのけて遺物が出てくるその面の下に、扁平の割石みたいなのが敷いてあったりですね、その下は岩盤なんです。それで落ち葉をかきのけて発見される状態が、当初の状態なんだと、その段階で認識してきたんですね。落ち葉やなんかをかきのけた状態で出てきますからね。正確な出土地点がいまいちおさえられないんですよ。だから図面には書いてないでしょう。

それとマッチ棒、8号遺跡は私と渡辺さんとで担当したんですけど、滑石の小玉などはたくさん散らばって出るんでそれの上にマッチ棒を全部立てたんですね(写真22)、それを翌日行ってみるとオガチがバーッとかきまぜてるという、状態だったんですよ。渡辺正気さんもたばこは吸わないんでマッチをどんどん使ったんですが、たばこ飲む先生たちからはえらい敬遠されてね。マッチがなくなるからええ加減にせえと。それでも渡辺正気さんはせっせとマッチ棒を。終わったときにはたばこ吸う先生たちからは、だいぶ喜ばれたんですけどもね。鏡山先生なんかはたばこ吸っておられたんですけども、沖ノ島の調査の段階で禁煙者になったんですよ。それまではよくたばこを吸っておられたんですけどもね。沖ノ島の調査で2週間もおってたばこ吸わなければ、大体禁煙者になったんじゃないですかね。

岡寺：いい禁煙のきっかけになったんじゃないですかね。

小田：1次調査の時は指輪が出たりしているのですが、1次・2次の報告書では重要な遺物を浮きださせるために細かい情報は省略します、というような



写真23 6号遺跡 (1969)



写真25 17号遺跡 (1954)



写真24 6号遺跡祭壇状遺構 (1969)

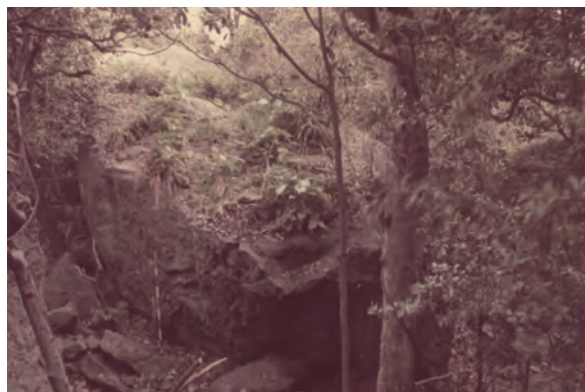


写真26 21号遺跡調査前の写真 (1970.5.8)



写真27 21号遺跡調査後祭壇完掘状況 (1970.5.21)



写真28 21号遺跡復元状況 (1970.5.23)

ことをやっていますから、報告書に出てゐる以外に、本当は原図を見ないとね。

(10) 6号遺跡(写真23・24)

小田：これは6号遺跡ですね(写真23)。この岩の後ろ側がぐっと下がってしまっていて、この後ろ側が5号遺跡になるんですよ。ここでは写真にありますようにね、長方形の溝状に石灰を入れてですね、祭壇の端に石灰を入れて線を引いたんですよ(写真24)。その前にL字型の30cmぐらいの幅の溝が、これが排水溝ですけどもね、それが回って、今の岩の先のところからグーっと下がって5号遺跡の方へ落ちるようになっていっているんです。当時、輪郭を作らせたんですが、報告書の方を見たら入ってないんですよ。私の方でその後、委託研究の時に、ここの溝の状態の、訂正した図面を入れておきました(小田2012)。今から考えたら、石灰をちゃんと入れさせておいてよかった。これは私がぜひ入れとけと入れさせたんですよ。それでこうL字型になってここがグーっと下がってですね、手前か、5号遺跡の方へ落ちていくという仕組みになっているんです。

岩陰遺跡は上の巨岩の一番先端の輪郭である雨落ち線が、だいたいこの祭壇のすぐ外側にくる仕組みになっておるんです。だから雨落ち線より内側の部分が祭壇になるわけです。この第3次調査の6号遺跡についてはこの前、委託研究でもう一度訂正した図面を載せていますから、そちらのほうを見ていただきたいと思います(小田2012)。

(11) 17号遺跡(写真25)

小田：I号巨岩、一番古い段階の祭祀ですね。一番高いところが確か宗像神社の人たちが「高天原」と呼んでいたところになるんですけどね。

岩の累々としていところ、1番上が18号遺跡、その下の岩陰のところは17号遺跡(写真25)、4世紀から5世紀にかけての沖ノ島のいちばん古い段階のところですね、これは報告書の段階ではこのへんからはっきり書いてないんですよ。やはりこの段階から巨岩の上にも小さな祭壇を作っているんです。遺物が出るその下に割石があるんです。そういう簡

単な祭壇を作っているんで、遺物が出てくると合わせて輪郭をとると、だいたい長方形になって、それの大きいのが後の岩陰の段階になってくると思うんですけども。その辺のところも私の委託研究のほうでは新しく書いておきました(小田2011ほか)。

古い段階のものは、祭壇の上に遺物を並べてですね、さらにその上を小さい石で覆い被せてしまうというやり方です。そういうのを報告書にははっきり書いてなかったんじゃないかと思うんですけど、今風に言えば、簡単な祭壇を作ってその上奉獻品を並べて、そこでお祀りが終われば、それが見えないように石でそれを覆って隠してしまうというやり方ですね。これが岩上祭祀の場合も同じことをやっているわけですね。

17号遺跡の場合、21面の鏡がまとめて押し込んであって、その下に、鉄刀などを並べてあって、そしてこういう風に見える外側からさらにもう一度、中ぐらいの石を上から立てかけて隠してあるという、そういう状態です(写真25)。

この祭壇を作って遺物をその上に並べてというのは、21号遺跡という岩上祭祀の最後ではもうそれをやらないですね。一番高いところにあるからまず人の目に触れなかったためか、その段階では遺物の上にさらにもう一度石を被せるということはやらないんですよ。露出したままで置いているんです。それがさらにそのまま下に下ってくると、岩陰遺跡の状態になるということなんですね。

(12) 21号遺跡(写真26-28)

小田：21号遺跡は、祭壇の隅に大きな石を置くという、右側ですね、岩がちょうどぐーっと下がってますから、どうしてもこちらに下がってくるんです、一番下がってくる隅のところに大きな石を置いているわけですね。そして真ん中にも石を据えています。この写真は復元した状態です(写真28)。

それでもう一つは祭壇の真ん中にやや大きめの石を一つ置いて、あの石の高いところに小さい穴がいくつか開いていて、その穴の中に、滑石の白玉が2〜3入ってしまっていて。そうすると多分真ん中の石の前で、榊か何かを立てて、それに白玉をぶら下げてお

いて、ひもが切れるかなどで穴の中に入りこんだんだろうということを想像しておるところです。

そういうことでこちらから見ると梯子のかかっている下の段の一番上の向こう側の高い段の斜めになっているところです。確かその高低差が50～60cmあったと思うんです。そういうところで水平面、平坦面を作るためにあのような祭壇を新たに作ったんですね。でこれがちょうど5世紀の中頃前後ぐらいになるんですね。巨岩の下部分はきれいに残っていたんで、この輪郭が割り出せたんです。巨岩の低いほうにはずっと切り込んだ線が残ってしまっていてね、その所に小さい石が二～三段ずつ積んだ状態がずっと残っていたんです。その上にのせて復元したわけなんです。

福嶋：復元の時に使った石というのは遺跡の周辺にあったものですか？

小田：復元に使った石は下から持ってきたんじゃないくて、巨岩上の低いほうにたまってたものだと思います。低い方は地上から3mほどありまして、高いほうは下から7～8mありまして、下は良く残っていますからね、低い方は、四隅のところに大きな石がありますが、あのそばに50cm幅ほどか、並行した石敷きがずっと出ているんです。多分そこが正面だと思うんですが。3mのそこからずっと上がってくるんですが。

低いほうの四隅に大きな石をやるというのは慶州あたりの古墳でもやっているんですよ、低い方が一番ズレやすいんです、そういうところに大きな石を置くのは、たぶん新羅の古墳の影響だと思うんです。

そして一番外側に50cmくらいの石敷きの幅がずっと出たんです。これは低い方はよく残っていたんです。で、そちらから上がってきて、幅50cmのところは正面だと思うんです。これが新羅でも大邱あたりの古墳の前面にね、石敷きを置きます。最近では大きい祭祀遺跡でも石敷きが出てしまっていてね。こういう作り方のよりどころは新羅の慶州あたりや加耶あたりから出てくる古墳の作り方の技術をかなり導入しているんじゃないかなと思うんですけどね。

岡寺：もし下から人が祭祀の為に巨岩に上がってくるとしたら・・・

小田：左のほうですね。左側のほうにごろごろ石があって、割と上がってこられるんですよ。あそこしか上がってくる道はないですね。そしてちょうど手前に角の所に大きい石が置いてある、あの部分の左側にかけてのあそこに幅50cmくらいの石敷きの面がずっと出ている。だから左側のほうから上がってきて、手前のほうが正面になると思いますけどもね。

21号遺跡から、岩陰遺跡がでてくるまでのところにブランクがずっとあるんですよ。あとはわりとつながるんですけども、沖ノ島の中ではそこがね。この後、岩陰が出てくるまでがブランクになって、半世紀近く。ちょうど雄略前後、大和の政権が一番弱ってくる時期でしょう。そういう意味では、今のところその時期の遺跡がないんですよ。

そしてこの後に、岩陰遺跡が出てきますのでね、ちょうど雄略の時期は、政権が弱っている時期と言われますけれども、そこら辺と重なっていくのではないかなと思っています。未発掘のところでその時期が埋まるのではないかなと思うんですが、7・8号遺跡みたいなあんな大掛かりなものはどうもなさそうだなという感じです。

それともう一つ申し上げますけれども、沖ノ島の当初の段階での遺跡の認定などにしても、将来きちんと調査する時期があれば、そこで整理してもいいと思います。欠番にしなければいかんようなことがありうるだろうから。20号遺跡と14号遺跡のように、どこかで欠番にしないといけないような状態も起こりうるんじゃないかなと思っています。

(13) 1号遺跡

小田：1号の場合は露天です、遺物がザーッと落ちたような状態が10m四方におよんでいる（写真29）。地形が傾斜してますからね、低い方については石を積んで、ぐり石である程度平坦面を作っています。

1号遺跡は全体を完全に発掘したわけじゃないんですよ。土器の出方がいちめんに出てくる状態を図面に描いてみると、また下からも出てくる。そこで図面を描くとまた下に出る。だから低いところで見るとかなりの厚さになってくるんですよ。どうも1回限りの祭祀ではなさそうだと。ある時期には土器類を



写真29 1号遺跡土器検出状況（1971）



写真30 1号遺跡大石検出状況（1971）

まとめて持って来てる、ただ捨てるんだったらなんで祭壇みたいなものを作るんだと。最後の状態は捨て場ですね。最初はきちんとしたものを作ってるんだから、祭壇というのがあって祭祀の遺跡だと。のちになるとあそこへもって行って捨て場にする、と。祭祀遺跡から祭祀遺物の処理場へという考え方になっているんですね。最初は露天祭祀だろうと。そしてその後には土器の処理場になっていったんだろうと。

あれは全部捨て場だと決めつける説と、そうでなくあれは最初は祭祀をした場所だという考えと両方で、結論は出てないんですよ。しかし実際にあれだけちゃんとした祭壇を作っているということは、捨て場に何で祭壇がいるんだということになりますからね。だから、最初は露天祭祀の段階であって、それからの中には集積したものの捨て場になっていくと考えた方がいいんじゃないかと。

それともう一つは大島の御嶽山祭祀遺跡の場合も、祭祀をやった場所なら大甕を据えてるはずで

す。甕がそこら中から出たからですね。調査していた人に確かめてほしいと言っておいたのですが、やはり大甕は地面に据えられていた状態だったと聞きました⁽⁵⁾。そうするとやはり5号遺跡のように甕を地面に据えて、祭祀に使ったんだと。出てくる遺物も大体5号遺跡の時期で出ますからね、その時期に祭祀がはじまったと。

世界遺産になる時も、三社（宗像大社沖津宮・中津宮・辺津宮の三宮）成立の話が出たと聞いています。少なくとも7世紀には沖ノ島、大島に祭祀遺跡があるということで、三社成立の話は7世紀までさかのぼらせてもいいんじゃないかという結論になってくるわけです。世界遺産も三社まで認めておるわけでしょう？世界遺産の判定はヨーロッパの人たちが多ければ、おそらく古代の祭祀について、なかなか理解ができないだろうと思いますよ。それもあつたんで、私は大島の御嶽山遺跡の名前を世界遺産にきちんと挙げておくべきだと思います。三社の説明をするときに、欠かせない遺跡だと思うんですけどね。

岡寺：御嶽山祭祀遺跡は、中津宮の一部分として世界遺産に登録されています。

小田：1号遺跡は、遺物が散らばっている範囲を見ると大体10m四方くらいの範囲の中で納まると思います。そういう認識のもとで中にトレンチを一本入れたんだけどあまりにも遺物の包含層があって、取っても取っても出てくる状態なので、最初は半分くらい掘る予定だったんだけど、そこまでやる余裕がなかったんです。だから、ある程度の調査で状況を確認して、こういう状態で残っているということがわかってきました。最初はわからないもんだから、この中に入っていくとバリバリバリ音がして、須恵器なんか踏み割られるんですよ。

これは隅のところの大石ですね（写真30）。やっぱり祭壇の隅に大きな石を置くようにしているんですね。この大きな石の下の方のところに、ぐり石で固めた平坦面があって。

『沖ノ島』『続 沖ノ島』の段階で書いてるのは、国家祭祀というのは鏡がたくさん出たり、そういう状態。その後、そういうものがなくなってくると、

これは民間祭祀になったんだと考えていて。豪華な古墳時代の新羅のものや馬具や鏡がたくさん出たりすると、国家祭祀であると。しかし、そういうものがなくなってくると、これは地元でやった民間祭祀になってるんだという考え方で。

その辺で律令祭祀という考えをはっきり打ち出したのが井上光貞さんでしてね、井上さんは、神道祭祀については何とかしなきゃいかんと。結局、東大の最終講義の時に沖ノ島祭祀をやってるわけですよ（井上1984）。そして井上さんのところで初めて律令祭祀というのを打ち出してきて、それにあたるのがだいたい岩陰遺跡の後半、半岩陰・半露天祭祀という時期ですね。あの時期は完全に律令祭祀でその上に遺物がいっぱい出てくるでしょう？あの時期で律令祭祀の方式が決まってくるわけですよ。

そういう発想が、1次・2次にはなかったもんだから。『沖ノ島』『続 沖ノ島』では、その辺のところをのみこんだうえで報告書を読まないといけません。当時の学問的な考え方を押さえないと、こういう研究というのは日進月歩で進んでいくわけですから。それから当時、神道考古学というのは地方にまではなじんでいなかった時期ですからね。当時は大体常識というのがそういうもんだったと、ある程度こちらののみこんだうえでこの報告書を読まないといけないわけですよ。

そうするとこれが40年たって『宗像・沖ノ島』が出た段階ではある程度「神道祭祀」とか「律令祭祀」という考え方が入り込んでいる時期ですから、最初の2冊の段階から、書く人自身の神道考古学に対する認識も違ってきている。だから当然、学問の世界での進展なり認識の違いもあるんだということをのみこんだ上で読んでいかないと。

大場磐雄先生は石田茂作先生の仏教考古学に対しては一種のライバル意識を持っていて、亡くなる前に『神道考古学講座』を6巻もくろんだでしょ。あの時考古学協会の若い人たち、我々も呼び集められてね。『仏教考古学講座』はあるけれども神道考古学はないので作らなければいかんので、皆さんよろしく頼むと言って始まったわけですよ。大場先生は第6巻目が出るころに亡くなられたんですか

ね。そういうのが（沖ノ島の）1次・2次と3次の間に入ってくるわけです。そういう学会の動きなどもある程度知ったうえで読むと、理解度も違ってくると思うんですけどね。

私自身が委託研究に入ったのは、当時としてはそうではなかったんだよという、また、その後の認識は我々としてはこうだよ、という説明を今のうちにやっとなないと、もう生き残りは私一人ですから、早く亡くなった先生たちに申しわけない（小田2011、2012、2013、2020）。生き残りとしては、今回のような委託研究の形で、現在の神道考古学の考えにおつきあいをするとすれば、また新しい進展ができますよということがやっておきたいことなんです。

（14）戦争遺跡

小田：また、だんだんと戦争遺跡の研究がこのところ盛んになってきてますんでね、おそらく戦争遺跡の関係にここもかぶってくるんじゃないかと。砲台の跡もそうだし、岩盤をくりぬいた弾薬庫もありますよね。今、登ってる登山道、あれを造ったのは軍隊なんです。軍隊が作った道ですから、今だったら大変なお金がかかるんじゃないかと思います。あれで灯台まで上がるような道ができたんです。それがいまだに機能している。だから当時の軍隊というのは大変な仕事をしてましてね。私、朝日のセスナで雲南に行ったことがあるんですけども、雲南に行ったときに一番端っこの方は昔のビルマに近いところです、あの辺は確か久留米の方の軍隊が行って造った鉄道がありますよ。ミャンマー鉄道があるでしょう。戦争遺跡がまたいずれかかわってくるんじゃないかと思っています。

岡寺：そろそろ時間になりました。それでは、本日はこれで終了させていただきたいと思います。小田先生、長時間にわたり、本当に大変ありがとうございました。

（一同：ありがとうございました）

謝辞

本稿は令和元年から2年度の文化庁文化遺産総合活用事業で実施したデジタル・アーカイブ事業の成

果によるものである。本調査にあたっては、宗像大社、片山写真館はじめ長期にわたり多くの方々にご協力頂きました。記して感謝申し上げます。伊崎俊秋、飯田章人、飯田美智子、魚里洋一、岡 崇、岡部るい、小田富士雄、片山敬子、原俊一、福嶋真貴子、松川博一、松本将一郎

註

- (1) 本稿掲載写真のうち、第1次・第2次調査にかかる写真（写真3～8、11～22、25）は片山撰三写真撮影、第3次調査は松見守道、阿久井長則が撮影（写真9・10、23・24、26～30）。また掲載写真の一部は、世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群のデジタル・アーカイブであるMUNAKATA ARCHIVESの写真データベースで公開されている。<https://www.munakata-archives.asia/>
また本調査をもとに制作された動画「WHY OKINOSHIMA? Episode 1: Why is Okinoshima the island where the gods dwell?」が本遺産群の公式YouTubeチャンネルで公開されている。
なお、写真4・5のイラストはいずれも画像生成AI（Firefly）で作成。
- (2) 沖ノ島を発掘調査するに至るまでの経緯は、武藤正行1993『海の正倉院』に詳しい。
- (3) 第1次・第2次調査時の社務所と第3次調査時の社務所は別の建物、立地も異なる。本稿の「社務所」は第3次調査での「旧社務所」を指す。
- (4) 「正三位社前遺跡」は昭和47年（1972）の豪雨による土砂崩れにより消滅（宗像市・宗像大社2022、宗像大社1973社報『宗像』第150号昭和48年6月）。宗像市岡氏のご教示による。
- (5) 宗像市教育委員会2012『大島御嶽山遺跡』宗像市文化財調査報告書、第64集

参考文献

井上光貞1984『日本古代の王権と祭祀』東京大学出版会
小田富士雄編1988『古代を考える 沖ノ島と古代祭祀』吉川弘文館
小田富士雄2011「沖ノ島祭祀遺跡の再検討 ―4～5世紀宗像地方との関連で―」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」

研究報告Ⅰ』、2020『古代九州と東アジアⅢ』再録
小田富士雄2012「沖ノ島祭祀遺跡の再検討2」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅱ』、2020『古代九州と東アジアⅢ』再録
小田富士雄2013「沖ノ島祭祀遺跡の再検討3」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅲ』、2020『古代九州と東アジアⅢ』再録
小田富士雄2020「沖ノ島祭祀遺跡の再検討4」『古代九州と東アジアⅢ』同成社、2020『古代九州と東アジアⅢ』再録
小田富士雄2020『古代九州と東アジアⅢ』
小田富士雄2025「沖ノ島祭祀遺跡調査関係資料拾遺」『古文化談叢』九州古文化研究会
岡寺未幾 2020「「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究事業 二〇一九年度調査概要 四（三）片山写真館所蔵「宗像大社関連写真」について」『沖ノ島研究』第6号「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
岡寺未幾 2021「沖ノ島21号遺跡についての再検討（予察）―記録写真の分析から―」『沖ノ島研究』第7号「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
武藤正行1993『海の正倉院沖ノ島：よみがえる建国の神々』世界日報社
宗像市教育委員会2012『大島御嶽山遺跡』宗像市文化財調査報告書、第64集
宗像市教育委員会・宗像大社 2022『国指定史跡「宗像神社境内」保存活用計画 本編』
宗像神社復興期成会1958『沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』
宗像神社復興期成会1969『続 沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』
宗像神社復興期成会1970『沖ノ島 1 宗像神社沖津宮祭祀遺跡昭和44年度調査概報』
宗像神社復興期成会1971『沖ノ島 2 宗像神社沖津宮祭祀遺跡昭和45年度調査概報』
宗像大社復興期成会1979『宗像 沖ノ島』吉川弘文館

宗像市内における須恵器脚付短頸壺の新出資料

太田 智 宗像市世界遺産課

要旨：須恵器脚付短頸壺は、これまでの研究で韓国嶺南地域南西部（特に小加耶周辺）が故地であること、分布が宗像・遠賀川流域に集中すること等が判明しており、今日では宗像地域の特徴の一つともされる。しかし当時は資料数も少ないうえ、分布の集中域とされた宗像地域の良好な出土例がほとんど公表されておらず、型式の設定などにも課題を残していた。そこで本稿では宗像市内の未公表資料のうち、完形復元できる6個体を紹介し、改めて検討を加えた。その結果、故地や分布域等はおおむね従来通りだったが、遠賀川流域と宗像地域では施文の種類と配置が異なる傾向があり、各々小地域色がみられるほか、加耶圏域のデザインを踏襲する系統とは別に、高坏形器台などの在地の長脚を組み合わせた系統も一定数存在することが明らかとなった。

キーワード：古墳時代、宗像地域、遠賀川流域、須恵器、脚付短頸壺、地域間交流

1. はじめに

脚付短頸壺は、宗像から遠賀川流域にかけて分布が集中し、6世紀後半に主に小加耶のものを祖形として創出させた器種とされる（牛嶋1998、寺井2012、太田2016）。今日ではその分布が地域間交流の範囲の一端を示すとされ、実際に成果が上がっている（太田・椎葉2020など）。

しかし、当時は検討できる資料が少なく、これが原因で型式学的検討も不十分と言わざるを得ないのが現状である。そこで今回は宗像市内の未公表資料のうち、完形復元可能な6個体を紹介し、改めて脚付短頸壺の検討を行う。

2. 資料の紹介

（1）野坂中松元31号墳（図1-1・5）

野坂中松元31号墳では2点出土する。このうち1は高さ18.6cm、最大幅5.9cmを測る。胴部下半は内面に当て具痕と外面にタタキ痕を残し、上半は回転ナデののち外面にカキメを巡らせる。肩部には刺突文を上下2段にわたって施す。5は破片だったが、接合した結果脚付短頸壺とわかった。1よりもやや大きく、高さ24.3cm、胴部最大幅19.5cmを測る。製作技法は1と同様だが、肩部の刺突文の様相や、脚部

中途に沈線を2条巡らせる点が1と異なる。

（2）久原Ⅲ-1号墳（図1-2）

2は口縁部が欠損するが、蓋の焼成痕跡から脚付短頸壺と判断した。全体的にカキメを巡らせる半面、施文等はみられない。

（3）久原Ⅳ-21号墳（図1-3）

3はほぼ完形で、高さ23.2cm、胴部最大幅20.7cmを測る。脚部下半の大きく屈曲しながら端部に至る形態が特徴的だが、製作技法はやはり1や5などと同じで、肩部には沈線で区画した上部に刺突文を、脚接合部付近と脚部下半に刺突文を巡らせる。

（4）平等寺原1号墳（図1-4）

4は復元すると高さ37cmとかなり大型で、脚部が異常に長い点で他とは一線を画す。脚部は沈線で区画したのち長方形透窓を三段にわたって施し、その間を刺突文がめぐる。肩部も沈線で区画した上部に刺突文を巡らせる。製作技法は他と同じである。

（5）大穂町原3号墳（図1-6）

6は歪みが激しい。高さ20.6cm、胴部最大幅19.8cmを測り、製作技法は他と同じだが、施文がなく、胴部は全体的にカキメが巡る。

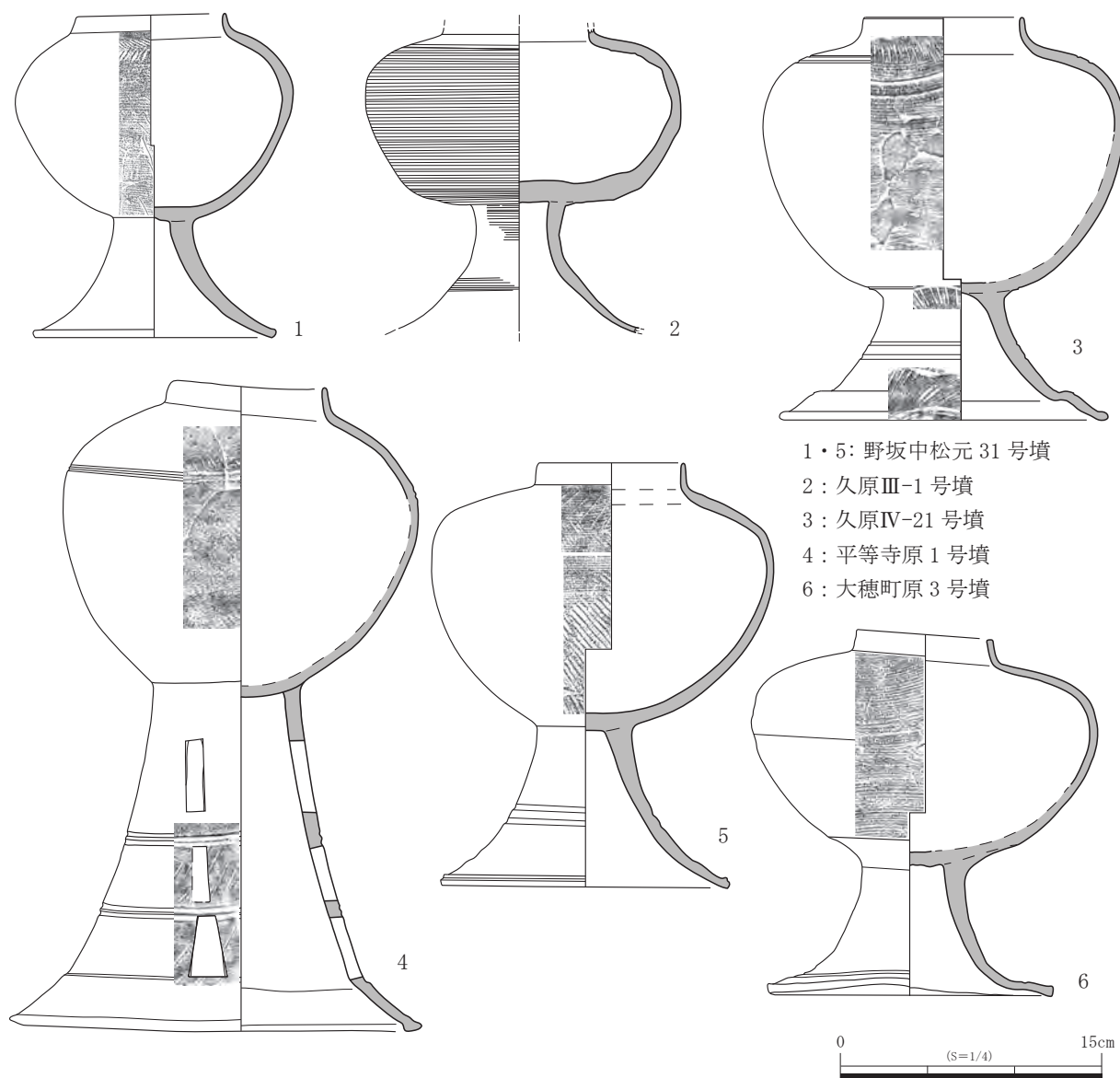


図1 宗像市内出土須恵器脚付短頸壺（新出資料）（S =1/4）

3. 脚付短頸壺の再検討

（1）先行研究

ここで一度既往の成果を確認しておく。まず牛嶋英俊氏は脚付短頸壺の基礎的な研究を進め、分布が宗像・遠賀川流域に偏り、ⅢB～V期という比較的短期間に副葬品として使用されたことを指摘し（牛嶋1998）、寺井誠氏は小加耶周辺の土器が祖形となった可能性を指摘した（寺井2012）。筆者も朝鮮半島各地と日本の脚付短頸壺を比較検討し、寺井氏らと同様の結論に至った（太田2016）。しかし、型式の設定では分類基準があいまいな部分があり、施文や

製作技法等もあまり考慮されていなかった。具体的には変化に乏しく客観性が担保しにくい口縁部形態や胴部の形態を取り上げている反面、なぜか法量や施文の検討が行われていないなどの点である。資料数が少ない中で今回紹介した6個体は貴重である。これらを含めて改めて検討してみよう。

（2）各属性の分類と相関

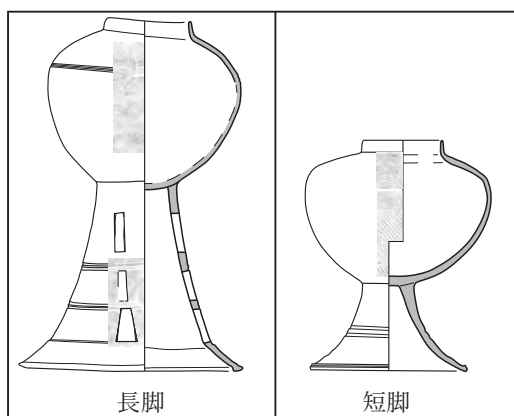
a. 分類（図2・表1）

まず全体的なプロポーシオンから短脚型と長脚型に分けておく。また最も差異が大きい脚部形態も湾曲するものとそうでないものに大別する。胴部は形

表 1 脚付短頸壺一覧表

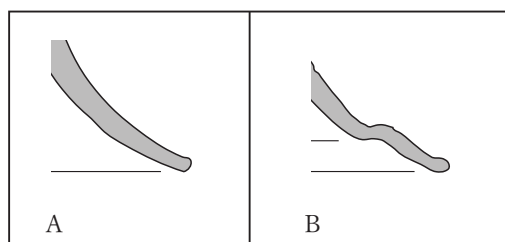
番号	所在地2	遺跡名	器高	脚高	胴部 最大幅	プロポ ーション	脚部 形態	施文 肩部	脚接合部	脚部	透窓
1	宗像市	平等寺向原Ⅱ-7号墳	23.8	6.4	21.8	短脚	A	刺突文2段	刺突文1段	無	無
2	宗像市	朝町竹重119号墳	—	—	—	短脚	B	刺突文2段	無	無	無
3	宗像市	大穂町原3号墳	20.6	7.1	19.8	短脚	B	無	無	無	無
4	宗像市	大穂町原1号墳	—	—	—	短脚	A	刺突文2段	無	無	無
5	宗像市	城ヶ谷3号墳	—	—	—	短脚	—	無	無	無	無
6	宗像市	城ヶ谷13号墳	—	—	—	短脚	—	無	無	無	—
7	宗像市	城ヶ谷18号墳	—	—	—	—	—	無	無	無	—
8	宗像市	平等寺原1号墳	37	20	20.4	長脚	A	刺突文1段	無	刺突文2	長3段
9	宗像市	久原Ⅲ-1号墳	18	—	—	短脚	—	無	無	無	無
10	宗像市	久原Ⅳ-21号墳	23	7.6	20.7	短脚	B	刺突文1段	刺突文1段	刺突文1	無
11	宗像市	野坂中松元31号墳	18.6	6.8	15.9	短脚	A	刺突文2段	無	無	無
12	宗像市	野坂中松元31号墳	24.3	9.2	19.5	短脚	A	刺突文2段	無	刺突文1	無
13	福津市	新原・奴山1号墳	24.8	9	21.8	短脚	B	—	刺突文2段	無	長1段
14	福津市	津丸横尾3号墳	20	6	8.6	短脚	A	無	無	無	長2段
15	福津市	手光南2号墳	—	—	—	短脚	—	刺突文2段	刺突文1段	刺突文1	長2段
16	福津市	手光南2号墳	—	—	28.6	—	—	刺突文2段	—	—	—
17	宮若市	都地遺跡 溝・土盛状遺構	23.6	8.4	18.6	短脚	A	刺突文2段	無	無	長1段
18	宮若市	高平1号墳	18.6	8.8	19	短脚	A	刺突文2段	無	無	無
19	鞍手町	古月C-5・D-2号横穴	19.6	5.2	19.8	短脚	A	刺突文2段	無	無	無
20	鞍手町	小牧西牟田B11号横穴	—	13.4	24	短脚	A	無	無	無	長1段
21	宮若市	向畑1号墳	—	—	24.2	長脚	—	無	無	無	有
22	宮若市	向畑2号墳	20.1	6.1	20.2	短脚	A	波状文3段	無	無	長1段
23	宮若市	小原7号墳	—	8	21.8	短脚	A	波状文3段	無	無	無
24	宮若市	損ヶ熊1号墳	30.8	8.8	18.6	短脚	B	刺突文1段	無	無	長2段
25	宮若市	小原1号墳	27.8	11.6	19.2	短脚	B	刺突文1段	無	無	長2段
26	宮若市	金丸西の浦古墳	20.6	6.2	20.4	短脚	A	刺突文4段	無	無	無
27	遠賀町	鳥見山遺跡群43Tr	21.5	7.4	7.2	短脚	A	無	無	無	無
28	岡垣町	東田8号墳	25	10	21	短脚	B	刺突文1段	無	無	長1段
29	岡垣町	縄手3号墳	—	—	19.2	短脚	B	刺突文1段	無	無	長1段
30	岡垣町	山田沖1号墳	24	10.5	19.2	短脚	A	無	無	無	無
31	岡垣町	高倉4号墳	25	12	17.1	短脚	A	—	—	—	長2段 円1段
32	岡垣町	菟ギ坂1号墳	25	7	21.4	短脚	A	無	無	無	三1段
33	大任町	狐塚Ⅰ-6横穴	—	33.2	25.8	長脚	A	波状文2段	無	波状文5 段以上	長1段 三1段
34	北九州	日明一本松塚古墳	23	8	20.4	短脚	B	刺突文3段	無	無	無
35	北九州	日明一本松塚古墳	19.2	6.6	18.4	短脚	A	刺突文1段	無	無	長2段
36	飯塚市	平原古墳	—	—	20.6	短脚	—	刺突文4段 波状文2段	無	無	—
37	飯塚市	小池14号横穴	22.6	8.8	19.6	短脚	B	波状文1段 刺突文2段	無	無	無
39	飯塚市	城腰5号横穴墓道A群	19	4.2	18.9	短脚	B	刺突文4段	—	—	無
38	飯塚市	西ノ浦上2号墳	—	—	—	長脚	—	—	—	波状文	三3段
40	嘉麻市	新行坊古墳	16.8	12	16	短脚	A	刺突文1段	無	無	長2段
41	桂川町	瀬戸5号墳	26.2	10.2	20.8	短脚	B	刺突文5段	無	無	無
42	宇美町	宇美観音浦KS1号墳	—	4.2	—	短脚	A	無	無	無	無
43	宇美町	宇美観音浦KS12号墳	20.8	7	19.8	短脚	B	刺突文3段	刺突文3段	無	無
44	福岡市	鋤崎A-5号墳	—	—	18.4	—	—	無	無	無	—
45	福岡市	高崎2号墳	20.6	6.6	12.2	短脚	A	無	無	無	無
46	福岡市	元岡G-1号墳	19.8	6.4	18.6	短脚	A	刺突文2段	無	無	無
47	福岡市	広石Ⅰ-1号墳	17	6.6	15	短脚	B	無	無	無	無
48	福岡市	堤ヶ浦7号墳	—	—	17.6	—	—	無	無	無	—
49	福岡市	堤ヶ浦10号墳	26.4	4.8	23.4	短脚	A	無	無	無	無
50	前原市	坂元1号墳	—	—	20.4	—	—	—	無	—	—
51	筑紫野	剣塚遺跡	24.6	9.8	21.6	短脚	B	無	無	無	三1段
52	八女市	釘崎3号墳	23.8	8.2	21.6	短脚	A	刺突文2段	無	無	無
53	久留米	内畑古墳	—	7	—	短脚	B	刺突文2段	無	無	無

※旧筑前～筑後まで対象



プロポーションの分類

図2 各属性の分類



脚部の形態

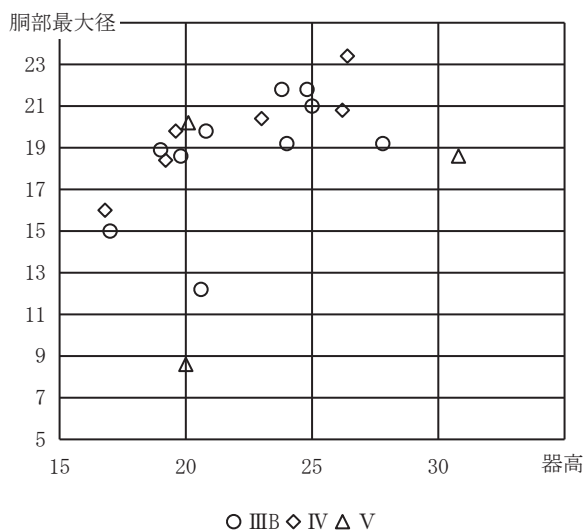


図3 器高と胴部最大幅、時期との関係

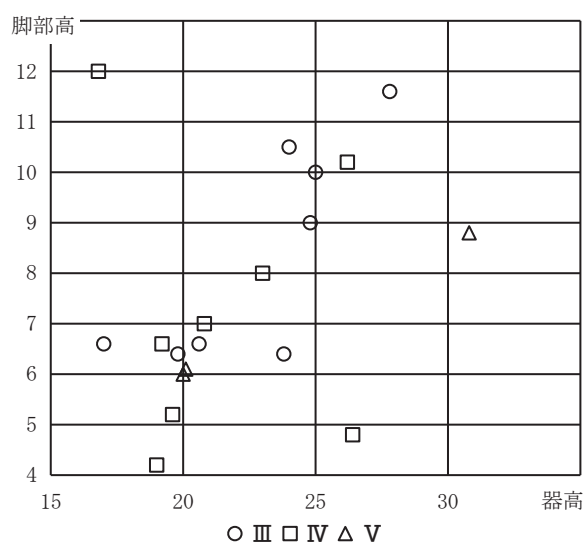


図5 胴部高と脚部高、時期との関係

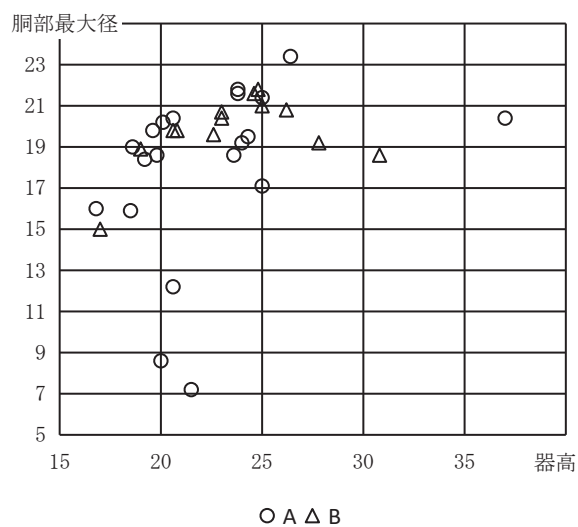


図4 器高と胴部最大幅、脚部形態との関係

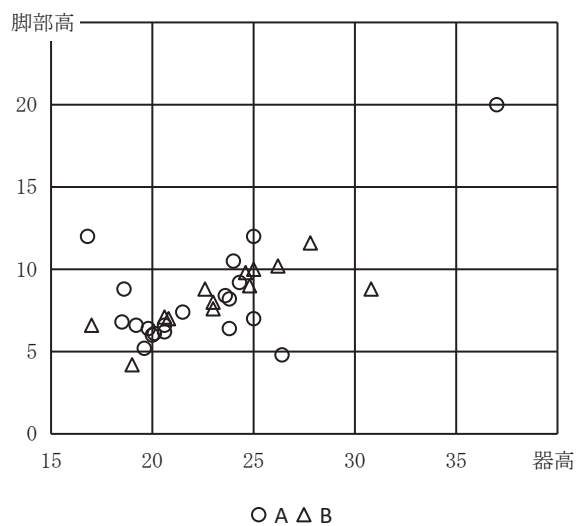
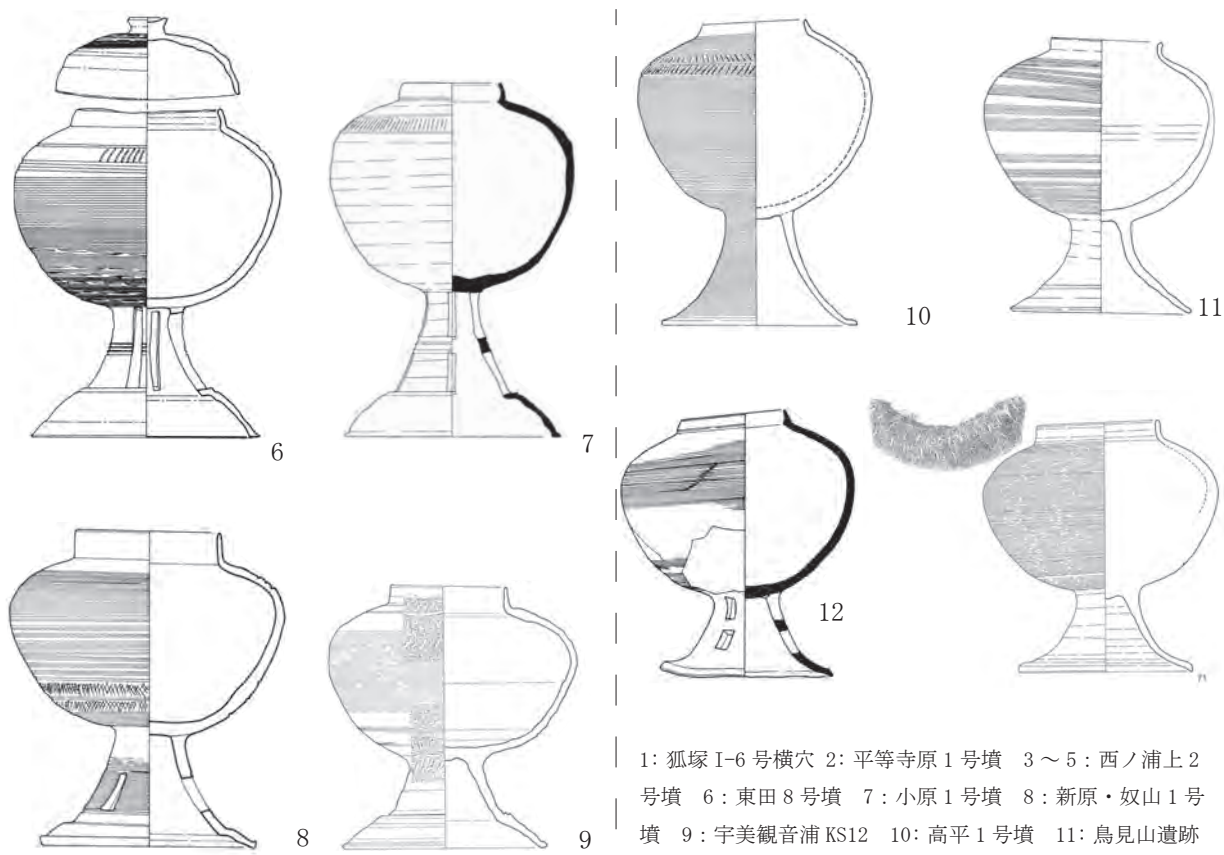
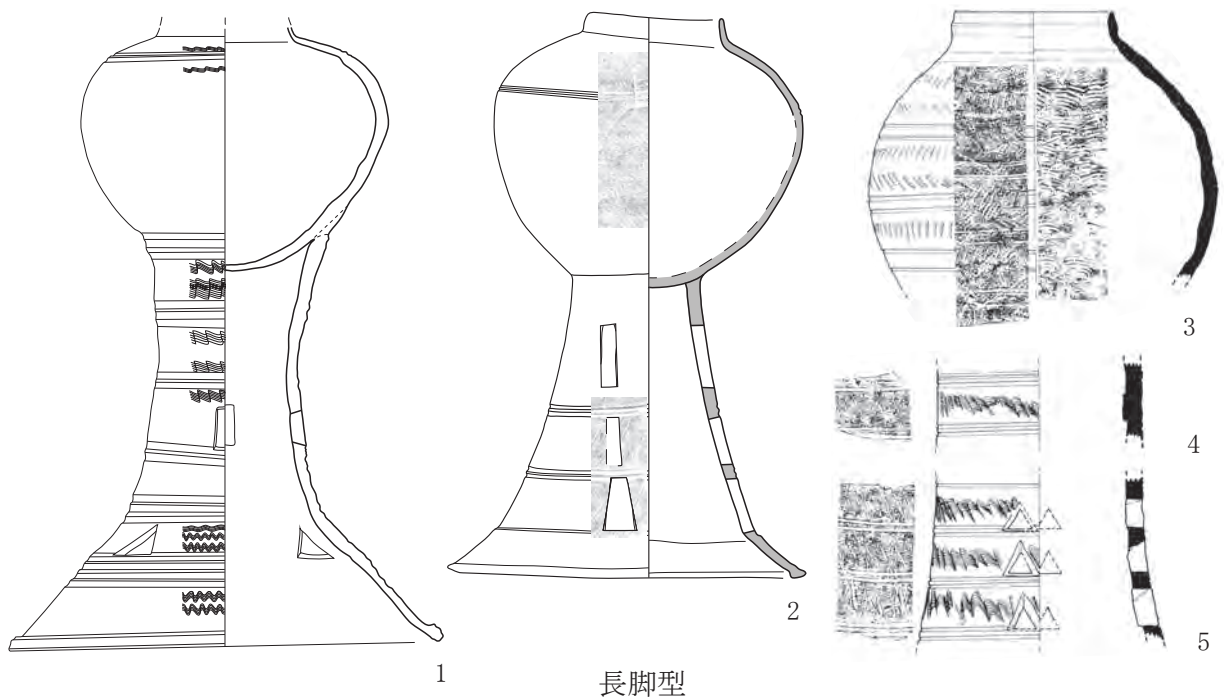


図6 胴部高と脚部高、脚部形態との関係

表2 脚部形態と時期

	III B	IV A	IV B	V
A	5	4	1	2
B	8	1	2	1



1: 狐塚 I-6 号横穴 2: 平等寺原 1 号墳 3~5: 西ノ浦上 2 号墳 6: 東田 8 号墳 7: 小原 1 号墳 8: 新原・奴山 1 号墳 9: 宇美観音浦 KS12 10: 高平 1 号墳 11: 鳥見山遺跡群 43 トレンチ 12: 津丸横尾 3 号墳 13: 元岡 G-1 号墳

0 (S=1/6) 20cm

図 7 脚付短頸壺の諸例 (s=1/6)

態的な差異が最も小さく分類も難しいので、胴部最大径と器高・脚部高など各部の法量、全体のプロポーシオンから見極める。施文は基本的に刺突文と波状文の二種類が確認できる。施文の位置・配置等を表1のように表記した。

b. 各属性の相関

まず全体のプロポーシオンをみると(図3)、どの個体もやや縦長のプロポーシオンをもつ点で共通する。器高はおおむね20~30cm台におさまリ、そのプロポーシオンの縦横比もある程度共通する。しかし時期ごとの傾向をみると、各期とも分布範囲が重複しており、プロポーシオンの違いが時期差を表すわけではなさそうである。また、脚部との相関関係をみても(図4)、一見して明瞭に相関していない。

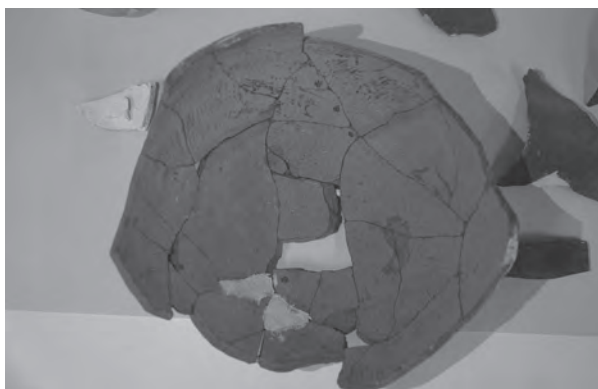
次に胴部高・脚部高と各属性の関係をみる(図5)。バラつきはあるものの、基本的には脚部高は胴部高の三分の一ほどしかない場合が多く、寸胴な印象を与え、先の胴部最大幅とあわせてプロポーシオンにある程度のまとまりがある。しかしこれと時期の関

係をみると、図3と同じく時期差を示しておらず、これは図6の脚部形態の相関も同様である。一方、時期差を示す可能性があった脚端部形態も、表2に示すように各期ともに存続しており、単純な時間差というよりは、むしろ時期以外の系譜や工人の系統の差を示すとみられる。

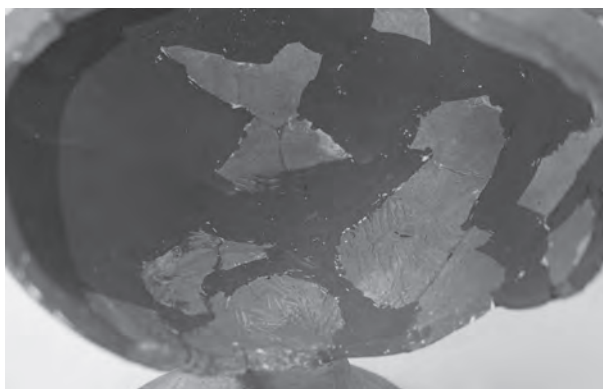
このように、脚付短頸壺は他の大量生産品と違い、各属性があまり相関せず型式変化に一定の傾向がみられず、分類も難しい。理由は後述するが、ここではおおまかに以下の通りに設定するにとどめておく。

(3) 各型式の設定と特徴(図7)

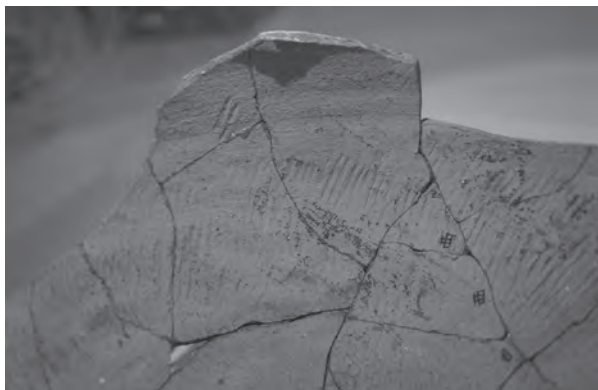
長脚型：胴部高よりもはるかに高い脚部が付くもの。脚部に透窓と施文を複数段巡らせる点では共通するが、各資料の法量はバラつきが大きいほか、施文・透窓の配置もさまざまである。現状では類例が少なく、完形復元できるものも今回報告した平等寺原1号墳例のみである。このうち西ノ浦上2号墳例



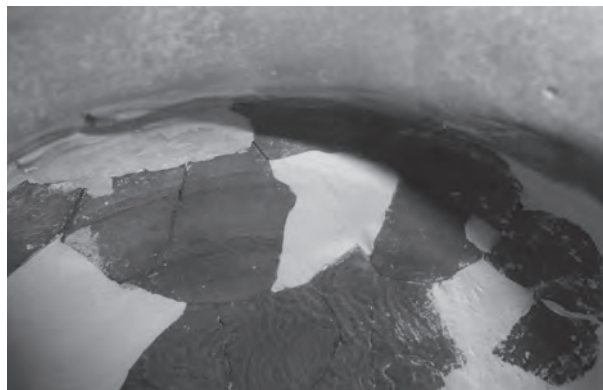
野坂中松元 31 号墳①



前畑古墳



野坂中松元 31 号墳②



菟が坂 1 号墳

図8 脚付短頸壺の製作技法

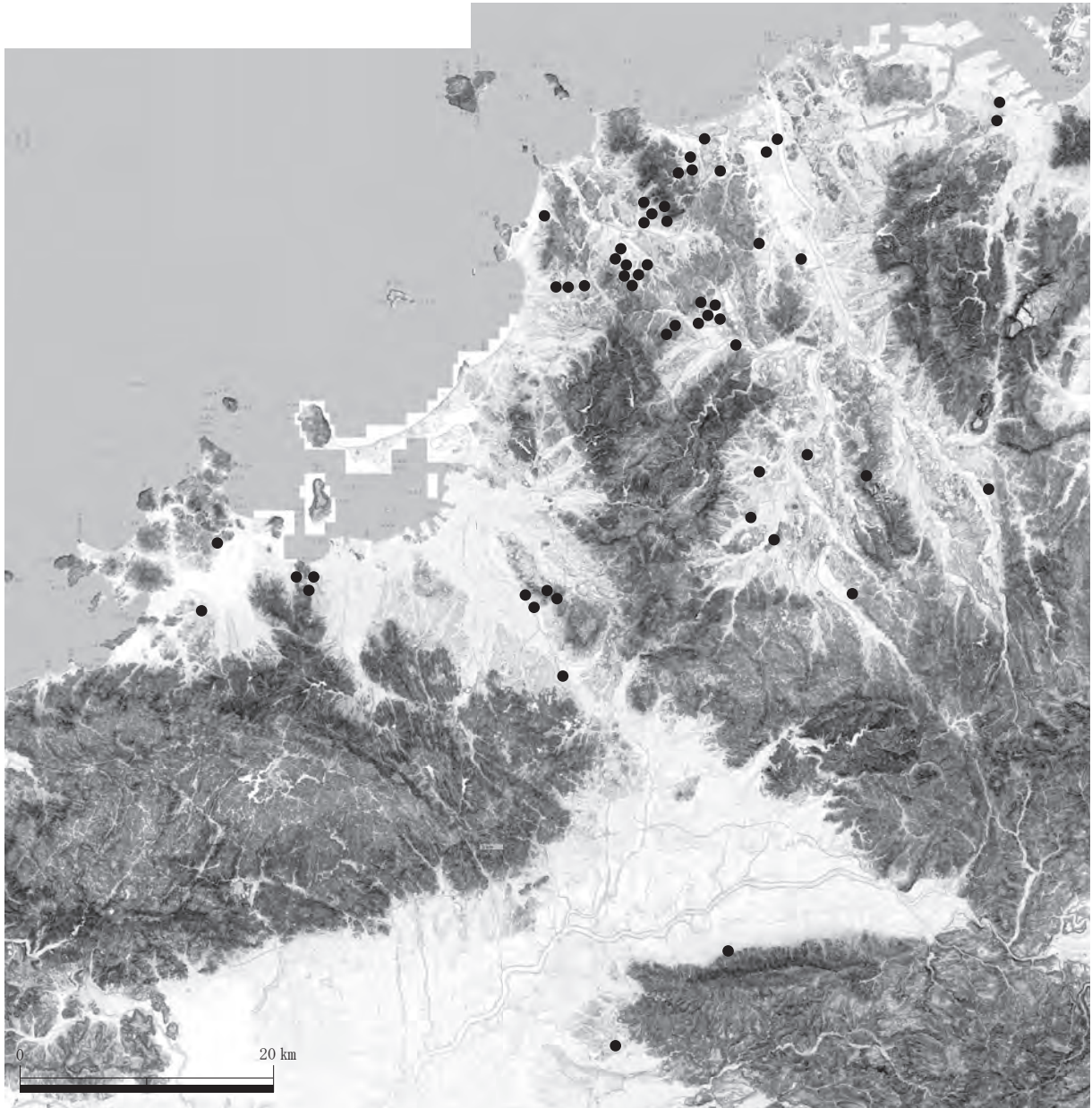


図9 脚付短頸壺の分布

はⅢB期だが、他は不明で、どこまで存続するかは分からない。

短脚型：胴部高よりも低い脚部が付くもので、脚部形態から2者に分かれる。

短脚型A類：脚端部までラップ状に開くものの一群。施文は有文と無文が混在しており、前者は刺突文が大半で、その配置は肩部1～2段が基本である。透窓もあるものとなないものが混在するが、特定の属性と相関するわけではない。

その出現は平等寺向原Ⅱ-7号墳等のⅢB期まで

さかのぼり、以後津丸横尾3号墳のV期ごろまで存続する。

短脚型B類：脚部途中で段を設けて湾曲させ端部に至るものの一群。施文は有文と無文が混在しており、前者は刺突文が大半で、その配置は肩部1～2段が基本である。透窓もあるものとなないものが混在するが、特定の属性と相関する傾向はない。

その出現は東田8号墳例等のⅢB期までさかのぼり、以後損ヶ熊1号墳のようなIVB～V期ごろまで残る。古墳からの出土が主だが、装飾古墳の損ヶ

熊1号墳や日明一本松塚古墳のような首長墓から、朝町竹重119号墳のような一般的な古墳まで、階層を選ばず用いられる。

また、各型式の製作技法は共通しており、基本的にタタキ技法で成形し、上半部はカキメまたは回転ナデで整える(図8)。回転ナデを主とする通常の小型短頸壺とは製作技法が異なる。

一方、遠賀川流域では波状文を主体とする一群や、瀬戸5号墳、城腰5号横穴墓墓道、金丸西の浦古墳など4段以上施文する例が複数あり、これらの特徴は宗像地域ではみられない(図10)。少数で細分できないが、宗像・遠賀川流域には施文種類と配置で小地域差が存在する。

(4) 分布

図9で示した通り、やはり分布は宗像から遠賀川流域にかけて集中する。このうち宗像地域では城山から派生する丘陵一帯にまとまって分布する一群と、南部の一群のそれぞれでまとまりがみられる。前者は宗像窯跡群の「城山支群」に隣接しており(太田2023)、ここからの製品がもたらされているとみられる。一方、宮若市犬鳴川流域でも数がまとまっているのが注目され、宗像産製品の可能性のほか、未知の窯もあるかもしれない。

一方、遠賀川流域も数がそろいが、注目されるのが先述した施文の地域性である。このうち波状文を施す例は井出ヶ浦窯跡群の小型短頸壺にも多くみられるので井出ヶ浦産の脚付短頸壺が含まれる可能性が高い。

このほか、早良平野西部から糸島半島でもまとまりがみられる。一帯からは脚付短頸壺だけでなく脚付甕や垂耳状口縁甕、宗像系土師器高坏などもまとまり、移住を含む人的交流が古墳時代から行われていたことを傍証する(太田・椎葉2020など)。御笠川右岸の丘陵部でもまとまりがみられ、このうち堤ヶ浦6号墳から脚付甕が出土しており、こちらも彼我の地域間交流を示す資料として注目される。

(5) 脚付短頸壺の系譜

寺井2012、太田2016では小加耶の陶質土器を祖形

としており、本稿でも短脚型については、これを追認する。これは近年東田8号墳例の脚付短頸壺と共伴していた刻目釦が加耶南西部系であることが判明した点と矛盾がない(太田2022)。問題は長脚型で、ここまで長脚の資料群は朝鮮半島にはみられず、系譜がたどれない。ここで脚部に注目すると、沈線で区画する点やその間を透窓や施文で加飾する様相は高坏形器台や筒形器台、脚付の装飾付須恵器の様相と似ている。実際に西ノ浦上2号墳例では短頸壺と共伴して高坏形器台や装飾付須恵器などが多く出土したほか、宗像地域にも多い。このことから長脚型は小加耶のデザインに、在地の脚付器種の意匠を組み合わせることで創出した系統と考えられる。

4. まとめ

以上の検討結果を下記に示す。

①先行研究では宗像・遠賀川流域に偏在するとされつつ、宗像地域は資料数が少なく疑問符が付いていた。今回未報告資料を探索したところ、現状完形復元できるものが6点、今回紹介していないものも含めると相当数存在し、分布に関する先行研究の指摘が正しいことを追認できた。

②今回4型式に分類したが、いずれもⅢB期からV期まで同時併存しており、各属性等にも一定の時間的な傾向が見られない。

③施文のうち、宗像地域では基本的に肩部は刺突文1～2段構成が基本だが、遠賀川流域では波状文を巡らせる資料や、4段以上の例が複数存在し、一部は井出ヶ浦窯跡群産の可能性が高く、施文の種類や配置が小地域色を示すことが分かった。

④分布は従来通りだが、早良平野西部～糸島、御笠川流域の一部にまとまりがあり、これらは地域間交流の一端を示すとみられる。

⑤その系譜は、短脚型は従来の指摘通り小加耶である。ただし長脚型については朝鮮半島には見られない点、同時期の高坏形器台や脚付壺等と類似する点から、小加耶のデザインに在地の脚付器種を組み合わせることで創出させたものと考えられる。

なお、本稿作成に当たっては向井浩太・西依由里

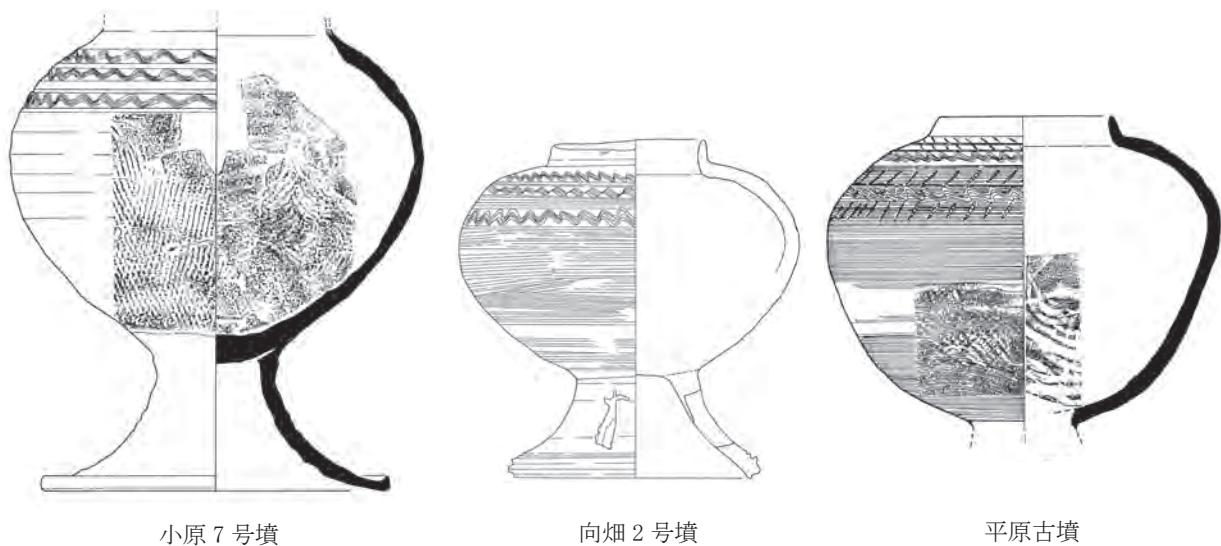


図 10 井出ヶ浦窯跡群周辺の脚付短頸壺 (S=1/4)

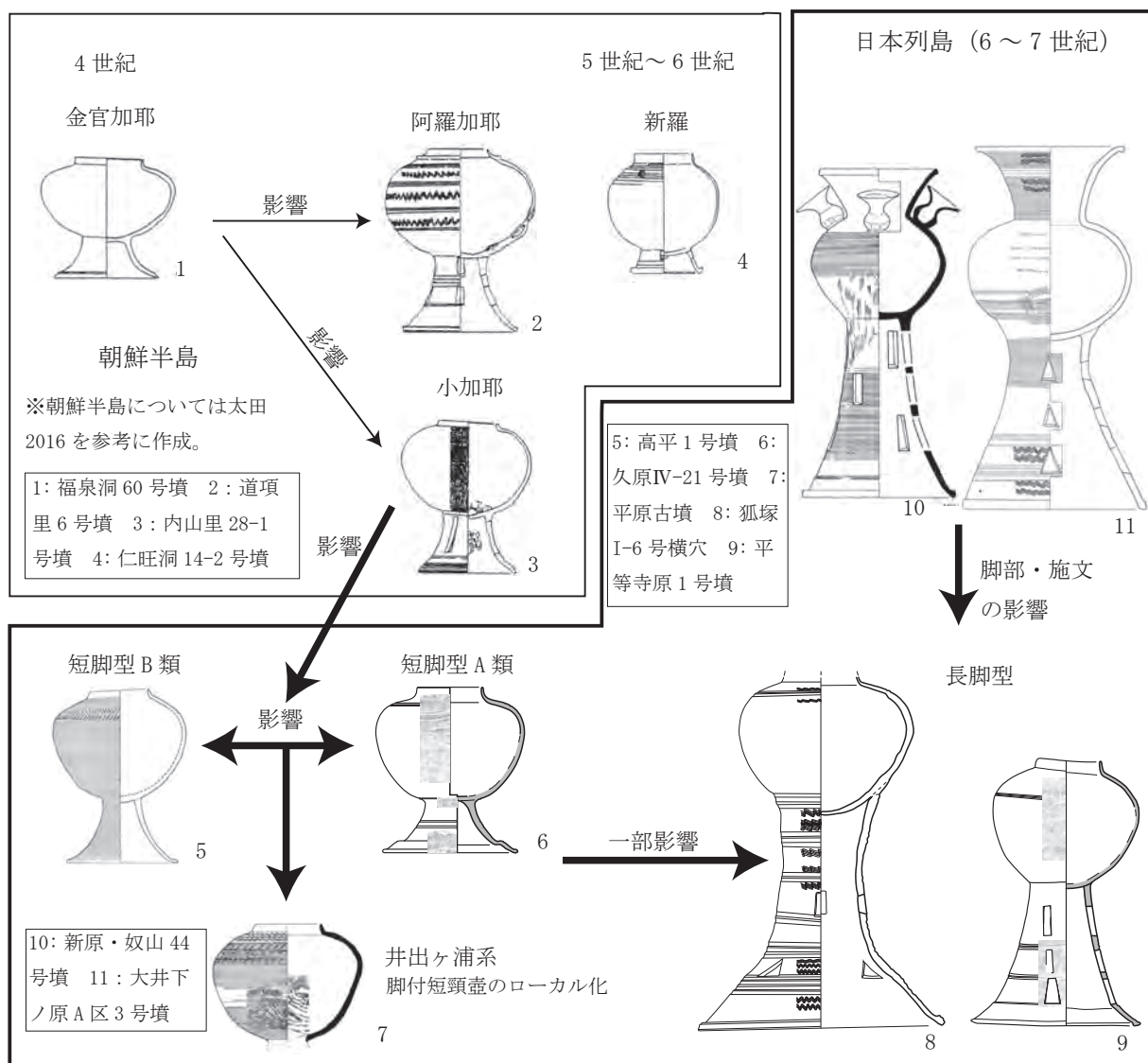


図 11 脚付短頸壺の軌跡 (縮尺任意)

香に資料の調査等で少しお手伝いいただいた。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 牛嶋英俊 1998 「大型脚付短頸壺について」『小原古墳群』若宮町文化財調査報告書第15集、若宮町教育委員会
- 太田 智 2016 「脚付短頸壺考」『七隈史学』第18号、七隈史学会
- 太田 智・椎葉 実郁 2020 「福岡市広石Ⅱ-2号墳出土須恵器の再検討」『七隈史学』第22号、七隈史学会
- 太田 智 2022 「三国・古墳時代の金属製刻目釦」『七隈史学』第24号、七隈史学会
- 太田 智 2023 「朝町木山遺跡・山田棒ノ尾遺跡・山田井ノ上遺跡の窯資料」『宗像市史研究』第6号、新修宗像市史編集委員会
- 寺井 誠 2012 「6・7世紀の北部九州出土朝鮮半島系土器と対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』、九州前方後円墳研究会

図版出典

- 図1-1・3・4・6、図7-2：筆者実測・拓本・トレース
- 図1-2・5：実測図を一部改変トレース 図2～図6：筆者作成 図7-1：大任町1976-1集を再トレース 図7-3～5：太郎丸遺跡調査会1987より転載 図7-6：岡垣町1976より転載 図7-7：若宮町1998-15集より転載 図7-8：津屋崎町1981-3集より転載 図7-9：宇美町1981より転載 図7-10：福岡県1979-若宮宮田1集より転載 図7-11：遠賀町2017-21集より転載 図7-12：福岡町1997-11集 図7-13：福岡市2019-1381集より転載 図8：筆者撮影 図9：国土地理院地図を基に筆者作成 図10-1：若宮町2003-19集より転載 図10-2：宮田町2005-6集より転載 図10-3：飯塚市2013-44集より転載 図11-1～4：太田2016から転載 図11-10：津屋崎町2003-20集より転載 図11-11：宗像市2018-75集より転載

筑前国の灯籠堂と急用丸格納庫

佐藤 正彦 九州産業大学名誉教授

要旨：本稿は、江戸時代の筑前国の灯籠堂と急用丸の格納庫についてその構造形式を解明した。灯籠堂は、船舶の航行の安全を守るための施設で、中に行灯（火袋）を置く。灯台の前身である。取り扱った灯籠堂は、全て船舶から確認しやすい筑前国の沿岸や玄界灘の島々に建つ。鐘崎・相（藍）島・地島・勝馬（志賀島）・岩屋（現在北九州市戸畑区）の5箇所に設置されていた灯籠堂を取り上げた。

灯籠堂の広さは、平均1坪5合7勺（5.18㎡）である。最大は相島の2坪3合（7.59㎡）、最少は勝馬（志賀島）と岩屋の1坪（3.3㎡）である。灯籠堂は高い石垣上に建つ。控柱を四隅に付けるのは海風の強いところに建つ灯籠堂にとっては重要なことで、倒壊予防のための知恵である。

構造は、土台上に、角柱をたて、桁や梁を受ける。土台に火打を付ける場合もある。一面に片引き板戸の出入口を設け、三面は腰高窓に上下の板戸を立てる。内部の踏み込みは土間で、他は板張り床の化粧屋根裏である。四隅に控柱を大栓と足下貫で付ける。屋根は瓦葺きで漆喰の露盤宝珠が付く。灯籠堂の維持管理は遠見番所の仕事であった。

急用丸（早船）の格納庫は、桁行45尺（13.64m）梁間2間半（4.55m）、切妻造、茅葺き、妻入りで、出入口は竹の両開き戸が付く。柱は礎石上に立ち、板壁で、床は土間、化粧屋根裏である。四隅と桁行中央に控柱が付く。柱は全て控柱も含めて丸太材で、梁は全ての柱位置に掛り、叉首構造である。

キーワード：灯籠堂、行燈、急用丸格納庫、構造形式、江戸時代

はじめに

灯籠堂は、江戸時代の灯台である。神社境内にある石灯籠ではない。どちらも夜間の道しるべであるが前者は、船舶の航行安全を目的とする。筑前国（福岡藩）の灯籠堂と急用丸格納庫を掲載するのは、九州歴史資料館所蔵福岡県史編纂史料〔林（美）家文書〕No.122『嘉永七寅年五月改／浦嶋遠見番所燈籠堂急用丸上家共図／林武』である（以後『指図』と略記する）⁽¹⁾。末尾の「林武」は、文政8年（1825）太宰府市の観世音寺大講堂を建立した大工棟梁林武四郎の略称なのか別人なのか即断できない。しかしながら、〔林（美）家文書〕No.69『乍恐奉願上口上之覚』は、嘉永7年（1854）に「簀子町組頭大工武四郎」が「大野藤左衛門様と寺嶋喜右衛門様」宛てに「倅佐平大工職執行につき、御帳面差加願」を記しているので、略称とみるのが妥当であろう。ちなみに、嘉永7年と文政8年では29年の差がある⁽²⁾。

『指図』には、筑前国の鐘崎・相（藍）島・地島・

勝馬・岩屋の5箇所に設置されていた灯籠堂の平面図や断面兼立面図（建地割図）の他に簡単な仕様書がある。

灯籠堂が設置された場所は鐘崎と勝馬（志賀島）を除いて遠見番所が置かれていた。遠見番所については、別稿を予定している。また『指図』には、急用丸の格納庫の平面図と建地割図と簡単な仕様書がある。これらから、本誌No.11号に掲載した地島にある「急用丸上家」（写真10）の規模形式が推測できる⁽³⁾。「急用丸上家」は、急用丸格納庫の鳥瞰図である（写真11）。ちなみに地島の急用丸格納庫は現存しない。5箇所の灯籠堂もない。

本稿は、『指図』と仕様書および鳥瞰図などを参考にして、筑前国（福岡藩）の灯籠堂と急用丸の格納庫についてその規模や構造形式を解明することを目的とした。

1 灯籠堂

『指図』によって、灯籠堂をまとめたのが表1である。表1によれば、5箇所の灯籠堂の建坪の平均は約1坪5合7勺(5.18㎡)であるから、4畳弱である。最も広いのは、No.2相(藍)島の灯籠堂で、9尺1寸四方の2.3坪である。最も狭いのは、No.4勝馬とNo.5岩屋(北九州市若松区)の灯籠堂で、どちらも1坪である。

灯籠堂は、中に行灯を置き、夜間の船舶の航行を助けた。行灯は火袋ともいわれ、油を燃やしていた。油の種類は確言できないが、地島では椿油を生産していたので、使われていたかも知れない。火の番をかねていずれのところにも1人の灯籠番を配置していた。例えば、文政6年(1823)時には、相島灯籠番稲光文助、地島灯籠番中村又右衛門、鐘崎浦灯籠番九平、志賀島灯籠番1人(姓名未詳)である⁽⁴⁾。

(1) 鐘崎灯籠堂

鐘崎には、『続日本紀』神護景雲元年(767)8月の条に、僧壽應の進めにより「船瀬」を造ったとある。すなわち、防波堤である。『筑前国続風土記附録』(以下『続風土記附録』と略記する)中巻に、寛喜3年(1231)に波止が築かれたことが記されているので、その頃には灯籠堂も設けられたことであろう。『筑前国続風土記拾遺』(以下『続風土記拾遺』と略記する)中巻の「鐘岬」に「山の後、岩岸の上に通路指南の燈籠堂あり」とみえる。

鐘崎は、宗像市にあって、金崎・金埼・鐘の御崎とも書いた。玄界灘に面した鐘の岬に灯籠堂があったことになる。

『指図』に鐘崎灯籠堂の平面図と建地割図がある(写真1)。図面では全ての部材の寸法を必ずしも記入していないので必要な部分をここで示す。それによれば、各々の灯籠堂の大きさは相島と地島が大きく他はほぼ同じで構造は大差ないことがわかる。

鐘崎灯籠堂は平面図によれば、「六尺八寸四方」、すなわち、方6尺8寸(2.03m)の宝形造、棧瓦葺きである。出入口は南東角にあって、「戸一」と記すので、片引きもしくは片開き板戸と考えられるが、

二重線に描くので、次項の相島の灯籠堂の仕様に「引戸」とあるので、引き戸であろう。出入口の大きさは「入口鴨居内法四尺六寸巾二尺五寸」であるから、高さ四尺六寸(139.4cm)、巾二尺五寸(75.6cm)である。出入口のある南東面が板壁でその他は腰板壁に「掛戸二」と「引上ゲ戸」と記すので、上部を掛戸(折れ釘などに掛ける板戸)に、下部を引き上げ戸にする腰高窓を正面(南東面)以外の三面に付ける。四隅に控柱が付く。控柱の大きさは、建地割図から「末口五寸、長老丈」で身舎柱に大栓止めにし、足下貫を付ける。本体の柱は礎石に土台上に立つが控柱は掘立である(図1を参照)。

内部は踏み込み土間があって、板張り床に行灯を置いていた。土間の東隅に「込板」と記すので、土間の両側は巾木付き羽目板壁である。『指図』の建地割図は背面(北西面)を描く。

行灯(火袋)の大きさの記載がないけれども、相島の灯籠堂に、「同燈籠堂地指図行灯」があって、平面図と立面図と共に仕様書を記すので、次項(写真2)で触れるが、行灯は2尺4寸(72.7cm)四方で、高さ3尺2寸(97.0cm)である。屋根の上部に「上戸」がついていた。この場合の「上戸」は蓋の意味であろう。

鐘崎灯籠堂は、享和2年(1802)9月晦日22時前後に小火を出したことが次の記録でわかる。

『玄海町史話伝説』に「『黒田文書』「郡町浦御用帳」の中に「燈籠堂が小火を起こした報告、処置の記録もあります。享和二年(一八〇二)壬戌十月十四日/鐘崎浦 庄屋/組頭 当浦岬燈籠堂、先月晦日夜四つ頃燃え居り候を(中略)灯籠番清作一同早速走り付け、火取消し申し候、」とある⁽⁵⁾。

(2) 相島灯籠堂

相島灯籠堂は、『続風土記拾遺』(下巻)に、「遠見番所、燈籠堂有。島番の士二員、卒徒四員を置いて守衛とす」とある。『続風土記附録』(中巻)の「藍嶋」の図に遠見番所も灯籠堂も描かれている。

『指図』の相島灯籠堂は、方「九尺一寸」(2.76m)、宝形造、棧瓦葺きである。鐘崎の灯籠堂より一辺が2尺3寸大きい(表1)。「家上中程葺惣漆喰」の書

表1 灯籠堂一覧表

番号	所在地(名称)	桁行	梁間	屋根	屋根材	建坪(坪)	造作
1	鐘崎	6.8	6.8	宝形	棧瓦	1.28	床板張、土間、土台、出入口左側
2	相(藍)島	9.1	9.1	宝形	棧瓦	2.3	床板張、土間、土台、出入口右側
3	地島	9	9	宝形	棧瓦	2.25	床板張、土間、土台、露盤、惣漆喰、出入口左側
4	勝馬	6	6	宝形	棧瓦	1	床板張、土間、土台、板壁、出入口左側
5	岩屋	6	6	宝形	棧瓦	1	床板張、土間、土台、板壁、露盤宝珠、出入口右側
平均		7.38	7.38			1.566	

【註】桁行、梁間の単位は尺。

き込みがあるので、瓦を多量の漆喰で固めていたの
である。

出入口は右角にあって、「入口横二尺八寸引戸」
から巾85cmの片引き板戸を立てる。出入口が右角に
あって、板戸を左に引くのは後に触れる岩屋の灯籠
堂と同じである。

出入口がある面を除く三面は腰板目板張りで、
「戸二」と記すので、板戸が1箇所^(横力)に上下2枚つ
いていたのであろう。「三方上掛戸三ツ坪釣り／下引
上ケ戸」とあって、上の戸は坪釣りの掛戸で、下の
戸は引き上げ戸である。四隅に掘立の控柱が付く。

腰高窓の高さは「梁下^(横力)方□上迄／四尺五寸」で、
「□上^(横力)方土台上迄／三尺」と記す。これから「梁下
より□上^(横力)まで」四尺五寸(136.4cm)で、「□上^(横力)方土
台上迄」三尺(90.9cm)なので、土台上端から梁下
まで、7尺5寸(227.3cm)である。ちなみに建地
割図の欄外に、「桁下^(横力)方土台上端まで七尺五寸」と
あって、合致する。「□」は建地割図から腰貫を示
すといえる。なお、腰壁に「三尺」(90.9cm)の書き
込みがあるので、土台上端から腰貫上端までは「三
尺」(90.9cm)である⁽⁶⁾。

内部は踏み込みが「三尺八寸ニ式尺七寸」の土間
で、3段の木階段で板張り床に上がる。土間が5つ
の灯籠堂で一番狭い。出入口の戸幅は2尺8寸(85.0
cm)である。

床上行灯が置かれる。行灯は「火袋」として、
立面図を掲載する(写真2・図2)。

立面図によると、火袋は2尺4寸(72.7cm)四方で、
高さ「桁上端から土台下まで」3尺2寸(87.0cm)、
寄棟造に近いが、屋根の位置に「上戸」と記すので、
これは、取り外し可能な蓋を示すのであろう。棟の
部分が開いていた可能性がある。

壁は一面が板張りで、他の三面が8枚の障子紙張

りである。この程度⁽⁶⁾の行灯(火袋)が先の鐘崎の灯
籠堂や地島、勝間、岩屋の灯籠堂にあったと考えら
れる。

行灯の立面図の書き込みは、「火袋、上戸、高サ
三尺式寸、柱二寸角、二寸角、式尺四寸」である。
すなわち、2尺4寸(72.7cm)四方で、土台と柱は
2寸(6.1cm)角、土台から軒桁までの高さは3尺
2寸(97.0cm)である(図2)。「但シ壺方ハ板打三
方障子壺ケ所ニ中折八枚張」と記す。

したがって、四面のうち一面が板張りで、三面が
中折れ8枚張りの障子である。いずれの灯籠堂も行
灯の板張りを土間側に向けて置いた。

灯籠番は記録では文化9年稻光文助34才が文政6
年まで務めていた⁽⁶⁾。

(3) 地島灯籠堂

灯籠堂は、『地嶋波止場之図』(本誌No.11の写真1)
に、泊集落の殿様波止の近くに「灯籠堂」の記入が
あって位置がわかる。そして、鳥瞰図なので、外観
がわかる(写真7)。建物は、方一間の宝形造で、
控柱が四隅にある。『指図』には平面図があって、
相島の灯籠堂の建地割図とほぼ同じ形式で規模も類
似していたこともわかる(写真3)。

『指図』から地島の灯籠堂は、9尺(2.73m)四方、
宝形造、瓦葺きで、相島の灯籠堂と大同小異の構造
である。出入口が正面の左片隅に付き、他の三面に
「掛戸二」と記すので、折れ釘に掛ける板戸と引き
上げ戸が正面以外の腰高窓に付いていた。腰壁は「腰
立目板打」と欄外に記す一方、平面図左側に「惣漆
喰」と記す。恐らく「惣漆喰」は、瓦と露盤宝珠を
を止めるための漆喰を示すのであろう。四隅に掘立
の控柱が付く。これもほぼ相島や他の灯籠堂と同形
式である。



写真1 鐘崎灯笼堂

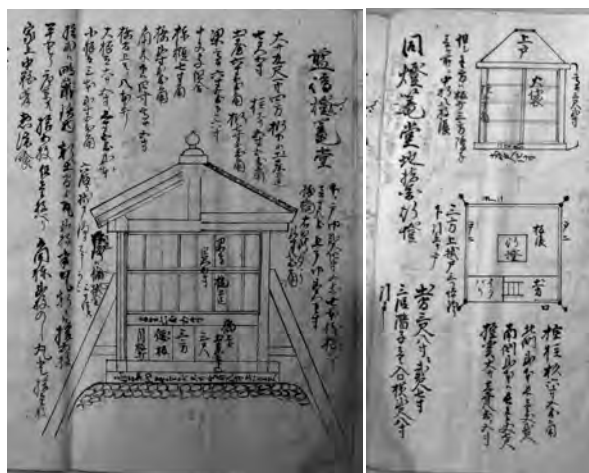
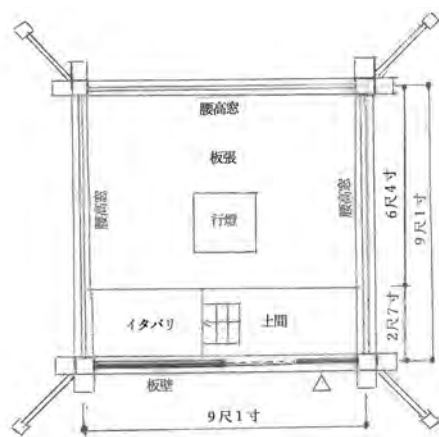


写真2 左：相島灯笼堂 右：同灯笼堂地指図行燈

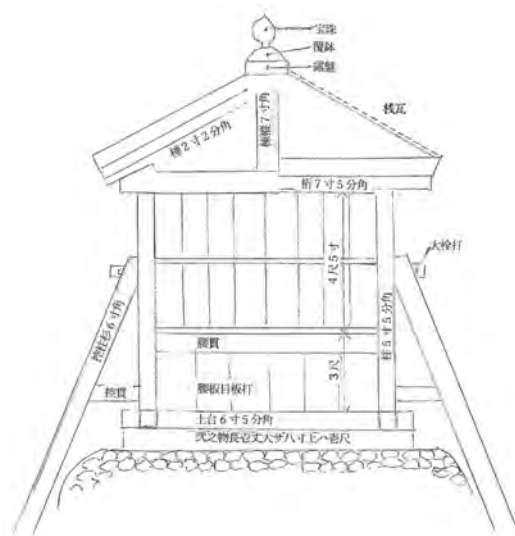


図1 上：相島灯笼堂平面図 下：同建地割図

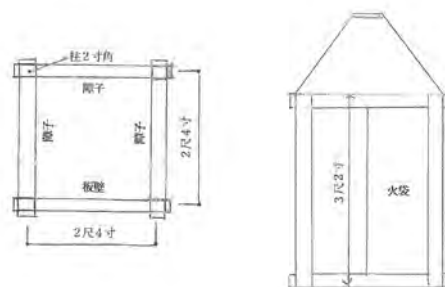


図2 左：相島行燈平面図 右：同立面図

内部は踏み込みが奥行約3尺(90.9cm)、巾9尺(272.7cm)の土間で、相島の土間より広い。残りは板張り床で、行灯が置かれていた。行灯の大きさは記載が無いが、相島の行灯と大差ないものと想われる。

ここでは、露盤の大きさが「老尺六寸_二高サ九寸」とわかる。また、柱や土台の大きさも「柱八寸角」「土台八寸角」とあってわかる。鳥瞰図では露盤はほとんど描かれないで宝珠が大きめに描かれている。

地島の灯籠堂は、『海遊録』に、「享保四年(1719)八月初十日の夜、地島に碇泊通信使の三使は国書を奉じて西光寺に泊まる。寺の西南の山頂には、石燈十餘丈もあって、上に石門がある。傍に曰ふ、慈島殿と、これ観音佛奉ずるの所、(女神厳島姫を観音様と解釈している)。又其の西山の脚に燈臺峰臺を設け皆な屋壁があつて堅固に、往来する船舶の展望地に充てゝ居る。」とある⁽⁷⁾。

次に、図面の欄外の記述を記しておく。

「惣漆喰／大サ九尺四方／桁下高サ／土台上方／垂木／大サ／床カ上下／柱八寸角／土台八寸／角／梁^(横カ)／掛戸口^(横カ)／棧／上戸巾／下ノ戸巾／引上ケ戸タルミ留メ^(横カ)／腰立イタ目板打／入口／控柱大サ／床カ口高サ／同厚サ／下貫／上大栓打／行灯大サ／瓦軒唐草拾六枚／丸登り巴共八枚／角丸ハ無シ／平式枚葺ニ而／露盤老尺六寸_二高サ九寸」

これによって、瓦葺き屋根で、瓦の種類や枚数まで判明する。

(4) 勝馬灯籠堂

勝馬灯籠堂は、『続風土記附録』(上巻)によれば、勝馬明神社のところに、「祠の北の崖上に燈籠堂有。往来の船人に、此の邊に瀬あるをしらしめんため、夜ことに燈を點せり」とあって、灯籠堂の役割を示す(写真3・4・5)⁽⁸⁾。

勝馬は、金印が発見された福岡市東区志賀島にあって、玄界灘と博多湾の境に位置する志賀島の北西部である。灯籠堂は勝馬神社の崖上にあって、往来の船に瀬のあることを知らせるため毎夜点灯された。この灯籠の油代として年に銀百目を納め、油奉行支配の番人に二人扶持が与えられていた⁽⁹⁾。

勝馬灯籠堂は、方「老間」(181.8cm)、宝形造、棧瓦葺きである。次項で触れる岩屋の燈籠堂と大同小異の構造である。出入口が正面の左片隅に方立付きで「巾二尺八寸」(84.8cm)の片引き板戸で付き、他は腰板壁である。正面を除く三面とも「掛戸二」と記すので、「坪釣」(壺金)に掛ける形式の板戸と引き上げ戸が腰高窓に付いていた。「坪釣」を記すのはここだけである。四隅に控柱が付くのは他の灯籠堂と変わらない。

内部は他と変わり踏み込み土間が台形で、平面の底辺が6尺(181.8cm)、残りは板張り床で行灯が置かれていた(写真3)。

行灯の大きさの記載がないが、相島の行灯と大差ないものであろう。

次に、図面の欄外の記述を記す。

「大^サ老間四方 桁下高^サ土台上方六尺五寸／柱大^サ五寸 土台七寸角 但^シ七寸^ニ中土台／式本入大石上^ケ有之／桁六寸垂木六本打 大^サ下^ハ梁^(横カ) 腰口高^サ六寸厚^サ四寸／掛戸棧七本押縁押 上戸巾老尺五寸三ツ坪釣^リ／下戸巾老尺八寸引上^ケタルミ留^メ上戸略此角張出^シ／軒 控柱七寸大栓打下貫／腰板胴縁彦本目板打土台上^ハ面押打／入口高^サ内法 戸巾式尺左右法立／板張下隅十文字^ニ尾引組合^ニ平物根太入瓦軒唐草拾貳枚／角棟九枚 貳枚熨斗瓦有 露盤宝珠共漆喰^ニ練立／惣漆喰 平登^リ巴^共七枚 丸巴共老^ト西^ニ四拾三枚程入^ル」

以上により、細かい部材や使用方法および瓦の種類や枚数がわかる。

(5) 岩屋灯籠堂

岩屋灯籠堂は、『続風土記拾遺』(中巻)に、「有毛村の北濱にて民居一所に在。産神ハ蟹從村戸明神也。境内に遠見番所、燈籠堂、定番の士宅二區有」とみえる。有毛村は、現在の北九州市戸畑区である。

岩屋灯籠堂は、方「老間」(1.82m)、宝形造、棧瓦葺きで、勝馬の灯籠堂と大同小異の構造である。出入口が正面の右片隅に片引き板戸で付き、他は腰板壁である。出入口が右側にあって、板戸を左に引く形式は先の相島の灯籠堂と同じである。他の三面に「掛戸」と記すので、折れ釘掛けの板戸付きの腰



写真3 左：勝馬灯籠堂 右：地島灯籠堂



写真5 那珂郡志賀島弘浦絵図の勝馬灯籠堂

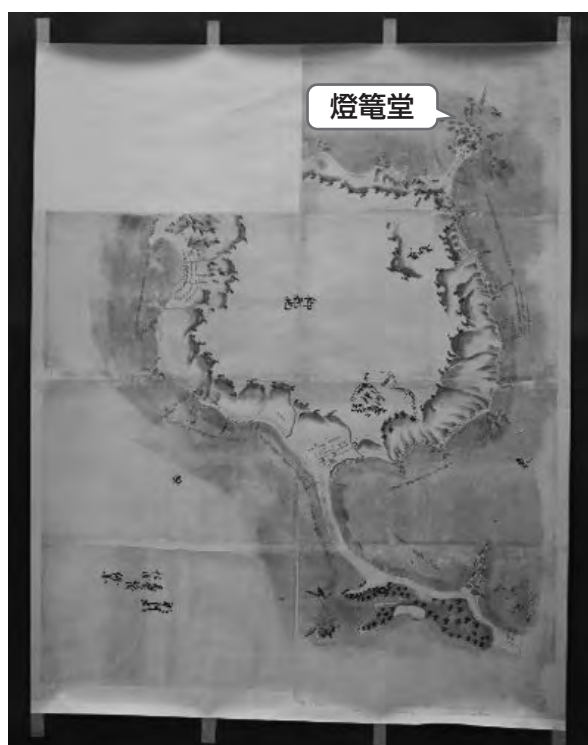


写真4 那珂郡志賀島弘浦絵図（福岡市博物館蔵）

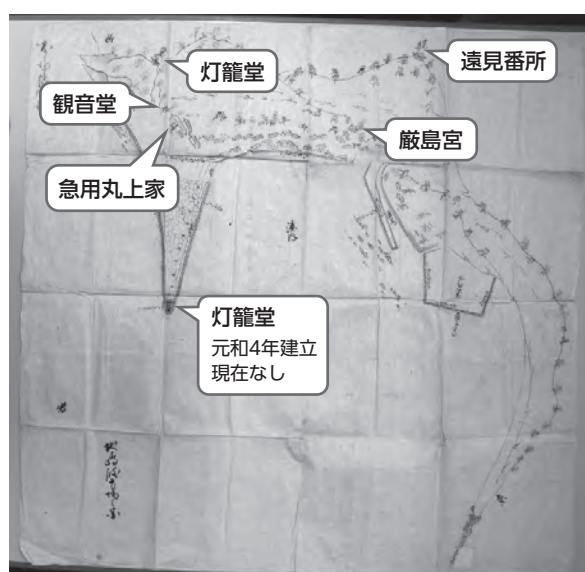


写真6 地島波止場之図の地島灯籠堂・急用丸上家



写真7 地島波止場之図の地島灯籠堂

高窓が付いていた。四隅に控柱が付く。土台や筋違いがあって、梁は「十文字」に付く（写真8）。

出入口を入ると踏み込み巾6尺（181.8cm）の土間で、他は板張り床で、行灯が置かれている。行灯は寸法の記入がないが、相島の行灯と大差ない。

ここでは、「土台筋違入八寸角組合石積上ケ」と記すので、相島の灯籠堂のように石積基壇の上にたち、土台に筋違（火打）を用いていたことがわかる。また、「窓内法ニ而三尺式寸」とあって、窓の高さが「三尺式寸」（97.0cm）であることがわかる。これは、相島の「四尺五寸」（136.4cm）より低いので、平面の大きさとのバランスによるのであろう。ちなみに「桁下高サ土台上六尺壺寸」（184.8cm）とあって、相島の「七尺五寸」（227.3cm）より42.5cm低い。小型の灯籠堂と言って良い。

次に図面の欄外の記述を記す。

「梁十文字入七寸角土台筋違入八寸角^{ニ而}／組合石積上^ケ／大^サ老間四方桁下高^サ土台上六尺壺寸柱大^サ五寸五歩／土台上六寸五歩高サ五寸五歩桁高サ六寸^{（横カ）}／裏板打 梁 腰^{（横カ）}口高サ 厚サ／掛戸棧押縁上戸／下戸／窓内法^{ニ而}三尺式寸 控 大栓 下貫／腰板 軒 板張／入口高^サ内法 戸巾／瓦斬唐草拾式枚 角棟 露盤宝珠／丸登七枚 丸中^{ニ而}七六五四三式壺」

以上により部材や使用法および屋根瓦の種類や露盤宝珠がつくことがわかる。

2 急用丸格納庫

急用丸は、伝馬船を用いた伝令船として、遠見番所で南蛮船など異国船を発見すると直ちにしかるべきところに知らせる。そのために、「急用丸御船付御加子代」を配置していた。いわば沿岸警備艇である。

例えば、文政6年時相島の急用丸加子は長五郎、大島の急用丸加子は半次郎、地島の急用丸加子は庄七、玄界島、小呂島など各1人（姓名未詳）がいた。庄七は文化9年（1812）の記録にもある⁽⁴⁾。文化9年時相島の急用丸加子は兵次であった⁽⁶⁾。

黒田藩が警備を強化したのは、寛永17年（1640）、貿易再開を嘆願しにきたマカオからのポルトガル人

61人を斬罪に処してからである。この時、幕府は、ポルトガル・イスパニア両国の報復攻撃を想定し、関係諸大名に領内の各所に遠見番所を設置することを命じ、もしポルトガル船を見たら即座に島原藩主の高力忠房および長崎奉行に通報し、さらに大坂や隣国にも通報することを命じている。また、播磨姫路藩主の松平忠明らには、異国船が来襲した場合の総司令官として長崎に出陣することを命じた。

この命令を受けた熊本藩主の細川忠利は、遠見番の者には百姓を徴発するわけにいかないで藩で召し抱えている者を使わねばならず、早船を30艘用意するとすれば1,200人の水主（かこ）が必要である。そのうえ、長崎や豊後目付、上使などの御用にも備えておかなければならないので、「事之外なる九州之よりハ」で、「きりしたん程日本をなやまし候もの又とこれ無く候」と嘆息している。

福岡藩の黒田忠之も、領内5箇所に遠見番所を設け、それぞれの場所に番の武士を置き、番船を出して毎日巡検させている⁽¹⁰⁾。遠見番所の仕事としては、海上の見張りのほかに、流人の監視や志賀島・相島・地島・鐘崎などの灯籠堂（灯台）の維持管理があるが、これらの役割は、時代の推移とともに軍事的なものから民生的なものへと変化していった⁽¹¹⁾。

領内5箇所は大島、相島、地島、姫島、小呂島である。このように九州諸大名に負担をかけた沿岸の防備体制であった。

『指図』に、急用丸を格納しておく小屋の平面図と立面兼断面図（建地割図）がある（写真9・10）。建地割図の欄外に「急用丸^{上家}天保六年相止御取除^{ニテ}相成^ル」「大嶋 藍嶋 地嶋／姫嶋 小呂嶋／右五ヶ所板壁」「玄界／岩屋浦／右式^ケ所是迄之通／土壁^{ニ而}有之」と記す。「急用丸^{上家}」（上家）が天保6年（1835）に取り除かれて以後なかったようにも考えられるが、急用丸は天保6年以降も存在していたことは確実のようである。ただし、上家（屋）付きであったかどうかは即断できないけれども、大切な役目を持つ船なので格納庫は存在したものと想われる。

建地割図の棟上部に「棟簀縄阿ミ／葺縄掛ケ」とあって、棟が、縄を使った簀子をのせて、葺縄でしっ



写真 8 岩屋灯籠堂

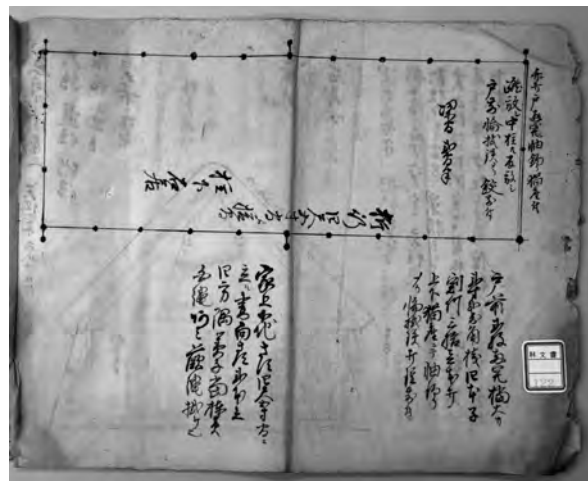


写真10 急用丸格納庫平面図

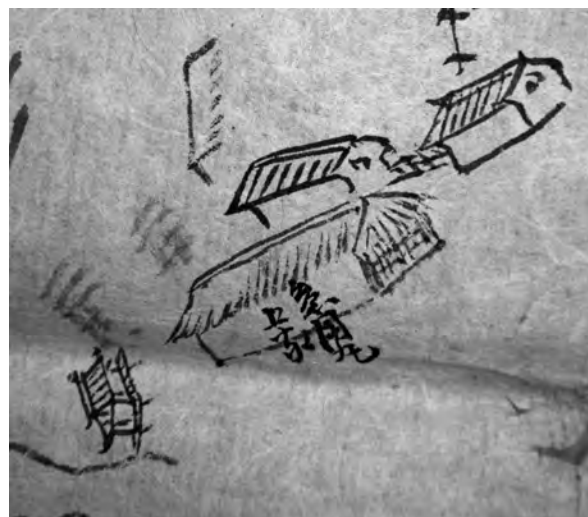


写真11 地島波止場之図の急用丸上家



写真 9 急用丸圀家上の図

かり結んでいたことがわかる。蕨縄は、藁縄などと比べると格段に丈夫で、雨水に強く弾力性がある。

また、欄外に次の書き込みがある。

「玄界／岩屋浦／右式^ケ所是迄之通^リ／土壁^ニ有之
／梁間二間半 桁行四尺五寸間^ニ拾間 本間^ニ／
六間九合余／桁下高サ石^ノ六尺五寸 家柱丸太末口
六寸／惣柱丸太末口五寸 梁拾壺本末口七寸／中法
梁壺通^リ／貫式段壁板側付合^セ目板押縁打／蹴放^シ中
柱^共／取除^ク／但^シ中柱四寸角／控柱六本末口七寸上
大栓／下貫」

以上により部材や構造がはっきりする。すなわち、柱は全て控柱も含めて丸太材で、梁は全ての柱位置に掛け、又首構造である。柱は礎石に立ち、控柱は掘立である。板壁で、蹴放しなどは取り除かれていた。また、「玄界／岩屋浦」から、先の5箇所以外に玄界島と岩屋にも急用丸があったことがわかる。「岩屋浦」は現在北九州市若松区にあって、福岡藩領であった。

建地割図中にも同じような書き込みが次のようにあって各部材の寸法などがわかる。

「向サス／向サス／茅葺家上登^リ壺丈三尺五寸／
控／桁下高サ／六尺五寸石^ノ口^{（唇カ）}／中柱取放^シ／割竹
三拾壺本／巾八尺棧四本／竹打戸／控」の書き込みがそれぞれの箇所にある。妻側に「巾八尺棧四本」の「割竹三拾壺本」を使った「竹打戸」があって、その他は「貫式段壁板側付合^セ目板押縁打」であった。「巾八尺棧四本」が半分なので、梁間は16尺（1間＝6尺5寸とし、約2間半）になる。柱は礎石立てで、控柱があって、母屋柱と腰貫でつなぐ。

さて、『指図』の平面図（写真10）には、急用丸の文字がないが、建地割図欄外の「梁間二間半 桁行四尺五寸間^ニ拾間」の書き込みがあって、梁間2間半と10間の柱間が合致するので、急用丸の格納庫の平面とみてよい。「梁間二間半」の正面は、中柱1本の2つ割り、背面は中柱2本の3つ割りである。但し、正面の中柱は「取放^シ」（取り外し）出来る。

平面図には、以下の書き込みがある。

「竹打戸両開軸釣猫座付」「蹴放^シ中柱共取放^シ／戸前輪拭鉄^ヲ錠前付」と正面出入口に記す。また、

「梁間二間半／桁行四尺五寸間^ニ拾間／柱下石居」と記す。さらに、図面の余白に次の書き込みがあって構造形式が分かる。

「戸前式枚両開^{（横カ）}大^サ／式寸式歩角棧四本子／割竹三拾壺本打／上下猫座^ニ軸釣^リ／^{（縦カ）}輪掛鉄打錠前共」とあり、「角棧四本子／割竹三拾壺本打」は建地割図と合致する。

さらに「家上下地さ須四尺五寸間^ニ／立^ル妻向さ須式本立／四方隅簀子当棟簀^{（棕櫚カ）}／白縄阿ミ蕨縄掛け也」と記す。「さ須」は、さす（収首）で建地割図とあう。

まとめ

以上により以下の知見を得た。

- 1、灯籠堂の広さは、平均1坪5合7勺（5.18㎡）である。最大は相島の2坪3合（7.59㎡）、最少は勝馬（志賀島）と岩屋（北九州市若松区）の1坪（3.3㎡）である。
- 2、灯籠堂は高い石積み基壇上に建つ。構造は、土台上に角柱をたて、桁や梁を受ける。土台に火打を付ける場合もある。三面は腰高窓に上下の板戸を立て、一面に片引き戸の出入口を設け、踏み込みは土間で、他は板張り床で化粧屋根裏である。四隅に控柱を大栓でとめ足元貫を付ける。宝形造の瓦葺きで露盤宝珠が付く。
控柱を四隅に付けるのは海風の強いところに建つ灯籠堂にとっては重要なことで、倒壊予防のための知恵である。相島では床を3尺程高くして木階段3段を付ける。
- 3、相島に「同燈籠堂地指図行灯」（写真2）とあるので、平面図を「地指図」と称していた。
- 4、灯籠堂の維持管理は遠見番所の仕事であった。
- 5、急用丸の格納庫は、桁行45尺（13.64m）梁間2間半（4.55m）、切妻造、茅葺き、妻入りで、出入口は竹の両開き戸が付く。柱は礎石上に立ち、床は土間、化粧屋根裏である。四隅と桁行き中央に控柱が付く。控柱は掘立で柱は控柱も含めて丸太材で、梁は全ての柱位置に掛け、又首構造である。板壁で、蹴放しなどは取り除かれていた。

6、急用丸の格納庫は「地島波止場之図」に鳥瞰図があり、他の格納庫も大同小異であろう。

7、[林(美) 家文書] No.122『嘉永七寅年五月改／浦嶋遠見番所燈籠堂急用丸囲上家共図／林武』は、明治以降の近代的灯台になる直前の灯籠堂史料として大変貴重である。なお、「林武」は、林武四郎の略称であろう。

謝辞

末筆ながら[林家(美) 文書]の閲覧でお世話になった九州歴史資料館内地域史研究所草野真樹・久恒真由美の両氏と福岡市博物館又野等氏および解説にご助力を得た山口県文書館吉積久年氏、金沢文庫貫井裕恵氏と横浜市歴史博物館小林紀子氏に厚く御礼を申し上げます。

註

- (1) 縦32.3cm、横24.5cm。長綴。[林(美) 家文書] No.122の図面と仕様書は「大工林家所蔵文書Ⅲ」として『九州産業大学工学部研究報告』第44号(2007年12月刊)に、原図と翻刻文を掲載した。
- (2) 佐藤正彦 1992 「福岡大工林とその仕事」『日本建築学会大会学術講演梗概集』北陸。989頁。
- (3) 佐藤正彦 2025 「地島の漁業集落」『沖ノ島研究』No.11(「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会)。114頁。
- (4) 1989 『福岡県史』近世研究編福岡藩四(西日本文化協会)。323頁。中村又右衛門は文化9年(1812)にも灯籠番をしていた(註5、174頁)。
- (5) 1997 吉武謹一著『玄海町史話伝説』玄海町史話伝説委員会編(玄海町教育委員会)。137頁。
- (6) 1997 『新宮町誌』(新宮町)に平面図と断面兼立面図を掲載。873頁。断面兼立面図は「^(横カ)方」を「から」と誤る。「^(横カ)□」(欄)を「横」(ぬき)と推定したのは図面と仕様書からである。
- (7) 1926 細井肇編『海遊録』(『朝鮮研究叢書』第八巻)(自由討究社)。76頁。
- (8) 写真4・5は、福岡市博物館所蔵[青柳種信関係資料目録] No.1521『志賀島浦弘浦絵図』である。
- (9) 1922 青柳種信 広渡正利、筑前古文書を読む会

校訂『筑前町村書上帳』文献出版。

- (10) 2007 山本博文著『学校で習わない江戸時代』(新潮文庫)。120頁。『黒田家譜』(第2巻)「定」。179と181頁。
- (11) 1998 『福岡県史通史編』福岡藩(一)(西日本文化協会)。843頁。

2025年度「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群調査研究事業概要

1. はじめに

世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究は、福岡県・宗像市・福津市・宗像大社からなる「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会によって進められている。以下、令和7年度に本遺産群に関連して行われた各調査研究の概要を以下に報告する。

2. 特別調査研究事業

第2期特別研究事業は令和6年度から10年度までの5カ年計画で行っており、今年度は第2カ年目に当たる。第2期の課題は、①航海を軸としたアジア・太平洋、東アジアや日本列島内等、さまざまなレベルでの地域間交流の視点からの検討、②神話学・宗教学など新たな枠組みでの意義付け、③古代から中近世までの通史的な沖ノ島および宗像地域の祭祀についてのより解像度の高い復元である。さらに、基礎研究の推進のため、沖ノ島出土品を調査研究の対象とする国宝部会と地元の文化財担当者・学芸員からなる地域史部会の二つの部会を設けて取り組みを進めている。

(1) 第2回国際検討会

第2期2年目となる本年は「宗像における祭祀・信仰の歴史的変遷の世界的意義-The Global Significance of the Historical Transition of Rituals and Beliefs in Munakata」をテーマに、第2回国際検討会を開催した。

日 時：令和7年11月29・30日（土・日）

場 所：メルキュール福岡宗像リゾート&スパ

趣 旨：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群は、古代から現在まで続く「神宿る島」沖ノ島を崇拝する文化的伝統の物証である。4世紀から9世紀にかけて航海安全を願う祭祀により沖ノ島に捧げられた

8万点の奉獻品は、東アジアにおける諸国家間の重要な交流を示すものとして、世界遺産に登録されている。このように、宗像地域における祭祀と信仰の変遷は海を介した古代東アジアの交流による影響を背景とした固有の信仰の発展の文脈で理解される。

しかしながら、近年の研究や本特別研究事業の成果により、宗像における祭祀の変遷は様々な要因により変化してきた事が明らかとなってきた。

宗像において自然崇拝に基づく固有の信仰が歴史的に変化した主な要因として考えられるのは、①海域のネットワークによる地域間交流、②仏教をはじめとする外来の思想および文化の到来等の異文化交流、③中央権力と地域勢力の関係を含む社会構造の階層化・複雑化、④部族・首長制段階を経て国家形成期・古代・中世・近世から現代に至る時代の変化、とくに、古代から中世へ等の過渡期の問題、⑤自然環境の変化、⑥人間の認知的な構造と自然環境の関係、等があげられる。

本検討会では、本遺産の特質である「祭祀の変遷」に焦点を当て、考古学、宗教学、文化人類学、民俗学、歴史学など様々な角度から「祭祀・信仰・宗教の変化とその要因」を考えると共に、世界の宗教的思考・行為の歴史の中に宗像の祭祀・信仰を具体的に位置付ける事を目指す。

講演者：

ファビオ・ランベッリ（カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授）

菊地 大樹（東京大学史料編纂所教授）

鈴木 正崇（慶應義塾大学名誉教授）

マイク・パーカー・ピアソン（ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン考古学研究所、考古学）

議 長：

佐藤 信（専門家会議委員長、東京大学名誉教授）

溝口 孝司（専門家会議委員、九州大学教授）

委託研究者：

秋道 智彌（山梨県立富士山世界遺産センター、総

合地球環境学研究所名誉教授)

禹 在柄 (忠南大学校教授)

高田 貫太 (国立歴史民俗博物館)

田中 史生 (早稲田大学教授)

笹生 衛 (國學院大学教授)

大高 広和 (大正大学文学部専任講師)

研究協力者：

王 海燕 (中国浙江大学教授)

国宝部会：

河野 一隆 (東京国立博物館学芸研究部長)

辻田 淳一郎 (九州大学教授)

橋本 達也 (鹿児島大学博物館教授)

地域史部会：

岡寺 未幾 (福岡県九博・世界遺産室)

正田 実知彦 (福岡県九博・世界遺産室)

野木 雄大 (福岡県文化財保護課)

加藤 和歳 (福岡県九州歴史資料館)

池田 拓 (宗像市世界遺産課)

太田 智 (宗像市世界遺産課)

岡 崇 (宗像市世界遺産課)

向井 浩太 (宗像市世界遺産課)

井浦 一 (福津市文化財課)

池ノ上 宏 (福津市文化財課)

崎野 祐太郎 (福津市文化財課)

高木 慎太郎 (福津市文化財課)

オブザーバー：

鈴木 地平 (文化庁文化資源活用課文化遺産国際協力室、文化財調査官)

岡田 保良 (日本イコモス国内委員会委員長)

会議次第：

1. 課題整理

笹生 衛「概念整理 ―日本列島における神 (カミ)・祭祀 (マツリ)、環境と認知―」

2. コメント

溝口 孝司「国家形成と宗教:議論の補助線として」

3. 講演

マイク・パーカー・ピアソン「新石器時代からローマ鉄器時代までの英国における社会・祭祀・宗教」
ファビオ・ランベッリ「宗教的实践と思想の変化、および聖なるものに関する学術的理解の変化：理論

と方法」

菊地 大樹「山の宗教・仏教史の立場から、宗像の祭祀・信仰を考える」

鈴木 正崇「山岳信仰・民俗学の立場から宗像の祭祀・信仰を考える」

4. 課題整理

田中 史生「古代・中世の北部九州をとりまく国際環境・交流環境 ―宗像・沖ノ島地域の国際環境を考えるために―」

5. コメント

禹 在柄「5～6世紀における倭国と百済の王権・地方勢力間の相互作用」

高田 貫太「古墳時代の日朝関係史から見た沖ノ島祭祀」

王 海燕「古代中国の地域間交流と航海信仰」

大高 広和「宗像三女神」

秋道 智彌「ジェンダーと海の祭祀―沖ノ島信仰と船霊女神の出現―」

6. 総合討論

「歴史的文脈から宗像の祭祀・信仰の意義を考える」

司会 佐藤 信

「宗像の祭祀・信仰の世界史的意義を考える」

司会 溝口 孝司



写真1 第2回国際検討会

(2) 国宝部会

今年度は、前年度に引き続き宗像大社神宝館所蔵資料の調査を行っている。調査対象は沖ノ島から流出したと伝わる資料群で、鏡、甲冑片を含む金属製品、滑石製品、貝製品である。

石製品・石製模造品、鏡および武器・武具などの金属製品を対象として宗像大社神宝館での調査を行った。

ア. 国宝部会の開催

第一回（オンライン）

日 時：令和7年9月18日（木）

議 題：今年度事業について

第二回（オンライン）

日 時：令和7年12月8日（月）

議 題：調査状況・報告書執筆

第三回

日 時：令和8年3月9日（月）

場 所：宗像大社神宝館

議 題：調査成果の報告と検討

イ. 資料調査

① 神宝館での調査

- ・石製品・滑石製品

調査者：河野 一隆

日 時：11月13日～15日（木～土）

- ・鏡

調査者：辻田 淳一郎

日 時：10月10日（金）

- ・金属製品・貝製品

調査者：橋本 達也、水野 敏典

日 時：8月5～8日（火～金）※

9月24・25日（水・木）

10月27・28日（月・火）

※橋本氏のみ

② その他の調査

- ・元興寺文化財研究所

調査者：橋本 達也

日 時：8月20日（水）

- ・福津市カメラステージ歴史資料館

調査者：橋本 達也

日 時：12月1日（月）

（3）地域史部会

地域史部会は福岡県・宗像市・福津市・宗像大社の文化財担当者・学芸員からなる。本遺産群につい

て分野を超えた調査研究を推進して、より解像度の高い宗像の祭祀の復元を目指して設置された。今年度は6回開催し、各自の調査研究についての進捗状況の共有を行った。

第1回 令和7年5月21日（水）

令和7年度事業について

第2回 令和7年7月16日（水）

池ノ上 宏「響灘・玄界灘東部における海浜型古墳について」

太田 智「宗像系文物からみた地域間交流」

第3回 令和7年9月17日（水）

野木 雄大「宗像神信仰の国内伝播の研究」

第4回 令和7年11月5日（水）

池田 拓「明治期・沖ノ島海軍望楼」

岡寺 未幾「記録写真による沖ノ島祭祀遺跡の復元—とくに22号遺跡を中心として—」

第5回 令和8年1月21日（水）

岡 崇「沖ノ島祭祀遺跡のモニタリングの展望」

正田 実知彦「沖ノ島祭祀遺跡の景観分析」

第6回 令和8年3月11日（水）

加藤 和歳「沖ノ島および周辺遺跡出土金属器の構造技法解析」

井浦 一・崎野 祐太郎「新原・奴山古墳群の成立と変遷」

高木 慎太郎・向井 浩太「宗像系須恵器の基礎的研究—須恵器坏を中心に—」

（岡寺 未幾 福岡県九州国立博物館・世界遺産室）

3. 宗像大社にかかる調査研究

(1) 考古資料

ア. 土器詳細台帳の作成

平成29年度より、報告書に基づく土器詳細遺物台帳の作成作業を九州大学考古学研究室と行っている。本年度は、令和7年5月から3月まで実施した。

(福岡 真貴子 宗像大社文化局)

イ. 金属製品のX線撮影による調査分析及び金属製品デジタル台帳の構築

沖ノ島祭祀遺跡から出土した金属製品は、発掘から半世紀以上が経過し、劣化が懸念されている。この状況を受け、令和6年度より、当該資料と宗像市・福津市から出土した金属製品のX線透過写真撮影とデジタル台帳の作成を行いその成果をMUNAKATA ARCHIVES「金属製品のX線画像」として一般公開している。

なお、令和6年度は保存台に固定されている金属製品の撮影を行ったが、アクリルケース等で管理されている資料が数多く存在する。その一部でも資料化を進めるため、今年度は7号・8号遺跡および国宝部会で調査予定の沖ノ島返納品資料の金属製品資料についてX線透過写真撮影および整理作業を行った。本事業は福岡県岡寺、宗像市太田智・西依由里香、宗像大社菊池宣行・福岡真貴子が行い、X線透過写真撮影については公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。必要に応じて特別研究事業国宝部会水野敏典氏、橋本達也氏のアドバイスを受けた。X線撮影にあたっては、国宝の負担を避けるため、撮影機材を宗像大社神宝館に搬入して行うこととした。作業は、準備を令和7年8月26日(火)・28日(木)、X線撮影9月8日(月)から11日(木)、撮影後の整理を令和8年1月14日に行った。

ウ. 国宝部会による資料調査

特別研究事業国宝部会を参照。

(岡寺)

(2) 宗像大社文書調査

2017年度から継続して「宗像清文氏奉納文書」のうち書簡・公文書等の一紙ものの目録の作成を行っている。2025年度は2026年1月までに19回の調査を実施し、年度内にさらに数回の調査を予定している。

調査は、宗像大社文化局、福岡県教育庁文化財保護課、福岡県立アジア文化交流センター、九州歴史資料館、福岡市博物館市史編さん室が協力して行い、今年度は史料の全体数の把握とこれまでに作成した目録の精査を並行して実施した。『宗像神社史』に別の名称で引用されている史料のうち、本件に含まれるものがあることが判明したため、目録において対応関係の整理も進める。

なお、「宗像清文氏奉納文書」に係る調査成果の一部は、第2期特別調査研究事業の成果報告書において公開する予定である。

(野木 雄大 福岡県文化財保護課)

(3) 経過観察

ア. 「宗像神社境内」全体に関する調査

宗像大社沖津宮の沖ノ島、小屋島、御門柱、天狗岩の構成資産については、周辺海域を含めた釣人などのモニタリング調査を10回(1月11日(土)・2月11日(火)・3月2日(日)・4月26日(土)・5月3日(土)・6月7日(土)・9月17日(水)・10月11日(土)・11月9日(日)・12月16日(火))実施した。そのうち10月11日と11月9日は各祭祀遺跡の詳細なモニタリング調査を実施し、12月16日には、沖ノ島祭祀遺跡の全遺跡について360度撮影を実施した。

あわせて、国指定沖ノ島特別鳥獣保護区及び国指定沖ノ島鳥獣保護区となっている沖ノ島と小屋島、御門柱、天狗岩は、環境省九州地方環境事務所によって外来ネズミ類がオオミズナギドリやカンムリウミスズメなどに与える影響を調査した。

中津宮は、11月6日(木)の午前中に御嶽山祭祀遺跡等のモニタリング調査を実施し、あわせて沖津宮遙拝所の見回りを行った。

辺津宮は、11月6日(木)の午後3時から資産の見回りと共に祭祀遺跡のモニタリング調査を実施し

た。中津宮、辺津宮は、ともに宗像市世界遺産市民の会の協力の基に実施した。

現地調査関係者は以下の通りである。

○宗像大社沖津宮

東京文化財研究所 松浦 一之介

環境省九州地方環境事務所 戸田 博史

九州環境管理協会 岡部 海都

福岡県九州国立博物館・世界遺産室 正田 実知彦
栗山 凌

宗像市世界遺産課 岡 崇 池田 拓 鎌田 隆徳

○宗像大社沖津宮遙拝所、中津宮、辺津宮

宗像市世界遺産市民の会 吉武 貴章 魚住 久信
光永 真 吉開 智子

宗像市世界遺産課 岡 崇

イ. 構成資産 1 沖ノ島

9号遺跡、10号遺跡、10号遺跡東側における遺物の出土状況について重点的にモニタリング調査を実施した。その結果、露出した遺物の移動はあるものの、新規に金銅製品等の優品は認められなかった。遺物の露出が減った理由の1つとして毎月調査を実施することで、気配を察知したオオミズナギドリは、9号遺跡、10号遺跡周辺での営巣活動をやめて、他の場所に移したことが原因ではないかと考えられる。

8号遺跡北側の礫の下から露出した鉄製品については、大きな風化もなく原位置を留めている。こちらも今年から重点的にモニタリングを続けている。

ウ. 構成資産 2 小屋島

令和6年8月24日（土）に宗像市モニタリング調査と共に実施した環境省の調査で小屋島に上陸しカメラ2台を設置、同時に外来ネズミ類の生息確認に備えて捕獲器の設置場所の候補地などの現場確認を行った。

12月5日（木）に環境省で実施したモニタリング調査で小屋島に上陸し、カメラ2台を設置、同時に外来ネズミ類の痕跡（捕食痕・糞等）の有無を観察

したが、外来ネズミ類の侵入を示す痕跡等は確認されなかった。

令和7年3月1日（土）に環境省の調査で回収したカメラのデータに1頭のネズミ類が写し出されていたことから、小屋島に再度ネズミが侵入したことが確認された。

そのため急遽、翌3月2日（日）に宗像市モニタリング調査と共に実施した環境省の調査で小屋島に上陸しネズミ用の捕獲器（かごわな）を12か所設置した。

3月9日（日）に実施した環境省の調査で捕獲器にネズミが1頭捕獲され、クマネズミと同定された。形態的特徴からカメラに映っていた個体ではないかと考えられた。

6月7日（土）に宗像市モニタリング調査と共に実施した環境省の調査で同行した環境省職員等が小屋島に上陸し、3月に設置したセンサーカメラの撮影データを回収した（カメラは電池を交換し継続設置）。カメラを設置した3月9日～6月7日の期間にクマネズミは写っていなかった。このため侵入したクマネズミは捕獲された1頭のみで、駆除は成功した可能性が高いと判断された。

エ. 構成資産 3 御門柱

上陸せず、船内からの目視で大きな変化はない。

オ. 構成資産 4 天狗岩

上陸せず、船内からの目視で大きな変化はない。

カ. 構成資産 5 沖津宮遙拝所

11月6日に宗像市世界遺産市民の会とともに資産見回りを実施し、大きな変化はなかった。岩瀬海岸は、大きなプラスチックゴミが目立ったが、11月22日に実施した清掃活動で回収した。

キ. 構成資産 6 宗像大社中津宮

8月10日から11日にかけて宗像地域を襲った大雨で参道の一部が崩落した。

11月6日に宗像市世界遺産市民の会とともに御嶽山祭祀遺跡のモニタリング調査を実施し、昨年同

様、御嶽山山頂から南側斜面にかけて土器の散布が認められた。

ク. 構成資産 7 宗像大社辺津宮

11月6日に実施した宗像市世界遺産市民の会の見回り活動では大きな変化は認められなかったが、高宮祭場の南側には、須恵器などの遺物の露出が目立った。

その他境内における特記事項については撰末社の修復が今年度終了した。また、第1駐車場の整備を行った。

ケ. その他の調査

○釣人調査

令和7（2025）年に実施した沖ノ島とその周辺の防波堤や岩礁、小屋島、御門柱、天狗岩に上陸している釣人の人数を調査している。

2月、4月、6月に比べ、7月から12月までの下半期のモニタリングでは釣人が確認されなかった。この結果は、モニタリング調査日と釣人が渡島した日が合わなかったことが原因であり、全く釣人が上陸していなかったわけではないが、全体的に減少傾向にあるのではないと思われる。

○沖ノ島視認調査

沖ノ島視認調査は、沖ノ島への眺望が世界遺産の価値の1つでもあることから、2018年6月から運用を開始し、視認データの集計を2021年から実施している。大島の北、大島砲台近くのトイレ壁に設置したカメラから、約48km離れている沖ノ島の見え方をほぼ毎日午前9時前後と午後3時前後の2回写真データを取得している。また、アプリ「みちびき沖ノ島」では24時間いつでもだれでも携帯電話などの媒体を通じて見るができるようになっている。

令和7（2025）年は、8月10日から11日にかけて宗像地域を襲った大雨でカメラが故障し、その後点検を行い9月23日に復旧したものの、10月4日に再び襲った雷雨で再び故障し、点検後の10月30日から復旧した。そのため8月から10月までのデータが取得できず、グラフに調査結果を掲載することができ

なかった。

今年も例年通り3月から6月までは、沖ノ島の視認があまり良くない状態が続き、7月以降は、視認の良好な状態が続いていたものと思われる。

5年間継続して調査を実施しているが、各月による小さな変動はあるものの、全体を通じて、ほぼ毎年同じ傾向で沖ノ島の見え方が推移していることがわかる。

（岡 崇・宗像市世界遺産課、正田 実知彦・福岡県九博・世界遺産室）

4. 宗像市管内文化財調査

（1）宗像市管内遺跡調査

本年度は、2件の埋蔵文化財発掘調査を実施した。野坂榎元遺跡は、円墳二基と弥生時代の貯蔵穴群の発掘調査を行った。1号墳は、粘土槨に割竹形木棺を収めた第一主体部と礫床の木棺墓を検出し、古墳時代前期後半から中期前半頃と考えられる。2号墳は、5世紀後半頃の竪穴系横口式石室で、福津市勝浦井ノ浦古墳の前方部主体部に類似する。

もう一件の池田桜B-3号墳は、6世紀末頃と考えられる60～70mほどの前方後円墳で、令和6年度より墳丘規模や墳形のトレンチ調査を進めている。

（2）史跡宗像神社境内撰末社修理事業

宗像大社辺津宮本殿・拝殿の周囲には、江戸期の絵図にも確認できる22棟の撰末社が配置され、史跡の本質的価値を構成する諸要素のひとつとなっている。令和2年度より修理事業を開始しており、本年度は残る3棟（織幡神社、牧口神社、御鑑持神社）の解体修理を行い、これをもって本事業は終了した。

（白木 英敏・宗像市世界遺産課）

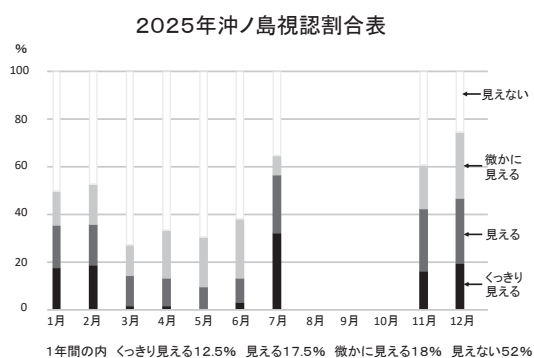
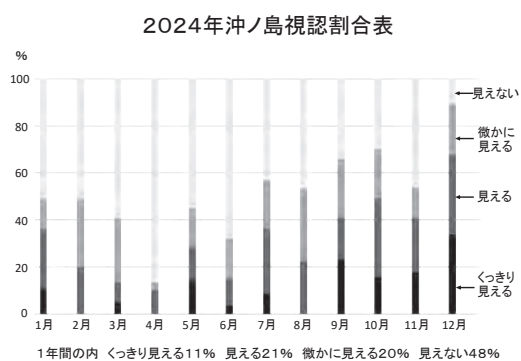
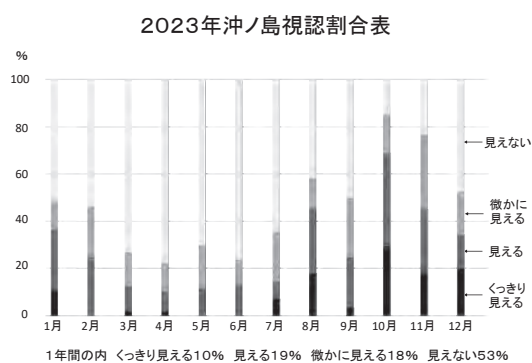
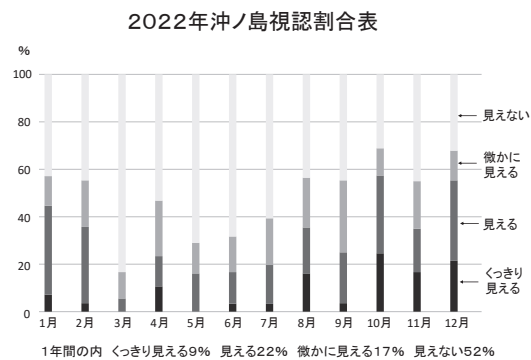
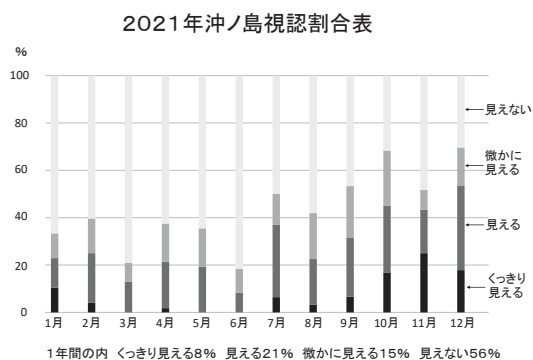


図1 沖ノ島視認割合表 (2021年から2025年)



写真2 新原・奴山6号墳の石室調査



写真3 新原・奴山5号墳の墓道調査

5. 新原・奴山古墳群に関わる調査

新原・奴山5号墳と6号墳は、ともに6世紀後半頃に築造された単室構造の横穴式石室を有する円墳である。墳丘規模は、5号墳が直径約13m、6号墳が直径約10m強を測る。両古墳は大型農業施設建設に伴う昭和55年の記録保存調査を経て消滅したと考えられていたが、令和6年に残存状況の確認調査を実施したところ、5号墳と6号墳ともに石室の一部が残存することを確認した。令和7年の継続調査では、5号墳と6号墳の石室内流入土砂を撤去し残存状況を把握した他、昭和55年調査時に調査区外へ延びていた墓道未掘部を検出し、発掘調査した。5号墳と6号墳の確認調査は、令和8年3月で終了する予定である。

(崎野 祐太朗 福津市文化財課)

6. 福津市管内文化財調査

令和7年度は開発に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査はなかったが、前年度発掘調査を実施した蓮鳥遺跡第4地点と宮司蓮町遺跡第2地点の報告書刊行を行った。前者は堅穴建物2棟、溝1条、土坑2基、小穴多数が検出された古墳時代及び中世の集落遺跡である。後者は溝2条、小穴多数が検出された弥生時代及び古墳時代の集落遺跡である。

発掘調査以外では、分布調査により前方後円墳と判明した奴山沖田1号墳について一部の地形測量調査を実施した。全長45m程度に復元できる前方後円墳で、新原・奴山古墳群と谷を一つ隔てた南方に位置する。規模や形状が新原・奴山12号墳に類似する。

また全国Q地図を参照し、福津市管内の赤色立体地図に基づき現地を確認する分布調査を試験的に実施した。これまで把握できていなかった古墳が多数確認されており、継続調査による遺跡分布地図補完の必要が生じている。

(松永通明 福津市文化財課)

7. その他の活動報告

(1) 公開講座

令和7年度文化庁補助事業「地域文化財総合活用推進事業」を受け実施したもの。

今年度は「いま、世界遺産を考える」をテーマに世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の世界遺産登録に関わった専門家を招き、本遺産群の今後について考えた。会場は海の道むなかた館で行った。講演の様子は公式YouTubeにて後日公開予定。

第1回 西谷 正「世界遺産と考古学 朝鮮半島の世界遺産を考える」

日 時：令和7年9月20日（土）

第2回 三輪 嘉六「世界遺産と文化財 あらためて、沖ノ島を考える」

日 時：令和7年10月18日（土）

第3回 金田 章裕「世界遺産と文化的景観 イギリス・オーストラリアの世界遺産から考える」

日 時：令和7年11月15日（土）

第4回 岡田 保良「建築学と世界遺産 オリエンタルの世界遺産から考える」

日 時：令和7年12月20日（土）

第5回 稲葉 信子「世界遺産学 世界遺産の歴史からその意義を考える」

日 時：令和8年1月17日（土）

第6回 佐藤 信「世界遺産と歴史学 東アジアの歴史的文脈から」

日 時：令和8年2月21日（土）



写真4 公開講座チラシ

(2) 海外での価値発信

ア. 第10回世界考古学会議 (WAC10)

場 所：ダーウィン、オーストラリア

日 時：令和7年6月20日(金)から29日(日)

出張者：岡寺 未幾

・70ヶ国から2000人を超える参加者、オンラインでの参加者を含めると2500人を超える WAC 史上最大規模の会議。

・会長は九州大学の溝口孝司先生。12年間という異例の長期間にわたり会長を務め、今回で退任。

・「T21/S04 成立宗教の到来と固有の信仰の変化」と「T14/S10次世代教育で世界遺産とコミュニティをつなぐ」の二つのセッションを実施。

・T21/S04は、令和6年度第2回国際検討会の講演者と実施。

T21/S04：成立宗教の伝播による固有の祭祀・信仰の変化

The Change in Indigenous Rituals and Beliefs Due to the Spread of Established Religions

日 時：令和7年6月25日(水)

方 式：ハイブリッド

議 長：サイモン・ケイナー、セインズベリー日本芸術研究所考古学・文化遺産センター所長、エグゼクティブディレクター

ガミニ・ウィジェスリヤ、WHITRAP 特別顧問、世界考古学会議元副会長

溝口 孝司、九州大学教授

岡寺 未幾、福岡県参事補佐

概要：仏教という成立宗教の伝播は、古代社会において思想・社会構造・宗教・芸術と様々な面で影響を与え、現在まで大きな影響を与え続けている。その影響は海域ネットワークでつながる島嶼部で特に顕著である。日本固有の祭祀・信仰の1600年にわたる変化がみられる世界遺産「神宿る島」沖ノ島でもその影響は大きく見られる。仏教の伝播は、巨岩で行われていた祭祀から社殿を成立させ、祭祀の変化に多大な影響を与えた。生きている信仰の資産であるこの資産では、古代東アジアにおける諸国間の交流により、固有の祭祀・信仰が変化していく過程プロセスを見ることができる。このセッションでは、

成立宗教の伝播がどのように祭祀・信仰の変遷に固有の信仰に影響を与えたのか、世界遺産である「神宿る島」沖ノ島の祭祀の変遷を軸として、世界中の島嶼部における事例比較を通して考えてみたい。

1. 祭祀行為を通じた宗教の進化の追跡：祈りの形態の変化を映す小宇宙としての沖ノ島

溝口 孝司、岡寺 未幾

2. スリランカにおける仏教の伝来とその儀礼的景観への影響

ガミニ・ウィジェスリヤ

3. 西太平洋諸島の伝統と植民地化の歴史における儀式と信仰の変化：2つのケーススタディ

クリストフ・サンド、ニューカレドニア政府上級考古学者、フランス国立持続可能開発研究所上級研究員、ヌメア、GDR SENS

4. 宗教転換の考古学：奈良からノリッジプロジェクトにおけるキリスト教と仏教の採用

サイモン・ケイナー

5. カシミール仏教の遺産をたどる：悟りへの旅

ナジム・フセイン・アル・ジャフリ、ジャミア・ミリア・イスラミア大学教授、インド、オンライン

6. 大アジアにおける宗教システムの継続と変化における仏教とヒンドゥー教の洞窟寺院、岩窟宗教建築、岩窟の役割

ニコラス・ロバーツ、オーストラリア、ケアンズ、ジェームズ・クック大学ケアンズ研究所兼任研究員、オーストラリア、ケアンズ、クイーンズランド州交通・道路局文化遺産担当官

7. 土地の神から周縁へ：タイの繁栄信仰におけるナン・クワックの疎外

アルハナ・ロチャン、デリー大学、インド



写真5 世界考古学会セッション T21/S04

T14/S10 次世代教育で世界遺産とコミュニティをつなぐ

Connecting World Heritage Sites with Local Communities through Education for the Next Generation

日 時：令和 7 年 6 月 26 日（木）

形 式：報告・議論

司 会：ファティハ・ポリン、Perceive 創設者兼 CEO、バングラデシュ

岡寺 未幾、福岡県庁、日本

パティボン・ヨッスラン、カセサート大学、タイ

概要：遺産を保護するためには、地域社会との関わりが不可欠である。現在、世界遺産では、遺産そのものを保護するだけでなく、無形遺産を含む文化遺産、遺産が存在する地域の自然や環境も保護する必要がある。しかし、多様な人々で構成される地域社会との関わりは容易ではない。そのため、地域の将来を担う若い世代との関わりが必要であると考え

る。本セッションでは、バングラデシュ、日本、タイなどにおける世界遺産教育の事例を紹介する。初等教育から高等教育、一般教育から専門教育、理論から実践まで、幅広い取り組みを紹介する。若い世代がどのように遺産について学び、地域社会と遺産の架け橋となっているのかを見ていく。これらの事例を通して、遺産と地域社会を結びつけ、未来に遺産を残していく方法を考える。

方 式：ハイブリッド

1. 人々と共に過去を読む―「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の場合―

岡寺未幾、福岡県、日本

2. タキシラの仏教遺産の維持：遺産所有権論争の解決における教育の役割

ムハンマド・テマッシュ・カーン博士、アーカイブ担当、アガ・カーン大学（パキスタン、カラチ）
シャキール・ウッラー博士、考古学部長 / 教授、ハザーラ大学（パキスタン、マンセラ、タキシラ）

3. 遺産を受け入れる：洞察から影響へ

ネパール、ハヌマーンダカ宮殿博物館開発委員会、
レヌ・マハルジャン

4. 若者たちを触媒として：タイにおけるコミュニティと文化遺産の架け橋

パティボン・ヨートスラン、タイ・バンコク、カセサート大学建築学部

5. 文化遺産保護における地域社会の関与：ナイジェリア、スクル文化的景観の事例

アキンボワレ・アキンタヨ、英国ヨーク大学考古学部

6. バングラデシュにおける世界遺産の保全に地域社会と若者を巻き込む

ファティハ・ポリン、Perceive 創設者兼 CEO、バングラデシュ

バングラデシュ・ドゥジタ・カスフィ、Perceive（バングラデシュ）建築家兼研究者

7. 世界遺産の複合遺産－地域社会を結びつける機会。ルーマニアの事例

セルギウ・ムステアタ教授、UNESCO UNTITWIN ネットワーク、ルーマニア・タルグイシュテのヴァラキア大学

8. 私たちはマクリをつなぐ：災害と地域紛争の管理における若者と地域社会の役割

ザヒダ・クアドリ、パキスタン・シンド州政府文化・観光・古代遺跡・公文書局、ICOMOS パキスタン、国際博物館協議会



写真 6 世界考古学会セッション T14/S10

カカドゥ国立公園

令和 7 年 6 月 25 日に実施されたミッド・コングレス・ツアーへ参加。カカドゥ国立公園は会議場所から 300km 離れた場所にある。

・セルフ・ガイドツアーとして、個人で岩絵を巡るルートが整備されている。巡ったのはブルンクイとウビルーの二箇所。巨大な岩にアボリジニが描いた

先史時代から20世紀までの3000を超える岩絵が残されている。

- ・ルートは動線、手すりなど、自然に配慮した形で整備されており、サインはかなり少なめに抑えられている。一人で訪れていたら不安に感じるくらい少なく、一人だったら道に迷ったかも、という所もあった。岩絵の解説は総じて少なめ、解説の内容もボリュームも場所によって統一されていない。なお、レンジャーによる解説ガイドツアーも有償で実施。

- ・「現在、祭りの時期であるため、この巨岩に描かれている岩絵の写真を撮らないでください」などの注意書きもみられた。

- ・カカドゥ国立公園では、アボリジニの反対を押し切る形でウラン開発が長年行われており、輸出先の日本において福島第一原発の事故につながったことから、アボリジニの人たちに多大な衝撃を与えている、あわせて景観破壊や健康被害なども問題となっており、世界遺産委員会からモニタリングの対象となっている。



写真7 カカドゥ国立公園



写真8 踊る人々の岩絵

イ. 東アジア考古学会 (SEAA10)

日時：2025年8月18日から26日 出張者：岡寺

場所：アバディーン大学 (英国、アバディーン)

- ・東アジア考古学会 (SEAA) は、東アジア地域の考古学に特化した唯一の国際学会であり、国際的に活動する研究者が一堂に会する。

- ・参加者は20カ国から322人、33のセッションで288件の発表。参加者数は前回の185人から322人に増加し、過去最高。・中国・韓国からの研究者の姿が目立つが、日本からの参加者は総じて少ない。

- ・初日に基調講演が行われ、宮本一夫名誉教授 (九州大学) が講演。

- ・東アジア考古学のパイオニア的存在であるジナ・バーンズ (Gina Lee Barnes) 氏を顕彰するセッション (Queen Mother of the West: Papers in Honor of Professor Gina Lee Barnes and her contribution to Japanese archaeology) が行われ、縄文・古墳時代をはじめ日本考古学の報告が行われていた。

- ・NARA to Norwich のイベントで本遺産群のプロモーションを実施。PPT やパンフレットで資産の説明を行うと共に、資産の概説と金銅製矛鞘の調査研究成果などを伝える。

- ・これまで SEAA5 (福岡、2012年) と SEAA7 (米国ボストン、2016年) に参加。世界遺産登録後初の参加。これまでの2回と比べ、認知度が格段に向上している感触を得た。



写真9 東アジア考古学会でのイベント (SEAA)

ウ．韓国国立全州博物館 国際シンポジウム
「東アジア海洋祭祀と交流」

日 時：令和7年10月22日（木）から25日（土）

出張者：岡寺 未幾

竹幕洞祭祀遺跡は全羅北道扶安郡の海岸にある祭祀遺跡である。古代から現在まで続く祭祀の場であり、かつ、沖ノ島と共通した祭祀遺物が奉献されている。このことから、沖ノ島祭祀遺跡との比較研究の対象となっている。

1991年に国立全州博物館による発掘調査が行われ、1994年には発掘調査報告書が刊行された。1998年には沖ノ島を研究する日本の研究者を招聘しての国際会議が行われ、日韓交流の考古学の学史上においても非常に重要な遺跡である。



写真10 竹幕洞祭祀遺跡

このため、本遺産群についても世界遺産登録の初段階から竹幕洞祭祀遺跡については比較研究が行われてきた。かかわっていただいた主な研究者に、ソウル大学名誉教授イム・ヒョジュ氏、韓国国立中央博物館ユ・ビョンハ氏、そして特別研究事業の委託研究者であり、現在もかかわっていただいている忠南大学校禹在柄氏がいる。

今回のシンポジウムは、竹幕洞祭祀遺跡出土の土器の再整理事業に伴い、竹幕洞祭祀遺跡の国際的な意義づけをしようとするもの。韓国から5名、中国から1名、ベトナムから1名、日本から2名の研究



写真11 パネル・ディスカッション

者を招いた国際シンポジウムである。来場者は、一般および博物館関係者、大学など研究機関所属の専門家等であった。竹幕洞の祭祀遺跡の最新の研究果のみならず、海洋信仰の側面からをテーマとしており、考古学と無形遺産、古代と現代、東アジアを視野に入れたシンポジウムは大変意義深いと考える。

今回のシンポジウムでは韓国の多くの研究者と知り合うことができ、今後の竹幕洞と将来的に調査研究を共同ですすめる可能性が出来た。あわせて、韓国の特に研究者においては本遺産群についての認知度と関心が高いことを知り得る機会となった。

エ．世界遺産ボランティアプログラム 2025

主 催：PERCIVE（バングラディッシュ）

日 時：令和7年11月18日（火）報告者：岡寺 未幾
世界遺産の保存管理の技術習得と実地研修をあわせたボランティアプログラムにおいて、本遺産群の事例をオンラインで報告。

『沖ノ島研究』 既刊一覧

『沖ノ島研究』 第 1 号 2015 年（改定版 2018 年）

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

磯村幸男「ムナカタとヤマト王権についての一試論」

岡崇「沖ノ島の自然—自然崇拜の根源を探る—」

大高広和「古代宗像郡郷名駅名考証（一）」

松本将一郎「沖津宮遙拝所における信仰の建築と景観」

野木雄大「「宗像社家文書惣目録」成立の歴史的意義」

岡寺未幾・仲谷隆造「第18回イコモス総会における「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の事例報告」

『沖ノ島研究』 第 2 号 2016 年

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

岡崇「沖ノ島の戦時遺構」

大高広和「古代宗像郡郷名駅名考証（二）」

野木雄大「宗像大社浜宮考」

高山百合「〔研究ノート〕中村研一《日本海沖ノ島》について」

『沖ノ島研究』 第 3 号 2017 年

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

大高広和「古代宗像郡郷名駅名考証（三）」

岡崇「沖ノ島の中世土師器小皿について」

河窪奈津子「宗像大社所蔵「川添昭二先生寄贈資料」の紹介」

野木雄大「宗像大宮司家と南朝年号」

野木雄大「宗像大社所蔵資料 平成二十八年度調査概報」

松本将一郎「宗像大社沖津宮社殿の特質」

岡寺未幾「第 8 回世界考古学会セッション「宗教遺産に関するグローバルな視座：世界的脈絡における沖ノ島および宗教の融合」について」

岡寺未幾・仲谷隆造「第 7 回東アジア考古学会（SEAA7）における「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の紹介」

『沖ノ島研究』 第 4 号 2018 年

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

西谷正「沖ノ島から神社の起源を考える」

大高広和「七世紀における遣唐使の航海と沖ノ島祭祀の変遷」

小嶋篤「「前方後円墳の終焉」から見た胸肩君」

野木雄大「中世における宗像神信仰の展開」

《資料紹介》福嶋真貴子「下高宮を中心とした辺津宮境内発見の祭祀品について」

《調査報告》「「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究事業 二〇一七年度調査概要」

『沖ノ島研究』 第 5 号 2019 年

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

磯村幸男「宗像と英彦山」

桑田和明「「宗像大宮司天正十三年分限帳」についての一考察」

小嶋篤「遺跡形成過程から見た巨岩と社殿」

野木雄大「宗像大宮司家における鎌倉御家人化の動向」

《資料紹介》河窪奈津子「宗像大社文書複製本の紹介」

《書評と紹介》池ノ上宏「〈新刊紹介〉春成秀爾編『世界のなかの沖ノ島』（季刊考古学・別冊二七）」

《調査報告》「「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究事業 二〇一八年度調査概要」

『沖ノ島研究』 第 6 号 2020 年

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

池ノ上宏「津屋崎地区の海浜型古墳について」

桑田和明「御米注進状・御米銭注進状にみる宗像氏貞領の郷村」

野木雄大「最後の大宰府守護所下文と宗像大宮司家」

花岡興史「新発見の豊臣秀吉文書と肥後宗像家」

《調査報告》岡崇「沖ノ島への眺望」

鎌田隆徳・松本将一郎・大高広和「北九州市若松区小竹の沖津宮遙拝所について」

「「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究事業 二〇一九年度調査概要」

『沖ノ島研究』 第 7 号 2021 年

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

桑田和明「温科氏と大内氏・毛利氏・宗像氏との関係について」

小嶋篤「宗像の鉄刀・刀子・雛形鉄刀」

《特集・沖ノ島のガラス》

中井泉「沖ノ島出土ガラスは何を語るか」

福嶋真貴子「古代沖ノ島祭祀とガラス製品」

四角隆二「サーサーン朝におけるガラス容器生産と流通—沖ノ島8号遺跡出土カットグラス碗片の理解に向けて—」

阿部善也「沖ノ島8号遺跡出土カットグラス碗片・切子玉の非破壊蛍光X線分析による起源推定」

村串まどか・加藤千里・阿部善也「沖ノ島祭祀遺跡出土ガラス製玉類の起源および流通に関する考察」

岡寺未幾「沖ノ島21号遺跡についての再検討（予察）—記録写真の分析から—」

《調査報告》「「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究事業 2020年度調査概要」

『沖ノ島研究』 第 8 号 2022 年

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

大高広和「宗像大宮司時代と伝える「海灘境目之事」について」

花岡興史「肥後宗像家文書を中心にみる天正十四年以降の宗像家の去就—謎の人物「宗像才鶴」の研究動向を含めて—」

桃崎祐輔「沖ノ島出土馬具の復元的研究」

岡寺未幾「世界遺産保存管理の国際的な動向—第四回世界遺産サイト・マネージャーフォーラムの概要—」

《調査報告》「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究事業 二〇二一年度調査概要

『沖ノ島研究』第 9 号 2023 年

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

岩本崇「鏡からみた沖ノ島祭祀の展開」

魚津知克「五世紀末における鉄製工具の画期と新原・奴山古墳群」

森田克行「瀬戸内の神々と倭王権－住吉・大山積・宗像－」

岡崇「沖ノ島の自然と祭祀遺跡」

津江聡実「宗像大社所蔵「河野家文書」の紹介」

清喜裕二「宗像大社辺津宮境内「高宮出土として伝世する品」が提起する問題について」

《調査報告》「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究事業 二〇二二年度調査概要

『沖ノ島研究』のバックナンバーはMUNAKATA ARCHIVES のウェブサイトから、閲覧・ダウンロードいただけます。

<https://www.munakata-archives.asia/frmSearchBunkenList.aspx>

もしくは、下記QRコードよりアクセスください。



『沖ノ島研究』第 10 号 2024 年

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

齊藤大輔「沖ノ島祭祀遺跡の武器と武装」

池ノ上宏「響灘の海浜型古墳について」

桑田和明「大内氏領国下における筑前国西郷の河津氏と宗像氏」

重住（福嶋）真貴子・水野敏典・森下章司「沖ノ島出土鏡の再検討」

高橋照彦・館内魁生・福嶋真貴子「沖ノ島出土奈良三彩小壺に関する基礎的再検討」

《調査報告》「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究事業 二〇二三年度調査概要

『沖ノ島研究』第 11 号 2025 年

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

《特集 沖ノ島祭祀を奉獻品から考える》

岡寺未幾「経緯」

福嶋真貴子「国宝沖ノ島出土品の保存活用計画について」

河野一隆「国宝特別調査 石製品・石製模造品編」

辻田淳一郎「沖ノ島出土の鏡に関する調査・研究の現状と課題」

橋本達也「沖ノ島遺跡出土の金属製品の現状と課題―甲冑・馬具を中心として―」

水野敏典「7・8号遺跡出土の鉄製武器と金属製品の再検討に向けて」

国宝金銅製矛鞘検討会「沖ノ島8号遺跡出土金銅製矛鞘の新知見」

太田智・向井浩太「いわゆる「宗像系文物」の衰退と終焉」

佐藤正彦「地島の漁業集落」

《調査研究事業》2024年度「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群調査研究事業概要

『沖ノ島研究』別冊 1 2022 年

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

福岡県宗像郡の金石文集成 一（宗像市篇）

『沖ノ島研究』別冊 2 2023 年

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

福岡県宗像郡の金石文集成 二（福津市篇・宗像市補遺）

本誌のデータは、本遺産群のデジタル・アーカイブ
「MUNAKATA ARCHIVES」の「宗像研究文献」より
閲覧・ダウンロードできます。
<https://www.munakata-archives.asia/>

沖ノ島研究 第12号

令和8(2026)年7月発行

発行：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
(事務局：福岡県市町村・地域振興部文化局九博・世界遺産・文化施設課)
〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7番7号

ISBN 978-4-9913533-5-2

OKINOSHIMA RESEARCH MONOGRAPH no.12

CONTENTS July 2026

Towards the Restoration of the Ancient Rituals Based on National Treasure of Okinoshima 2

- 01 I Overview of the Survey of Returned Artifacts
OKADERA Miki
- 03 II “Returned Artifacts” Allegedly Excavated from
Okinoshima
FUKUSHIMA Makiko
- 05 III Examination of the Eight-Phoenix Mirror
(Deformed Phoenix Mirror) Excavated from Site No.
18 on Okinoshima and Related Materials
TSUJITA Jun’ichiro
- 15 IV Gilt-Bronze Armor from the Okinoshima Ritual
Site No. 21 and Returned Artifacts
HASHIMOTO Tatsuya
- 33 V Examination of Metal Artifacts from the Alleged
Okinoshima Ritual Site
MIZUNO Toshinori
- 45 VI A Study of Stone figures Among the Okinoshima
Offerings
KAWANO Kazutaka
- 57 VII Summary: Evaluation of the Alleged Offerings
from the Okino-shima Ritual Site
MIZUNO Toshinori

- 59 The Genealogy of the Gilt-Bronze Sheath and Inlaid
Spear Excavated from Okinoshima Ritual Site No. 8
SAITO Daisuke
- 83 Report on Interviews on the Academic Survey of the
Okinoshima Ritual Site
OKADERA Miki
- 101 Newly Discovered Materials on Short-Necked,
Footed Sue Ware Jars in Munakata City
OTA Satoshi
- 111 The Lantern Hall and Coast Guard boat Storage in
Chikuzen Province:
SATO Masahiko
- 121 [Research Project]
Summary reports of the investigation on the Sacred
Island of Okinoshima and Associated Sites in the
Munakata Region in the fiscal year 2025